

公益社団法人日本地球惑星科学連合

平成 26 年度 第 3 回理事会

開催日時 平成 26 年 6 月 2 日（月）
午後 14 時 00 分から午後 16 時 00 分

開催場所 東京大学理学部 1 号館 8 階 851 号室
（東京都文京区本郷 7-3-1）

平成 26 年度第 3 回理事会次第

1. 開 会

2. 報 告 事 項

1. 大会関連報告
2. ジャーナル関連報告
3. 褒賞、推薦等に関わる報告
4. 委員会報告
 - ・ 総務委員会
 - ・ 広報普及委員会およびフェロー推薦委員会
 - ・ 25 周年記念委員会
 - ・ 環境・災害対応委員会
5. その他

3. 審 議 事 項

- | | |
|---------|--------------------------|
| 第 1 号議案 | 会員（正会員）入会承認の件 |
| 第 2 号議案 | 西田賞推薦・被推薦資格、ならびに審査期間設定の件 |
| 第 3 号議案 | 国際第四紀学連合第 19 回大会共催承認の件 |
| 第 4 号議案 | 各委員会委員の承認の件 |
| 第 5 号議案 | 国際対応の件 |
| その他 | |

4. 閉 会

(資 料)

報告事項

1.	大会関連報告 2014 年連合大会総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2014 年大会収支決算書・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 高校生セッション参加校一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ユニオンセッション開催報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・ NASA 関連企画報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 次世代育成コラボレーション事業報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2015 年連合スケジュール案・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 連合大会日程案・・・・・・・・・・・・・・・・・・	P. 1-6 別添 P. 7 P. 8-22 P. 23-28 P. 29-37 P. 38 P. 39
2.	ジャーナル関連報告	P. 40-41
3.	褒賞、推薦等に関わる報告 とうきゅう環境財団社会貢献学術賞への連合からの推薦について 日本学術振興会育志賞への連合からの推薦について・・・・・・・・・・	P. 42-44 P. 45-48
4.	委員会報告 総務委員会 協賛等承認報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 広報普及委員会/フェロー推薦委員会 フェロー冊子作成について・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25 周年記念委員会 パンフレット英語版作成について 環境災害対応委員会・・・・・・・・・・・・・・・・・・	P. 49 P. 50 P. 51-52
5.	その他 サイエンスセクションボード	P. 53-55

審議事項

1.	新規入会会員承認の件 平成 26 年 3 月～平成 26 年 5 月度 入会会員・・・・・・・・・・ 平成 26 年度会員数推移・・・・・・・・・・・・・・・・・・	P. 56-62 P. 63
2.	国際第四紀学連合第 19 回大会共催承認の件・・・・・・・・・・	P. 64-69
3.	各委員会委員の承認の件 新体制概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 委員会推薦名簿・・・・・・・・・・・・・・・・・・	P. 70-72 P. 73-78
4.	西田賞推薦・被推薦資格、ならびに審査期間設定の件 地球惑星科学西田賞について・・・・・・・・・・・・・・・・・・	P. 79-86
5.	国際対応の件 AGU 訪問の件・・・・・・・・・・・・・・・・・・ EGU との MOU・・・・・・・・・・・・・・・・・・ The Asahiko Taira International Scientific Ocean Drilling Research Prize について・・・・・・・・・・・・・・・・・・	P. 91 P. 92 P. 93-96
6.	その他 フェロー制度規則・・・・・・・・・・・・・・・・・・	P. 87-90

その他の資料

	平成 26 年度第 2 回理事会議事録・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2014 年連合大会アンケート資料・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 規則集・・・・・・・・・・・・・・・・・・	P. 97-98 別冊 別冊
--	---	----------------------

2014 年連合大会総括

【2014 年日本地球惑星科学連合大会】

開催期間 4 月 28 日（金）～5 月 2 日（金） 5 日間
 開催場所 パシフィコ横浜 会議センター
 主催：日本地球惑星科学連合
 後援：45 団体
 協賛：日本サンゴ礁学会、日本高圧力学会、日本天文学会

【2014 年大会開催セッション数】

（括弧）の中は国際セッション数

	2014 年大会	2013 年	2012 年	2011 年	2010 年
ユニオン(U)	10 (2)	7 (2)	7 (2)	9 (5)	4 (1)
パブリック(O)	7 (1)	5 (0)	4 (0)	4 (0)	4 (0)
宇宙惑星科学(P)	29 (11)	23 (10)	26 (13)	22 (8)	27 (5)
大気水圏科学(A)	24 (7)	26 (6)	22 (5)	20 (4)	22 (5)
地球人間圏科学(H)	25 (8)	22 (8)	20 (8)	22 (6)	17 (4)
固体地球科学(S)	58 (10)	58 (11)	60 (6)	61 (11)	58 (11)
地球生命科学(B)	9 (2)	10 (2)	10 (2)	10 (3)	9 (2)
教育・アウトリーチ(G)	5 (1)	4 (0)	5 (0)	5 (0)	4 (0)
領域外・複数領域(M)	26 (1)	25 (3)	23 (6)	21 (4)	23 (4)
合計	193 (43)	180 (42)	174 (42)	174 (41)	167 (32)

【2014 年大会投稿数】

- ・発表投稿数：3806 件（2013 年 3980 件，2012 年 3876 件，2011 年 4044 件，2010 年 3686 件）
 口頭発表 2428 件（2013 年 2226 件，2012 年 1975 件，2011 年 2354 件，2010 年 2090 件）
 ポスター 1378 件（2013 年 1754 件，2012 年 1901 件，2011 年 1690 件，2010 年 1596 件）

■参加者数

参加者数：7046 名（2013 年 6869 名、2012 年 7318 名、2011 年 5809 名、2010 年 5746 名）

- ・事前参加登録者数：3811 名
 全日程 3167 名 1 日券 644 名
 一般 2693、小中高教員 33 名、大学院生 936 名、シニア 55 名、学部生 91 名、高校生 3 名
- ・当日参加登録者数：1376 名
 全日程 734 1 日券 642
 一般 605 名、小中高教員 7 名、大学院生 196 名、シニア 67 名、学部生以下 501 名
- ・総合案内来場者数：1832 名
 一般 325、小中高教員 2 名 1、大学院生 0 名、シニア 6 名、学部生以下 192 名
 高校生発表 258 名、ジオパーク 432 名
 プレス 148 名、会合参加者 147 名、出展関係者 303 名

■出展関係

- ・団体展示：63 ブース（2013 年 63、2012 年 43、2011 年 44、2010 年 48）
- ・大学インフォメーションパネル：17 ブース（2013 年 11、2012 年 13、2011 年 11、2010 年 10）
- ・書籍出版（関連商品）：27 ブース（2013 年 25、2012 年 29、2011 年 26、2010 年 26）
- ・パンフレットデスク：7 ブース（2013 年 10、2012 年 8、2011 年 11、2010 年 9）
- ・学協会エリア 個別デスク：10 ブース（2013 年 9、2012 年 10、2011 年 10、2010 年 12）

■その他

- ・会期中開催会合数：95（学協会総会等関連：45，連合関連：18，一般：32）
- ・アルバイト：のべ 355 名

来場者数集計表

事前当日	会員種別	登録区分	身分	28日	29日	30日	1日	2日	合計
事前	会員	一日	一般	92	95	71	74	72	404
			小中高教員	0	11	0	0	2	13
			大学院生	40	33	27	25	17	142
			学部生	0	0	1	3	3	7
			高校生以下	0	1	0	0	0	1
			シニア	1	3	1	0	0	5
		全日	一般	1253	403	249	142	16	2063
			小中高教員	10	8	1	0	1	20
			大学院生	514	125	66	39	10	754
			学部生	27	21	16	4	6	74
			高校生以下	1	0	0	0	0	1
			シニア	19	10	11	3	4	47
事前	非会員	一日	一般	16	10	7	19	12	64
			小中高教員	0	0	0	0	0	0
			大学院生	3	3	0	1	0	7
			学部生	0	0	0	0	0	0
			高校生以下	0	0	0	0	0	0
			シニア	1	0	0	0	0	1
		全日	一般	92	30	18	18	4	162
			小中高教員	0	0	0	0	0	0
			大学院生	23	5	2	3	0	33
			学部生	3	2	3	0	2	10
			高校生以下	0	1	0	0	0	1
			シニア	0	0	0	2	0	2
事前登録受付来場（有料）				2043	723	441	321	134	3662
事前登録受付来場（無料）				52	38	32	12	15	149
事前登録受付来場				2095	761	473	333	149	3811
当日	会員	一日	一般	25	46	35	32	45	183
			小中高教員	0	2	0	0	1	3
			大学院生	9	10	9	16	9	53
			学部生以下	0	1	0	0	1	2
			シニア	0	1	0	0	1	2
		全日	一般	124	38	33	24	0	219
			小中高教員	1	0	0	0	0	1
			大学院生	34	11	5	2	0	52
			学部生以下	5	3	1	0	0	9
			シニア	9	3	0	0	0	12
当日	非会員	一日	一般	21	23	11	33	25	113
			小中高教員	1	1	0	0	0	2
			大学院生	8	2	7	6	15	38
			学部生以下	40	91	26	31	44	232
			シニア	5	4	1	3	1	14
			同伴	1	6	2	4	4	17
		全日	一般	42	25	12	11	0	90
			小中高教員	0	1	0	0	0	1
			大学院生	31	9	10	3	0	53
			学部生以下	92	89	38	29	10	258
			シニア	23	9	4	3	0	39
			同伴	8	1	0	1	0	10
当日登録受付来場（有料）				305	175	124	132	99	835
当日登録受付来場（無料）				174	201	70	66	57	568
当日登録受付来場				479	376	194	198	156	1403
一般公開			一般	0	164	161	0	0	325
			小中高教員	0	21	0	0	0	21
			大学院生	0	0	0	0	0	0
			学部生以下	0	183	9	0	0	192
			シニア	0	6	0	0	0	6
			高校生発表	12	246	0	0	0	258
			ジオパーク	1	15	415	0	1	432
一般公開来場（無料）				13	635	585	0	1	1234
その他			出展者	193	34	17	24	3	271
			出展者追加発行	2	11	8	7	4	32
			プレス	33	35	34	28	18	148
			会合	32	37	26	25	12	132
			会合 フェローのみ				15		15
総合案内受付来場（無料）				260	117	85	99	37	598
2014年大会 来場者総合計				2847	1889	1337	630	343	7046

■2014年大会セッション一覧

国際記号	コンピーナ	セッション名	口頭	ポスター	合計
ユニオン					
★ U-01	村山 泰啓	Forum for Global Data Sciences in Earth and Planetary Research	24	3	27
★ U-02	田中 宏幸	Particle Geophysics	21	12	33
U-03	川幡 穂高	日本地球惑星科学連合ジャーナルPEPSと学術出版の将来	7	0	7
U-04	小池 真	最新の地球科学:航空機による地球科学・地球観測研究の展開	12	3	15
U-05	大竹 翼	生命-水-鉱物-大気相互作用	19	18	37
U-06	荒川 政彦	太陽系小天体研究の新展開	23	24	47
U-07	氷見山 幸夫	Future Earth - 持続可能な地球へ向けた統合的研究	17	0	17
U-08	松本 淳	連合は環境・災害にどう向き合っていくのか?	18	0	18
U-09	橋本 学	海溝型巨大地震と原子力発電所	6	0	6
U-10	永原 裕子	地球惑星科学の進むべき道(6):地球惑星科学と行政・社会	6	0	6
パブリック					
O-01	中井 仁	防災教育-災害を乗り越えるために私達が子ども達に教えること3	6	0	6
O-02	宮嶋 敏	次期学習指導要領における高校地球科学教育のあり方	5	0	5
O-03	原 辰彦	地球・惑星科学トップセミナー	2		2
O-04	原 辰彦	高校生によるポスター発表	0	68	68
O-05	若狭 幸	地球惑星科学系研究者のワークライフバランスとキャリア形成	5	0	5
O-06	渡辺 真人	日本のジオパーク	13	42	55
★ O-07	原 辰彦	Special NASA Lecture	1	0	1
宇宙惑星科学					
惑星科学					
★ P-PS01	木村 淳	Toward JUICE and future explorations of outer solar system	12	3	15
★ P-PS02	佐藤 毅彦	Mars	7	5	12
★ P-PS03	Barkin Yuri	Rotation, inner dynamics and natural processes on the Earth, the Moon and Mars	5	4	9
P-PS21	奥住 聡	惑星科学	24	20	44
P-PS22	木村 真	隕石と実験からみた惑星物質とその進化	11	6	17
P-PS23	諸田 智克	月の科学と探査	21	15	36
P-PS24	橋 省吾	宇宙における物質の形成と進化	13	6	19
P-PS25	瀬戸 雄介	隕石解剖学:太陽系物質の総合的理解に向けて	17		17
P-PS26	出村 裕英	来たる10年の月惑星探査に向けた構想と戦略	13	1	14
太陽地球系科学・宇宙電磁気学・宇宙環境					
★ P-EM04	海老原 祐輔	New Perspectives on Earth's Inner Magnetosphere	18	4	22
★ P-EM05	新堀 淳樹	Characteristics of atmospheric waves in the mesosphere-lower thermosphere (MLT)	12	6	18
★ P-EM06	山本 衛	Study of coupling processes in Sun-Earth system with large radars and large-area observations	34	14	48
★ P-EM07	佐藤 光輝	Lightning and TLEs and their effects on the lower and middle atmosphere	11	4	15
★ P-EM08	片岡 龍峰	Space Weather and Space Climate	30	8	38
★ P-EM09	塩川 和夫	VarSITI - Variability of the Sun and Its Terrestrial Impact	44	0	44
★ P-EM10	Yan Huirong	Wave, Turbulence, Reconnection, and Energetic Particles in Solar, Space and Laboratory	9	0	9
P-EM27	徳丸 宗利	太陽圏・惑星間空間	6	6	12
P-EM28	中野 慎也	磁気圏-電離圏結合	20	7	27
P-EM29	松清 修一	プラズマ宇宙:波動粒子相互作用, 粒子加速, 相対論的プラズマ	14	4	18
P-EM30	松清 修一	プラズマ宇宙:乱流, 輸送, 非線形現象	9	3	12
P-EM31	松清 修一	プラズマ宇宙:原子分子過程, ダスト, 弱電離, プラズマ応用	7	0	7
P-EM32	松清 修一	プラズマ宇宙:MHD現象, リコネクション, 構造形成	16	3	19
P-EM33	松清 修一	プラズマ宇宙:観測・実験の計画・手法, 装置開発, プラズマ計測	8	1	9
P-EM34	松清 修一	プラズマ宇宙:星間・惑星間空間, 磁気圏	8	2	10
P-EM35	松清 修一	プラズマ宇宙:シミュレーション技法, データ解析・可視化	6	4	10
P-EM36	大塚 雄一	大気圏・電離圏	25	28	53
P-EM37	三好 由純	磁気圏構造とダイナミクス	17	9	26
宇宙惑星科学複合領域・一般					
★ P-CG11	松岡 彩子	Instrumentation for space science	8	11	19
P-CG38	今村 剛	惑星大気圏・電磁圏	26	15	41
大気圏科学					
大気科学・気象学・大気環境					
★ A-AS01	真木 雅之	Extreme Weather in Cities	15	4	19
★ A-AS02	石川 裕彦	Data Assimilation in Earth Sciences	12	2	14
A-AS21	宮崎 和幸	成層圏過程とその気候への影響	20	6	26
A-AS22	竹川 暢之	大気化学	28	31	59
A-AS23	古本 淳一	稠密観測によるマイクロ・スケール大気現象研究の新展開	18	8	26
海洋科学・海洋環境					
A-OS24	平田 貴文	海洋生態系モデリング	9	1	10
水文・陸水・地下水学・水環境					
★ A-HW07	谷 誠	Insight into change and evolution in hydrology	18	9	27
A-HW25	安原 正也	同位体水文学2014	14	6	20

国際記号	コンビーナ	セッション名	口頭	ポスター	合計
A-HW26	安原 正也	都市域の地下水・環境地質	10	2	12
A-HW27	林 武司	水循環・水環境	11	3	14
A-HW28	知北 和久	流域の水及び物質の輸送と循環ー源流域から沿岸域までー	25	15	40
A-HW29	平野 高司	JapanFlux: 水・物質循環における陸域生態系の役割	9	0	9
雪氷学・寒冷環境					
A-CC31	鈴木 啓助	雪氷学	13	6	19
A-CC32	川村 賢二	氷床・氷河コアと古環境変動	13	2	15
地質環境・土壌環境					
★ A-GE03	森 也寸志	Subsurface Mass Transport and Environmental Assessment	7	16	23
大気水圏科学複合領域・一般					
★ A-CG04	松本 淳	Hydroclimate in Asian monsoon region	12	5	17
★ A-CG05	山敷 庸亮	Continental-Oceanic Mutual Interaction: Global-scale Material Circulation through River Runoff	11	4	15
★ A-CG06	沖 理子	Satellite Earth Environment Observation	33	8	41
A-CG33	鈴木 啓助	中部山岳地域の自然環境変動	9	5	14
A-CG34	佐藤 永	統合的な陸域生態系ー水文ー大気プロセス研究	7	3	10
A-CG35	山田 誠	陸海相互作用ー沿岸生態系に果たす水・物質循環の役割ー	13	5	18
A-CG36	齊藤 誠一	北極域の科学	28	21	49
A-CG37	名倉 元樹	熱帯におけるマルチスケール大気海洋相互作用現象	18	5	23
A-CG38	樋口 篤志	地球環境関連データセット博覧会	9	5	14
地球人間圏科学					
地理学					
★ H-GG01	水上 象吾	International comparison of landscape appreciation	5	8	13
H-GG21	上田 元	自然資源・環境の利用と管理	6	3	9
地形学					
★ H-GM02	島津 弘	Geomorphology	6	2	8
H-GM22	島津 弘	地形	12	10	22
第四紀学					
H-QR23	吾妻 崇	ヒト・環境系の時系列ダイナミクス	8	8	16
H-QR24	宮地 良典	平野地域の第四紀層序と地質構造	8	4	12
社会地球科学・社会都市システム					
★ H-SC03	Santiago-Fandino Vicente	Living with Tsunami Hazards and Considerations for the Reconstruction and Restoration Process	7		7
★ H-SC04	氷見山 幸夫	International Human Dimensions Programme	7	1	8
H-SC25	青木 賢人	人間環境と災害リスク	12	10	22
H-SC26	白井 正明	ダム堆積物問題(堆砂と排砂)に対する地球科学的アプローチ			0
防災地球科学					
★ H-DS05	千木良 雅弘	Landslides and related phenomena	18	4	22
★ H-DS06	PETROVA ELENA	Natural hazards: impacts on society, economy, and technological systems	4	4	8
H-DS27	林 豊	津波とその予測	17	9	26
H-DS28	宝田 晋治	アジア太平洋地域の地震・津波・火山噴火ハザードとリスク	6	2	8
H-DS29	千木良 雅弘	湿潤変動帯の地質災害とその前兆	7	12	19
H-DS30	森田 澄人	海底地すべりとその関連現象	7	1	8
応用地質学・資源エネルギー利用					
H-RE31	小出 仁	地球温暖化防止と地学(CO2貯留・利用, CO2-EOR, 地球工学)	11	2	13
計測技術・研究手法					
★ H-TT07	小口 高	GIS	13	1	14
★ H-TT08	早川 裕式	Geoscientific applications of high-definition topographic data	4	2	6
H-TT32	桑原 祐史	環境リモートセンシング	10	1	11
H-TT33	近藤 昭彦	UAVリモートセンシングが拓く新しい世界	6	5	11
H-TT34	小口 高	地理情報システム	10	2	12
H-TT35	中村 俊夫	地球人間圏科学研究のための加速器質量分析技術の革新と応用	14	15	29
地球人間圏科学複合領域・一般					
H-CG36	梅田 浩司	原子力と地球惑星科学	8	7	15
H-CG37	山口 直文	堆積・侵食・地形発達プロセスから読み取る地球表層環境変動	11	5	16
H-CG38	富田一横谷香織	惑星と閉鎖生態系における生物のシステムー微生物からヒトまで	6	3	9
固体地球科学					
測地学					
S-GD21	高島 和宏	測地学一般	14	4	18
S-GD22	今西 祐一	重力・ジオイド	9	6	15
地震学					
★ S-SS01	鶴岡 弘	Earthquake predictability research after the 2011 Tohoku earthquake (2)	12	0	12
S-SS23	元木 健太郎	強震動・地震災害	24	21	45
S-SS24	伊藤 喜宏	地震活動	9	10	19
S-SS25	竹内 希	地震予知	10	0	10
S-SS26	仲西 理子	地殻構造	7	15	22
S-SS27	齊藤 竜彦	地震波伝播: 理論と応用	15	6	21

国際記号	コンピーナ	セッション名	口頭	ポスター	合計
S-SS28	中村 雅基	リアルタイム地震情報システムの発展と利活用	9	8	17
S-SS29	加瀬 祐子	地震発生の物理・震源過程	10	10	20
S-SS30	金川 久一	海溝型巨大地震の新しい描像	37	29	66
S-SS31	重松 紀生	内陸地震への包括的アプローチ	13	5	18
S-SS32	大橋 聖和	断層帯のレオロジーと地震の発生過程	15	10	25
S-SS33	村瀬 雅之	地殻変動	16	12	28
S-SS34	吾妻 崇	活断層と古地震	18	28	46
S-SS35	中原 恒	微動探査の近年の発展	8	11	19
固体地球電磁気学					
S-EM36	山崎 健一	電気伝導度・地殻活動電磁気学	7	12	19
S-EM37	櫻庭 中	地磁気・古地磁気・岩石磁気	15	13	28
地球内部科学・地球惑星テクニクス					
★ S-IT02	Mysen Bjorn	Aqueous fluids and melts in subduction zones: Experiment, modeling, and geophysical observations	9	3	12
★ S-IT03	田中 聡	Structure and dynamics of Earth and Planetary deep interiors	27	6	33
★ S-IT04	水上 知行	Fluid flow, deformation and physical properties of the subduction boundary and forearc mantle	9	7	16
★ S-IT05	中川 貴司	Cause and evolution of plate tectonics: Advances in understanding oceanic plate–continental systems	10	1	11
S-IT38	大内 智博	地球構成物質のレオロジーと物質移動	19	10	29
S-IT39	綿田 辰吾	地球深部ダイナミクス: プレート・マントル・核の相互作用	12	10	22
S-IT40	中村 美千彦	地殻流体: その分布と変動現象への役割	17	11	28
S-IT41	森下 知晃	海洋プレートの一生: 誕生から解体, そして復活	21	6	27
地質学					
S-GL42	田上 高広	地球年代学・同位体地球科学	11	8	19
S-GL43	山縣 毅	地域地質と構造発達史	4	5	9
S-GL44	岡田 誠	上総層群における下部一中部更新統境界	13		13
資源・鉱床・資源探査					
S-RD45	星野 美保子	資源地質学の新展開: 地球環境変動と元素濃集	8	2	10
岩石学・鉱物学					
★ S-MP06	Mysen Bjorn	Impact of volatiles on the processes of formation and evolution of the Earth's interior	11	5	16
S-MP46	河上 哲生	変形岩・変成岩とテクニクス	14	19	33
S-MP47	奥寺 浩樹	鉱物の物理化学	22	21	43
S-MP48	土屋 範芳	メルトー延性一脆性岩体のダイナミクスとエネルギー・システム	9	0	9
S-MP49	鈴木 庸平	ナノから解き明かす地球惑星物質の性状と起源	5	4	9
火山学					
S-VC50	鈴木 雄治郎	火山噴火のダイナミクスと素過程	17	11	28
S-VC51	藤光 康宏	火山の熱水系	9	5	14
S-VC52	萬年 一剛	火山防災の基礎と応用	9	4	13
S-VC53	下司 信夫	火山とテクニクス	8	7	15
S-VC54	及川 輝樹	火山・火成活動とその長期予測	11	15	26
S-VC55	青木 陽介	活動的火山	0	34	34
固体地球化学					
S-GC56	下田 玄	固体地球化学・惑星化学	12	6	18
計測技術・研究手法					
★ S-TT07	三ヶ田 均	Frontier Researches in Exploration Geophysics	18	4	22
S-TT57	八木 勇治	地震観測・処理システム	6	9	15
S-TT58	楠本 成寿	空中からの地球計測とモニタリング	6	4	10
S-TT59	山之口 勤	合成開口レーダー	12	12	24
S-TT60	日野 亮太	ハイパフォーマンスコンピューティングが拓く固体地球科学の未来	10	2	12
固体地球科学複合領域・一般					
★ S-CG08	Ur Rehman Hafiz	Collision, Subduction, and Metamorphic processes-II	10	4	14
★ S-CG09	鍵 裕之	Deep Carbon Cycle	9	2	11
★ S-CG10	藤縄 幸雄	Microcracks preceding ruptures in the crust related to earthquakes, volcanic eruptions and landslide	8	1	9
S-CG61	角替 敏昭	岩石・鉱物・資源	12	17	29
S-CG62	岡本 敦	流体と沈み込み帯のダイナミクス	13	6	19
S-CG63	角森 史昭	断層帯の化学	6	2	8
S-CG64	廣瀬 仁	スロー地震	20	6	26
S-CG65	佐藤 活志	応力と地殻ダイナミクス	8	4	12
S-CG66	深畑 幸俊	プレート収束帯における地殻変形運動の統合的理解	6	4	10
S-CG67	沖野 郷子	海洋底地球科学	21	21	42
S-CG68	佐藤 比呂志	島弧の構造・進化とジオダイナミクス	12	5	17
地球生命科学					
宇宙生物学・生命起源					
★ B-AO01	小林 憲正	Astrobiology: Origins, Evolution, Distribution of Life	12	10	22
地球生命科学・地圏生物圏相互作用					
B-BG21	渡邊 敦	熱帯一亜熱帯沿岸生態系における物質循環	5	8	13

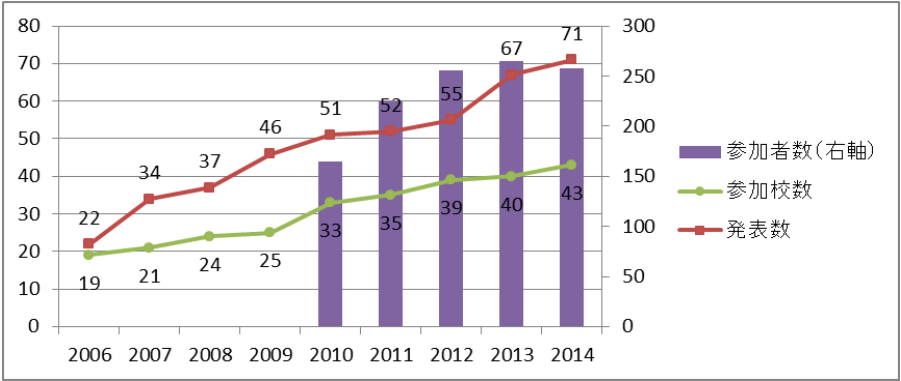
国際記号	コンピーナ	セッション名	口頭	ポスター	合計
地下圏微生物学					
B-GM22	砂村 倫成	地球惑星科学と微生物生態学の接点	13	2	15
古生物学・古生態学					
★ B-PT02	豊福 高志	Biocalcification and the Geochemistry of Proxies	19	3	22
B-PT23	小宮 剛	地球史解説: 冥王代から現代まで	28	7	35
B-PT24	ジェンキンズ ロバート	化学合成生態系の進化をめぐって	11	3	14
B-PT25	本山 功	地球生命史	7	2	9
B-PT26	遠藤 一佳	古代ゲノム学	12	2	14
B-PT27	磯崎 行雄	顕生代生物多様性の変遷: 絶滅と多様化	16	2	18
教育・アウトリーチ					
★ G-01	Liu Chi-Min	Ocean education in tomorrow's classrooms	0	3	3
G-02	植木 岳雪	地球惑星科学のアウトリーチ	8	14	22
G-03	畠山 正恒	小中学校の地球惑星科学教育	2	2	4
G-04	畠山 正恒	高等学校の地球惑星科学教育	10	2	12
G-05	畠山 正恒	学士課程教育の現状と課題	1	0	1
領域外・複数領域					
ジョイント					
★ M-IS01	多田 隆治	Land-ocean linkages in East Asian marginal seas	12	4	16
M-IS21	楊 宗興	生物地球化学	25	17	42
M-IS22	戸丸 仁	ガスハイドレートと地球環境・資源科学	11	10	21
M-IS23	後藤 和久	津波堆積物	20	12	32
M-IS24	伊賀 啓太	地球流体力学: 地球惑星現象への分野横断的アプローチ	16	1	17
M-IS25	松岡 篤	遠洋域の進化	8	5	13
M-IS26	芳原 容英	大気電気学	13	3	16
M-IS27	臼井 朗	海底マンガン鉱床の生成・環境・起源	7	2	9
M-IS28	藤田 茂	日本における巨大地磁気誘導電流	13	2	15
M-IS29	児玉 哲哉	地震・火山等の地殻活動に伴う地圏・大気圏・電離圏電磁現象	13	5	18
M-IS30	山田 和芳	古気候・古海洋変動	30	20	50
M-IS31	立入 郁	分野横断的連携による総合的な地球温暖化研究に向けて	19	4	23
M-IS32	斎藤 実篤	地球掘削科学	27	6	33
M-IS33	辻 健	巨大地震・津波のポテンシャルを現場から事前に評価できるのか?	7	2	9
M-IS34	野木 義史	全球環境変動解明の鍵: 南大洋・南極氷床	10		10
M-IS35	目代 邦康	ジオパーク	19	13	32
M-IS36	木村 勇気	結晶成長における界面・ナノ現象	14	8	22
M-GI37	豊田 英司	情報地球惑星科学と大量データ処理	6	2	8
応用地球科学					
M-AG38	北 和之	福島原発事故により放出された放射性核種の環境動態	23	8	31
M-AG39	酒井 慎一	都市の脆弱性が引き起こす激甚災害の軽減化プロジェクト	13	5	18
宇宙開発・地球観測					
M-SD40	片山 直美	宇宙食と宇宙農業	3	2	5
計測技術・研究手法					
M-TT41	小荒井 衛	地球惑星科学における地図・空間表現	0	17	17
M-TT42	横山 祐典	地球化学の最前線: 先端的手法から探る地球像	13	7	20
M-TT43	山本 真行	インフラサウンド及び関連波動が繋ぐ多圏融合地球物理学の新描像	9	3	12
M-TT44	天野 一男	ソーシャルメディアと地球惑星科学	8	3	11
その他					
M-ZZ45	矢島 道子	地球科学の科学史・科学哲学・科学技術社会論	12	2	14
合計			2428	1378	3806

発表番号	参加 回数	所在地	高校	発表 件数	参加人数 (教員)	参加人数 (生徒)	合計
O04-P01, ■O04-P02	3	鹿児島県	鹿児島県立錦江湾高等学校	2	2	6	8
O04-P03	1	東京都	都立府中工業高校	1	当日不参加		
O04-P04, O04-P05, O04-P06	9	京都府	京都府立桃山高等学校	3	2	5	7
O04-P07, O04-P08, O04-P09, O04-P10	6	埼玉県	栄東高等学校	4	1	10	11
O04-P11	3	東京都	成蹊高等学校	1	1	1	2
O04-P12, O04-P13, O04-P14	7	大阪府	大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎	3	2	4	6
O04-P15	2	福井県	福井県立藤島高等学校	1	1	4	5
O04-P16, O04-P17, O04-P18	9	静岡県	静岡県立磐田南高等学校	3	1	9	10
O04-P19, ★O04-P20	1	滋賀県	滋賀県立米原高等学校	2	2	5	7
O04-P21	1	群馬県	群馬県立太田女子高等学校	1	1	6	7
O04-P22	7	京都府	京都府立洛東高等学校	1	1	2	3
■O04-P23	4	大阪府	大阪府立春日丘高等学校 定時制の課程	1	2	3	5
O04-P24	2	宮城県	宮城県古川黎明高等学校	1	1	2	3
■O04-P25, O04-P26	1	福岡県	東筑紫学園高等学校	2	2	6	8
O04-P27, O04-P28, O04-P29, O04-P30	4	兵庫県	兵庫県立加古川東校等学校	4	3	10	13
◆O04-P31	7	愛知県	愛知県立一宮高等学校	1	1	3	4
O04-P32	3	栃木県	佐野日本大学高等学校	1	1	3	4
■O04-P33	1	鳥取県	鳥取県立鳥取東高等学校	1	1	3	4
O04-P34	1	東京都	東京都立多摩科学技術高等学校	1	1 (1)	6	7
O04-P35	3	千葉県	千葉県立長生高等学校	1	2	3	5
O04-P36	1	神奈川県	神奈川県立西湘高等学校	1	1	6	7
O04-P38, O04-P37	1	岡山県	岡山県立津山高等学校(※1)	1	2	7	9
O04-P37	1	岡山県	岡山県立岡山朝日高等学校(※2)	1	1	3	4
O04-P39, ■O04-P40	3	北海道	北海道札幌開成高等学校	2	1	4	5
O04-P42	3	埼玉県	埼玉県立浦和高等学校	1	1	3	4
O04-P43	4	岡山県	山陽女子高等学校	1	1	2	3
O04-P44	9	長野県	長野県諏訪清陵高等学校	1	内訳不明		6
O04-P45, ◆O04-P46	3	長野県	長野県飯山北高等学校	2	内訳不明		2
O04-P47	3	東京都(栃木)	那須高原海城高等学校	1	1	4	5
O04-P48, O04-P49	2	兵庫県	兵庫県立三田祥雲館	2	当日不参加		
O04-P50, O04-P51	6	長野県	長野県屋代高等学校	2	1	8	9
O04-P52	2	茨城県	茨城県立並木中等教育学校	1	1	2	3
O04-P53, O04-P54, O04-P55	4	神奈川県	横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校	3	1	3	4
O04-P56, O04-P68	6	東京都	海城中学高等学校	2	1	19	20
O04-P57, ■O04-P58	3	群馬県	群馬県立前橋女子高等学校	2	1	7	8
O04-P59, O04-P60, O04-P61, O04-P62	3	福島県	福島県立磐城高等学校	4	内訳不明		10
O04-P63, O04-P64	1	埼玉県	埼玉県立深谷第一高等学校	2	(1)	6	6
■O04-P65	1	宮崎県	宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校	1	1	2	3
O04-P66	2	高知県	土佐塾中学・高等学校	1	1	3	4
O04-P67	1	沖縄県	沖縄県立球陽高等学校	1	1	3	4
◆O04-P69	1	東京都	東京学芸大学附属高等学校	1	1	1	2
O04-P70, O04-P71	5	東京都	東京都立戸山高等学校	2	1	16	17
O04-P72	2	群馬県	群馬県立中之条高等学校	1	1	3	4
合計				71	47	193	258

都道府県別参加校数

所在地	校数
北海道	1
宮城県	1
福島県	1
茨城県	1
栃木県	1
群馬県	3
埼玉県	3
千葉県	1
東京都(※3)	7
神奈川県	1
福井県	1
長野県	3
静岡県	2
愛知県	1
滋賀県	1
京都府	2
大阪府	2
兵庫県	2
岡山県	3
徳島県	1
高知県	1
福岡県	1
宮崎県	1
鹿児島県	1
沖縄県	1
合計	43

※1 P37は岡山朝日と共同発表 / ※2 津山と共同発表
教員カッコ内人数は、高校生セッション名札不使用者(合計数には未カウント)



大会毎開催規模推移

※2014年の参加者数はカウント方法を変えたため、2013年までと同条件ではない
※2009年までの「高校生セッション」参加者数はカウントしていない

※3 那須高原海城高等学校は東京都にカウント

■2014年大会ユニオンセッション一覧

国際	記号	開催日	コンピーナ	セッション名	口頭	ポスタ	合計
★	U-01	5月1日 AM-PM	村山 泰啓	Forum for Global Data Sciences in Earth and Planetary Research	24	3	27

概要

The international society is increasingly agreeing with the idea of sharing scientific data openly between society and scientists, as stated in "The Future We Want" at RIO+20 2012, and the Open Data Charter agreed by G8 in UK June 2013. Data is also one of the most important multidisciplinary issues for JpGU. Significant research areas in The Union stand on research data which are substantially important in its sciences and cannot be obtained and/or be produced again. In international context, ICSU-WDS (World Data System) is proceeding for goals of open data sharing and long term preservation. DIAS (Data Integration and Analysis System) is under development as Japanese contribution to GEO/GEOSS. New actions are starting including Future Earth, re-forming global environmental science enterprises, and also Belmont Forum's discussion of e-infrastructure development whose targets include a support of Future Earth's data activity. Furthermore academic publishers like Thomson-Reuters and WDS started collaboration for data publication and data citation (use e.g. DOI or Digital Object Identifiers attached to datasets for citation in scientific articles). Discussions and exchanges of ideas, difficulties and challenges will be covered for future international data framework.

国際	記号	開催日	コンピーナ	セッション名	口頭	ポスタ	合計
★	U-02	4月28日 AM-PM	田中 宏幸	Particle Geophysics	21	12	33

概要

The great success in the imaging of volcanoes with elementary particles called muons (muography) as well as in the detection of neutrinos generated inside the earth (geo-neutrinos) has resulted in observation opportunities completely independent from the capabilities of conventional geophysical methods. By facilitating the future goals and concerns of the geophysical community, ideally shared among the muography observation group, geo-neutrino observation group, and earth scientists through international and interdisciplinary interactions, the aim is to strengthen the evolution of particle geophysics. Various muographical projects have been promoted worldwide, and each international group has been producing valuable results. Concerning geo-neutrino detection, the quantity of radioactive materials generating heat inside the Earth will be recognized via the frequency of geo-neutrino counts. Since this radioactive heat generation reflects the geodynamics and the chemical composition of the building blocks of our planet, improvements to measurement accuracy will likely yield useful geo-scientific information in the near future. With active cooperation between international communities, we aspire to expand the frontiers of earth observation techniques.

国際	記号	開催日	コンピーナ	セッション名	口頭	ポスタ	合計
	U-03	5月1日 PM1	川幡 穂高	日本地球惑星科学連合ジャーナルPEPSと学術出版の将来	7	0	7

概要

研究成果公開促進費(科研費)では「国際情報発信強化」として学術誌のオープンアクセス化を最重点項目として日本の学術誌の国際情報発信力の強化を求めている。日本地球惑星科学連合においても「Progress in Earth and Planetary Science」を2014年初に創刊する。オープンアクセス電子ジャーナルは新しい出版形態で、欧米で急速にその整備が進行している。本セッションでは、オープンアクセス電子ジャーナルのビジネスモデル、その概念、学術出版の将来、地球科学の研究に与える影響について議論する。

国際	記号	開催日	コンピーナ	セッション名	口頭	ポスタ	合計
	U-04	4月29日 AM	小池 真	最新の気象科学: 航空機による気象科学・地球観測研究の展開	12	3	15

概要

地球温暖化を含む地球環境問題に対応するには、地上や人工衛星からの観測に加えて航空機を用いた地球観測システムの構築と、そのための広い分野の研究者が長期的な視点から利用できる航空機の運用体制を確立することが必要である。航空機観測は対流圏全域を観測可能であるとともに、測定項目、精度、時空間分解能の点で優れている。本セッションでは地球観測専用の航空機の保有・占有と、それを用いた地球観測・監視システムの構築へ向けての展望を議論する。気候システムに関わる気象科学観測の重要課題としては、温室効果気体の変動と循環、エアロゾル・雲・降水相互作用、台風・集中豪雨・メソ降水システムの解明などがある。また本セッションでは気象科学分野だけではなく、幅広い分野の地球観測、すなわち雪氷・海水の動態解明や陸域・沿岸・海洋生態系観測などについても展望したい。これら多様な課題において、これまでの航空機観測の研究成果や観測専用機導入後の研究計画などについての発表を期待する。

国際	記号	開催日	コンピーナ	セッション名	口頭	ポスタ	合計
	U-05	4月30日 AM-PM	大竹 翼	生命-水-鉱物-大気相互作用	19	18	37

概要

地球における生命活動は、地球における様々な物理・化学的なダイナミズム及びプロセスと密接に関わっている。その本質とは、生命活動、水、鉱物(固体地球)、大気各因子間あるいは多元的に生じる相互作用である。この生命-水-鉱物-大気相互作用を単一の科学領域で解き明かすことは不可能であり、多様な研究分野、研究者或いは研究アイデア及び手法の連携が不可欠である。本セッションはその道標となる場を提供する。

国際	記号	開催日	コンピーナ	セッション名	口頭	ポスタ	合計
	U-06	4月28日 AM-PM	荒川 政彦	太陽系小天体研究の新展開	23	24	47
概要 本セッション太陽系小天体(衛星、小惑星、彗星、惑星間塵、太陽系外縁天体、さらに微惑星)に関する研究を広く募集し、実証的に太陽系進化の理解へと迫ることを考える場としたい。精力的にすすめられてきた天文観測や理論的研究に加えて、「はやぶさ」が持ち帰ったサンプルの初期分析結果は、太陽系の起源やそのダイナミックな進化をたどる上で鍵となる証拠をわれわれが手にしつつあることを示している。さらに始源的な小惑星からのサンプルリターンを企画する「はやぶさ2」も本格化しつつあり、そのサンプル分析から、有機物や水が関与する惑星物質科学が解き明かされ生命に関連した情報も引き出されるであろうことへの期待が高まっている。本セッションでは、太陽系小天体に関連した、観測、探査、実験、理論による最新の研究成果をふまえて、小惑星の形成・進化に重要な役割を果たした衝突の物理にも注目して、今後どのような新しい展開が有り得るのかを議論する。							

国際	記号	開催日	コンピーナ	セッション名	口頭	ポスタ	合計
	U-07	5月1日 AM-PM	氷見山 幸夫	Future Earth - 持続可能な地球へ向けた統合的研	17	0	17
概要 世界の地球環境研究はICSU/ISSC主導で2014年末までを目処にFuture Earth 計画の旗の下で抜本的に再編成されつつある。地人関係や自然災害をも含む地球表層に生起する諸事象を主たる研究対象とする地球惑星科学にとって、Future Earth 計画への貢献は全人類の使命である。その使命をわが国の地球惑星科学コミュニティとしてどう果たすべきかを議論する。							

国際	記号	開催日	コンピーナ	セッション名	口頭	ポスタ	合計
	U-08	5月2日 AM-PM	松本 淳	連合は環境・災害にどう向き合っていくのか?	18	0	18
概要 連合では2008年度以来、参加学協会によびかけて、環境災害対応委員会を設置し、環境や災害に関する諸問題への対処をしてきた。2011年3月11日に発生した東日本大震災は、単一学会では対処できない、環境と災害が密接に関係した問題が現実起こることを示した。本セッションでは、大震災時における連合や各学協会の活動を総括したうえで、他の災害や環境問題を含めて、連合が今後いかに環境と災害の問題に取り組んでいくかについて議論する。発表は学協会やセクションからの推薦による以下の招待講演とする(発表者は予定)。地震学会・田所、地質学会・高木、活断層学会・宍倉、地理学会・熊木、地図学会(未定)、GIS学会・畑山、気象学会 中島、水文科学会・近藤、水文学会・恩田、陸水学会(未定)、地下水学会(未定)、海洋学会(升本)、地球生命圏(未定)、鉱物科学 青野、火山学会 藤井、雪氷学会・上石、宇宙科学・菊池、地球人間圏・氷見山、固体地球・今村							

国際	記号	開催日	コンピーナ	セッション名	口頭	ポスタ	合計
	U-09	5月1日 PM	橋本 学	海溝型巨大地震と原子力発電所	6	0	6
概要 福島原発事故以降、地震・津波による原子力発電所のリスクに関する議論が社会的に注目を集めている。中でも、海溝型巨大地震の震源域に面した原子力発電所のリスク評価は喫緊の課題であり、地球科学研究者が果たすべき役割は大きい。本セッションでは、これまで原発立地に海溝型巨大地震によるリスクは、どのように認識されて来たか、さらに、その認識は福島事故を受けて、どのように変わろうとしているのか、について招待講演者のレビューを受け、現状認識を共有することを目的とする。さらに、これを踏まえ、地球科学研究者として何ができるかを議論する。							

国際	記号	開催日	コンピーナ	セッション名	口頭	ポスタ	合計
	U-10	5月1日 AM	永原 裕子	地球惑星科学の進むべき道(6):地球惑星科学と行政・社会	6	0	6
概要 本セッション地球惑星科学の進むべき道(6)は、日本学術会議と日本地球惑星 科学連合の共催によるセッションである。地球惑星科学は、地震・津波・火山、海洋、資源、原発、宇宙など、デリケートな国策に直結した行政に強く関わっている。多くの地球惑星科学研究者がそこにに関わり、実際は国の方針決定に重要な役割を果たしているが、個人のレベルで参画していることが多い。本セッションにおいては、地球惑星 科学が社会的に果たすべき役割を、とりわけ、行政との関わりについて、研究者と行政・社会の側から双方のサイドからの議論をおこなう。セッション は招待講演のみにて構成される。							

JpGU2014 年大会 ユニオンセッション報告

U-01 “Forum for Global Data Sciences in Earth and Planetary Research”

代表コンビーナ：村山泰啓（情報通信研究機構）

共同コンビーナ：小池俊雄（東京大学）、渡邊堯（WDS-IPO）、大石雅寿（国立天文台）、柴崎亮介（東京大学）、喜連川優（国立情報学研究所／東京大学）

本セッションは5月1日に全日（4コマ）を使って国際セッションとして開催された。ICSU-WDS と GEOSS/DIAS の2つのイニシアティブによるジョイントセッションとして位置付けられる。本セッションは、日本学術会議 春日副会長（国際担当）による、Future Earth を中心とした WDS、GEOSS などの我が国の国際的学術交流についての総括・紹介講演で開始した。外国人の講演としては、WDS や RDA（下部注を参照）の国際的データパブリケーション活動で中心的な存在の一人である Andreas Rauber（ウィーン工科大学）、IUGG のデータ・情報コミッション議長である Peter Fox（Rensselaer Polytechnic Institute）、最大級国際学術出版社エルセビア社における新規コンテンツ部長であり WDS/RDA のデータパブリケーション活動のリーダーの一人、Hylke Koers、などがあつた。

コマごとの主な話題を示す。AM1 は主に Future Earth、ICSU-WDS、GEOSS、学術会議、といった学術組織枠組みの視点、AM2 は DIAS プロジェクトからのデータ活用やデータ整備の講演、PM1 は IUGG の国際データコミッションや IUGONET（超高層大気観測メタデータ事業）等の国内外活動、PM2 は主にデータサイテーション（学術出版とデータの関係）の視点から講演と議論が行われた。全体を通じ、我が国の学術枠組みから地球科学データベース、情報技術の活用までを俯瞰するセッションとなった。

なお、U-01（本セッション）、U-03（JpGU ジャーナル）、U-07（Future Earth）、U-10（地球惑星科学の進むべき道）、と我が国の地球惑星科学の学術枠組みや方向性を議論するユニオンセッションが4つとも同じ5月1日に開催されることとなった。このため、参加者・講演者のアレンジが困難となり、いずれも JpGU としてとらえておくべき問題であるにも関わらず会員はいずれのセッションにも断片的にしか参加できなかったことが問題との指摘があつた。次年度以降はプログラム面で改善が求められよう。

注 「RDA（Research Data Alliance）」：G8 の Group of Senior Officials での議論から立ち上がった国際コンソーシアム。ICSU が設置した ICSU-WDS（World Data System）と最終的な目標は近いがアプローチが異なるため、WDS と RDA は相互に協力し合いながらオープンデータや学術データ保存・利用事業を推進している。

U-03 日本地球惑星科学連合ジャーナル PEPS と学術出版の将来

コンビーナー 川幡 穂高・津田 敏隆・小田 啓邦. 聴衆は約 100 名.

5 月 1 日 PM1 (14:15 - 16:00) にメインの会場で行った. 外部有識者ということで, 植田 憲一先生が「物理系学術誌におけるオープンアクセス、歴史と現在」, 永井 裕子先生が「学術出版コンソーシアム設立に向けて・UniBio Press の活動」, また, JpGU 内の有識者ということで, 村山 泰啓先生が「学術情報のオープン化と科学データ」という題で講演した. さらに, 津田会長挨拶, PEPS および EPS の出版状況や狙いについて井龍康文先生, 小田啓邦先生, 川幡穂高が講演した.

研究成果公開促進費(科研費)では「国際情報発信強化」として学術誌のオープンアクセス化を最重点項目として日本の学術誌の国際情報発信力の強化が求めているが, 各々のジャーナルで状況は異なっており, 「各々のジャーナルのおかれた状況で最善を尽くすこと, 最終的に学術の振興を最大の目的化するように運営すること」が重要であるということが結論となった, 有志者の講演は, 昨年と比べてより具体的な内容となり, 出版が進行していく状態で, 「振興」をどのように具体的に実施していくのかを今後検討する際に貴重なものとなった.

日本地球惑星科学連合大会 2014 ユニオンセッション開催報告：
生命-水-鉱物-大気相互作用セッション (U-05)

北海道大学大学院工学研究院
代表コンビーナー 大竹 翼

本セッションは、地球における様々な物理的・化学的なダイナミズムおよびプロセスと密接に関わっている生命活動について、多角的な視野で議論を行うためのセッションである。単一の科学領域で解き明かすことは不可能であり、多様な研究分野や研究手法の連帯が不可欠であることから、ここ数年ユニオンセッションでの開催を希望し、今年度もユニオンセッションとして採択された。

今年度の発表応募数は、口頭発表 20、ポスター発表 17 であったが、発表者の重複があったため、最終的な発表数は、口頭発表 19（うち招待講演 6）、ポスター発表 18 となり、4月30日全日のセッションとなった。招待講演者や座長は、アストロバイオロジー、初期地球、地下深部、大気化学、鉱物表面、微生物、エネルギーなど様々な分野に関わる第一線の研究者の方々に担って頂き、分野間での活発な議論が行われた。ユニオンセッションの特長である招待講演の自由度の高さを活かし、6名にそれぞれ30分の招待講演を行って頂くことができ、各分野への理解も深まった。残念ながら、多くのコンビーナーが重複して関わっている他のセッション（地球史解説、地球惑星化学と微生物生態学の接点など）と日程が重なってしまったのは反省点の一つであるが、その他の口頭発表においても、開催された部屋（419）の定員が70名と比較的小さかったこともあり、立ち見の出た発表も多くあった。また、ポスター発表も例年よりも多数の発表が行われ、活発な議論と交流が行われていた。全体として発表者や参加者の年齢が若い印象を受け、若い研究者のこのような分野横断的な研究への興味と将来への明るい展望を感じられるセッションとなった。

連合大会 U-8「連合は環境・災害にどう向き合っていくのか？」

環境災害対応委員会の主催により、5月2日にメインホールにて終日開催した。大きな会場にもかかわらず、最大で80名程度の参加者しかなかったが、内容は大変に充実していた。総合討論の内容により全体報告としたい。

コンビーナ：松本 淳・須貝 俊彦・石原 正仁・小荒井 衛

スコープ：連合では2008年度以来、参加学協会によびかけて、環境災害対応委員会を設置し、環境や災害に関する諸問題への対処をしてきた。2011年3月11日に発生した東日本大震災は、単一学会では対処できない、環境と災害が密接に関係した問題が現実起こることを示した。本セッションでは、大震災時における連合や各学協会の活動を総括したうえで、他の災害や環境問題を含めて、連合が今後いかに環境と災害の問題に取り組んでいくかについて議論する。発表は学協会やセクションからの推薦による招待講演とする。

＜総合討論議事録＞

○松本 淳代表コンビーナ（首都大学東京、連合環境災害対応委員長）による以下18件の発表のまとめの後、発表者・参加者を交えた討論を行った。

AM1（09:00-10:45）座長：小荒井 衛

U08-01：田所 敬一（日本地震学会）

「日本地震学会における東日本大震災対応と学界の災害・環境対応のあり方」

●地震学会の東日本大震災対応

- ・学会独自の対応
- ・学会間連携による対応

●学界の災害・環境対応のあり方

- ・対応：交通整理、学問的
- ・共に平時からの体制整備や意識の共有が必須
- ・東日本大震災の教訓：自然災害と地球環境問題とは不可分
- ・平時からの学問的連携のための研究会を立ち上げては？

例）「災害科学の中の地球環境問題」

U08-02：高木 秀雄（日本地質学会）

「東日本大震災の復興にむけた日本地質学会の取り組み」

1. 3.11 震災直後の社会への発信
2. 講演会・展示会の開催（2011 水戸大会）
3. 復旧復興にかかわる調査・研究事業
4. 学術活動（特に津波堆積物）
5. 三陸ジオパーク支援活動

U08-3：矢倉 正展（日本活断層学会）

「活断層研究・古地震研究の震災における役割と今後の課題」

災害対応における学会の役割について

- ・震災を通じた学会の対応は、社会貢献と学術的深化の両面が求められている。
- ・前者は主要な学会による対応と地球惑星科学連合内での連携が重要。
- ・小規模な学会、コミュニティでは、専門性を活かして後者を目指していくことが健全。その際にも学際的な研究を目指した地球惑星科学連合内での連携が重要。

U08-4：熊木 洋太（日本地理学会）

「東日本大震災に対する日本地理学会の取り組みと学協会の災害対応のあり方」

学協会の災害対応のあり方

- ・ 迅速に対応できる組織体制を整備しておくこと
- ・ ある程度マニュアル的に行動できるようにしておくこと
- ・ マスコミ等の問い合わせに的確に対応できること（専門用語を使わなくても説明できる）
- ・ 現地の事情の把握と情報の共有化，行動の調整
- ・ 調査研究への理解が進むように（普段から科学がどのように人に役立つのかを明確に）
- ・ 環境問題：問題意識の共有化

U08-5：有川 正俊（日本地図学会）

「環境問題や災害に対する危機解決への地図学会からの貢献」

- ① 迅速性と品質
- ② 被災地の状況に応じた地図供給の適正さ
- ③ 被災状況レベルに応じた地図供給のシナリオ設計
- ④ 紙地図とデジタル地図
- ⑤ 現在のハザードマップの検証
- ⑥ 意思決定・伝達手段・メディアにおける地図リテラシーの欠如
- ⑦ 国際貢献
- ⑧ ボランティア地図製作，位置情報 SNS，ユビキタスマッピング
- ⑨ 時空間ビッグデータの利活用

AM2（11:00-12:45） 座長：石原 正仁

U08-6：畑山 満則（地理情報システム学会）

「地理空間情報を用いた災害対応支援活動」

学会として何ができるのか？何をすべきか？

- ・ 社会貢献の側面
 - GIS 学会の有志が中心となった勝手なグループか？
 - GIS 学会の活動として位置付けられたグループか？
 - 学会の活動として特定の自治体を支援していていいのか？
- ・ 学術調査の側面
 - 地理情報システム学会で行う調査とは何か？
 - 多くの会員は別の学会での調査に参加する（何もしない人もいる）
 - マッシュアップできるデータを公開しているサイトを調べる（ポータルサイト）
- ・ 支援活動のあり方
 - 体制の整備は必要だがやることが明確でないのに体制を作れるのか？
 - 会員の活動の集約は十分にできなかった
 - ICT の高度化や普及により GIS をとりまく環境も大きく変化した
 - GIS の普及につながることは活動理由ではなくなった
- ・ 連合に参加する学会としての対応について
 - 他学会の調査データの GIS 化支援（阪神・淡路では行った）？
 - 学会間の横糸としての連携支援？
 - 学会としてあまり積極的ではない、情報系の学会とはどう連携するのか？

U08-7：中島 映至（日本気象学会）

「福島第一原子力発電所事故に関わる環境汚染と大気科学の役割」

- ・ 放射能防護システムの中で、輸送シミュレーションや衛星システムなどあらゆる手段を併用すべきである。気象庁・環境省の既存システムと統合的に整備すべきである。
- ・ 有効な施策決定にはボトムアップの情報を共有するメカニズムが不可欠である（学術会議の緊急対応指針）。
- ・ その過程での情報発信には、科学者が質の判断、不確実性と説明を付与が必要である（IPCCの例）。
- ・ 初期汚染状況と今後の対策には総合的な環境研究が必要である。

U08-8：近藤 昭彦（日本水文科学会）

「水文科学会は東日本大震災にどう向き合っていくのか」

問題に対峙した時の日本水文科学会の役割

●正しい自然観・環境観の醸成

現場に立脚して自然のしくみの理解を試み、
人と自然の関係＜環境＞のあり方を社会に向けて発信

●科学の成果の社会への実装

2013 年 10 月 31 日 日本水文科学会会告

福島第一原子力発電所の汚染水問題に関する声明

U08-9：恩田裕一（水文・水資源学会）

「福島事故起源の放射性物質の陸域から水域への移行」

- ・ 学会の役割；初期調査費は有効に機能
→学会をバックに政府に要請していくことが効果的。
- ・ 各省庁との直接のコンタクト：とても非効率だがその方法しか現状ではない。
- ・ 各省庁の縦割りの論理：大所高所からの科学者の意見表明が必要。

U08-10：野原 精一（陸水学会）

「湖沼生態系での環境放射性物質のストックとフロー」

赤城大沼における放射性セシウム汚染の実態解明

- ・ 大気から森林へ
放射性物質は何処に降り何処に溜まってどこへ行ったか
- ・ 森林から湖へ
流出と流入の解明
- ・ 湖沼底質における Cs の分布
放射性 Cs は何処に溜まっているか
放射性 Cs の堆積メカニズム
赤城大沼の底泥巻き上げに関する検討
- ・ 湖内での循環
赤城大沼での懸濁物質の放射性 Cs の挙動
- ・ 放射性セシウムの収支

PM1 (14:15-16:00) 座長：須貝 俊彦

U08-11：中川 啓（日本地下水学会）

「日本地下水学会の震災に対応した活動」

- － 災害時の地下水の有効性、非常時のストックとしての水をどの程度どのような形で蓄えておくべきか、そのためのインフラ整備をどのように行っていくべきか、また管理・維持・利用形態を常にブラッシュアップして、社会と自然の回復の過程で地下水が持つ役割を十分認識する必要。
- － 津波による硝酸態窒素や重金属による汚染の可能性もある。
- － 表層土壌や浅層地下水は津波の塩水化の影響を受けているので、より深いところの地下水を非常用水源として確保できたらよいと考える。→沿岸部の帯水層データベースの必要性。
- － 津波被害からの回復という観点からは、今後も継続的な調査が必要。
- － 調査結果等をまとめておくこと、非常時水源としての地下水利用についての社会的枠組みの整備、意思決定のための詳細な調査の必要性。

U08-12：升本 順夫（日本海洋学会）

「放射性核種の海洋分散に関するモデル比較の取り組み」

学会 WG の取り組み：

- ・ 震災対応ワーキンググループを設置し、複数の提言を出すとともに、関連する活動の調整やアウトリーチ活動を行った。
- ・ 学会外に対してどの程度の影響を及ぼしたかは不明であるが、緊急時に研究者がどのように対応すべきかの1つのやり方を示した。

分散モデル比較の試み：

- ・ 個々のモデルはある程度妥当な結果を得ているものの、モデル間の違いも大きい。この違いの原因には、モデルの設定や境界条件の違い、現象の再現性の違いなどが考えられる。
- ・ モデル結果を示す場合には、不確実さも合わせて提供する必要がある。
(研究者間だけでなく、政策決定者や一般への説明の際にも重要)

U08-13：青野 宏通（日本鉱物科学会）

「土壌からの放射性セシウム除染を目的としたゼオライト-マグネタイト複合材料の開発」

- (1) 磁化 Na-P1 型ゼオライトについて、ゼオライトとマグネタイトナノ微粒子が一体型複合材料となっていることを確認。
- (2) 磁化 Na-P1 型ゼオライトにより、優れた汚染土壌からの放射性セシウム除去効果を確認。
しかし、平成 25 年度では除染効率が低下。放射性 Cs の土壌への固着状態の変化が懸念。
- (3) セシウム選択性がより優れたモルデナイトの人工合成及びマグネタイト複合化に成功。これを用いた土壌からの除染実験を行なう予定。

U08-14：氷見山幸夫（地球人間圏科学セクション）

「地球環境問題と災害への地球人間圏科学からの取り組み」

1. 地球人間圏科学 研究教育情報ネットワークの推進：
2. 学校市民参加モニタリングネットワーク、ESD、地球人間圏科学教育、
グッドプラクティスの発掘と推進：
3. 陸域持続可能性研究の推進：
土地利用・土地被覆変化、土地・資源・エネルギー、都市、農村、林野、土壌、
水環境、環境保全、生態系保全、環境劣化、廃棄物、統合モデル、地球情報

4. 沿岸・縁辺海域・海洋持続可能性研究の推進：
陸域－縁辺海域システム、沿岸・縁辺海域利用、環境保全、生態系保全、
海洋資源、汚染の発生と浄化
5. 自然災害（ハザード、リスク）の総合的研究の推進：
気候変化影響、地震、洪水、津波、地形災害、火山災害等、災害原因の学際究明、
データ統合、リスクの人間社会的側面、対災害レジリエンス、社会連携

U08-15：今村 文彦（固体地球科学セクション）

「東日本大震災の教訓と減災に向けての研究展望」

災害科学の深化

- ・ 事前対策、災害の発生、被害の波及、緊急対応、復旧・復興、将来への備えを一連の災害サイクルにとらえ、それぞれのプロセスにおける事象を解明し、その教訓を一般化・統合化すること。

実践的防災学の展開

- ・ 東日本大震災における調査研究、復興事業への取り組みから得られる知見や、世界をフィールドとした自然災害科学研究の成果を社会に組み込み、
- ・ 複雑化する災害サイクルに対して人間・社会が賢く対応し、苦難を乗り越え、教訓を活かしていく社会システムを構築するための学問

PM2（16:15-18:00） 座長：松本 淳

U08-16：藤井 敏嗣（日本火山学会）

「火山学は環境・災害にどう向き合っていくのか？」

火山学は火山噴火災害にどのように関わってきたか？

- ・ 火山学会として直接対応したことはない。
- ・ 旧学術会議火山学研究連絡委員会との共催で、5年ごとに火山噴火予知シンポジウムを開催、火山噴火予知計画の策定に貢献。
- ・ 火山噴火災害対応は火山噴火予知計画参画機関・火山噴火予知連絡会
- ・ 原子力規制委員会火山評価ガイド
- ・ 内閣府提言

U08-17：河島 克久（雪氷学会）

「近年の雪氷災害の変容と新たな課題」

いざという時に正しい防災行動がとれるように

- ☐ 大雪後の対応が主
- ☐ 最中にできることあったのでは？
- ☐ ちょっとしたことでは防げる被害が多い
- ☐ 何ができていれば犠牲者・被害をださずに済んだか？
- ☐ 住民への対処方法の周知
- ☐ 防災情報の迅速かつ正確な伝達
- ☐ 次世代を担う子供たちへの防災教育

1997年以降、毎年、各地で「雪氷楽会」

科研費・研究成果公開促進費

継続的な防災教育⇒学会に問い合わせ窓口（予定）

U08-18：菊池 崇（宇宙科学セクション）

「宇宙災害と宇宙天気研究」

- ・ 太陽フレアが発生すると、X 線、高エネルギー粒子、コロナプラズマ塊（CME）が放出され、地磁気、磁気圏、電離圏、熱圏の嵐が発生する。
- ・ 静止衛星、周回衛星に帯電、半導体エラー、大気ドラッグにより、電源系統火災、軌道・姿勢の不安定、機器の誤動作が発生する。再起不能な障害に陥る場合がある（あすか衛星、みどり衛星など）
- ・ 地磁気嵐により電力送電線に誘導電流が発生し、変圧器の損傷や停電が発生する（カナダ、スウェーデンなど）。
- ・ 衛星・地上観測データの解析とコンピュータシミュレーションにより、太陽フレア予測、放射線帯粒子予測、サブストーム・磁気嵐予測研究を実施している。
- ・ 国際的組織による宇宙天気予報が行われており、学会は予報アルゴリズムの開発等で寄与している。

松本委員長による全体のまとめ：

- ・ 大災害（阪神淡路大震災など）を契機に災害対応の組織的整備が進んだ学協会が多い。
- ・ 災害対応の経験蓄積が進んでいる。
- ・ 初期調査に対する学会支援の重要性。
- ・ 行政との関係構築が課題。
- ・ 地域住民・社会との関係構築も課題。
- ・ 長期予算措置の欠如の問題。

○各講演に対する質疑

- ・ 中井 仁（小淵沢総合研究施設、地球電磁気・地球惑星圏学会）：各学会での日頃の成果が大震災時に生かされなかったのはなぜかを考える必要がある。個々の研究者の発言では、行政の施策に十分に浸透しない恐れがある。たとえば米国政府は、以前は地球温暖化は自然現象との立場を取っていたのに対し、AGU が 2003 年に地球温暖化は人為影響である、との声明を出した。その後 2005 年には米国政府も人為影響を認めざるを得ない状況になった。学会としての発信により、数の力を発揮する必要があるのではないか？

火山学会では統一見解を出すことはしないそうだが、防災に対しては、国民は、学会からの統一見解を期待しているのではないか？

差し迫って必要なこととして、放射能汚染状況モニタリング調査費用を確保し続けるための活動をしてはどうか？

- ・ 藤井敏嗣（環境・防災研究所、日本火山学会）：火山学会がこれまで学会として公式の意見表明をしたのは、三宅島での米軍による NLP 訓練時に観測に支障が出る恐れから中止要請を出した時のみ。この時は決定に 1 年以上かかった。災害は緊急性が高く、学会として見解を統一するには時間的に困難。環境とは別に考える必要がある。噴火予知連ならば可能で、学会員の観測系研究者は大部分が参加している。
- ・ 石嶺康浩（国立保健医療科学院、日本火山学会）：震災後の海洋学会の動きが素早かった理由は？
- ・ 升本順夫（東京大学、日本海洋学会）：学会員の中から多くの有志が手を挙げて参加した。必

ずしも学会を代表する立場ではないが、学会執行部が速やかに決定して推進した。ただし、モデルの結果自体の公開が早かったとは必ずしも言い切れない。

- ・松本 淳：今も海洋学会では震災対応を組織的に行っているのか？
- ・升本順夫：対応幹事が継続して対応している。
- ・松本 淳：連合の環境災害対応委員会活動にもぜひ参加してほしい。

○全体のまとめ

- ・松本 淳：震災を契機に連合の環境災害対応委員会では、各種の意見交換を進めた。このセッションでの成果を基に、対応をさらに進めるための努力をすべきである。
いくつかの発表で、初期の学会支援がその後の研究調査の発展やその時にしか取得できない貴重なデータの確保などに、非常に大きな力になったことが明らかになった。
学会間の連携に加えて、行政などとのように向き合っていくべきかについても議論が必要。
放射能のモニタリングをはじめとする長期的な予算措置がなくなりつつある事態は大きな問題で、理事会等でも対応を検討したい。
行政とは別に、生活者とのかわりをどのように広げていくかという点も大きな課題。
今後の連合の環境災害対応委員会が取り組むべきことに関する意見は？
- ・嶋田 純（熊本大学、日本地下水学会長）：震災後の初動に関しては、今回は地下水学会と水文・水資源学会の共同での現地調査ができたことが大きかった。地下水学会は800名程度の会員しかなく、全体の予算が年間1千万円程度と小規模で、個別学会としての対応には限界がある。連合からの支援もあるとありがたい。モニタリング調査の継続の必要性を連合としても訴えていくべきである。
- ・恩田祐一（筑波大学、水文・水資源学会）：モニタリングへのサポート意見は大変に有難い。
原子力事故が事前には想定されていなかったために、政府含め初動時の対応には混乱があった。
種々の幸運もあって、マッピングやモニタリングを含めた研究を早期に立ち上げ、ここまで、進めることができた。しかし、現在の資金が復興予算で行われているために、水系の長期的なモニタリング継続が難しくなっている。将来の国際機関からの検証に耐えるデータの蓄積は絶対必要で、強く支援を訴えたい。
- ・松本 淳：喫緊の課題で、理事会を通じて、連合としての対応策を考えていきたい。
- ・畑山満則（京都大学、地理情報システム学会）：初動のための予算措置は非常にありがたい。
連合のとりまとめを期待する。災害対応は、時間がない。平常時に対応すべき災害規模などに関するプロトコルを事前にきちんと決めておくべきである。
- ・中井 仁：防災教育セッションのコンビーナをやってきた。あと2年は続ける予定。連合は今回のようなセッションを今後どうする方針か？
- ・松本 淳：これまでの連合の環境災害対応委員会活動では、教育面が弱いという意識は持っている。来年度以降には、これまで委員会として接触をしていない他の災害関係のセッションも含めて連携していくことを検討したい。
- ・中井 仁：現状は個人的に進めている状況なので、もし学会としての対応が可能であるならば発展的解消も考えられるので、相談を進めていきたい。
- ・松本 淳：今日も北和之氏がコンビーナの放射性物質セッションと時間が完全に重なってしまった。このような重複を可能な限り避ける努力を続けるとともに、関連したセッションとはなるべく一緒にできるようにしていきたい。

- ・高木秀雄（早稲田大学、日本地質学会）：今日のセッションは連合の良さが活かされていて、大変良い試みであった。
 今後は、学術会議との連携が大切であろう。対外的に連合の傘下での連携の重要性を社会に対しても発信して行ってほしい。
- ・松本 淳：対応したい
- ・中村洋一（宇都宮大学、日本火山学会）：防災教育のイベントは、学会中心で年数回程度の開催が限界。地域で取り組んでいる防災教育に対して、学会から支援をしてはどうか？
- ・松本 淳：講師派遣などは、連合の広報普及委員会でも取り組んでいる。可能な範囲で対応できるようにしていきたい。
 田所敬一氏の発表での整理は大変に良くできていた。平時の対応策を練っておくことが重要。自然災害と地球環境問題は不可分。フューチャーアースでも同様のことが言われている。連合の役割はきわめて重要と再認識。工学、生態、農学、経済方面との連携をどう進めていくかは今後の大きな課題。
 連合内での連携については、教育を含めて進めていく必要がある。このようなセッションを今後も続けていく必要がある。
 委員会のホームページがまだできていないので、早期に開設できるようにしたい。
 当委員会は発足時に各学協会に参加呼びかけを行ったが、震災後には組織的な参加呼びかけはしてこなかった。海洋学会のような例もあるので、今後は適宜、学協会への参加呼びかけを行い、連合内での連携を広げていきたい。
 今後の連合大きな役割としては、1. 学術会議との連携、2. 政府へのモニタリング継続の働きかけ、が挙げられた。
- ・田所敬一（名古屋大学、日本地震学会）：スライドとアブストラクトに加え、各発表のまとめを合わせて、一目見れば全体がわかるような形でHPに掲載してはどうか？
- ・松本 淳：そのような方向を考えたく、発表者とも相談の上で進めていきたい。本セッションは会場が大きい割に参加者が少なかったのはやや残念だったが、内容としては非常に有意義だった。HPで内容を広く公開して成果を活用していきたい。

U09: 海溝型巨大地震と原子力発電所

コンビーナー：橋本学・川勝均・金嶋聡・末次大輔

本セッションは、「福島原発事故以降、地震・津波による原子力発電所のリスクに関する議論が社会的に注目を集めている。中でも、海溝型巨大地震の震源域に面した原子力発電所のリスク評価は喫緊の課題であり、地球科学研究者が果たすべき役割は大きい。本セッションでは、これまで原発立地に海溝型巨大地震によるリスクは、どのように認識されて来たか、さらに、その認識は福島事故を受けて、どのように変わろうとしているのか、について招待講演者のレビューを受け、現状認識を共有することを目的とする。さらに、これを踏まえ、地球科学研究者として何ができるかを議論する。」ことを主眼とした。5月1日14時15分から途中休憩を挟んで18時までの4時間弱の時間を確保し、5階502号室において、6件の招待講演と総合討論を行った。今回の大会中2番目に広い会場であったが、常に立ち見の観客が認められる状況で、参加者の関心の高さが伺えた。

前半は、コンビーナーの挨拶と趣旨説明に続いて、主として地形・地質学的な津波研究に携わってこられた下記の3名の方々に講演いただいた。藤原治氏は、静岡県浜松市周辺の綿密な津波堆積物結果に基づいて、南海トラフにおいていわゆる「最大クラスの超巨大地震」が発生した証拠は見つからないとした。岡村眞氏は、四国～九州地方の沿岸湖沼に残された津波堆積物調査の結果から、過去6000年のうちに規模の大きい津波が繰り返して来た事を示した。岡村行信氏は、産総研が進めて来た東北地方の津波堆積物調査による貞観地震の研究成果、そしてその成果が東日本大震災時の減災に活かされなかった経緯を紹介された。引き続き総合討論では、内閣府による「南海トラフの最大クラスの地震」に関する議論が盛り上がったが、3名の招待講演者はどなたもが、津波堆積物調査には限界があることを異口同音に主張された。

後半は、京都大学防災研の川瀬氏に強震動と構造物応答の研究の立場から、津波研究者として規制基準の議論に参加されている北海道大学の谷岡氏には現在の議論について、東大地震研の額額氏にはこれまでの耐震基準の考え方と地震の科学の関係についてご講演いただいた。川瀬氏は、M8を越えるあたりで強震動は飽和することを示し、この観点から原子力発電所の応答について議論した。谷岡氏は、原子力規制委員会における安全設計基準策定の議論を紹介し、一般の防災対策との違いを強調された。額額氏は、強震動を中心に地震科学が原子力発電所の耐震安全性評価に果たしうる役割について議論し、その限界を指摘された。総合討論では、内閣府の最大クラスの地震想定を踏まえ、原子力発電所内の諸施設の耐震安全性に関する質疑が多くなされた。また、谷岡氏が指摘された一般の防災対策と原子力発電所の防災対策との違いについても、改めて議論がなされた。

コンビーナーとしては、原子力発電所の耐震安全性評価に関して、参加者が疑問に思っているさまざまな事について、率直に議論できたものとする。ただ、限られた方々に発言が集中した嫌いもあり、立場の違いを越えて積極的な意見交換ができれば、よりよかったと思う。

○講演者（所属）と講演題目

藤原 治氏（産総研）「津波堆積物を用いた南海トラフ東部の津波規模の推定」

岡村 眞氏（高知大）「南海トラフ沿いの津波堆積物から考える巨大地震と原子力発電所」

岡村 行信氏（産総研）「東北地方太平洋沖地震前後の巨大津波の研究と原発の安全審査」

川瀬 博氏（京大防災研）「海溝型巨大地震の強震動の特性と巨大剛構造物としての原子力発電所の応答」

谷岡 勇市郎氏（北大）「東北地方太平洋沖巨大地震後の津波に対する原子力発電所の安全基準のあり方」

瀬戸 一起氏（東大地震研）「耐震規制基準と地震の科学」

JpGU2014 横浜における NASA アウトリーチ活動に関して

グローバル戦略委員会（旧国際学術委員会委員長） サイモン・ウォリス

JpGU2013 において、NASA との共同計画に関するユニオンセッションが企画され実施された。しかし、NASA 側において旅費が厳しく制限されていた時期にあたったため、NASA からの参加はTV会議経由という形となってしまう、必ずしも議論が盛り上がったと評価できるものではなかった。また、同時に予定されていた NASA による展示もキャンセルされた。

その後、「やり直し」というニュアンスだけでなく、2014 年 2 月に JAXA/NASA 共同の地球観測衛星 GPM が日本の種子島宇宙センターから打ち上がることもあって、JpGU2014 において NASA 地球観測部(NASA HQ Science Mission Directorate, Division for Earth Science)のアウトリーチ活動を展開の可能性に関して、NASA から JpGU に打診された。

それを受けて、2013 年 12 月の AGU に JpGU が展示ブースを出していたこともあり、その会場にて懇談する会合が持たれた。JpGU 側出席者は、木村、藤本、飯田、谷上、白井。NASA 側は、Michael Freilich（地球観測部長）、Jack Kaye（地球観測副部長）、Winnie Humberson（広報担当）。会合では、

- ・ NASA が一般公開日のパブリックセッションで高校生向けのセミナーをすること
- ・ NASA がランチタイムスペシャルレクチャーに参加すること
- ・ NASA が Hyperwall (HW) presentation を展示会場に持ち込むこと
- ・ HW presentation は JAXA と合同で実施することで、宇宙科学もカヴァーすること
- ・ HW presentation のために必要な JpGU からのサポートは、JAXA が支援することが合意された。

その後、HW presentation のための装置レンタル業者の手配(HW とは、9つの大画面を連動させて超大画面として駆動させ、超高解像度にて映像を表示する装置である)や presentation file（HW のためには、NASA 側で特殊なファイル形式に変換する必要がある）の交換等を進めて、5 月の本番に向けての準備が進められた。

JpGU2014 においては、予定されていたすべての NASA 参加行事が無事に進められた。特に HW presentation に関して、

- ・ NASA 側は、地球観測部長を含む 3 名の研究者をプレゼンターとし、さらに、広報担当者 1 名と技術支援員 2 名を加えた、総勢 6 名のチームを編成してきた
- ・ 大迫力のプレゼン装置を使った NASA 地球観測コンテンツに、多くの日本学界関係者がはじめて触れた

- ・JAXA 提供のコンテンツに NASA 側が高く評価するものが見出される等、日本側（JAXA 宇宙科学と地球科学）にもよい経験となった
- ・高校生デイでは、NASA の発表内容を同時通訳的に日本語抄訳するサービスを提供し、結果的に高校生からの質問が多く出ることを促した
- ・連動して NASA グッズが学会参加者（高校生を含む）に配られ、これも HW 視聴者数を増やすことに貢献した

後日談としては、ある独立法人の広報担当者が「経費負担してもいいので、来年は参加したい」と言ってきた（飯田）、というものがある。NASA 側にも有意義なイベントであったようであり、(JpGU とは直接関係しない話ではあるが) 7 月札幌での AOGS にて、NASA HW 展示に JAXA メンバーがゲスト参加することが打診されてきており、実施する方向で調整中である。会場で足を止め興味を持ってプレゼンを聞いていた学会参加者が多くいたことも含め、成功したイベントだったと評価できよう。

今後、(JAXA に頼るのではなく) JpGU として NASA HW の展示をさらに歓迎し、また、それを常駐させることで日本の学界におけるアウトリーチに対する考え方への刺激としたのであれば、「NASA と協議しつつ、JpGU 側で主導して、NASA だけではカバーしきれない地球惑星科学という大きな枠組みを意識しつつ、価値を付加していくこと」がポイントになると考える。今回に関して言えば、(JAXA が)「宇宙科学コンテンツを提供したこと」「同時通訳サービスを提供したこと」がこれにあたる。なお、「NASA ブランドに頼る」という姿勢では、遅かれ早かれ、NASA 側から見切られてしまうだろう。

最後に、JpGU メンバーでもある JAXA 飯田佑輔氏の大活躍に言及して、この報告を終えたい。彼の熱心さが、成功を支える重要な要素であったことは間違いない。

NASA-JAXA ハイパーウォール展示企画@JpGU2014 報告

2014.06.02(月) JAXA/ISAS 飯田佑輔

JpGU2014 における NASA-JAXA ハイパーウォール展示企画(9枚の大画面ディスプレイを連結して行う展示・講演; 以下、HW)について、報告させていただく。飯田からの報告は、来年度以降の HW 展示や同様のイベントを企画する際の考察のために、準備の部分に集中する。全体を通した結果報告は、サイモン氏からの別報告を参照していただきたい。

飯田が、この企画に参加させていただいたのは、AGU Fall Meeting 2013(2013年12月)の際に行われた NASA-JpGU-JAXA 間の会合からである。宇宙研からのサポート役という形で参加させていただいた。会合では、JpGU2014 における NASA メンバーの科学セッション参加や HW 出展について議論された。その中で、今回の HW では NASA-JAXA の共同展示企画として行うことが決定された。

日本に戻った後、早速 HW 出展の準備に取りかかった。まず、12 月内に講演者の決定を行った。今回は、JAXA 内でこちらから講演を頼むという形をとった。HW システムによる大画面での講演は、多くの科学者に魅力的に映ったようで、快く講演を引く受けてくださった。同時に、適宜 NASA 側に連絡をとって、HW 上で可能な発表形態や準備物などの技術面の把握に務めた。この把握には(AGU 中に予想していた以上に)非常に多くの労力が必要であった。

年が開けた 1 月に NASA 側と実際の講演手段・時間等の調整を始めた他、JpGU 事務局とディスプレイレンタル業者との会合に出席した。ディスプレイレンタル業者との会合に直接出席したことは、具体的なイメージの助けになった。1 月末には JAXA 内では各講演メンバーを集めて、具体的な準備物等を確認する会合を行った。この段階で、大会までの基本的な準備の流れは周知された。

2 月は、各講演者の講演資料準備・NASA 側との最終的な予定調整を行った。実際に講演資料の準備を開始すると、各講演者から様々な質問が送られてくる。研究分野によっては使用する分解能に耐え得る資料を作ることが難しいとの意見も寄せられた。分野によっては、十分なクオリティの資料を準備するのに膨大な手間がかかってしまうことは、改めて注意喚起が必要かもしれない。また、同月内に JpGU 事務局の大会会場内覧に同席し、HW 周りの備品配置(カーペット、ディスプレイの配置等)についてのイメージを固めた。

3 月に入り、資料を NASA 側に送付した。HW 講演のためには、一度用いる資料を NASA 側に送り、ファイル形式を専用のものにする必要がある。十分な Resolution を持つデータであると、数分の動画で数百 GB ほどであり、今回では全体で~2TB ほどとなった。このデータ量ではインターネット経由等では非常に手間がかかる。そこで、今回は空輸という形をとった。

空輸する前にインターネット経由で簡単なデータチェックを依頼した。いくつかのデータは問題があり、実際の送付は初期予定よりも2週間ほど遅れてしまった。送付した後のデータには、特に問題がないということであった。しかし、日本側から実際のHWディスプレイを確認する手段はなく、最終的な確認は大会会場の準備日まで行うことができなかった。

4月に入り、最終調整を行った。講演内容が最終決定され、本イベントのリーフレットやWEBページの作成・JpGU メールニュースでの宣伝を行った。また、大会数日前に来日したNASAメンバーをJAXAに案内し、JAXAからの講演者との間で最終調整会合を行った。この最終調整会合は、講演の際の疑問点を完全に払拭する・事前に士気を高めるという点で非常に重要であったと考えられる。

大会当日は、特に大きな問題がなく講演が行われた。本イベントには30席ほどの椅子を準備していたが、各回50-100名ほどが聴講に参加し、予想以上に盛況であった。逆に、この点は次回以降に開催する際に注意する必要もある。実際の様子は、本報告3-4P目の写真を参考にしてほしい。発表内容に対する質問も、各講演で1つ以上はでており多いときは5つほどでいた他、講演時間外に興味を持った聴講者が講演者に質問を行う様子が見られた。高校生が参加した大会二日目には、藤本氏がNASA側の講演内容を即興で翻訳するということを行った。このことは、高校生の理解を大きく促したようであり、このスタイルは継続するべきであると思われる。最後に、今回レンタルしたHWディスプレイセットや会場内備品などについて、NASA側としては満足しているようであったということを報告しておきたい。これらの動作が正常であったことも本イベントの成功には重要であった(NASA側からの情報では、異常が見られることも、しばしばあるとのこと)。

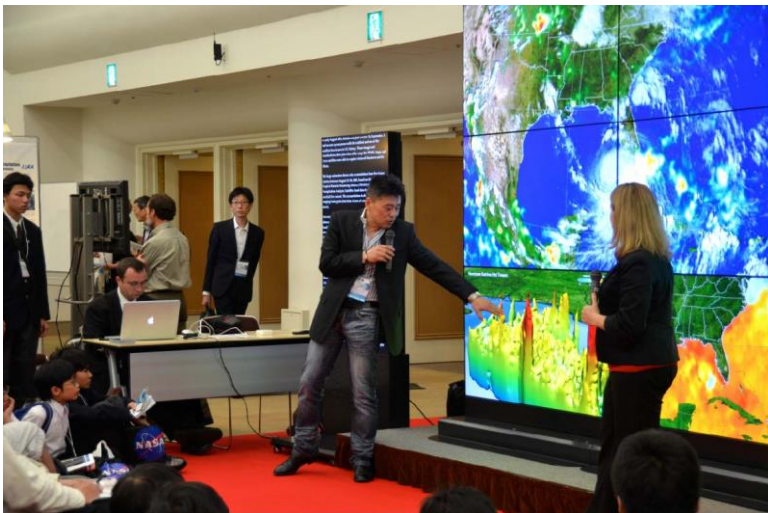
今回のHW企画については、初開催としては成功であったと感じた。他研究所の広報部から来年度以降も行うならばぜひ参加させていただけないか、という話もいただいております、そのインパクトと影響力は非常に大きかったと感じる。また、大会後にNASA側からこれが始まりだというコメントを頂いたことから、NASA側はHW企画を継続的に行っていきたいと考えていると思われる。しかし、これからもHW企画を継続していくには、こちらから新しい提案をしていくことが重要であると考えられる。その一つとして、地球科学の他分野の話もHW企画内に含めるようにJpGU側からNASA側に提案することは、地球科学の連合学会であるJpGUの性質を考えると自然な方向で拡張できるのではないかと考える。しかし、今回の企画でさえ、半年で何とか実行までこぎつくことができたことと、NASA側からのメンバーとの比率のバランスをとる必要等があることから、その労力は非常に大きくなることには注意したい。



Freilich 氏のイントロダクショントークの様子。



大会初日夜に行われた食事会後の様子。



Highschool Day で行われた NASA による講演では、藤本氏がその場で講演内容の翻訳・意識を行った。



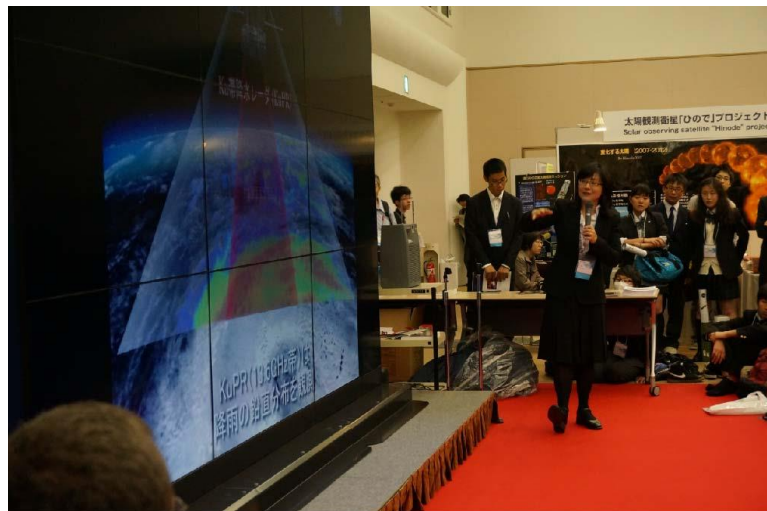
David Crisp 氏(NASA)による講演の様子。



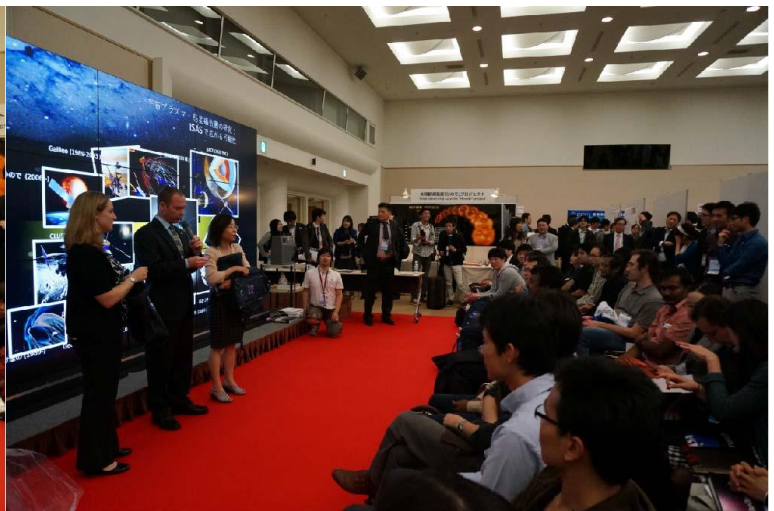
今村剛 氏(JAXA)による講演の様子。



講演者を捕まえて質問する、熱心な参加者も見られた。
写真は、質問に答える Dalia Kirshbaum 氏 (NASA)



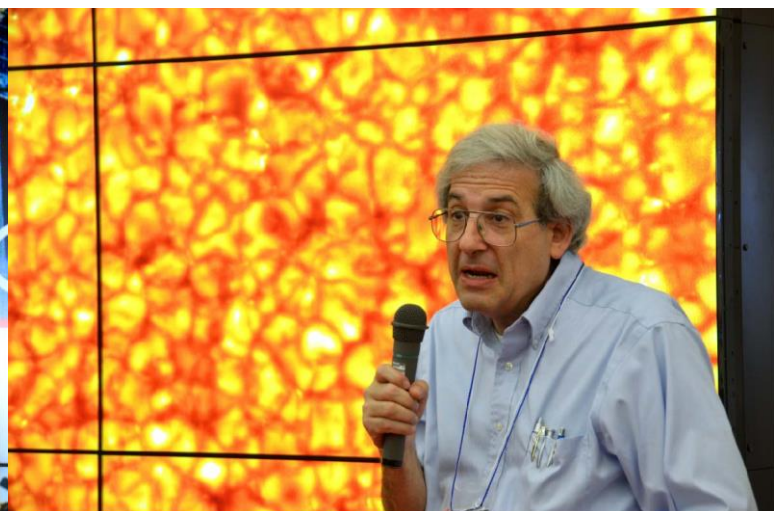
沖理子 氏(JAXA)の講演の様子。



4 講演(15 分 x2)をセットに行い、各セット後には、抽選で NASA グッズを配布した。



島田政信 氏(JAXA)の講演の様子。



Freilich 氏(NASA)によるサマリートークの様子。



ハイパーウォール講演終了後の集合写真。お疲れ様でした。

4 月 13 日 実施 横浜市次世代育成プログラムの流れ

11 月下旬 横浜市より次世代育成プログラムの依頼

12 月 Jamstec 小俣珠乃氏に協力依頼 内容検討

1 月 内容と開催場所を慶応高校に決定。
開催日は 4 月 13 日，チラシ作成

2 月 スタッフ手配．横浜市広報に掲載．
中学高校にチラシ配布（3 月 18 日締切）

3 月 142 名申し込み，全員受け入れ決定．
スタッフ追加手配（スタッフ総勢 29 名）
横浜サイエンスフロンティア高等学校に機材提供依頼
（慶応・聖光と 3 校の機材を集結）
26 日記者会見で紹介．

4 月 2 日に事前打ち合わせ．
12 日事前準備．
13 日実習当日 123 名参加，19 名欠席

申し込み内訳		男子	女子
高3	5	4	1
高2	16	8	8
高1	34	20	14
中3	29	18	11
中2	42	31	11
中1	16	15	1
		96	46

横浜市・日本地球惑星科学連合次世代育成プログラム
「深海コア～地球の謎に迫る～」
実施報告書

平成 26 年 4 月 18 日
公益社団法人
日本地球惑星科学連合

1. 概要

JpGU2014 年大会を横浜市で開催することに伴い、地球惑星科学に興味を持つ中高生を増やして次世代の研究者輩出を促進し、学会の盛会に協力するため、実サンプル・データを用いた授業を実施した。

2. 日時：平成 26 年 4 月 13 日（日）9:00~17:00

3. 場所：慶応義塾高等学校

実施体制：

主催 日本地球惑星科学連合大会(JpGU)

共催 横浜市

協力 海洋研究開発機構(JAMSTEC)

NPO 法人地学オリンピック日本委員会

慶応義塾高等学校

聖光学院高等学校

横浜サイエンスフロンティア高等学校

4. 参加者：横浜市在学または在住の中高生 123 名

（事前応募 142 名、当日欠席 19 名）

5. 結果報告

当初の募集人数 48 名に対し、募集開始 1 週間で申し込み数 70 名を突破した事から、主催側では、次世代への地球科学に対する関心を高める目的を鑑み、応募者を極力受け入れる方向で再調整し、最終的には応募者全員受け入れとした。

実習は、ノート PC を利用した JAMSTEC のデータベース実習および双眼実体顕微鏡を利用した海洋コア観察実習を行い、ノート PC および双眼実体顕微鏡を 1 名 1 台が使用できる状態で実習を行った。参加生徒達にとって、深海調査の実際と得られたデータやサンプルを直接調査・観察する事で、普段の生活では触れる機会の限られている深海についてより深く知ることができたと思われる。

上記実習後には、参加者の興味も高いと思われる地学オリンピックの紹介を行った。

その後、IODP 運航船の一つであるジョイデス・レゾリューション号とのスカイプ中継が行われた。ジョイデス号は現在小笠原諸島周辺で研究航海を行っており、参加者も深海掘削の現場と実際のデータの関わりについて実感する事ができたのではないかとと思われる。

加えて特筆すべきは、今回の実施体制について、横浜周辺の地球科学に関連した幅広い教育・研究機関が協力し、実習補助を行うボランティアスタッフとして、地球科学系学科・関連学科の大学生・大学院生（国際地学オリンピック元日本代表選手を含む）の貢献があったことである。参加生徒達にとって、地球科学に関わる幅広いキャリアプランの啓蒙という効果もあったことを指摘したい。

スタッフ（敬称略）：

長野玄	東京大学	理学部地球惑星環境学科	4 年
橋本敏明	慶應大学	理工学部	4 年
青祐太郎	東京大学大学院	理学系・地球惑星科学専攻	M2
森里文哉	東京大学大学院	理学系・地球惑星科学専攻	M2
福地里菜	東京大学大学院	理学系・地球惑星科学	D1
高木悠花（はるか）	早稲田大学大学院	創造理工学研究科 地球・環境資源理工学専攻	D2（JAMSTEC 研究生）
富永紘平	筑波大学	生命環境科学科地球進化科学専攻	4 年
南里翔平	首都大学東京大学院	都市環境科学研究科	M1
平塚将起	慶應義塾大学大学院	（理工学部機械工学科）	博士課程 3 年
坪川祐美子	横浜国立大学大学院	環境情報学府 環境生命学専攻	修士 1 年

大平茜	横浜国立大学 環境情報学府 環境生命学専攻 修士 1 年
杵島正洋	慶應義塾高等学校（地学教諭）
古市正彦	慶応義塾高等学校（助手）
岡崎伶子	慶応義塾高等学校（助手）
畠山正恒	聖光学院中学 高等学校（地学教諭）
小川乃絵	横浜サイエンスフロンティア高等学校（地学教諭）
松尾花枝	横浜サイエンスフロンティア高等学校（地学教諭）
小俣珠乃	海洋研究開発機構地球深部探査センター（海洋コア実習講師）
中野幸彦	海洋研究開発機構地球情報研究（データベース実習講師）
臼井洋一	海洋研究開発機構地球内部ダイナミクス領域（海洋コア実習講師）
藤井友紀子	海洋研究開発機構広報課
今村仙子（ひさこ）	海洋研究開発機構支援部
木戸ゆかり	海洋研究開発機構地球深部探査センター
渡来めぐみ	地学オリンピック日本委員会
川村教一	秋田大学教育学部
瀧上豊	地学オリンピック日本委員会
原辰彦	JpGU 広報普及委員会
谷上美穂子	JpGU 事務局
白井佳代子	JpGU 事務局

実習の様子

開会式



開会の挨拶



3D 眼鏡による地図観察

海洋コア実習



説明



コア観察



顕微鏡観察

データベース実習



説明



データベース検索

地学オリンピック紹介



ジョイデス・レゾリューション号中継



中継の様子



質問の様子

閉会式



横浜市担当者挨拶



スタッフ挨拶



参加者集合写真

■参加者数内訳

学年	参加者数	割合	
中学生	1	13	11%
	2	35	29%
	3	27	22%
中学生 計	75	61%	
高校生	1	28	23%
	2	15	12%
	3	4	3%
高校生 計	47	39%	
総計	122	100%	

■満足度(平均値は「とても満足」を5、「やや満足」を4、「どちらでもない」を3として算出)

学年	とても満足	やや満足	どちらでもない	やや不満	不満	平均
中学生	1	7	5			4.58
	2	20	10	2		4.56
	3	9	8	5		4.18
中学生 計	36	23	7			4.44
高校生	1	11	15			4.42
	2	9	5			4.64
	3	2	1	1		4.25
高校生 計	22	21	1			4.48
不明	3	4	1			4.25
総計	61	48	9	0	0	4.44

<主な理由>

とても満足	・思っていたよりも本格的で実物のコアなども見られたため ・普段みれないものを見ることができたから ・講師の方々が丁寧に指導してくださったから
やや満足	・少し難しい所があった(インターネットの操作) ・自分は生物について興味があり参加したけど、実習が多かったから ・自分で自由にできることが良かったから
どちらでもない	・時間が長く、疲れたから ・日頃から勉強をしていないので、難しかった ・もう少しここでしかできないような実習を試みたかった

■参加した動機

学年		面白そう だった	教員・保護者 のすすめ	JAMSTEC への興味	地球惑星科 学への興味	実習が 好き	その他
中学生	1	6	3	1	2		
	2	16	8	7	4	1	
	3	4	8	5	2	2	2
中学生	計	26	19	13	8	3	2
高校生	1	12	5	1	5	2	2
	2	3	2	5	3	1	
	3		2		2		
高校生	計	15	9	6	10	3	2
不明		5	3				
総計		46	31	19	18	6	4

＜「その他」の内容＞

- ・地質学について興味があったから
- ・科学系の実習に参加したいと思っていたから
- ・理科の実験が大好きだから
- ・友人にすすめられたから

■認知経路

学年		チラシ	紹介	HP	広報よこはま	新聞	Twitter
中学生	1	6	7		1		
	2	23	7	2	3		
	3	19	4	1			
中学生	計	48	18	3	4		
高校生	1	18	5	3			
	2	10	7		2		
	3	2	3				
高校生	計	30	15	3	2		
不明		6	2	1			
総計		84	35	7	6	0	0

■参加してよかったこと

学年	深海コア の 観察	データベース 実習	地球惑星 科学に携わる スタッフ との交流	JOIDES Resolution号 との スカイプ中継	他校生徒 との交流	その他
中学生	1	10	8	1	2	1
	2	31	19	6	6	3
	3	20	10	6	1	1
中学生 計	61	37	13	9	4	3
高校生	1	21	7	7	1	
	2	10	9	4	2	
	3	3	1			
高校生 計	34	17	11	3	1	
不明	5	6	2	1		1
総計	100	60	26	13	5	4

＜「その他」の内容＞

- ・学校よりも自由にできて楽しかった
- ・コアの中の粒の観察が貴重だったこと
- ・顕微鏡を使って、細かいものを見られて貰えたこと
- ・大学内を見れた

■特別実習を通して得たこと

＜主な内容＞

- ・深海、地球のことについて学ぶことができた
- ・普段見られないものを見ることで、新しい知識を得ることができた。
- ・研究者がどのようなことをしているかを知った。
- ・地学への興味
- ・深海について何も知らなかったけれど、深海について興味を持てたこと
- ・どのような研究かがよくわかり、将来での選択肢が増えたこと。

■その他意見

＜主な内容＞

- ・また機会があれば参加したいと思います。
- ・コア観察図？の和訳があればよかった
- ・データベース(パソコン)が難しかったです。
- ・スタッフの方々が優しく接してくれて、うれしかったです。
- ・長時間だったので、目が疲れた。
- ・深海生物についてもやってほしい
- ・今度は天体観測をしたい
- ・8時間は明らかに長いです
- ・同世代で集まっているので、話す機会が欲しい

2015年大会準備スケジュール案

2013年日程→2014年日程	プログラム関連予定/作業者	2015日程案
1/10→1/8(水)	投稿・参加登録開始	1/8(木)
2/3→2/3(月)	↓投稿者	2/3(火)
2/15(2/18)→2/12(水)	投稿早期締切	A案:2/12(木) 35days B案:2/18(木) 35days+6days* C案:2/23(月) 35days+11days**
2/25(3/1)→2/18(金)	↓投稿者	*プログラム編成の曜日の都合から逆算して7日ではなく6日 **土日の関係で10日ではなく11日
3/12(3/13)→3/4(火)	投稿最終締切	A案:2/18(水) 6days B案:2/24(火) 6days C案:3/2(月) 6days
3/25(3/26)→3/18(金)	↓プログラム局	A案:3/4(水) 14days B案:3/10(火) 14days C案:3/16(月) 14days
4/1(4/2)→3/25(日)	コマ数確定	A案:3/5(木) 1day B案:3/11(水) 1day C案:3/17(火) 1day
4/8(4/9)→3/31(日)	↓プログラム局	A案:3/5(木) 1day B案:3/11(水) 1day C案:3/17(火) 1day
4/15(4/16)→4/8(日)	コマ割り確定	A案:3/11(水) 6days or 3/16(月) 11days* B案:3/18(水) 7days C案:3/23(月) 6days**
4/22(4/23)→4/15(日)	↓事務局	*編成完了日の曜日の都合から逆算すると7日ではなく6日、後ろに延ばした案も用意。 **データ確定日の曜日の都合から逆算すると7日ではなく6日、これ以上の延長は難しい。
4/29(4/30)→4/22(日)	コマ割りWEB公開	A案:3/16(月) 5days or 3/20(金) 4days B案:3/23(月) 5days C案:3/27(金) 4days
5/6(5/7)→4/29(日)	↓事務局	★編成システムを改修し、コンビーナが招待講演者の時間設定を行えるようにできれば2日で可能
5/13(5/14)→5/6(日)	プログラム編成開始	プログラム全データ確定 →秋田活版にデータ渡し
5/20(5/21)→5/13(日)	↓コンビーナ	A案:3/20(金) 4days or 3/25(水) 5days B案:3/27(金) 4days C案:4/1(水) 5days
5/27(5/28)→5/20(日)	プログラム編成完了	5/12(火)
6/3(6/4)→5/27(日)	↓事務局	5/14(木)
6/10(6/11)→6/3(日)	発表データ確定	
6/17(6/18)→6/10(日)	↓JTBCOM/(事務局)	
6/24(6/25)→6/17(日)	プログラムWEB公開	
6/30(7/1)→6/24(日)	事前参加登録締切	
7/7(7/8)→6/30(日)	予稿公開	

連合大会日程案

2015 年

5 月 24 日（日）～5 月 29 日（金） （6 日間）幕張メッセ または
5 月 24 日（日）～5 月 28 日（木） （5 日間）幕張メッセ

（EGU：4 月 12 日～17 日）

2016 年

4 月 25 日（月）～29 日（金） （5 日間）パシフィコ横浜 または
5 月 22 日（日）～26 日（木） （5 日間）幕張メッセ

（EGU：4 月 17 日～22 日）

（Goldschmidt 2016：6 月 26 日～7 月 1 日 パシフィコ横浜）

2017 年

ゴールデンウィーク中開催 パシフィコ横浜 または
5 月末開催 幕張メッセ

EGU 4 月 23 日～28 日

ジャーナル関係報告（2014 年 6 月 2 日開催理事会用）

3 つの委員会を開催した。

1. ジャーナル編集長会議（第 2 回）を開催（平成 26 年 5 月 20 日（火）午後 13 時 00 分から 14 時 50 分 @フクラシア品川クリスタルスクエア，議長 編集長 川幡穂高（敬称略））
2. ジャーナル編集会議（第 1 回）を開催（平成 26 年 5 月 20 日（火）午後 15 時 00 分から 17 時 00 分 @フクラシア品川クリスタルスクエア，議長 総編集長 井龍康文（敬称略））
3. ジャーナル企画経営委員会（メール会議，平成 26 年 5 月 24 日（月））

報告

1) H26 年度分の実行案を日本学術振興会に最終案を近日中に提出予定である。また，H25 年度分については，繰り越し分が終了しだい，6 月末頃をめどに提出する予定である。

2) 投稿・出版・リジェクト状況の確認

・Submit リストにより現状を説明（岡田）。[投稿 34 本、出版済 9 本、Reject 4 本](#)、Springer の編集画面で view 数が閲覧できるが、[閲覧数の多い論文はすでに 1000 件を超え順調に閲覧されている](#)。

Nakamura and Takai 論文，SpringerOpen のサイト内、“Most Popular/Last 30 days”で、“Highly Accessed”（1003 accesses）として 95 位にランクインしています。

PEPS のページでも、赤いバナーがついてハイライトされています。

<http://www.progearthplanetsci.com/>

Review **Open Access** **Highly accessed**
Theoretical constraints of physical and chemical properties of hydrothermal fluids on variations in chemolithotrophic microbial communities in seafloor hydrothermal systems
Nakamura K and Takai K
Progress in Earth and Planetary Science 2014, **1**:5 (22 April 2014)

・査読者公表について、出版数の少ない段階で公表すると，ある種の論文に関しては査読者が特定されてしまうので，[査読者一覧は 2 年分位をまとめて謝辞とともに公表](#)する。

・著者に通知希望の査読者の名前は、Reviewer’ s report の最後に署名していただくか，HE が査読結果を著者に返す際に明示する。

- ・ [Tex Template の不備があったが、改善し、Upload した。](#)
- ・ 特に[学生にも目につくよう日本語による 800 語以下のアブストラクト](#)を PEPS HP に掲載するよう準備する。
- ・ [出版論文の Highlight](#)：著者への依頼文を総編集長が考える。
- ・ Forthcoming, Published, Highlight 等を考慮した [HP のデザイン変更を検討](#)する。

3) PEPS 出版に関し，編集会議での[受理論文のレベル](#)に関する合意事項

- ・ [「PEPS における受理論文のレベルは、地球惑星科学における世界の一極を担える」オープンアクセス電子ジャーナル](#)を確立できるレベルとする。具体的には、AGU の主要雑誌、[Journal of Geophysical Research](#)、[Geophysical Research Letter](#) あるいは EGU の主力雑誌などで[受理されるレベル以上とする](#)。PEPS は、IF がとても高い値（例えば、>10）を目指したり，時流のト

ピックスを狙うような論文を主に掲載するのでなく、質の高い論文の掲載に重点をおく良心的な出版を遂行する予定である。

4) 本年度の出版計画および予定

- ・ [今年度の出版では 60 \(～100\) 本の論文の出版を予定](#)している。
- ・ セッション・コンビーナーに対して、[「JpGU 新ジャーナル「Progress in Earth and Planetary Science \(PEPS\)」への連合大会セッションへの推薦依頼」](#)を 4 月下旬に行ったが、連合大会を終了したので、近日中に実施予定である (5 月 22 日夕刻に実施し、すでに対応済み)。
- ・ Editorial board のメンバーについては、Thomson Reuter による IF を得るまでは現状をあまり変更しないことにするが、一方で Associate Editorなどを補強して、円滑な査読を行えるよう準備する。
- ・ 7 月下旬に AOGS にあわせた PEPS 国際編集委員会議を行う (7 月 29 日 (火) 18:00-20:00, 懇親会は 20:00 より, 会場: 札幌芸文館ホテル)

5) その他

- ・ 連合大会におけるジャーナル関係ユニオンセッションを開催した。
- ・ 日本人の科学活動について、PEPS 編集委員から以下のコメントがあった: 「1980 年頃, 岩波の科学に (日本人の) 先人の科学的成果の review (もちろん日本語) が掲載された. 学部に進学して, その論文を読んで, 先生達やその上の世代が努力したので, 今の自分達の学問もあるというのが, 簡単に理解できた. 最近このような [日本人の活動を俯瞰できるような便利な読み物](#)がない. JpGU の若手 (+学生) 会員に対して「日本人の成果の再評価 (=引用)」と述べても, 日本人の科学成果の全体像が見えないと理解しづらい. 全体が俯瞰できるような記事あるいは論文などの企画があればと思う。」
- ・ 今後の予定: 7 月下旬に AOGS にあわせた PEPS 国際編集委員会議を行う (7 月 29 日 (火) 18:00-20:00, 懇親会は 20:00 より, 会場: 札幌芸文館ホテル)。

平成 26 年 4 月 16 日

公益社団法人 日本地球惑星科学連合
会長 木村 学様

公益財団法人 とうきゅう環境財団
理事長 西本 定保



平成26年度「第6回 とうきゅう環境財団 社会貢献学術賞」
受賞候補者推薦について（ご依頼）

拝啓 時下ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。

当財団は、地域社会への感謝の気持ちから、主要事業エリアを流れる多摩川およびその流域の環境改善を図ることを目的に昭和49年8月に設立されました。

平成21年8月、創立35周年を記念して、我が国の学術振興に資することを目的に「第1回とうきゅう環境浄化財団 社会貢献学術賞」(現とうきゅう環境財団)贈呈の事業を行いました。

この度、本年第6回の授賞に先立ちまして、貴日本地球惑星科学連合におきまして日本の環境分野(環境保全・エネルギー・リサイクル・廃棄物など)において学術的、社会的に特に顕著な業績(調査研究・科学技術の発展・行政施策・実践活動など)を挙げた研究者様を受賞候補者として推薦をお願い致したく存じます。

本賞の趣旨をご理解の上、別紙の推薦要綱によりまして、ご推薦頂きますようお願い申し上げます。

敬具

(お問合せ先) 公益財団法人 とうきゅう環境財団 事務局

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷 1-16-14 渋谷地下鉄ビル5階

TEL 03-3400-9142(代表) FAX 03-3400-9141

ホームページ <http://www.tokyuenv.or.jp/>

平成 26 年 4 月 16 日

第 6 回(平成 26 年度)とうきゅう環境財団 社会貢献学術賞
受賞候補者推薦要綱

公益財団法人 とうきゅう環境財団

1 候補者対象

日本の環境分野において学術的、社会的に特に顕著な業績を挙げた研究者(個人・共同・団体、外国籍(国内で研究されている方)、但し企業は除きます)。

2 社会貢献学術賞

本賞 1 件：賞状および賞金 50 万円。

* 受賞者は原則 1 件 1 人としませんが、共同ならびに団体研究の場合においても 1 件として取扱います。

3 推薦依頼先

別紙に掲げる環境に関連する依頼先に当財団が推薦を依頼します。

4 推薦件数

各依頼先からの推薦候補者は、原則として各 1 件とします。

5 応募期間および締切日

応募期間 平成 26 年 4 月 1 日～8 月 31 日

締切日(必着) 平成 26 年 8 月 31 日

6 提出方法

財団所定の推薦書用紙(財団ホームページにてダウンロード可)に必要事項を記載し、期日迄に当財団に郵送で提出して下さい。なお提出書類は返却いたしません。

7 選考

当財団の選考委員会において選考の上、決定いたします。

選考結果は、平成 26 年 10 月初旬、推薦者・受賞者に通知いたします。

8 社会貢献学術賞の贈呈式

平成 26 年 11 月、東京にて開催予定。

9 その他

本贈呈に関して取得する個人情報、業務に必要な範囲に限定して取扱います。

10 推薦書提出先

公益財団法人とうきゅう環境財団

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷 1-16-14 渋谷地下鉄ビル 5 階

TEL:03-3400-9142 FAX:03-3400-914 HP <http://www.tokyuenv.or.jp/>

(別紙) 推薦団体依頼先 一覧表

(公社) 日本河川協会	(公社) 日本生物工学会	日本地球化学会	(公財) 日野自動車グリーンフアンド
(一般財) 日本緑化センター	(公社) 日本造園学会	(公社) 日本都市計画学会	(公社) アジア協会アジア友の会
(公社) 日本下水道協会	(一般社) 日本土壌肥料学会	(公社) 日本水環境学会	(公財) オイスカ
日本海洋学会	(公社) 日本農芸化学会	(一般社) 日本環境測定分析協会	(一般社) 海外環境協力センター
(一般社) エネルギー・資源学会	(公社) 日本分析化学会	水文・水資源学会	(財) 国際環境技術移転研究センター
(公社) 土木学会	日本水処理生物学会	日本内分泌攪乱化学物質学会	(公財) 国際緑化推進センター
(公社) 化学工学会	(公社) 農業農村工学会	(一般社) 廃棄物資源循環学会	(一般財) 省エネルギー経済研究所
(公社) 空調調和・衛生工学会	(一般社) 環境情報科学センター	(公社) 日本地球惑星科学連合	(公財) 地球環境センター
(一般社) 日本建築学会	日本陸水学会	日本魚類学会	(公財) 地球環境戦略研究機関
(公社) 地盤工学会	(公社) 日本地下水学会	(一般社) 自然環境共生技術協会	(一般財) 日本エネルギー経済研究所
全国簡易水道協議会	(公財) 日本生態系協会	(公社) 環境科学学会	(公社) 日本環境教育フォーラム
(公社) 日本気象学会	(公財) 日本ナショナルトラスト	日本鳥学会	(一般社) 日本森林技術協会
(公社) 日本化学会	(公社) 日本騒音制御工学会	(公社) 日本動物学会	(公財) 本田財団
日本衛生学会	(一般社) 日本環境アセスメント協会	(公社) 日本植物学会	(公財) 三菱財団
日本環境学会	(一般財) 日本環境衛生センター	(公財) 旭硝子財団	(公財) 助成財団センター
(一般社) 日本公園緑地協会	(公財) 日本環境協会	(公財) 国際花と緑の博覧会記念協会	(財) 河川環境管理財団
(一般財) 日本公衆衛生学会	(公社) 日本ナショナルトラスト協会	(公財) 自然保護助成基金	(一般社) 産業と環境の会
(公社) 日本水道協会	(財) 統計研究会	(公財) 損保ジャパン環境財団	(公財) トヨタ財団
(公社) 日本水産学会	(社) 農山漁村文化協会	(一般財) セゾン・イレブン記念財団	(一般財) キヤノン財団
(一般社) 日本生態学会	(公財) 日本自然保護協会	(公財) 住友財団	
(公財) 日産科学振興財団	(公社) 日本地理学会	(公財) 日立環境財団	以上 82ヶ所

日本学術振興会 育志賞の概要－優秀な大学院博士課程学生の顕彰・支援－

1. 趣旨

日本学術振興会（以下「本会」という。）は、天皇陛下の御即位20年に当たり、社会的に厳しい経済環境の中で、勉学や研究に励んでいる若手研究者を支援・奨励するための事業の資として、平成21年に陛下から御下賜金を賜りました。^[SEP]このような陛下のお気持ちを受けて、本会では、将来、我が国の学術研究の発展に寄与することが期待される優秀な大学院博士課程学生を顕彰することを目的として、平成22年度に「日本学術振興会 育志賞」を創設しました。

2. 対象分野

人文学、社会科学および自然科学の全分野とします。

3. 対象者

①大学院における学業成績が優秀であり、豊かな人間性を備え、意欲的かつ主体的に勉学及び研究活動に取り組んでいる大学院生であって、当該大学長から推薦された者

②①に相当する大学院生であるとして所属する学会長から推薦された者

③①及び②の者は、平成26年4月1日現在34歳未満であり、平成26年5月1日に我が国の大学院博士後期課程（医学、歯学、薬学または獣医学を履修する4年制の博士課程を含む）に在学していること。

また、海外からの留学生で大学院博士後期課程に在学する者についても、推薦することができます。

※ 推薦に当たっては、論文等の業績のみにとらわれず、将来、我が国の学術研究の発展に寄与することが期待される優秀な者を推薦願います。

4. 推薦権者

5. 授賞等

授賞総数は毎年度16名程度とし、受賞者には賞状、賞牌及び副賞として

学業奨励金 110 万円を贈呈します。^[L_{SEP}]また、受賞者は、希望により翌年度から特別研究員等に採用することとします。その場合、研究奨励金等が支給されます。^[L_{SEP}]特別研究員等への採用を希望する者は、翌年度の 4 月 1 日の在学年次、学位の取得状況等に応じた採用区分の特別研究員又は外国人特別研究員に所定の手続きを経て採用することとなります。既に特別研究員として採用されている受賞者についても、希望により前記と同様の扱いを受けることが可能です。詳細については、受賞者に対して別途お知らせします。^[L_{SEP}]なお、特別研究員または外国人特別研究員への採用に当たっては、原則として他のフェローシップ、研究費の助成等を受給することはできません。また、定められた規則等を遵守して頂きます。

第4回（平成25年度）日本学術振興会 育志賞受賞者一覧

受賞者氏名 (性別) (年齢) (国籍・外国籍のみ)	所属機関	推薦機関	博士課程の研究課題
いいま まみ 飯間 麻美 (女)(33)	京都大学 (医学研究科 医学専攻)	京都大学	拡散 MRI を用いた新
おおうえ まさひと 大上 雅史 (男)(26)	東京工業大学 (情報理工学研究科 計算工学専攻)	東京工業大学	立体構造情報に基づく
くまぞえ もとふみ 熊添 基文 (男)(26)	九州大学 (生物資源環境科学府 生物産業創成専攻)	九州大学	緑茶ポリフェノール E -gallate によるがん細胞
こうの ななせ 河野 七瀬 (女)(27)	広島大学 (理学研究科 化学専攻)	広島大学	振動励起分子の衝突素
こばやし あつし 小林 篤史 (男)(27)	京都大学 (アジア・アフリカ地域研究研究科 グロー ル地域研究専攻)	京都大学	19 世紀の東南アジア地
こむら みづき 古村 聖 (女)(26)	名古屋大学 (経済学研究科 社会経済システム専攻)	名古屋大学	家族の経済学に基づく
なかはた よしひさ 中畑 義久 (男)(30)	総合研究大学院大学 (生命科学研究科 生理科学専攻)	日本神経科学学会	シナプス後膜における
はまむき なお 浜向 直 (男)(26)	東京大学 (数理科学研究科 数理科学専攻)	日本数学会	結晶成長現象とハミル
ふかや たかし 深谷 雄志 (男)(26)	東京大学 (新領域創成科学研究科 メディカルゲノ 専攻)	日本 RNA 学会	microRNA による遺伝
ふるいち のりとし 古市 憲寿 (男)(28)	東京大学 (総合文化研究科 国際社会科学専攻)	東京大学	日本における若手起業
へいあんざ よりこ 平安座 依子 (女)(26)	筑波大学 (人間総合科学研究科 疾患制御医学専攻)	筑波大学	日本人 2 型糖尿病の最
まつした たかし	北海道大学	日本ロシア文学会	ソ連崩壊後の現代ロシ

松下 隆志 (男)(28)	(文学研究科 歴史地域文化学専攻)		
みやけ ふさ 三宅 芙沙 (女)(26)	名古屋大学 (理学研究科 素粒子宇宙物理学専攻)	名古屋大学	樹木年輪中放射性炭素
むかい ひろみ 向井 裕美 (女)(26)	鹿児島大学 (連合農学研究科 農水圏資源環境科学専攻)	日本応用動物昆虫学会	社会性カメムシ類にお 構の研究
もちづき けんじ 望月 建爾 (男)(31)	総合研究大学院大学 (物理科学研究科 機能分子科学専攻)	総合研究大学院大学	氷の融解過程と水溶液
もりもと ゆうや 森本 雄矢 (男)(28)	東京大学 (情報理工学系研究科 知能機械情報学専攻)	東京大学	生体組織の再構築によ
やまさき せいじ 山崎 聖司 (男)(25)	大阪大学 (薬学研究科 創成薬学専攻)	大阪大学 日本薬学会	細菌薬剤排出ポンプの
りょう えい 梁 永 (男)(28)(中国)	京都大学 (工学研究科 電子工学専攻)	京都大学	ビーム出射方向制御可

※年齢は平成 25 年 4 月 1 日現在、所属機関は平成 25 年 5 月 1 日現在

平成26年度 共催・協賛・後援等一覧

2014/5/29 19:31

承認日	種別	会合名等	開催期間	会場
4月24日	協賛	PF研究会「次世代放射光源で期待されるXAFSを活用したサイエンス」 (主催:高エネルギー加速器研究機構 放射光科学研究施設)	2014年7月11日(金)～2014年7月12日(土)	高エネルギー加速器研究機構 4号館 セミナーホール
4月24日	協賛	第55回高圧討論会 (主催:日本高圧力学会)	2014年11月22日(土)～24日(月)	徳島大学 第三島キャンパス
4月25日	協賛	2014年URSI日本電波科学会議 (主催:電子情報通信学会エレクトロニクスサイエティ)	2014年9月8日(月)	中央大学 後楽園キャンパス
申請中	共催	国際第四紀学連合第19回大会 (主催:国際第四紀学連合, 日本第四紀学会, 日本学術会議)	2015年7月27日(月)～8月2日(日)	名古屋国際会議場

※参考:平成25年度 共催・協賛・後援等一覧

承認日	種別	会合名等	開催期間	会場
4月9日	協賛	第54回高圧討論会	2013年11月14日(木)～16日(土)	朱鷺メッセ 新潟コンベンションセン
4月18日	後援	科学教育研究協議会・第60回全国研究大会・岩手大会	2013年8月2日(金)～8月4日	専修大学北上高等学校
5月7日	協賛	日本地質学会第120年学術大会(仙台大会)巡検	2013年9月13日、14日、17日、18日	宮城県仙台市など13コース
5月16日	共催	Goldschmidt Conference 2016	2016年6月26日(日)～7月1日(金)	横浜国際平和会議場(パシフィコ横浜)
6月22日	協賛	女子中高生夏の学校2013～科学・技術者のたまごたちへ～	2013年8月8日(木)～平成25年8月10日(土)	国立女性教育会館
7月29日	協賛	ハイパフォーマンズコンピューティングと計算科学シンポジウム(HPCS2013)	2014年1月7日～8日	学術総合センターー橋記念講堂
11月5日	共催	日本学術会議公開シンポジウム 増大する災害と地球環境問題に地球人間圏科学はどう取り組むか?	2013年12月5日	日本学術会議講堂
12月17日	後援	東京大学地震研究所2013年度研究集会「地震の研究者と小・中・高等学校教員との連携ー地震教育の現状に即した知識普及活動を目指してー」	2013年12月26日(木)～ 2013年12月27日(金)	東京大学地震研究所
12月19日	共催	SED2014 国際シンポジウム	2014年8月3日(日)～ 2014年8月8日(金)	湘南国際村センター
12月26日	協賛	未来を拓く高圧力科学技術セミナーシリーズ(39)「高圧力と分光測定技術」	2014年3月26日(水)	日本大学文理学部世田谷キャンパス 内
1月15日	協賛	第19回計算工学講演会	2014年6月11日(水)～13日(金)	広島国際会議場
1月16日	協賛	物構研サイエンスフェスタ2013	2014年3月18日(火)～19日(水)	つくば国際会議場(エポカルつくば)
1月21日	後援	地震・自然災害のための測地学国際シンポジウム (GENAH2014)	2014年7月22日(火)～26日(土)	宮城県松島市 ホテル大観荘
3月5日	後援	科学教育研究協議会・第61回全国研究大会・東京大会	2014年8月2日(土)～ 2014年8月4日(月)	正則高等学校および芝中学校・高等

2014 年度 第 1 回 環境災害対応委員会 議事録(案)

日時：2014 年 4 月 30 日 13 時～14 時

場所：パシフィコ横浜会議センター423 号室

出席者：松本 淳（委員長：司会）、石原正仁（日本気象学会）、石峯康治（日本火山学会）、宇根 寛（日本地理学会、日本地図学会：書記）、大塚康範（日本応用地質学会）、金谷有剛（日本大気化学会・代理）、川畑大作（日本地質学会）、黒木貴一（東北地理学会）、小荒井 衛（日本地質学会）、後藤和久（日本堆積学会）、後藤真太郎（地理情報システム学会）、近藤昭彦（日本リモートセンシング学会）、田所敬一（日本地震学会）、田力正好（日本第四紀学会）、中村洋一（日本火山学会）、林 武司（日本地下水学会、日本水文科学会）、真木雅之（水文・水資源学会）、松島 大（水文・水資源学会）、柳澤教雄（日本地熱学会）、山本正直（写真測量学会・オブザーバ）

1. 参加委員等自己紹介

2. 前回議事録の承認

原案通り承認された。

3. 2013 年度の活動報告

委員長より、2014 年度連合大会で以下のセッションを主催・共催していることが報告された。

「人間環境と災害リスク」（共催）

「Extreme Weather in Cities」（共催）

「福島原発事故により放出された放射性核種の環境動態」（共催）

「連合は環境・災害にどう向き合っていくのか？」（主催）

主催・共催セッションが 2 組パラレルになった。プログラム編成の際になるべくパラレルになることを避けるようにすることが今後の課題。

出席委員から、各学協会の取り組みについて、配布資料等にもとづき下記の報告がなされた。

- ・日本気象学会（石原）：2013.5 春季大会でシンポジウム「変化する地球環境と気象学の役割」、公開気象講演会「将来の再生可能エネルギーと気象」を開催。2013 年連合大会で「A-AS23 都市における極端気象」セッションを協賛。2014 年 JPGU「U-08 連合は環境災害にどう向き合っていくのか」ユニオンセッションを協賛、「福島第一原子力発電所に関わる環境汚染と大気科学の役割」を講演（東大、中島）。2013.11 秋季大会で「2013 年 7/8 月豪雨災害に関する研究会」、シンポジウム「二酸化炭素研究の新展開」開催。IPCC 第 5 次評価報告書の刊行にあわせた解説本を作成中。夏休みには刊行予定。
- ・日本火山学会（中村）：2013 連合大会で火山防災シンポジウム、日本火山ハザードマップ集第 2 版出版（防災科研と連携。わずかだが残部有）。「日本火山学会火山防災委員会の活動からみたわが国の火山防災」論文発表（防災科研資料）。IAVCEI での発表と展示。秋季大会公開講座で「火山防災シンポジウムー福島県の活火山と防災ー」実施、火山防災委員会の常設化提案。火山防災関係省庁担当者との勉強会を実施。
- ・日本大気化学会（金谷）：本年より大気化学研究会から日本大気化学会に名称変更。2013.11 第 19 回大気化学討論会にて、福島原発事故由来の放射性物質に関するセッションなどを開催。環境災害の側面をもつ、越境大気汚染の解析に関する発表多数。
- ・日本地質学会（小荒井、川畑）：地質・地盤情報活用促進に関する法整備の緊急提言の活動中。連合も協議会の会員。
- ・日本第四紀学会（田力）：2013.6 深谷断層見学会、2013.6 特別講演会「自然環境の過去・現在から未来を見据える：環境と自然災害」、2013.8 公開シンポジウム「考古遺跡からみた津軽の人と自然」、2013.11 共同シンポジウム「関東地方の地形・地質・テフラ研究

の現状と今後の方向性」開催、2015 年 7 月の国際第四紀学会 INQUA 名古屋大会の開催準備。

- ・日本応用地質学会（大塚）：国際応用地質学会主催アジア地域応用地質学シンポジウムに参加、次回同シンポジウムを 2015.9 に京都大宇治キャンパスで開催を決定。2013 大会で「放射性廃棄物処分」の特別セッションを設定、特別講演「歴史と現代を対比し克災する」開催。2013.12 日本学術会議主催シンポジウム「南海トラフ地震に学界はいかに向かうか」に 29 学会が参画。2014.11 に同じ枠組みで「東日本大震災・阪神淡路大震災等の経験を国際的にどう活かすか」を準備中。
 - ・日本地熱学会（柳澤）：2013.7 再生可能エネルギー展示会に出展、講演、2013.11 年会で国立公園における地熱開発の課題についての特別講演、タウンフォーラム「地熱エネルギー入門」を開催。
 - ・日本水文科学学会（林）：福島第一原子力発電所の汚染水問題に関する声明を発表。
 - ・日本地下水学会（林）：2014.3 の水循環基本法の成立を受けて 5/23 にセミナーを開催。
 - ・日本リモートセンシング学会（近藤）：環境リモセン、合成開口レーダ、航空機観測、UAV などの環境計測技術を中心に取組。
 - ・日本地震学会（田所）：2014.3 「東日本大震災合同調査報告 共通編 1 地震・地震動」を刊行。日本学術会議シンポジウムに参画。
 - ・東北地理学会（黒木）：三陸海岸の調査を実施。2014.5 に日本地理学会・日本地図学会と共催で春季大会を開催予定。
 - ・日本堆積学会（後藤）：2013.9 に東北大で津波堆積物ワークショップを実施。
 - ・日本地理学会（宇根）：災害対応委員会を常置して定常的に活動。毎年災害シンポジウムを実施。特に 2013.9 の福島大での秋季大会で「東日本大震災の発災・復旧・復興～地理学の取り組みと課題」として「福島の原子力災害に対する地理学的支援」、「東日本大震災の災害地理学的検証―想定外を繰り返さないために」、「仮設住宅から復興公営住宅へ―地理学と隣接分野からの提言」の 3 件のシンポジウムを開催。2014.3 の春季大会では公開シンポジウム「レジリエントな国土・地域社会の構築に向けた地理学的課題」を開催。災害時には地域拠点が機能する体制。
 - ・日本地図学会（宇根）：2013.4 に日本国際地図学会から日本地図学会に名称変更。2014.8 に東北地理学会と共催で東北大学で定期大会を開催。
- この他、以下の学会は欠席のため事前にメールでの報告があった旨委員長より紹介があった。
- ・日本雪氷学会（西村）：2013.9 雪氷研究大会で特別セッション「吹雪による災害軽減のためのリスクマネジメントの必要性」と「除雪ボランティアの現状とその持続可能性」を開催。2014.2 の関東甲信地方の大雪災害に関して日本雪工学会との合同調査・研究グループ意を組織し、成果を 6 月までにまとめる予定。
 - ・地球電磁気・地球惑星圏学会（吉川、小田）：2013.6 宇宙科学技術連合講演会「宇宙活動の長期的持続性と宇宙環境保全」セッション開催。2013.9 「アジア・オセアニア宇宙天気セッション」開催。2013.11 秋学会講演会「宇宙天気セッション」開催、宇宙環境の様々な変動による影響について議論。

4. 今年度及び今後の活動方針

- ・今回の連合大会で防災教育についての良いセッションがあった。委員会では防災教育については取り組んでいなかったのも、今後取り組みの強化を検討する。
- ・緊急災害対応については引き続き検討する。
- ・松本委員長は 5 月末で退任。後任委員長は田中賢治理事（京都大）。副委員長は奥村晃史理事（広島大）、北 和之理事（茨城大）となる見込（正式決定は 6 月 2 日の理事会後に委員会で決定）。

サイエンスセクションボード

(2014年6月1日現在)

宇宙惑星科学

No.		氏名	所属
1	プレジデント	佐々木 晶	大阪大学大学院理学研究科
2	バイスプレジデント	高橋 幸弘	北海道大学大学院理学院
3	バイスプレジデント	中村 昭子	神戸大学大学院理学研究科
4	幹事	吉川 顕正	九州大学大学院理学研究院
5		中村 正人	宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究所
6		大村 善治	京都大学生存圏研究所
7		草野 完也	名古屋大学太陽地球環境研究所
8		関 華奈子	名古屋大学太陽地球環境研究所
9		長妻 努	独立行政法人情報通信研究機構
10		渡邊 誠一郎	名古屋大学大学院環境学研究科
11		倉本 圭	北海道大学大学院理学院
12		永原 裕子	東京大学大学院理学系研究科
13		橘 省吾	北海道大学大学院理学院
14		横山 央明	東京大学大学院理学系研究科
15		小久保 英一郎	自然科学研究機構国立天文台理論研究部
16		小嶋 浩嗣	京都大学生存圏研究所
17		藤井 良一	名古屋大学
18		藤本 正樹	宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究所
19		渡部 潤一	国立天文台天文情報センター
20		塚本 尚義	北海道大学大学院理学院
21		常田 佐久	宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究所
22		牛尾 知雄	大阪大学大学院工学研究科
23		和田 浩二	千葉工業大学惑星探査研究センター
24		加藤雄人	東北大学大学院理学研究科

大気水圏科学

No.		氏名	所属
1	プレジデント	中島映至	東京大学大気海洋研究所
2	バイスプレジデント	杉田倫明	筑波大学大学院生命環境系
3	幹事	川合義美	海洋研究開発機構地球環境変動領域
4		沖 理子	宇宙航空研究開発機構宇宙利用ミッション本部
5		神沢 博	名古屋大学大学院環境学研究科
6		鬼頭昭雄	気象庁気象研究所
7		近藤 豊	東京大学大学院理学系研究科
8		多田隆治	東京大学大学院理学系研究科
9		知北和久	北海道大学大学院理学研究院
10		花輪公雄	東北大学大学院理学研究科
11		日比谷紀之	東京大学大学院理学系研究科
12		松本 淳	首都大学東京都市環境科学研究科
13		村山泰啓	情報通信研究機構電磁波計測研究センター

地球人間圏科学

No.		氏名	所属
1	プレジデント	氷見山幸夫	北海道教育大学教育学部
2	バイスプレジデント	佐竹健治	東京大学地震研究所
3	バイスプレジデント	春山成子	三重大学大学院生物資源学研究科
4	幹事	島津弘	立正大学地球環境科学部地理学科
5		荒井良雄	東京大学大学院総合文化研究科
6		井田仁康	筑波大学教育学系
7		碓井照子	奈良大学文学部
8		海津正倫	名古屋大学大学院環境学研究科
9		岡本耕平	名古屋大学大学院環境学研究科
10		奥村晃史	広島大学大学院文学研究科
11		小口高	東京大学大学院新領域創成科学研究科
12		小口千明	埼玉大学地圏科学研究センター
13		後藤和久	東北大学災害科学国際研究所
14		近藤昭彦	千葉大学環境リモートセンシング研究センター
15		須貝俊彦	東京大学大学院新領域創成科学研究科
16		鈴木毅彦	首都大学東京都市環境科学研究科
17		鈴木康弘	名古屋大学減災連携研究センター
18		千木良雅弘	京都大学防災研究所
19		藤原広行	防災科学技術研究所
20		松本淳	首都大学東京都市環境科学研究科
21		渡辺悌二	北海道大学大学院地球環境科学研究院
22		目代邦康（依頼中）	公益財団法人自然保護助成基金
23		上田元	東北大学大学院環境科学研究科
24		横山 祐典	東京大学大気海洋研究所
25		中村 俊夫	名古屋大学年代測定総合研究センター
26		七山 太	独立行政法人産業技術総合研究所地質情報研究部門
27		安成 哲三	総合地球環境学研究所所長
28		青木 賢人	金沢大学地域創造学類
29		瀧上 豊	関東学園大学

固体地球科学

No.		氏名	所属
1	プレジデント	大谷栄治	東北大学大学院理学研究科
2	バイスプレジデント	歌田久司	東京大学地震研究所
3	幹事	木村純一	海洋研究開発機構地球内部物質循環研究分野
4		入船徹男	愛媛大学地球深部ダイナミクス研究センター
5		岩森光	東京工業大学大学院理工学研究科
6		ウオリス サイモン	名古屋大学大学院環境学研究科
7		大久保修平	東京大学地震研究所
8		金川久一	千葉大学大学院理学研究科
9		唐戸俊一郎	Yale University Department of Geology & Geophysics
10		川勝均	東京大学地震研究所
11		サティッシュ クマール マドスーダン	新潟大学理学部地質科学科
12		鈴木勝彦	海洋研究開発機構地球内部ダイナミクス領域
13		田中聡	海洋研究開発機構地球内部ダイナミクス領域
14		中川光弘	北海道大学大学院理学院
15		中田節也	東京大学地震研究所
16		成瀬元	京都大学大学院理学研究科
17		西山忠男	熊本大学大学院自然科学研究科
18		古村孝志	東京大学情報学環
19		日置幸介	北海道大学理学院
20		松澤暢	東北大学大学院理学研究科
21		道林克禎	静岡大学地球科学科

地球生命科学

No.		氏名	所属
1	プレジデント	小林 憲正	横浜国立大学大学院工学研究院
2	バイスプレジデント	川幡 穂高	東京大学大気海洋研究所
3	バイスプレジデント	磯崎 行雄	東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻広域システム科学系
4	幹事	生形 貴男	京都大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻
5	幹事	高野 淑識	海洋研究開発機構海洋・極限環境生物圏領域
6		稲垣 史生	海洋研究開発機構高知コア研究所地下生命圏研究グループ
7		井龍 康文	東北大学大学院理学研究科
8		遠藤 一佳	東京大学大学院理学系研究科
9		大河内 直彦	海洋研究開発機構海洋極限環境生物圏研究領域
10		掛川 武	東北大学大学院理学研究科
11		北村 晃寿	静岡大学理学部地球科学教室
12		鈴木 庸平	東京大学大学院理学系研究科
13		高橋 嘉夫	広島大学大学院理学研究科地球惑星システム学専攻
14		西 弘嗣	東北大学総合学術博物館
15		真鍋 真	国立科学博物館地学研究部
16		山岸 明彦	東京薬科大学生命科学部
17	Founder President	北里 洋	独立行政法人海洋研究開発機構海洋・極限環境生物圏領域

個人情報のため非公開とする

個人情報のため非公開とする

個人情報のため非公開とする

個人情報のため非公開とする

個人情報のため非公開とする

個人情報のため非公開とする

個人情報のため非公開とする

平成26年度会員数推移

正会員							准会員							大会会員						
	入会	変更(+)	退会(-)	喪失(-)	削除(-)	現会員数	入会	変更(-)	退会(-)	喪失(-)	削除(-)	現会員数	入会	退会(-)	削除(-)	変更(-)	現会員数			
3月末	28	14	117	747	4	7540	7	7				392	15	1	1	7	665			
4月	294	65	7	4	9	7879	32	33	2		1	388	89		9	32	713			
5月						7879						388					713			
6月						7879						388					713			
7月						7879						388					713			
8月						7879						388					713			
9月						7879						388					713			
10月						7879						388					713			
11月						7879						388					713			
12月						7879						388					713			
1月						7879						388					713			
2月						7879						388					713			
3月						7879						388					713			
H26年度計	294	65	7	4	9		32	33	2	0	1		89	0	9	32				

正会員

7879 名

准会員

388 名

大会会員

713 名

変更
大会会員より正会員へ
准会員から正会員へ

団体会員			賛助会員		
入会	退会	現会員数	入会	退会	現会員数
3月末		49			1
4月	1	50			1
5月					
6月					
7月					
8月					
9月					
10月					
11月					
12月					
1月					
2月					
3月					
	1	0	50	0	1

全会員

8597 名
8980 名

3月末
4月
5月
6月
7月
8月
9月
10月
11月
12月
1月
2月
3月

名
名
名
名
名
名
名
名
名
名
名
名
名

公益社団法人日本地球惑星科学連合 会長 御中

共催・協賛・後援承認申請書

申請団体名：国際第四紀学連合第19回大会組織委員会

申請者住所：茨城県つくば市東 1-1-1

申請者名： 齋藤 文紀

行事名（英訳名）	国際第四紀学連合第19回大会 (英文公式名：International Union for Quaternary Research, XIX Congress) 会議の種類：(☐ 国内会議 ☒ 国際会議)
主催者名	国際第四紀学連合，日本第四紀学会，日本学術会議
開催日	2015年 7月27日（月）～ 2015年 8月 2日（日）
開催場所、所在地	場所：名古屋国際会議場 所在地：〒456-0036 愛知県名古屋市熱田区西町1-1
申請の種類	☒ 共催 (企画又は運営に参画し共同で開催する) ☐ 協賛 (趣旨に賛同し、必要に応じて金銭的・人的支援をする) ☐ 後援 (趣旨に賛同し、必要に応じて人的支援をする) ☐ その他 ()
金銭・人的援助の有無	無・有(具体的に：)
行事趣旨	4年ごとに開催される国際第四紀学連合の総会ならびに学術大会(日本での開催は今回が初)
共催、協賛、後援等 団体名(申請中も含む)	
希望する共催・協賛 ・後援の名称	☒ 公益社団法人日本地球惑星科学連合 その他 ()
連絡先 (受理通知等送付先)	所在地：〒305-8567 茨城県つくば市東1-1-1 中央第7事業所 (独)産業技術総合研究所 地質情報研究部門 気付 団体名：国際第四紀学連合第19回大会組織委員会事務局 担当者名：齋藤文紀 TEL：029-861-3895 FAX：029-861-3747 E-mail：yoshiki.saito@aist.go.jp
参加費等	(☐ 無料 ☒ 有料) 参加予定人数 1,100 人 会員 団体 円 個人 円 学生 円 非会員 団体 円 個人 60,000 円 学生 25,000 円
会議のホームページ	http://inqua2015.jp/

国際第四紀学連合第19回大会 会議説明書

- 1 会議名 和文名：国際第四紀学連合第19回大会
 英文名：International Union for Quaternary Research, XIX Congress
 (略称：INQUA Congress 2015 またはXIX INQUA Congress)

- 2 主催 国際第四紀学連合、日本第四紀学会、日本学術会議
 共催 自然史学会連合、地球環境史学会、日本地質学会、日本火山学会、日本堆積学会
 日本地理学会、日本地図学会、地理情報システム学会、日本珪藻学会、日本サンゴ礁学会、日本地震学会、日本海洋学会、富士学会、日本土壌肥料学会、日本人類学会、地盤工学会、東京地学協会、日本応用地質学会、日本地学教育学会、日本地形学連合、日本国際地図学会、日本沙漠学会、地理科学学会、日本地理教育学会、東北地理学会、日本考古学会、日本旧石器学会、歴史地震研究会、日本古生物学会、地球電磁気・地球惑星圏学会、日本リモートセンシング学会、日本地球化学会、日本有機地球化学会、日本地下水学会、日本水文科学会、土木学会、植生学会、日本雪氷学会、日本ペドロロジー学会、(独)防災科学技術研究所、(独)森林総合研究所、(独)国立環境研究所 (以下、依頼中または依頼予定) 日本地球惑星科学連合、全国地質調査業協会連合、日本地震工学会、日本地すべり学会、日本陸水学会、陸水物理研究会、日本測地学会、日本植生史学会、日本花粉学会、土壌物理学会、歴史学会、古文書学会、日本文化財科学会、日本粘土学会、日本地熱学会、ルミネッセンス年代測定研究会、日本フィッシュントラック研究会、(独)産業技術総合研究所、(独)海洋研究開発機構、国立極地研究所、名古屋大学
 後援 日本生態学会、日本気象学会、石油技術協会、(以下、依頼予定) 愛知県、名古屋市、文部科学省、国土交通省、経済産業省、環境省、国土地理院、気象庁
 協賛 日本加速器学会

- 3 母体団体 国際第四紀学連合 (INQUA : International Union for Quaternary Research)

- 4 開催時期 平成27年7月27日(月)～8月2日(日) [7日間]
 【関連行事】
 市民公開講座： 平成27年7月26日(日)
 野外研究集会： 平成27年7月21日頃～7月26日(日) (大会前)
 平成27年8月 3日(月)～8月 6日頃 (大会後)

[開催プログラム]

会議日程	午 前	午 後	夜
7月27日(月)	参加受付、開会式、総会、 プレナリーレクチャー	プレナリーレクチャー、テーマセッション、 ポスターセッション	研究グループ会合、 レセプション
7月28日(火)	テーマセッション、ポスターセッション	プレナリーレクチャー、テーマセッション、 ポスターセッション、国際評議員会	研究グループ会合
7月29日(水)	テーマセッション、ポスターセッション	プレナリーレクチャー、テーマセッション、 ポスターセッション、国際評議員会	研究グループ会合
7月30日(木)	日帰り野外研究集会		
7月31日(金)	テーマセッション、ポスターセッション	プレナリーレクチャー、テーマセッション、 ポスターセッション、国際評議員会	研究グループ会合
8月 1日(土)	テーマセッション、ポスターセッション	プレナリーレクチャー、テーマセッション、 ポスターセッション	バンケット
8月 2日(日)	テーマセッション	プレナリーレクチャー、総会、閉会式	

- 5 開催場所 名古屋国際会議場
(〒456-0036 愛知県名古屋市熱田区西町1-1 / TEL: 052-683-7711)

- 6 参加予定者数 50カ国/地域・1,100人(国外:750人、国内:350人)
[うち同伴者:国外:25人、国内:25人]

アメリカ、カナダ、日本、台湾、オーストラリア、オーストリア、ベルギー、ブラジル、
コロンビア、クロアチア、チェコ、デンマーク、エストニア、エジプト、フィンランド、
フランス、グルジア、ドイツ、ギリシア、ハンガリー、インド、アイルランド、イスラエル、
イタリア、韓国、ラトビア、メキシコ、モルダビア、モザンビーク、オランダ、ニュー
ージーランド、ノルウェー、ポーランド、ポルトガル、ロシア、南アフリカ、セルビア、
アルゼンチン、スペイン、スウェーデン、スイス、ウクライナ、イギリス、中国、インド
ネシア、タイ、マレーシア、ベトナム、フィリピン、シンガポール
以上、50カ国・地域

- 7 過去の開催状況 原則4年ごと
[過去開催状況]

開催年	開催地	参加国数	参加者数	日本人 参加者数	備考
1928年(第1回)	デンマーク(コペンハーゲン)	17ヶ国	102	0	
1999年(第15回)	南アフリカ(ダーバン)	52ヶ国	651	24	
2003年(第16回)	米国(リノ)	52ヶ国	1,059	46	
2007年(第17回)	オーストラリア(ケアンズ)	51ヶ国	1,005	47	
2011年(第18回)	ベルン(スイス)	68ヶ国	2,020	83	
2015年(第19回)	日本(名古屋)	50カ国	1,100	350	見込み

8 会議の意義・目的

国際第四紀学連合は、その定款の中で、目的を以下のように定めている。1) 第四紀に関するすべての科学的問題についての学術的研究を奨励すること、2) 国際会議の開催、ならびに特別な問題研究のために設置された研究委員会およびその他の団体を通じて、第四紀研究に関する国際協力を促進し、調整すること。本会議はこの目的に従い、国際会議を通じて研究の推進や情報や研究者の交流を促進することにある。また初めて日本で開催されることから、日本の先進的な研究を世界に発信すると同時に、海外の幅広い研究者と研究の最前線で交流をすすめることにより、日本及びアジアの研究を促進することにある。

9 会議開催の経緯と概要

- (1) 国際第四紀学連合第 19 回大会は、国際第四紀学連合 (International Union for Quaternary Research : INQUA) が 4 年ごとに開催する会議であり、1928 年の第 1 回から当会議で 19 回を迎える第四紀学分野で最も歴史のある国際会議である。第 18 回大会 (2011 年 7 月, スイス, ベルン市) の期間中に開催された国際評議員会ならびに総会において、第 19 回大会を 2015 年 7 月から 8 月に日本で開催することが決定された。これを受け、日本第四紀学会は、日本開催準備のために、日本学術会議 INQUA 分科会と共同で、国際第四紀学連合第 19 回組織委員会を 2011 年に設置し、開催の準備を進めることとなった。日本での開催は今回が初めてであり、この度の日本開催では、世界のトップレベルの研究者が一堂に会し、最新の研究成果について討論や発表が行われ、第四紀学の発展とその応用展開を図ることを目的としている。
- (2) 第四紀学は、地質年代のうちの第四紀と呼ばれている現在を含めた最も新しい時代区分に発生した事象を学際的に研究する学問である。地質学や地理学などの関連する地学分野のみならず、考古学、人類学、古生物学などを包含した広い学問分野と相互に関係しながら研究が遂行されている。近年は、高精度の古環境復元に関する研究や歴史記録が行われるよりも古い時代に発生した自然災害を明らかにする研究が著しい発展を遂げており、過去から現在を理解し、未来に貢献する研究が大きな成果をあげてきている。
第四紀学は、地球科学分野における日本の研究水準を高め、世界における環境問題の解明に対して多大な貢献をしており、今後の発展が大きく期待されている分野である。
- (3) この度の国際第四紀学連合第 19 回大会では、「第四紀学からみた気候変動・自然災害・文明」をメインテーマに、自然災害軽減のための第四紀研究、気候・海水準・環境変動予測高度化のための過去の変動の理解と定量化、人類と環境の動的相互作用の解明、第四紀層序学・年代学のための新しい技術と成果の統合を主要題目として、研究発表と討論が行われることとなっており、その成果は、第四紀学の発展に大きく資するものと期待される。
- (4) この会議を日本で開催することは、我が国における第四紀学の成果を全世界の研究者に大きくアピールし、多くの研究者の参画を促す絶好の機会となるとともに、我が国のこの分野の科学者に世界の多くの科学者と直接交流する機会を与えることとなり、我が国の第四紀学に関する研究を一層発展させる契機となる。また、この会議では社会のための第四紀学を目指して、この機会を活用し、関連研究分野との連携や融合を計る予定である。更にこの会議に合わせて普及講演会等を行うことにより、第四紀学研究者がこれまでに明らかにしてきた知見を社会に還元し、科学に関する一般社会の興味を大いに高めることが期待される。

10 会議構成

(1) テーマ・主要題目

メインテーマ：「第四紀学から見た気候変動、自然災害と文明」

主要題目：自然災害軽減のための第四紀研究、気候・海水準・環境変動予測高度化のための過去の変動の理解と定量化、人類と環境の動的相互作用の解明、第四紀層序学・年代学のための新しい技術と成果の統合

(2) 会議使用言語

英語 (同時通訳：なし)

(3) 会議プロシーディングス

これまでの通例に合わせて、大会終了後に国際第四紀学連合が発行している刊行物 (Quaternary International) の特集号として刊行する予定。

(4) 展示内容

学術展示：研究機関・研究プロジェクト紹介

企業展示：書籍、分析機器、分析・解析企業

本会議と連携して、公的な博物館において第四紀学の研究を展示 (計画中)

11 会議における特筆すべき事項

国際第四紀学連合の大会は、現在の含めた地球環境変遷を学際的に包括する研究分野として最も歴史のある国際会議である。2015 年の日本での開催は、アジア地域では 1991 年の中国 (北京) での開催に次いで 2 回目の開催であり、日本では初めての開催となる。

今回の大会では、「社会のための第四紀学」を目指して、気候変化や自然災害による防災の軽減や持続的な社会発展や環境保全を考慮した第四紀学を念頭に、理学、工学、人文社会学の関係者が一緒に議論できる場を提供したい。

以 上

国際第四紀学連合 (INQUA) 第19回大会 (平成27年7～8月, 名古屋市) 予算案

2014年4月13日版

収入 64,433,000

費 目	金 額	摘 要
参加登録費	48,050,000	早期6万円, 通常7.5万円, 学生2.5万円
バンケット参加料	2,500,000	250名
助成金	7,982,166	日本学術会議, 名古屋市
補助金	2,400,000	日本第四紀学会
ブース料	1,250,000	学術ブース(5団体), 商業ブース(10団体)
広告料	250,000	プログラム掲載広告(10件)
寄付金	2,000,000	募金, 寄付金交付金
雑収入	834	銀行利子

支出 64,433,000

費 目	金 額	摘 要
事前準備費	23,459,127	
人件費	300,000	大会ホームページ作成
旅 費	2,300,000	委員旅費
庁 費	20,859,127	大会配布物, 登録システム委託
会議運営費	38,851,308	
人件費	2,720,000	会場スタッフ
旅 費	8,080,000	招待講演者旅費, 若手研究者等参加補助
庁 費	28,051,308	会場費, 印刷費, 受付業務委託
会議事後処理費	684,020	
旅 費	150,000	委員旅費
庁 費	34,020	報告書印刷, 郵送料
募金経費	510,000	
旅 費	250,000	委員旅費
庁 費	260,000	交付金管理費, 募金資料郵送
予備費	928,545	

国際第四紀学会第19回大会組織委員会 委員名簿 (2011年12月25日発足)

(2014.4.13 現在)

役職	氏名	所属・職名	学術研究団体における役職
委員長	齋藤 文紀	産業技術総合研究所 上席研究員	日本第四紀学会 副会長
副委員長	遠藤 邦彦	日本大学 名誉教授	日本第四紀学会 前会長
	奥村 晃史	広島大学 教授	国際第四紀学連合 副会長
名誉委員長	杉村 新	神戸大学 元教授	国際第四紀学連合 名誉会員
顧問	熊井 久雄	大阪市立大学 名誉教授	日本第四紀学会 元会長
	町田 洋	東京都立大学 名誉教授	日本第四紀学会 元会長
	太田 陽子	横浜国立大学 名誉教授	国際第四紀学連合 名誉会員
	大場 忠道	北海道大学 名誉教授	日本第四紀学会 名誉会員
	佃 栄吉	産業技術総合研究所 理事	
	北里 洋	海洋研究開発機構 領域長	
	安成 哲三	名古屋大学 特任教授	
	中島 映至	東京大学 教授 センター長	
	海津 正倫	奈良大学 教授	日本第四紀学会 評議員
プログラム委員会			
委員長	小野 昭	明治大学 教授	日本第四紀学会 会長
副委員長	横山 祐典	東京大学 准教授	日本第四紀学会 評議員
巡検委員会			
委員長	鈴木 毅彦	首都大学東京 教授	日本第四紀学会 評議員
副委員長	三田村宗樹	大阪市立大学 教授	日本第四紀学会 評議員
委員	堀 和明	名古屋大学 准教授	
会場委員会			
委員長	中村 俊夫	名古屋大学 教授 センター長	日本第四紀学会 評議員
委員	中塚 武	名古屋大学 教授	
委員	齊藤 毅	名城大学 准教授	
委員	森 勇一	金城学院大学 講師	
委員	小嶋 智	岐阜大学 教授	
委員	豊蔵 勇	ジオとよくら	
広報委員会			
委員長	兵頭 政幸	神戸大学 教授	
副委員長	宮内 崇裕	千葉大学 教授	日本第四紀学会 評議員
財務委員会			
委員長	松浦 秀治	お茶の水女子大学 教授	日本第四紀学会 評議員
副委員長	近藤 恵	お茶の水女子大学 助教	
招聘委員会			
委員長	渡邊 真紀子	首都大学東京 教授	
副委員長	高岡 貞夫	専修大学 教授	
募金委員会			
委員長	竹村 恵二	京都大学 教授	日本第四紀学会 評議員
副委員長	山崎 晴雄	首都大学東京 教授	日本第四紀学会 評議員
委員	牧野内 猛	名城大学 教授	
出版委員会			
委員長	出穂 雅実	首都大学東京 准教授	日本第四紀学会 評議員
副委員長	田村 亨	産業技術総合研究所 研究員	
監事			
	久保 純子	早稲田大学 教授	日本第四紀学会 評議員
	百原 新	千葉大学 教授	
事務局			
事務局長	吾妻 崇	産業技術総合研究所 主任研究員	日本第四紀学会 評議員
事務局員	藤原 治	産業技術総合研究所 主任研究員	日本第四紀学会 評議員
事務局員	植木 岳雪	千葉科学大学 教授	日本第四紀学会 評議員
事務局員	近藤 怜介	明治大学 助教	

会長	津田敏隆	[会長補佐（新設）]	村山 泰啓	成瀬 元
副会長	中村正人			
副会長	木村 学			
副会長	川幡穂高			
監事	松浦 充宏			
監事	北里 洋			
顧問弁護士	鈴木 善和			

氏名	担当	
津田敏隆	会長、ジャーナル企画経営委員会	
川幡穂高	副会長、ジャーナル企画経営委員会	
木村学	副会長、ジャーナル企画経営委員会、グローバル戦略委員会	
中村正人	副会長、男女共同参画委員会、キャリア支援委員会、ジャーナル企画経営委員会、フェロー審査委員会	
ウオリス サイモン	グローバル戦略委員会	
奥村晃史	環境・災害対応委員会	
北和之	財務委員会、環境・災害対応委員会、大会運営委員会	
高橋幸弘	キャリア支援委員会、グローバル戦略委員会	
瀧上豊	教育検討委員会	
成瀬元	会長補佐（新設）、総務委員会、広報普及委員会	
西弘嗣	財務委員会	
畠山正恒	教育検討委員会	
浜野洋三	大会運営委員会	
原田尚美	男女共同参画委員会	
日比谷紀之	グローバル戦略委員会	
古村孝志	総務委員会、情報システム委員会	
松本淳	環境・災害対応委員会	
道林克禎	広報普及委員会	
村山泰啓	会長補佐（新設）、情報システム委員会	

渡邊誠一郎	男女共同参画委員会、キャリア支援委員会、教育検討委員会	
北里 洋	監事	
松浦 充宏	監事	

【常置委員会】

役員・委員会	担当理事（主）	担当理事（副）	幹事候補	[現]委員長	[現]副委員長	[現]活動実績内容	備考
総務委員会	古村孝志	成瀬 元		古村 孝志	大村 善治	代議員・プレジデント選挙、共催・後援依頼、会員管理、規則整備	
財務委員会	北 和之	西 弘嗣		西 弘嗣	北 和之	財務管理（予算、決算作成）	
広報普及委員会	成瀬 元	道林 克禎	田近 英一 (JGL 編集委員会) 橘 省吾 横山 広美	田近 英一	原 辰彦	JGL 発行、メールニュース発行、秋の講演会開催 連合HP 管理、アウトリーチ企画運営、	
環境・災害対応委員会	田中賢治	奥村晃史 北 和之	小荒井 衛	松本 淳	須貝 俊彦	10/5 委員会開催 連合大会にてセッション準備	
男女共同参画委員会	高橋幸弘（主） 渡邊 誠一郎 中村 正人	原田 尚美		小口千明	小川 佳子 坂野井 健	ワーク・ライフ・バランスに関して 2012 大会にてシンポジウム、2013 大会にてパブリックセッション開催 第3 回大規模アンケート実施	*合同して活動
キャリア支援委員会		高橋 幸弘			栗田 敬 市原 美恵	2012 年大会「キャリアパス説明会」「進路相談会」実施 第3 回大規模アンケート実施	
学校教育検討委員会	畠山 正恒	渡邊 誠一郎 (大学教育) 瀧上 豊 (科学オリンピック ック)		畠山正恒	根本 泰雄	2013 大会「第3 回地学教育シンポジウム」セッション「防災教育」開催	*名称変更予定 (教育問題検討委員会)
情報システム委員会	村山 泰啓	古村 孝志	横山 央明	小口 高	今西 和俊 西村 光史	会員・大会システムの頻繁な改修、大会アプリ、MyJpGU の制作	
ジャーナル企画経営委員会	川幡 穂高	津田 敏隆 木村 学 中村 正人				1 月 25 日に海外編集者も招いた全体会議を予定	*学術出版委員会を PEPS

							発刊実現のため発展的解消
大会運営委員会	浜野 洋三	北 和之	横山 央明	浜野洋三	岩上 直幹 高橋 幸弘 北 和之	2014 年大会準備	
グローバル戦略委員会	木村 学	ウオリスサイモン (副) 日比谷 紀之 高橋 幸弘、	関 華奈子 橘 省吾	ウオリスサイモン	加藤 照之 藤本 正樹	2013 年、2014 年大会 NASA 招致の進行中 連携する海外大会 (EGU, AGU, AOGS) へのブース出展	*名称変更・機能拡大予定 (国際学術委員会)
フェロー審査委員会	中村 正人					フェロー審査中	

【特別委員会】

25 周年記念事業準備委員会	津田 敏隆 川幡 穂高 木村 学 中村 正人 浜野 洋三 田 英一 小口 高志 古村 孝志					パンフレットの作成 記念式典の準備	
25 周年記念事業国際シンポジウム準備委員会	木村 学 日比谷 紀之 ウオリスサイモン 高橋 幸弘	関 華奈子 橘 省吾					

総務委員会推薦名簿

No.	役職(案)	選出母体	氏名	所属	期数
1	委員長	理事	古村 孝志	東京大学	2期
2		理事(副担当)	成瀬 元	京都大学	2期
3			川合 義美	独立行政法人海洋研究開発機構	3期

財務委員会推薦名簿

No.	役職(案)	選出母体	氏名	所属	期数
1	委員長	理事	北 和之	茨城大学	2期
2		理事(副担当)	西 弘嗣	東北大学	3期
3			山田 泰広	京都大学	2期
4			向山 栄	国際航業株式会社	2期
5			高野 修	石油資源開発株式会社	2期

大会運営委員会推薦名簿（2014年6月1日～2015年5月31日）

No.	役職(案)	部局(選出母体)	氏名	所属	備考
1	委員長	(理事)	浜野 洋三	JAMSTEC	重任
2	副委員長	企画	岩上 直幹	東京大学	重任
3	副委員長	企画(固体地球)	興野 純	筑波大学	重任
4		企画(理事)	北 和之	茨城大学	重任
5		企画(理事)	高橋 幸弘	北海道大学	重任
6		企画(宇宙惑星)	中村 昭子	神戸大学	重任
7		企画(人間圏)	財城 真寿美	成蹊大学	重任
8		企画(大気水圏)	竹内 望	千葉大学	交代予定
9		企画(宇宙惑星)	小嶋 浩嗣	京都大学	重任
10		企画(人間圏)	近藤 昭彦	千葉大学	重任
11		企画(固体地球)	金川 久一	千葉大学	重任
12		企画	和田浩二	千葉工業大学	新任
13		企画(生命) プログラム局長	鈴木 庸平	東京大学	新任
14		プログラム局	河宮 未知生	JAMSTEC	重任
15		プログラム局	中本 泰史	東京工業大学	重任
16		プログラム局	目代 邦康	自然保護助成基金	重任
17		プログラム局	井出 哲	東京大学	重任

情報システム委員会推薦名簿（2014年6月1日～2015年5月31日）

No.	役職(案)	選出母体	氏名	所属	備考
1	委員長	理事	村山 泰啓	独立行政法人 情報通信研究機構	
2	副委員長		小口 高	東京大学	重任
3	副委員長		近藤 康久	総合地球環境学研究所	重任
4		理事	古村 孝志	東京大学	重任
5			金田 平太郎	千葉大学	重任
6			坂口 有人	独立行政法人海洋研究開発機構	重任
7			篠原 育	独立行政法人宇宙航空研究開発機構	重任

グローバル戦略委員会推薦名簿

No.	役職(案)	選出母体	氏名	所属	備考
1	委員長	理事	木村 学	東京大学	重任
2	副委員長	理事(副担当)	ウォリス サイモン	名古屋大学	重任
3		理事(副担当)	高橋 幸弘	北海道大学	新任
4		理事(副担当)	日比谷 紀之	東京大学	新任
5			佐々木 晶	大阪大学	新任
			中島 映至	東京大学	新任
			氷見山 幸夫	北海道教育大学	新任
			大谷 栄治	東北大学	重任
			小林 憲正	横浜国立大学	重任
			加藤 照之	東京大学	重任
			関 華奈子	名古屋大学	新任
			末広 潔	独立行政法人海洋研究開発機構	新任
			多田 隆治	東京大学	重任
			春山 成子	三重大学	重任
			藤本 正樹	独立行政法人宇宙航空研究開発機構	重任
			村山 泰啓	独立行政法人情報通信研究機構	重任

教育検討委員会推薦名簿(検討中)

No.	役職(案)	選出母体	氏名	所属	備考
1	委員長	日本気象学会	畠山 正恒	聖光学院中学高等学校	
2	教育検討委員会	日本地震学会	根本 泰雄	桜美林大学	
3	教育検討委員会	日本地質学会	阿部 國廣	元・川崎市立西有馬小学校	
4	教育検討委員会	日本地球化学会	瀧上 豊	関東学園大学	
5	教育検討委員会		宮嶋 敏	埼玉県立深谷第一高等学校	
6	教育検討委員会	日本地質学会	中井 睦美	大東文化大学	
7	教育検討委員会	地球電磁気・地球惑星圏学会	中井 仁	大阪府立茨木工科高等学校	
8	教育検討委員会		高橋 栄一	東京工業大学	
9	教育検討委員会	地球電磁気・地球惑星圏学会	大村 善治	京都大学生存圏研究所	
10	教育検討委員会	日本宇宙生物科学会	奥野 誠	東京大学	
11	教育検討委員会	日本応用地質学会	武田 和久	(株)開発設計コンサルタント	
12	教育検討委員会	日本海洋学会	島田 浩二	東京海洋大学	
13	教育検討委員会	日本火山学会	吉本 充宏	北海道大学	
14	教育検討委員会	日本火山学会	萬年 一剛	神奈川県温泉地学研究所	
15	教育検討委員会	形の科学会	松浦 執	東海大学	
16	教育検討委員会	日本活断層学会	廣内 大助	信州大学	
17	教育検討委員会	日本気象学会	坪田 幸政	桜美林大学	
18	教育検討委員会	日本鉱物科学会	赤井 純治	新潟大学	
19	教育検討委員会	日本国際地図学会	西木 敏夫	目白学園	
20	教育検討委員会	日本古生物学会	間嶋 隆一	横浜国立大学	
21	教育検討委員会	資源地質学会	藤本 光一郎	学芸大学	
22	教育検討委員会	資源地質学会	宮下 敦	成蹊中学校・高等学校	
23	教育検討委員会	日本地震学会	伊東 明彦	宇都宮大学	
24	教育検討委員会	日本地震学会	山野 誠	東京大学	
25	教育検討委員会	日本情報地質学会	坂本 正徳	国学院大学	
26	教育検討委員会	日本水文科学会	辻村 真貴	筑波大学	
27	教育検討委員会	水文・水資源学会	近藤 昭彦	千葉大学	
28	教育検討委員会	生態工学会	新井 真由美	日本科学未来館	
29	教育検討委員会	生命の起源および進化学会	三田 肇	福岡工業大学	
30	教育検討委員会	石油技術協会	佐溝 信幸		
31	教育検討委員会	日本雪氷学会	納口 恭明	防災科学技術研究所	
32	教育検討委員会	日本測地学会	里村 幹夫	静岡大学	
33	教育検討委員会	日本測地学会	松本 剛	琉球大学	
34	教育検討委員会	大気化学研究会	林田 佐智子	奈良女子大学	
35	教育検討委員会	日本堆積学会	伊藤 孝	茨城大学	
36	教育検討委員会	日本第四紀学会	加藤 禎夫	埼玉県立小川高等学校	
37	教育検討委員会	日本地学教育学会	南島 正重	東京都立小石川高等学校	
38	教育検討委員会	日本地学教育学会	林 慶一	甲南大学	
39	教育検討委員会	地学団体研究会	久津間 文隆	埼玉県立川越初雁高校	

40	教育検討委員会	地下水学会	宮岡 邦任	三重大学	
41	教育検討委員会	日本地球化学会	津野 宏	横浜国立大学	
42	教育検討委員会	地球電磁気・地球惑星圏学会	町田 忍	京都大学	
43	教育検討委員会	地球電磁気・地球惑星圏学会	橋本 武志	北海道大学	
44	教育検討委員会	日本地形学連合	島津 弘	立正大学	
45	教育検討委員会	日本地質学会	芝川 明義	大阪府立花園高等学校	
46	教育検討委員会	日本地熱学会	大谷 具幸	岐阜大学	
47	教育検討委員会	日本地理学会・東京地学協会	滝沢 由美子	帝京大学	
48	教育検討委員会	日本地理教育学会	竹内 裕一	千葉大学	
49	教育検討委員会	地理教育研究会	海東 達也	都立竹早高校	
50	教育検討委員会	地理情報システム学会	谷 謙二	埼玉大学	
51	教育検討委員会	東北地理学会	西城 潔	宮城教育大学	
52	教育検討委員会	日本粘土学会	山崎 淳司	早稲田大学	
53	教育検討委員会	日本農業気象学会	林 陽生	筑波大学	
54	教育検討委員会	物理探査学会	三ヶ田 均	京都大学	
55	教育検討委員会	物理探査学会	山田 伸之	福岡教育大学	
56	教育検討委員会	日本陸水学会、陸水物理研究会	濱田 浩美	千葉大学	
57	教育検討委員会	日本リモートセンシング学会	宮崎 忠國	東京農業大学	
58	教育検討委員会	日本惑星科学会	縣 秀彦	国立天文台	
59	教育検討委員会	日本惑星科学会	鈴木 文二	埼玉県立春日部女子高等学校	
60	教育検討委員会		小寺 浩二	法政大学	
61	教育検討委員会	日本惑星科学会	山下 敏	埼玉県立熊谷女子高等学校	
62	教育検討委員会	日本火山学会	小川 康雄	東京工業大学	
63	教育課程小委員会		宮嶋 敏	埼玉県立深谷第一高等学校	
64	教育課程小委員会	日本地球化学会	瀧上 豊	関東学園大学	
65	教育課程小委員会	日本惑星科学会	山下 敏	埼玉県立熊谷女子高等学校	
66	教育課程小委員会	日本古生物学会	河湊 俊吾	横浜国立大学	
67	教育課程小委員会	日本地震学会	根本 泰雄	桜美林大学	
68	教育課程小委員会	地球電磁気・地球惑星圏学会	野坂 徹	松本大学松商短期大学部	
69	教育課程小委員会	日本気象学会	畠山 正恒	聖光学院中学高等学校	
70	教育課程小委員会	日本火山学会	林 信太郎	秋田大学	
71	教育課程小委員会	日本海洋学会	間々田 和彦	筑波大学	
72	教育課程小委員会	日本地学教育学会・日本地震学会	南島 正重	東京都立小石川高等学校	
73	教育課程小委員会	日本地質学会	矢島 道子	東京医科歯科大学	
74	教育課程小委員会	日本地質学会	阿部 國廣	元・川崎市立西有馬小学校	
75	教育課程小委員会		渡邊 正人	川崎市立川中島小学校	
76	教育課程小委員会		能見 郁永	さいたま市立大宮南中学校	
77	教員養成等検討小委員会	日本地質学会	中井 睦美	大東文化大学	
78	教員養成等検討小委員会	物理探査学会	松島 潤	東京大学	
79	教員養成等検討小委員会	地理情報システム学会	秋本 弘章	獨協大学	
80	教員養成等検討小委員会	日本地理教育学会	井田 仁康	筑波大学	
81	教員養成等検討小委員会	地理情報システム学会	谷 謙二	埼玉大学	
82	教員養成等検討小委員会	東北地理学会	西城 潔	宮城教育大学	
83	教員養成等検討小委員会	日本測地学会	里村 幹夫	静岡大学	
84	教員養成等検討小委員会	日本国際地図学会	志村 喬	上越教育大学	
85	教員養成等検討小委員会	日本地球化学会	瀧上 豊	関東学園大学	
86	教員養成等検討小委員会	日本地震学会	根本 泰雄	桜美林大学	
87	教員養成等検討小委員会	日本気象学会	畠山 正恒	聖光学院中学高等学校	
88	教員養成等検討小委員会	日本地学教育学会	林 慶一	甲南大学	
89	教員養成等検討小委員会	日本火山学会	林 信太郎	秋田大学	
90	教員養成等検討小委員会		宮下 芳	茨城大学	
91	教員養成等検討小委員会	日本火山学会	吉本 充宏	北海道大学	
92	大学および大学院教育小委員会	日本火山学会、日本惑星科学会	高橋 栄一	東京工業大学	
93	大学および大学院教育小委員会	理事	渡邊 誠一郎	名古屋大学	
94	大学および大学院教育小委員会		磯部 博志	熊本大学	
95	大学および大学院教育小委員会	監事	北里 洋	海洋研究開発機構	
96	大学および大学院教育小委員会		見延 庄士郎	北海道大学	
97	大学および大学院教育小委員会		松澤 暢	東北大学	
98	大学および大学院教育小委員会		小澤 一仁	東京大学	
99	大学および大学院教育小委員会		藤 浩明	京都大学	
100	大学および大学院教育小委員会		高橋 嘉夫	広島大学	
101	大学および大学院教育小委員会		廣岡 俊彦	九州大学	
102	大学および大学院教育小委員会		小室 裕明	島根大学	

103	大学および大学院教育小委員会		廣井 美邦	千葉大学	
104	大学および大学院教育小委員会		高澤 栄一	新潟大学	
105	大学および大学院教育小委員会		坂本 正徳	国学院大学	
106	大学および大学院教育小委員会		松岡 数充	長崎大学	
107	大学および大学院教育小委員会		鳥居 雅之	岡山理科大学	
108	大学および大学院教育小委員会		林田 明	同志社大学	
109	大学および大学院教育小委員会		内田 悦生	早稲田大学	
110	大学および大学院教育小委員会		和仁 良二	横浜国立大学	
111	大学および大学院教育小委員会	理事	畠山 正恒	聖光学院中学高等学校	
112	大学および大学院教育小委員会		根本 泰雄	桜美林大学	
113	大学および大学院教育小委員会	理事	瀧上 豊	関東学園大学	

JpGU広報普及委員会推薦名簿

No.	役職(案)	選出母体	氏名	所属	備考
	委員長	理事	成瀬 元	京都大学	新任
1		理事	道林 克禎	道林 克禎	重任
2		理事	奥村晃史	広島大学	重任
3		前委員長	田近 英一	東京大学	重任
4		前副委員長	原 辰彦	独立行政法人建築研究所	重任
5	幹事(JGL編集担当)		東宮 昭彦	独立行政法人産業技術総合研究所	重任
6	JGL書評担当		谷 篤史	大阪大学	重任
7	JGLデザイン担当		橘 省吾	北海道大学	重任
8	JGL広告担当		宮本 英昭	東京大学	重任
9	Web担当		佐藤活志	京都大学	新任
10	連合大会トップセミナー担当		山田 耕	早稲田大学	重任
11	高校生セミナー担当		安藤 寿男	茨城大学	重任
12	高校生セミナー担当		久利 美和	東北大学	重任
13	メールニュース担当		吉本 和生	横浜市立大学	重任
14	秋季講演会担当		横山 広美	東京大学	重任
15	教育関連担当		瀧上 豊	関東学園大学	重任
16	大気水圏科学担当		阿部 彩子	東京大学	重任
17	宇宙惑星科学担当		高橋 幸弘	北海道大学	重任
18			紺屋 恵子	独立行政法人海洋研究開発機構	重任
19			大河内 直彦	独立行政法人海洋研究開発機構	重任
20			関根康人	東京大学	新任
21			笠井康子	情報通信研究機構	新任

環境・災害対応委員会推薦名簿

No.	役職(案)	選出母体	氏名	所属	備考
1	委員長	環境・災害担当理事	田中賢治	京都大学	新任
2		環境・災害担当理事	奥村 晃史	広島大学	重任
3		環境・災害担当理事	北和之	茨城大学	新任
4		先期委員長	松本 淳	首都大学東京	重任
5		日本応用地質学会	大野 博之	(株)環境地質技術部	重任
6		日本応用地質学会	大塚 康範	応用地質(株)	重任
7		日本火山学会	吉本 充宏	富士山科学研究所	新任
8		日本火山学会	石峯 康浩	国立保健医療科学院	重任
9		日本気象学会	塩竈秀夫	国立環境研究所	新任
10		日本気象学会	小司 禎教	気象庁 気象研究所	新任
11		水文・水資源学会	松島 大	千葉工業大学	重任
12		日本雪氷学会	河島 克久	新潟大学	新任
13		大気化学研究会	加藤 俊吾	首都大学東京	重任
14		日本堆積学会	後藤 和久	東北大学	重任
15		地学団体研究会	卜部 厚志	新潟大学	重任
16		地球電磁気・地球惑星圏学会	小田 啓邦	独立行政法人産業技術総合研究所	重任
17		地球電磁気・地球惑星圏学会	吉川 顕正	九州大学	重任
18		日本地質学会	小荒井 衛	国土地理院	重任
19		日本地質学会	川畑 大作	産業技術総合研究所	重任
20		日本地熱学会	柳澤 教雄	独立行政法人産業技術総合研究所	重任
21		日本地図学会	宇根 寛	国土地理院	重任

22	地理科学学会	前李英明	法政大学	新任
23	地理情報システム学会	後藤 真太郎	立正大学	重任
24	東北地理学会	村山 良之	山形大学	重任
25	東北地理学会	大月義徳	東北大	重任
26	日本リモートセンシング学会	作野裕司	広島大学	新任

男女共同参画委員会推薦名簿

No.	役職(案)	選出母体	氏名	所属	備考
1		理事	中村 正人	独立行政法人宇宙航空研究開発機構	
2		理事	渡邊 誠一郎	名古屋大学	
3	委員長	理事 (日本海洋学会)	原田 尚美	独立行政法人海洋研究開発機構	重任
4	副委員長	日本惑星科学会	小川 佳子	会津大学	重任
5	副委員長	日本地理学会、日本地形学連合	小口 千明	埼玉大学	重任
6	副委員長	地球電磁気・地球惑星圏学会	坂野井 健	東北大学	重任
7		日本堆積学会	天野 敦子	独立行政法人産業技術総合研究所	重任
8		日本火山学会	下司 信夫	産業技術総合研究所	新任
9		日本雪氷学会	紺屋 恵子	独立行政法人海洋研究開発機構	重任
10		地球電磁気・地球惑星圏学会	坂野井 和代	駒澤大学	重任
11		地理情報システム学会	佐々木 緑	広島修道大学	重任
12		日本気象学会	清野 直子	気象研究所	重任
13		日本地理学会	宋 苑瑞	東京大学	重任
14		鉱物科学会	土屋 範芳	東北大学	重任
15		日本地震学会	西澤 あずさ	海上保安庁	重任
16		日本鉱物科学会	富樫 茂子	独立行政法人産業技術総合研究所	重任
17		日本地質学会	堀 利栄	愛媛大学	重任
18		日本地形学連合	若狭 幸	秋田大学	重任

キャリア支援委員会推薦名簿

No.	役職(案)	選出母体	氏名	所属	備考
1	委員長	理事(主)	高橋 幸弘	北海道大学	
2	副委員長	理事(副)	渡邊 誠一郎	名古屋大学	
3	副委員長	連合男女共同参画委員、SGEPSS	坂野井 和代	駒澤大学	重任
4	副委員長	前副委員長	市原 美恵	東京大学	重任
5	副委員長	連合広報普及委員	末吉 哲雄	国立極地研究所	重任
6		連合男女共同参画副委員長	小口 千明	埼玉大学	重任
7			佐々木 和彦	応用地質株式会社	重任
8		水文・水資源学会	大石 哲	神戸大学	重任
9		連合広報普及委員	田近 英一	東京大学	重任
10			津野 宏	横浜国立大学	重任
11		連合男女共同参画委員	富樫 茂子	独立行政法人産業技術総合研究所	重任
12			藤光 康宏	九州大学	重任
13		日本地理学会	松山 洋	首都大学東京	重任
14		前委員長	佐藤 薫	東京大学	重任
15		前副委員長	栗田 敬	東京大学	重任
16			多田 啓亮	横浜国立大学(博士前期課程1年)	新任
17			新井 真由美	日本科学未来館	新任
18			浜田 盛久	独立行政法人海洋研究開発機構	新任

JpGUジャーナル企画経営委員会

No.	役職(案)	選出母体	氏名	所属	備考
1	委員長	JpGU	川幡穂高	東京大学	重任
2		JpGU会長	津田敏隆	京都大学生	重任
3		JpGU副会長	木村学	東京大学	重任
4		JpGU副会長	中村正人	宇宙航空研究開発機構	重任
5		JpGU	田近英一	東京大学	重任
6		総編集委員長	井龍康文	東北大学	重任
7		編集長	小原一成	東京大学	重任
8		編集長	多田隆治	東京大学	重任
9		編集長	佐藤正樹	東京大学	重任
10	(拡大)	セクションプレジデント	佐々木 晶	大阪大学	新任
11	(拡大)	セクションプレジデント	中島映至	東京大学	重任
12	(拡大)	セクションプレジデント	氷見山幸夫	北海道教育大学	重任
13	(拡大)	セクションプレジデント	大谷栄治	東北大学	重任
14	(拡大)	セクションプレジデント	小林 憲正	横浜国立大学大学院	新任
15	(拡大)		小田啓邦	産業技術総合研究所	重任

JpGUジャーナル編集委員会

No.	役職	選出母体	氏名	所属	備考
1	総編集長	日本地質学会	井龍 康文	東北大学	重任
2	編集長	宇宙惑星科学セクション	倉本 圭	北海道大学	重任
3	編集長	大気圏科学セクション	佐藤正樹	東京大学大気海洋研究所	重任
4	編集長	地球人間圏科学セクション	松本 淳	首都大学東京	重任
5	編集長	固体地球科学セクション	小原 一成	東京大学	重任
6	編集長	地球生命科学セクション	川幡穂高	東京大学	重任
7			多田隆治	東京大学	重任
8		日本第四紀学会	池原 研	産業技術総合研究所	重任
9		日本温泉科学学会	井上 源喜	大妻女子大学	重任
10		日本古生物学会	遠藤 一佳	東京大学	重任
11		日本惑星科学学会	大竹 真紀子	宇宙航空研究開発機構	重任
12		日本鉱物科学学会	大谷 栄治	東北大学	重任
13		水文・水資源学会	大手信人	東京大学	重任
14		日本測地学会	加藤照之	東京大学	重任
15		大気化学研究会	金谷有剛	海洋研究開発機構	重任
16		日本地球化学会	川勝均	東京大学地震研究所	重任
17			菊地 俊夫	首都大学東京	重任
18		日本雪氷学会	兒玉裕二	国立極地研究所	重任
19		日本宇宙生物科学会	小林憲正	横浜国立大学	重任
20			近藤昭彦	千葉大学	重任
21			サイモン・ウォリス	名古屋大学	重任
22		日本測地学会	渋谷和雄	国立極地研究所	重任
23		地球電磁気・地球惑星圏学会	清水久芳	東京大学	重任
24		日本水文科学学会	杉田 文	千葉商科大学	重任
25		地球人間圏科学セクション	千木良雅弘	京都大学防災研究所	重任
26		日本火山学会	中田 節也	東京大学地震研究所	重任
27		地球電磁気・地球惑星圏学会	長妻 努	情報通信研究機構	重任
28		大気水圏科学	早坂 忠裕	東北大学	重任
29		日本海洋学会	日比谷紀之	東京大学	重任
30		日本鉱物科学学会	平島崇男	京都大学	重任
31		東京地学協会 物理探査学会	三ヶ田 均	京都大学	重任
32		日本活断層学会	宮内崇裕	千葉大学	重任
33		地理情報システム学会	村山 祐司	筑波大学	重任
34		地球電磁気・地球惑星圏学会	山本 衛	京都大学	重任
35		水文・水資源学会	芳村 圭	東京大学	重任
36		資源地質学会	渡辺 寧	秋田大学	重任

(2014年4月～2015年3月31日)

地球惑星科学振興西田賞について (HP およびメールレター原稿案)

この度公益社団法人日本地球惑星科学連合は「地球惑星科学振興西田賞」を創設し、国際的に評価を得ている優れた 45 歳未満の中堅研究者を表彰する事を平成 26 年 4 月 28 日の理事会において決議いたしました（連合 HP の議事録 <http://xxxx> をご覧下さい）。賞の名称は西田篤弘会員（フェロー）のご提案と寄付金により賞を維持することに由来します。ここでは、この賞の概要についてご説明します。

1. 受賞者の条件

地球惑星科学の分野において新しい発想によって優れた研究成果を挙げ、国際的に評価を得ている方で審査年度当初（4 月 1 日）に **45 歳未満の研究者** が受賞対象者となります。原則として個人ですが、2 名までの連名を認める場合があります。国籍、性別は問いません。

2. 受賞者数

1 年おき(西暦で偶数年)に 10 件以内を選ぶ事とし、2014 年度から開始します。以降隔年で受賞者を決定します。原則として各サイエンスセクションから最低 1 件を選ぶ事とし、配分においてはサイエンスセクションの規模を考慮します。

3. 推薦

- i. 選考対象は推薦によるものとし、自薦および他薦を認めます。ただし他薦の場合には本人に受賞の意思があることを事前に確認することが必要です。
- ii. 推薦に必要な書類は以下の通りです
 - 候補者の名前、連絡先（所属機関、住所、電話番号、メールアドレスなど）
 - 候補者の経歴、受賞歴
 - 査読付き論文リストおよび主要な論文 5 編の別刷り
 - 推薦理由書（A 4 で 6 ページ以内、日本語あるいは英語）
 - 自薦の場合は 2 通の推薦書、他薦の場合は推薦者以外の 2 名のサポートレター（日本語あるいは英語）

- 他薦の場合は推薦者の氏名と連絡先（住所、電話番号、メールアドレスなど）
 - iii. 提出はワードファイル、およびその PDF 版を当該年度の推薦期間内に地球惑星科学振興西田賞事務局(jpgu_nishidasho@icloud.com)にメールにて送付してください。
4. 審査委員会
- i. 各セクションから選出された委員で構成します。任期は選考を行う年度の10月から3月までとし最初の審査開始から最大4年まで再任を認めます。
 - ii. 委員は受賞候補者と同様の資格を満たし、当該分野の現状に通じた経験豊かな会員を各セクションから複数名(最低一名)出していただきます。分野毎の人数はセクションの規模を考慮し、全体で15名程度といたします。
 - iii. 委員は当該年度の9月の理事会で承認し、委員長は互選といたします。
 - iv. 委員の名簿は審査段階では非公開とし、受賞者発表時に公開する事と致します
5. スケジュール（以下は2014年度、以降開催年度毎に設定し直します）
- i. **2014年9月－11月：推薦期間**
2014年7月－9月：審査委員を理事会で決定（委員任期2014年10月－2015年3月）
 - ii. **2014年12月－2015年3月理事会まで：審査期間**
 - iii. 2015年3月：審査委員長は結果を理事会へ報告、報告後すみやかに受賞者をホームページなどで発表します
 - iv. 2015年の連合大会で表彰いたします。
 - v. 受賞者は2016年の連合大会で記念講演会を行って頂きます。
6. 顕彰方法
- i. 賞状を贈ります
 - ii. 副賞として受賞者に1件あたり50万円を贈ります。

賞の規則及び審査委員会規則は以下に掲示されています。

<http://www.jpgu.org/soshiki/kisoku/nishidashou.pdf>

http://www.jpгу.org/soshiki/kisoku/nishidashou_shinsa.pdf

この賞についてのご質問は jpгу_nishidasho@icloud.com に願ひ致します。

以上

地球惑星科学振興西田賞規則

2014 年 4 月 28 日 理事会制定

(趣旨)

この規則は、公益社団法人日本地球惑星科学連合（以下、「連合」という。）が「地球惑星科学振興西田賞」により、地球惑星科学の分野において国際的に高い評価を得ている優れた中堅研究者を表彰する為に必要な事項を定めるものである。本賞の名称は西田篤弘会員のご提案と寄付金により本賞を維持することに由来する。

(受賞者の要件)

第1条 受賞者は、次の各号に該当するものとする。

- (1) 審査年度の4月1日時点において45歳未満の連合の正会員である者。
- (2) 地球惑星科学の分野において新しい発想によって優れた研究成果を挙げ、国際的に高い評価を得ている者。
 2. 原則として個人とするが、授賞1件につき2名までの連名を認める場合がある。

(選考・受賞者数)

第2条 受賞者の選考は隔年で行ない、選考毎に10件以内を選ぶ。

2. 受賞者数は、連合の各セクションから1件以上とし、配分においてはセクションの規模を考慮する。

(推薦)

第3条 受賞者は正会員による推薦または自薦により候補者となるものとし、推薦者1名が以下の内容が記載された推薦書（任意書式）をもって会長に推薦するものとする。

- (1) 候補者の名前、連絡先（所属機関、住所、電話番号、メールアドレスなど）
- (2) 候補者の経歴、受賞歴
- (3) 査読付き論文リストおよび主要な論文5編の別刷り
- (4) 推薦理由書（A4で6ページ以内、日本語あるいは英語）
- (5) 自薦の場合は2通の推薦書、他薦の場合は推薦者以外の2名のサポートレター（日本語あるいは英語）
- (6) 他薦の場合は推薦者の氏名と連絡先（住所、電話番号、メールアドレスなど）
 2. 推薦書のMS Word ファイルとそのPDF を日本地球惑星科学振興西田賞事務局にメールにて送付する事とする。

3. 推薦者は、本人に授賞の意志があることを事前に確認しなければならない。

(審査委員会)

第4条 理事会は、地球惑星科学振興西田賞審査委員会（以下、「審査委員会」という。）を設置し、推薦された候補者の中から受賞者を選考する。

2. 審査委員会に関する規則は別に定める。

(授与)

第5条 理事会は、審査委員会からの選考結果を受け、受賞者を認定する。

2. 会長は表彰式において受賞者に賞状を授与する。

3. 副賞として受賞者に1件あたり50万円を贈る。原資は地球惑星科学振興西田賞特別会計とする。

(推薦・審査の実施時期)

第6条 候補者の推薦及び審査の時期は理事会が定める日程をもって行う。

(規定の改廃)

第7条 この規定の改廃は、理事会の決議を必要とする。

附則

(1) この規則は、2014年4月28日から施行する。

(2) 本賞の授賞は2014年度から開始し、以降、隔年（西暦の偶数年度）にて行う。

(3) 本賞の授賞式は選考年度の翌年に行う。

地球惑星科学振興西田賞審査委員会設置規則

2014 年 4 月 28 日 理事会制定

(趣旨)

第 1 条 この細則は、地球惑星科学振興西田賞規則に基づき、地球惑星科学振興西田賞審査委員会（以下、「審査委員会」と言う。）に関し必要な事項を定めるものとする。

(任務)

第 2 条 審査委員会は、理事会の要請に基づき、地球惑星科学振興西田賞被推薦者の中から受賞者を選考する。

(委員会の組織)

第 3 条 委員は、各セクションから当該分野の現状に通じた経験豊かな正会員を一名以上複数名選出するものとする。委員会全体で 15 名程度とし、その構成比率はセクションの規模を考慮して決める。

2. 委員は理事会の議を経て会長が委嘱する。

3. 委員長は互選とし、理事会の議を経て会長が指名する。

(委員会の運営)

第 4 条 委員長は、必要があると認めるときは委員会を招集し、その議長となる。

2. 委員会の決議は、委員の過半数が出席し、その過半数をもって行う。可否同数のときは議長の採決するところによる。

3. 前項の場合において、議長は委員として評決に加わることはできない。

(委員の任期)

第 5 条 委員の任期は審査年度の 10 月から 3 月までとし、再任は最初の審査開始から最大 4 年までとする。

(委員名の公表)

第 6 条 委員名は、受賞者が決定した時点でこれを公表する。

(委員の制約)

第 7 条 被推薦者および推薦者は委員になることはできない。

(秘守義務)

第8条 委員は、被推薦者および推薦者に関する情報を委員会の外に出してはならない。

附則

(1) この規則は、2014年4月28日から施行する。

地球惑星科学振興西田賞審査員数案

正会員数（20140528現在）

セクション名	登録者数	比率	審査員	審査員数(1)	審査員数(2)
宇宙惑星科学	1381	16.68%	2.502416	2	3
大気水圏科学	1835	22.17%	3.325079	4	3
地球人間圏科学	1178	14.23%	2.134574	2	2
固体地球科学	3254	39.31%	5.896352	6	6
地球生命科学	630	7.61%	1.14158	1	1
合計	8278	100.00%		15	15

フェロー制度規則

2013 年 10 月 11 日 理事会制定

(趣旨)

第 1 条 この規則は、公益社団法人日本地球惑星科学連合（以下、「連合」という。）が、地球惑星科学において顕著な功績を挙げ、あるいは連合の活動に卓越した貢献をはかった正会員に対し、名誉あるフェローとして処遇することを目的として設立された連合フェロー制度に関し、必要な事項を定めるものである。

(フェロー候補者の要件)

第 2 条 フェロー候補者は、連合において、推薦時点において過去 3 年度にまたがり連合の正会員資格を保持した経歴を持ち、次の各号のいずれかに該当するものとする。

- (1) 地球惑星科学研究領域におけるパラダイムシフトやブレイクスルーもしくは発見などを中心に、地球惑星科学の発展に著しい貢献をした者
- (2) 連合の活動に顕著な貢献をなし、日本の地球惑星科学の発展、あるいは地球惑星科学の知識普及に貢献した者

(フェロー候補者の除外)

第 3 条 前条にかかわらず、次の各号の者はフェロー候補者にはなれない。

- (1) 役員、及びセクションプレジデント
- (2) フェロー審査委員会委員

(推薦)

第 4 条 フェローは、正会員による推薦により候補者となるものとし、推薦者 1 名が次の各号の内容が記載された書面（任意書式）をもって連合会長に推薦するものとする。

- (1) 候補者の氏名、連絡先（所属機関、住所、電話番号、メールアドレスなど）
- (2) 候補者の履歴（研究歴、受賞歴、大学・研究機関・学協会等における貢献、他）
- (3) 候補者の主要な論文あるいは特許等あわせて 5 編のリスト、およびその別刷り乃至コピー
- (4) 推薦理由書(A 4 で 2 ページ以内、日本語又は英語)
- (5) 3 通のサポートレター(A 4 で各 1 ページ以内、日本語又は英語、連名を可とする)
- (6) 推薦者の氏名、連絡先（所属機関、住所、電話番号、メールアドレスなど）

(選考)

第 5 条 理事会は、フェロー審査委員会（以下、「審査委員会」という。）を設置し、推薦さ

れた候補者の中からフェローを選考する。

2. 審査委員会に関する規則は別に定める。

(授与)

第6条 理事会は、審査委員会からの選考結果を受け、フェローを認定する。

2. 会長はフェロー表彰式においてフェロー称号とメダルを授与する。

(推薦・選考の実施時期)

第7条 フェローの推薦及び選考の時期は理事会が定める日程をもって行う。

(規定の改廃)

第8条 この規定の改廃は、理事会の決議を必要とする。

附則

(1) この規則は、2013年10月11日から施行する。

(2) 本規則第2条の正会員資格には、公益社団法人地球惑星科学連合の正会員（2011年12月～）、一般社団法人日本地球惑星科学連合の正会員（2009年12月～2011年11月）、日本地球惑星科学連合大会（2006～2009年）および地球惑星科学関連学会合同大会（1990～2005年）の参加登録者を含むものとする。

2013年10月11日 理事会制定

2013年12月19日 理事会改正

フェロー審査委員会規則

2013 年 10 月 11 日 理事会制定

(趣旨)

第 1 条 この細則は、公益社団法人日本地球惑星科学連合フェロー制度規則に基づき、フェロー審査委員会に関し必要な事項を定めるものとする。

(任務)

第 2 条 フェロー審査委員会は、理事会の要請に基づき、フェロー被推薦者の中からフェローを選考する。

(委員会の組織)

第 3 条 委員は役員及びセクションプレジデントを除く正会員の中から理事会の議を経て会長が委嘱する 5 名の委員により構成する。

2. 委員長は、理事会の議を経て会長が指名する。

(委員会の運営)

第 4 条 委員長は、必要があると認めるときは委員会を招集し、その議長となる。

2. 委員会の決議は、委員の過半数が出席し、その過半数をもって行う。可否同数のときは議長の採決するところによる。

3. 前項の場合において、議長は委員として評決に加わることはできない。

(委員の任期)

第 5 条 委員の任期は 2 年とし、1 年毎に半数を改選する。

(委員名の公表)

第 6 条 委員名は、当該年度の全委員が改選された時点でこれを公表する。

(委員の制約)

第 7 条 委員は、被推薦者および推薦者になることはできない。

(秘守義務)

第 8 条 委員は、被推薦者および推薦者に関する情報を委員会の外に出してはならない。

附則

- (1) この規則は、2013 年 10 月 11 日から施行する。
- (2) 第 5 条の定めにかかわらず、本規則で最初に専任される委員のうち 2 名は 3 年の任期とする。

AGU 訪問の件

・訪問メンバー

	氏名
会長	津田敏隆
副会長	川幡穂高
副会長/ グローバル戦略委員長	木村学
副会長	中村正人
グローバル戦略委員	ウォリス サイモン
グローバル戦略委員/ セクションプレジデント	大谷 栄治
グローバル戦略委員	日比谷紀之
事務局	谷上美穂子 白井佳代子 杉村洋平

・旅程

月日	内容
7月15日	ワシントン ダレス国際空港着
7月16日	AGU とのミーティング
7月17日	ワシントン ダレス国際空港発

Memorandum on cooperation between JPGU and EGU

In order to promote research in the Earth and Planetary sciences, the European Geoscience Union (EGU) and the Japan Geoscience Union (JPGU) will cooperate to enhance the activity of their members.

1. The JPGU and EGU will distribute the following information to their respective members by email, newsletters or web servers.

- Information on meetings convened by either side.
- Information on research employment.
- Other information that will benefit researchers.
- Information on scientific publications

The means of circulation of information will be coordinated between both parties' secretariats.

2. A link to the JPGU/EGU homepage will be posted on the "collaboration with national and international geophysical societies" section" link from the homepage of EGU and JPGU using the logos of JPGU/EGU.

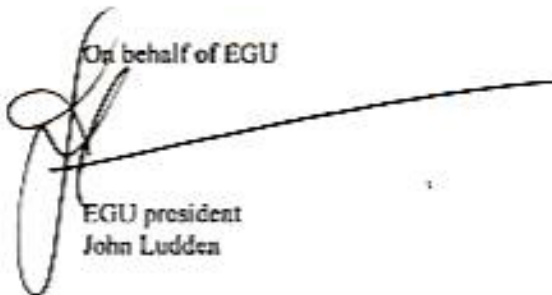
3. At both parties' annual conferences, a co-sponsored session by EGU/JPGU will be encouraged.

4. At the EGU/JPGU annual conferences, if requested, an exhibition booth will be provided free of charge.

5. The executive officers of EGU and JPGU will undertake to have a meeting once a year to discuss this cooperation. This meeting will be held at an appropriate EGU or JPGU annual meeting.

The agreements in this memorandum become effective on January 1st, 2007 .

On behalf of EGU



EGU president
John Ludden

The British Geological Survey
Keyworth, Nottingham, NG12 5GG
United Kingdom

On behalf of JPGU



Yozo Hamano,
JPGU Chairman

The University of Tokyo
Tokyo, Bunkyo-ku, Hongo 7-3-1,
113-0033
Japan

The Asahiko Taira International Scientific Ocean Drilling Research Prize

I. Award/Lecture/Program Title

The Asahiko Taira International Scientific Ocean Drilling Research Prize (the “Taira Prize”)

II. Background

It is important to the American Geophysical Union’s (AGU) mission to recognize scientists who are achieving fundamental and outstanding scientific advances in our understanding of the Earth through scientific ocean drilling. The Board of Governors of the Integrated Ocean Drilling Program – Management International (IODP-MI) envisions that such major contributions and discoveries will be made through international scientific collaboration in ocean drilling. This award will recognize individuals who have made outstanding and transdisciplinary scientific contributions enabled by ocean drilling.

III. Goal and Scope Statement

The Asahiko Taira International Scientific Ocean Drilling Research Prize will honor and support an early career scientist within 15 years (exceptions can be made for exceptional circumstances) of receiving their Ph.D. who has used ocean drilling to achieve fundamental and outstanding advances in our understanding of the Earth. If in the future, active research is no longer pursued in ocean drilling, the award should recognize scientific achievement in scientific drilling as a whole.

IV. Citation

In recognition of outstanding transdisciplinary research accomplishment in ocean drilling.

V. Type and Frequency

The Taira Prize will be given once a year and it will rotate among the Honors Ceremonies at 1) the AGU Fall Meeting, 2) the Japan Geoscience Union (JpGU) Meeting, and 3) the annual European Geosciences Union (EGU) General Assembly. AGU will host the award during the first year it is made. JpGU will host it the second year. EGU will host it the 3rd year. This order of rotation will be continued thereafter. The winner will also deliver a lecture at the appropriate venue where the prize is given that year... The recipient will receive \$18,000 and a presentation piece that recognizes his/her accomplishments in ocean drilling.

VI. Eligibility

An eligible candidate must be an active scientist who is within 15 years of receiving their Ph.D. of any discipline and must be making an impact in the field of ocean drilling. Exceptions to the 15-year limit can be made for exceptional circumstances such as, but not limited to, maternity/paternity leave. The candidate will be a single contributor who is completing significant work.

VII. Financial Implications

The Taira Prize will carry a \$18,000 cash prize and will be awarded annually, subject to AGU's Spending Policy (currently capped at 4% yearly spending from endowment-type funds). The award is being established through the generosity and planning of the Board of Governors of the Integrated Ocean Drilling Program – Management International. The Board of Governors envisions that the prize will be augmented by further contributions to the corpus investment and these funds will be used to increase or extend the award in the future.

VIII. Management of Award

AGU is responsible for all aspects of the Asahiko Taira International Scientific Ocean Drilling Research Prize— including but not limited to the management of the award fund, the nomination and selection processes and timeframes, creation and payment of prizes, advertising and marketing, and coordination of award presentations with JpGU and EGU. AGU will manage the prize so that it will continue in perpetuity.

IX. Nomination and Selection Process

Eligible Nominators and Supporters:

- Open to the public.
- **Two or more nomination packages for a single candidate will not be considered. If separate packages will be received, the nominators will be asked to combine them.** All nominations, nominators, supporters, and nominees must follow and uphold the AGU Conflict of Interest Policy (COI) (see below).

Requirements:

All documents included in a nomination package should be no more than two (2) pages in length.

1. Nomination and Supporting Letters

- A required total of three letters of support must be submitted (total number does not include the nomination letter). At least two supporting letters should be from individuals not currently or recently associated with the candidate's institution of graduate education or employment.
- Nomination and supporting letters should be concise, clear, and preferably on letterhead.
- Nomination letter must include the birth date of the nominee and certification of their current academic or career standing.
- Nomination and supporting letters must clearly articulate how the candidate(s) research over a sustained period of time has made significant impact on his/her field. The letters must explain the contributions and their importance to both their peers and to those outside their immediate research field.
- The first paragraph of each nomination and supporting letter should include the name of the candidate and a few sentences giving the overall reasons for nominating or supporting the candidate. The body of the nominating letter, which could be a few paragraphs, should give a brief and concise history of the candidate's work and publications that have resulted. Both the nomination and supporting

letters should state how the work has contributed to the field overall and/or to the growth of the field, as well as what insights have been gained and what impacts the work will have on current and future research.

- The last paragraph of the nomination and supporting letters should summarize the work, state who has benefitted, and highlight any of the candidate's recognitions and/or notable service to his/her field.
- If possible, the nominator might want to provide his/her nomination letter and other nomination materials to the persons asked to write supporting letters to help ensure the best possible coverage of the nominee's accomplishments and contributions. It is important that supporting letters augment the letter of nomination through substantive documentation that establishes the nominee's international reputation and impact of his/her work.
- Both nomination and supporting letters should contain the author's signature, full name, title, and institution affiliation. Electronic or official signatures are acceptable.

2. Curriculum Vitae

The curriculum vitae should list the candidate's (1) name, (2) address, (3) history of employment, (4) degrees, (5) research experience, (6) honors, (7) memberships, and (8) any service to the community. The date, title and organization where the Ph.D. was received must be included. It is important to explain the reasons for the honors which have been received by the candidate. All incomplete or incorrect CVs will be returned to the nominator for revision.

3. Bibliography

Each selected bibliography should begin by briefly stating the candidate's total number and types of publications. For example:

Jane Doe is the author of 92 publications, 86 in peer-reviewed scientific journals. The following selected list best supports Jane's nomination for the Taira Prize..

4. Holdover Nominations

AGU does not allow holdover nominations.

Unsuccessful nominators are encouraged to update documentation (i.e. nomination letter, curriculum vitae, bibliography, and supporting letters). Nominators will be provided with feedback from the Union Prize committee to which their package was submitted.

Timeline of Nomination and Review Process:

The nomination and review process will follow the time frame established for all AGU Union-level medals, awards and prizes.

Selection Committee:

AGU’s President appoints committee chairs every two years as one of their first acts in office. The AGU President should endeavor to rotate the appointed Chair between 1) The Asia-Australia area, 2) The Americas, and 3) Europe. The Chairperson of the Taira Medal Committee must be a recognized expert in the field of ocean drilling with background in international issues and programs related to ocean drilling. In order to maintain a truly international viewpoint and encourage the application and nomination of international applicants, the Chair will appoint experts in the field to staff the review committee. Seven members will comprise the committee: in addition to the Chair, 2 will be from the Asia-Australia area, 2 will be from the Americas, and 2 will be from Europe. A member will be considered from these areas if they are currently residing and pursuing research in these locations. The AGU Committee on International Participation (CIP) will view and approve committee appointments to ensure that these objectives are being met.

AGU Conflict of Interest Policy (COI Policy):

The purpose of the AGU Conflict of Interest policy is to avert, to the extent possible, biasing circumstances or the appearance of biasing circumstances in the selection of AGU honorees. This policy applies to all Union Medal, Award, Prize and Fellows selection committees; and Section and Focus Group awards, and lectures. The full text of the COI Policy can be found at

<http://honors.agu.org/agu-conflict-of-interest-policy-union-sections-focus-groups-fellows-medals-awards-prizes-lectures-program-selection-committees/>

[IODP Representative and Title]

Date

American Geophysical Union (AGU)
 Christine W. McEntee, Executive Director/CEO

Date

公益社団法人日本地球惑星科学連合
平成 26 年度第 2 回理事会議事録

1. 開催日時 平成 26 年 5 月 2 日 (金)
午前 13 時 00 分から午後 14 時 00 分
2. 開催場所 パシフィコ横浜会議センター414 号室
(横浜市西区みなとみらい 1-1-1)
3. 出席者 理事数 20 名
出席理事 16 名 (定足数 11 名 会議成立)
オブザーバー 6 名
4. 議長 理事 津田 敏隆
5. 出席役員
理事 津田 敏隆
理事 川幡 穂高
理事 木村 学
理事 ウォリス サイモン
理事 高橋 幸弘
理事 瀧上 豊
理事 田中 賢治
理事 成瀬 元
理事 西 弘嗣
理事 畠山 正恒
理事 濱野 洋三
理事 原田 尚美
理事 日比谷 紀之
理事 古村 孝志
理事 村山 泰啓
理事 渡邊 誠一郎
監事 北里 洋
監事 松浦 充宏

6. 出席オブザーバー

宇宙惑星科学セクションプレジデント 大村 善治
大気水圏科学セクションプレジデント 中島 映至
地球生命科学セクションプレジデント 北里 洋
大気水圏科学セクション幹事 川合 義美
固体地球科学セクション幹事 木村 純一
宇宙惑星科学次期セクションプレジデント 佐々木晶

午後 13 時 00 分、理事の定数に足る出席があったので、会長津田敏隆は議長席に着き、開会を宣言した。

7. 審議事項

第 1 号議案 代表理事（会長）、業務執行理事及び副会長選定の件 資料 P.1

津田敏隆会長、木村学副会長、川幡穂高副会長、中村正人副会長を選定した。

第 2 号議案 グローバル戦略委員承認の件 資料 P.2

グローバル戦略委員の委員を審議した。委員長は木村学副会長、副委員長をウォリス サイモン理事とし、委員を資料の通り選任した。

なお他の委員に関しては、議長より案が提出され、次回理事会で審議するとした。

議長は以上をもってすべての議事を終了した旨を述べ、閉会を宣した。（午後 14 時 00 分）
以上の議事の要領及び結果を明確にするため、本議事録を作成し、出席理事は次に記名・押印する。（捺印欄配布時省略）

大会運営委員会推薦名簿（2014年6月1日～2015年5月31日）

No.	役職(案)	部局(選出母体)	氏名	所属	備考
1	委員長	(理事)	浜野 洋三	JAMSTEC	重任
2	副委員長	企画	岩上 直幹	東京大学	重任
3	副委員長	企画(固体地球)	興野 純	筑波大学	重任
4		企画(理事)	北 和之	茨城大学	重任
5		企画(理事)	高橋 幸弘	北海道大学	重任
6		企画(宇宙惑星)	中村 昭子	神戸大学	重任
7		企画(宇宙惑星)	和田 浩二	千葉工業大学	新任
8		企画(宇宙惑星)	大月 祥子	専修大学	新任
9		企画(宇宙惑星)	能勢 正仁	京都大学	新任
11		企画(人間圏)	財城 真寿美	成蹊大学	重任
12		企画(人間圏)	赤坂 郁美	専修大学	新任
13		企画(人間圏)	近藤 昭彦	千葉大学	重任
14		企画(固体地球)	金川 久一	千葉大学	重任
15		企画(生命) プログラム局長	鈴木 庸平	東京大学	新任
16		プログラム局	河宮 未知生	JAMSTEC	重任
17		プログラム局	中本 泰史	東京工業大学	重任
18		プログラム局	目代 邦康	自然保護助成基金	重任
19		プログラム局	井出 哲	東京大学	重任

環境・災害対応委員会推薦（追加）

27		陸水物理研究会	知北 和久	北海道大学	新任
----	--	---------	-------	-------	----

公益社団法人日本地球惑星科学連合

平成 26 年度 第 3 回理事会

開催日時 平成 26 年 6 月 2 日（月）
午後 14 時 00 分から午後 16 時 00 分

開催場所 東京大学理学部 1 号館 8 階 851 号室
（東京都文京区本郷 7-3-1）

【追加資料】

JpGU2014 年大会ユニオンセッション U07 開催報告	P. 1-2
平成 26 年度「女子中高生夏の学校 2014～科学・技術・人との出会い～」 実行委員会からのお願い	P. 3-6
男女共同参画委員会規則	P. 7
WPGM 開催履歴	P. 8-9
WPGM2000 年大会資料	P. 10-12

JpGU 2014 年大会ユニオンセッション U07
Future Earth – 持続可能な地球へ向けた統合的研究
会場：501 日時：5月1日 09:00-18:00
報告(代表コンビーナ：氷見山幸夫)

2015 年 1 月の正式発足に向け、地球環境研究の新しい枠組である Future Earth の体制づくりが急ピッチで進んでいる。このたびわが国の Future Earth の主な関係者の多くと海外からかつて IYPE(国際惑星地球年)を主導された Eduardo de Mulder 教授を講師としてお招きして日本地球惑星科学連合大会で Future Earth のユニオンセッションを開催できたことは、Future Earth に取り組む国内の体制を固める上で大変有益であった。以下の講演要旨メモに見られるように、講演内容は大変幅広く且つ実質的で、かなり突っ込んだ議論が展開された。セッション終了後ある参加者が U07-2 の講演に関してメールで感想を述べたのをきっかけとして多数のメールが交換され、その後開催された日本学術会議 Future Earth 推進委員会でもそれが取り上げられるなど、大変インパクトの大きいセッションだったと言える。

<講演要旨メモ>

U07-1：安成哲三

「アジアにおける Future Earth の重要性」

Future Earth は地球環境変化を包括的に理解しつつ、持続可能な人類社会構築に向け、研究者だけでなく社会全体が行動する枠組み。日本はアジアでリーダーシップをとるべき。

U07-2：江守正多

「地球温暖化リスクのトレードオフと社会のリスク判断」

二酸化炭素排出量は速やかに減らすべきだが、温暖化のリスクも対策をとった場合のリスクと効果も不確実性があり、国、地域、世代等によっても異なる。どう意思決定するか？

U07-3：大崎満・広瀬和世

「熱帯泥炭地低湿地におけるモニタリング・センシング・モデリングによる MRV システム」

東南アジアには低湿地生態が多く、食糧生産、住民の生活、気候変動への緩和策や適応策などの生産生態として重要。日本は炭素量と炭素フラックスのマッピングで世界を主導。

U07-4：八木信行

「海洋生態系サービスの保全と持続可能な利用に関する国際ガバナンスの現状」

海の恵み(海洋の生態系サービス)を国際社会が適切に管理し最適利用することが課題だが、漁業操業の規制だけに焦点が当たり、海洋生態系や生態系サービスの保全の視点に欠ける。

U07-5：谷口真人

「持続可能な地球環境へ向けた国際共同研究の国内外でのプラットフォームの形成」

日本は Future Earth のアジア地域ハブとして、研究者を含むステークホルダーのネットワークを構築し、研究の手法・データ・能力等を提供するプラットフォームを形成すべき。

U07-6：山形俊男

「東アジア縁辺海の持続可能性イニシャチブについて」

東アジアの縁辺海(MSEA)は人口稠密で社会経済的活動が極めて活発な地域に接する。そこは多様な生物が生息する豊かな海だが台風などの災害も多く、環境の保全が重要である。

U07-7：福井弘道

「Future Earth の議論のプラットフォームとしての Digital Earth」

地理空間情報の高度利用により構築されるサイバースペース「デジタルアース」は多様なステー

クホルダーにより進められる Future Earth のプラットフォームとして活用できる。

U07-8：蟹江憲史

「Future Earth と持続可能な開発目標」

21 世紀の持続可能な開発は、持続可能な開発目標(SDGs)を策定し、地球環境をその基本的な必要条件として、その上に経済や社会が成り立つという考え方に転換する必要がある。

U07-9：Eduardo de Mulder

「How will Humanity Survive and Flourish on Future Planet Earth?」

人類は人口増加、都市の拡大、生活水準の向上などに伴い地球環境の様々な制約に直面しているが、Future Earth に示される英知をもってすれば、この難局を克服できるだろう。

U07-10：小池俊雄

「データ統融合による科学の知の創出」

データ統合・解析システム(DIAS)を基盤に諸科学分野が協働して地球環境問題を解決する科学の知を創造するための分野間の連携と科学－社会の連携への取り組みが始まっている。

U07-11：小口高

「地理空間データとフューチャーアース：デジタル標高モデルを例に」

Future Earth には多様な地理空間データが必要。それらのうち最も基本的なものの一つであるデジタル標高モデル(DEM)の整備状況と、Future Earth と関連する応用例を紹介する。

U07-12：沖大幹

「超高解像度地球環境予測による Future Earth 研究の推進」

全大陸のエネルギー、水、物質循環、炭素収支等を±150 年にわたり推計、持続可能なエネルギーや食料、資源、健康、生態系サービス等の変化や今後の問題点を明らかにしたい。

U07-13：杉原薫

「アジアの経済発展と地球環境の持続性」

広域アジアは全面的に工業化・都市化しつつあり、そこでの資源・エネルギー利用が世界経済の動きを律する。アジアの経済発展は地球環境にどう影響し、将来をどう規定するか。

U07-14：瀧上豊・久田健一郎

「Future Earth の視点から見た国際地学オリンピック」

国際地学オリンピックは国際協力野外調査(国際協力)や国際大会の設問(地学・地球科学=地球理解)を通して教育の改善及び人間を含む地球全体を考える Future Earth に貢献する。

U07-15：井田仁康

「持続可能な地球への教育－国際地理オリンピック」

国際地理オリンピックはマルチメディア、記述、フィールドワークの設問を通して地域の自然と社会、将来像、問題等を観察し考察する力を高め、持続的地球への教育に貢献する。

U07-16：植松光夫

「インド洋-太平洋における沿岸域を含む海洋生態系の持続可能な将来」

Future Earth の一環として、インド洋-太平洋における沿岸域を含む海洋生態系の持続可能な将来を実現するための、学際的で且つ人材育成を含む国際的な研究計画を実施すべき。

U07-17：氷見山幸夫

「持続可能な地球の未来への地球惑星科学的展望」

地球惑星科学は地球環境と人間活動との関係や自然災害を含む地球表層の諸事象を扱う領域を包括しており、地球持続可能性の向上を目指す Future Earth で重要な役割を果たす。

平成26年度「女子中高生夏の学校2014～科学・技術・人との出会い～」 実行委員会からのお願い

平成26年度実行委員長

湯浅 富久子（高エネルギー加速器研究機構 日本物理学会）

毎年、夏の学校に関して多くのご尽力を賜り、ありがとうございます。

下記の要領により、本年も「女子中高生夏の学校～科学・技術・人との出会い～」を行います。

（詳細は、添付の開催要項をご覧ください。）

- 1 主 催 独立行政法人 国立女性教育会館
- 2 共 催 日本学術会議「科学と社会委員会 科学力増進分科会」
「科学者委員会 男女共同参画分科会」 （申請中）

3 期 日 平成26年8月7日（木）～8月9日（土）

4 会 場 国立女性教育会館

〒355-0292 埼玉県比企郡嵐山町菅谷728

つきましては、この夏の学校を開催するにあたり、以下3件につきまして、ご希望をお伺いしたいと存じます。

	依頼項目	締め切り	申し込み・提出先
(1)	協賛依頼調査	6月20日（金）	国立女性教育会館事業課 千装 メールアドレス chigira@nwec.jp
(2)	実験・実習申し込み	5月31日（土）	
	開催資料用の要旨原稿	6月20日（金）	
(3)	ポスター展示・キャリア相談ブース 参加申し込み	5月31日（土）	
	テーマ・開催資料用の要旨原稿	6月20日（金）	

（1）協賛依頼調査

本年度も学会・大学・研究機関・企業等の皆様に協賛をいただきたく、お願い申し上げます。協賛をいただける方は下記の調査書にご記入の上、6月20日（金）までに国立女性教育会館 千装（メールアドレス chigira@nwec.jp）までお送りください。

協賛をいただける団体様には、後日、申請書をお送りいたします。申請書に指定の様式がある場合、また、都合により下記の調査書提出が締め切り後となります場合は、千装までご連絡ください。

平成26年度 女子中高生夏の学校2014～科学・技術・人との出会い～ 協賛依頼調査（6月20日（金）締め切り）

団体名（正式名称）	公益社団法人日本地球惑星科学連合
代表者名	日本地球惑星科学連合会長 津田 敏隆
協賛に関するご担当者名	日本地球惑星科学連合事務局
ご担当者メールアドレス	office@jpgu.org
申請書送付先住所（〒から）	〒113-0032 東京都文京区弥生 2-4-16 学会センタービル 4 階
申請書送付先あて名	公益社団法人日本地球惑星科学連合

* 分担金等のご負担は一切不要です。

* ご提出後、3日以内に返信がない場合は、お手数ですが再送をお願い申し上げます。

(2) 実験・実習の申し込み

夏の学校の2日目(8月8日金曜日)に「サイエンスアドベンチャーⅠ」というプログラムを実施します。その中で、各学協会・団体様に、実験・実習(9:00～11:30)をお願いしたいと考えております。

これは、女子中高生が大学・研究所での科学・技術の一端に触れて科学に興味をもち、将来の進路選択の助けとなることを目的としています。あらかじめ参加決定時に生徒に実験・実習の希望調査を行います。決定した実験・実習にじっくりと取り組み、研究者・技術者と交流しながら自分なりの発見をします。今年も、文理選択を迷っている生徒や中学生向けの「不思議体験コース」と理系の中の実験分野の選択に迷っている生徒向けのより専門性の高い「チャレンジコース」の2種類の実験を用意します。皆様の計画されている実験・実習が2つのコースのどちらに当たるか、申込書に明示をお願いいたします。また、昨年度より女子中高生が行う実験・実習に、参加者である保護者・教員の参加や見学ができるプログラムとしております。女子中高生、保護者・教員の最終的な参加人数は、追ってお知らせしますが、保護者・教員の実験・実習への参加が困難、または人数が増えることで実施が困難な場合は、申込書にてその旨お知らせください。

本趣旨をご理解いただける団体様の参加をお待ちしております。依頼状が必要な場合は、別途依頼状等をお出しいたします。なお、大学・企業関係者の皆様におかれましては、実験・実習中に特定大学・企業への誘致・宣伝とならないように、特段のご配慮をお願いいたします。

実験・実習場所は、研修室(ゼミ室)となっております。したがって水道・排水・ガスなどの設備はなく、通常使用の電気コンセント(数カ所)のみとなっておりますことをご了承ください。長机、イス、ホワイトボード、有線によるLAN接続は使用できます。水道・排水は洗面所使用となりますので、排水には十分の注意をお願いいたします。場合によっては、排水はお持ち帰りください。なお、当会館の研修室は、動物実験等の許可を受けている施設ではありませんので、解剖等、専用の教室がなければできない実験・実習のお申し込みはご遠慮くださいますようお願いいたします。また、お申し込み後、当日配付する開催資料に掲載する実験・実習の要旨原稿をご提出いただきますが、掲載する要旨の内容と異なる実験・実習を行うこともご遠慮くださいますよう重ねてお願い申し上げます。

実験・実習担当者の方は、女子中高生夏の学校の実行委員としてご登録いただき、共に活動させていただく形にしたいと思っております。また、お時間の許す方は、出来るだけ前泊、あるいは当日泊していただき、本プログラムの時間以外でも、女子中高生との交流を行っていただけると幸いです。

ご参加いただける団体は、下記申込書にご記入の上、5月31日(土)までに国立女性教育会館 千装(メールアドレス chigira@nwec.jp)まで申し込みをお願いいたします。また、研修室の数に制限がありますので、ポスター展示に変更させていただく場合もございますことを、ご了承願います。

準備などの詳細は、追ってご連絡いたします。開催資料掲載用要旨の最終的な提出期限は6月20日(金)とさせていただきます。

平成26年度 女子中高生夏の学校2014～科学・技術・人との出会い～

実験・実習の申し込み(5月31日(土)締め切り)

団体名	日本地球惑星科学連合	
代表者名	津田 敏隆	
実験・実習のレベル	☒ 不思議体験コース	☐ チャレンジコース
実験・実習の演題	地球惑星科学へようこそ～Dr.ナダレンジャーの自然災害のサイエンスショー～	
保護者・教員の参加	☒ 可	☐ 否
実験のご担当者名	納口恭明(独立行政法人 防災科学技術研究所 防災教育担当専門員) 小口千明(埼玉大学 大学院 理工学研究科)	
ご担当者メールアドレス	(納口)nhg@bosai.go.jp (小口)ogchiaki@mail.saitama-u.ac.jp	
依頼先住所(〒から)	(納口)〒305-0006 茨城県つくば市天王台 3-1 (小口)〒338-8570 埼玉県さいたま市桜区下大久保 255	
依頼先あて名	(納口)独立行政法人 防災科学技術研究所 (小口)埼玉大学 大学院 理工学研究科	

＊実験・実習の数は参加者数や場所の関係上、数が限られておりますので、ポスター展示への変更をお願いする場合があることをご了承ください。

＊ご提出後、3日以内に返信がない場合は、お手数ですが再送をお願い申し上げます。

（３）ポスター展示・キャリア相談ブース参加申し込み

夏の学校の2日目（8月8日金曜日）に「サイエンスアドベンチャーⅡ」というプログラムを実施します。その中で、各学協会および関連企業や関連大学等の皆様にポスター展示・キャリア相談ブース（13：00～15：40）をお願いしたいと考えております。（女子中高生、保護者・教員とも）

これは、女子中高生に理系の幅広い研究分野の魅力に触れてもらうと同時に、実際に企業や大学、研究機関等で働く科学者や技術者と交流することで、将来のキャリアイメージを掴んでもらうことを目的としています。

ブースのスペースですが、1件当たり、高さ約160cm幅約110cmのパネル2枚（A0ポスター2枚に相当）を割り当てる予定です。奥行きは約2m使用可能です。必要に応じてテーブル（幅約1.8m）2台といすの使用が可能です。その場所で担当する研究者や技術者の方に研究分野の紹介や女子中高生からのキャリア相談にのっていただきます。スペースの許す範囲で、デモ実験などをお願いいたします。たいへん申し訳ありませんが、全体のスペースの都合上、1団体1ブースでの申し込みをお願いいたします。

本趣旨をご理解いただける学協会や大学、企業の方の参加をお待ちしております。また、各学協会からも、関連企業の方にお声掛けをしていただけると幸いです。必要に応じて別途依頼状等をお出しいたします。

なお、繰り返しになりますが、本プログラムは多種多様な研究分野の研究者・技術者の紹介やキャリアイメージの提示を主目的としておりますので、大学・企業関係者の皆様におかれましては、特定大学・企業への誘致・宣伝とならないように、展示や説明内容等に特段のご配慮をお願いいたします。

当日はブース1つにつき最低1名の方に現場でご説明をいただく形をお願いいたします。なお、特に差支えが無ければ、ポスター展示・キャリア相談にご参加いただく出展担当者の方（必ずしも説明者と同一でなくても結構です）にも、女子中高生夏の学校の実行委員としてご登録いただき、共に活動させていただく形にしたいと思います。

本プログラムと同時に行われる保護者・教員向けプログラム「サイエンスカフェⅡ」（13：00～15：40）では、夏学参加者である保護者や教員の方にも、本プログラムでの各研究分野の紹介やキャリア相談の状況等を見学していただく予定となっておりますので、ご了承ください。

また、本プログラム後に行われる学生企画「Gate Way」（16：00～17：30）は、女子中高生が理系の進路についてさらに深く知るとともに、進路選択における悩みを相談できるよう、様々な分野や年代の人とざっくばらんに話し合う時間となっています。本プログラムでのご説明担当者の方あるいは出展担当者の方には、引き続きこの学生企画にもご参加いただき、できる限り女子中高生との交流を図っていただきたいと思います。お時間が許す場合には、できるだけ前泊、あるいは当日泊していただき、女子中高生との交流を行っていただけると幸いです。

ご参加いただける団体の方は、次ページの申込書にご記入の上、5月31日（土）までに国立女性教育会館 千装（メールアドレス chigira@nwec.jp）まで申し込みをお願いいたします。折り返し、依頼等に関する確認のご連絡をいたします。詳細につきましては、追ってご連絡をいたします。テーマ・開催資料掲載用要旨の最終的な提出期限は6月20日（金）とさせていただきます。

平成26年度 女子中高生夏の学校2014～科学・技術・人との出会い～
ポスター展示・キャリア相談ブースの申し込み（5月31日（土）締め切り）

学協会名： 日本地球惑星科学連合
団体名（企業・大学等の場合）：
推薦者：清野直子（気象研究所）・坂野井和代（駒澤大学）・小口千明（埼玉大学）
ポスター展示のテーマ（仮題の場合は最終締め切り日までにお送りください。）： （仮題）地球惑星科学へようこそ～ミクロの美しい世界～
ポスター展示の概要（200字以内、当日配布資料に掲載します。提出は最終締め切り日までで結構です。）： 日本地球惑星科学連合は、地球惑星科学全般の研究・教育をリードする研究者・技術者・教育関係者・科学コミュニケーター、それを学んでいる学生や一般市民からなる個人会員と、地球惑星科学関連48学協会を団体会員とする学術団体です。本年は、顕微鏡で見る美しい世界をご紹介します。
出展担当者（ポスター出展に対して連絡等に責任をお持ちいただける方、追って依頼等に関するご連絡をいたします。） 氏名：小川佳子（会津大学/日本地球惑星科学連合 男女共同参画委員会） 小口千明（埼玉大学/日本地球惑星科学連合 男女共同参画委員会） 所属： メールアドレス：yoshiko@u-aizu.ac.jp（小川） ogchiaki@mail.saitama-u.ac.jp（小口）
使用を希望する設備 電源の口数（ 1 口） LANの接続（ 無線 ） 机の台数（ 2 台） いすの脚数（ 4～6 脚） その他（ ）

* ご提出後、3日以内に返信がない場合は、お手数ですが再送をお願い申し上げます。

男女共同参画委員会規則

(趣旨)

第1条 この規則は、定款及び法人運営基本規則に基づき、男女共同参画委員会に関し必要な事項を定めるものとする。

(任務)

第2条 男女共同参画委員会は、女性と男性が共に個性と能力を発揮できる環境作りとネットワーク作りを行い、地球惑星科学の発展に資することを目的とする。

2 男女共同参画委員会は、以下の各号に掲げる事項について審議し、必要な活動を行う。

- (1) 男女共同参画事業の企画、運営に関する事項
- (2) 男女共同参画に関する広報、情報収集等の活動に関する事項
- (3) 男女共同参画学協会連絡会に関わる事項
- (4) その他、目的を達成するために必要な事項

3 男女共同参画委員会は前項各号の事項の審議の結果を理事会に報告するとともに、男女共同参画に関し、理事会からの諮問に答申し、又は理事会に対し意見を述べる。

(委員の任期)

第3条 委員の任期は2年とし、再任を妨げない。

(委員長及び副委員長の任期)

第4条 委員長及び副委員長の任期は1年とし、再任を妨げない。

附則

本規則は、この法人の設立の登記の日に遡って適用されるものとする。

WPGM (Western Pacific Geophysics Meeting)

The Western Pacific Geophysics Meeting (WPGM) provides an opportunity for AGU members, and members of the sponsoring societies in the Western Pacific region, to attend a meeting that serves the needs of geophysicists interested in studies in the western Pacific region. However, papers on all related aspects of geophysical sciences are encouraged.

1990 WPGM 国際地球物理金沢会議

1990 年 8 月 21 日 (火) -25 日 (土) 金沢市

主催：AGU, 日本海洋学会, 日本火山学会, 日本気象学会, 地震学会, 日本測地学会, 日本地球化学会, 地球電磁気・地球惑星圏学会, 日本地質学会, 陸水グループ

後援：石川県

http://www.metsoc.jp/tenki/pdf/1989/1989_12_0746.pdf#search='WPGM+Kanazawa'

(1992)

(1994)

1996 Western Pacific Geophysics meeting

July 23-27, 1996, Brisbane, Australia

<http://www.agu.org/meetings/wparchive/wp96summ.html>

1998 Western Pacific Geophysics Meeting

Taipei, Taiwan, July 21-24, 1998

<http://www.agu.org/meetings/wparchive/wp98top.html>

2000 Western Pacific Geophysics Meeting

National Olympic Memorial Youth Center (NYC) Shinjuku, Tokyo, Japan June 27-30,

2000 (Tuesday through Friday)

<http://www.agu.org/meetings/wparchive/wp00call.html>

2002 Western Pacific Geophysics Meeting

Wellington Convention Centre Wellington, New Zealand

9-12 July 2002

<http://www.agu.org/meetings/wparchive/wp02top.html>

2004 Western Pacific Geophysics Meeting

Hawaii Convention Center, Honolulu, Hawaii 16-20 August, 2004

<http://www.agu.org/meetings/wp04/>

2006 Western Pacific Geophysics Meeting

24-27 July, 2006, Beijing, China

<http://www.agu.org/meetings/wp06/>

2008 Western Pacific Geophysics Meeting

Cairns, Australia, 29 July-1 August, 2008

<http://www.agu.org/meetings/wp08/>

2010 Western Pacific Geophysics Meeting

Taipei, Taiwan, 22-25 June 2010

<http://www.agu.org/meetings/wp10/>

<https://unit.aist.go.jp/actfault-eq/lab-seis/WPGM.html> (レポート)

<http://thesis.ceri.go.jp/db/files/00160591101.pdf#search='Western+Geophysics+Meeting>

(レポート)

AGU 主催、日本測地学会、香港気象学会、日仏海洋学会、日本地震学会共催

Fall Meeting の 1/10 の規模

2012 AOGS-AGU(WPGM) Joint Assembly

13-17 August 2012 Singapore Resorts World Convention Centre

<http://www.asiaoceania.org/aogs2012/public.asp?page=home.htm>

http://www.miz.nao.ac.jp/rise/content/news/topic_20121001 (レポート)

(2014)

WPGM 2000年大会 資料 (2014年6月2日 第3回理事会資料)

WPGM 報告 連絡会 2000 年 9 月 19 日

1

開催までの経緯

1998 年? 連絡会 (本蔵事務局長) から AGU へ招待状 (2000 年 6 月に東京で開催)

1999 年 3 月 プログラム委員会発足 (連絡会から各学会へ委員選出依頼)

1999 年 6 月 プログラム委員長 佐竹健治選出

1999 年 6 月 組織委員会・実行委員会発足 (連絡会から各学会へ委員選出依頼)

組織委員会・実行委員会・プログラム委員会合同会議

組織委員長 入倉孝次郎氏選出

AGU 側との折衝, 以下を合意

- ・ 運営・財政については AGU 側が全責任を持つ.
- ・ 実行委員会は AGU にアドバイスをする.
- ・ 日程は 6/27-30 とし, 6/27, 28 は合同大会と会場を分け合う.

1999 年 8 月 連絡会ニュースレターに案内記事掲載

1999 年 8 月 合同大会と共同で代々木会場・宿泊施設予約

実行委員長に井田喜明氏選出

1999 年 9 月 特別セッション第 1 次締切 (43 件)

実行委員会幹事会発足 (井田・平田 直, 住 明正, 榎森 啓元)

連絡会にて進捗状況を報告

1999 年 11 月 特別セッション最終締切 (74 件)

1999 年 12 月 プログラム委員会 (AGU fall meeting において)

2000 年 1 月 実行委員会・JCOM・JTB との初打ち合わせ

2000 年 2 月 合同大会のメーリングリストを使って WPGM の案内メール発送

2000 年 3 月 アブストラクト投稿締切 (約 1410 件)

2000 年 4 月 プログラム委員会 (東京) においてプログラム編成

口頭発表 940, ポスター 470 件

AGU・実行委員会・JCOM・JTB との打ち合わせ (及び 会場下見)

連絡会においてプログラム編成結果を報告 (早川氏)

2000 年 5 月 実行委員会・合同大会・JCOM・JTB との打ち合わせ (及び 会場下見)

プログラム最終決定

組織委員会規約作成・決定 (ビザ申請のため)

ツアー中止決定

企業展示募集 (JCOM から)

2000 年 6 月 実行委員会・JCOM との最終打ち合わせ

代々木会場・宿泊最終申し込み

WPGM

WPGM 報告 連絡会 2000 年 9 月 19 日

1

開催までの経緯

1998 年? 連絡会 (本蔵事務局長) から AGU へ招待状 (2000 年 6 月に東京で開催)

1999 年 3 月 プログラム委員会発足 (連絡会から各学会へ委員選出依頼)

1999 年 6 月 プログラム委員長 佐竹健治選出

1999 年 6 月 組織委員会・実行委員会発足 (連絡会から各学会へ委員選出依頼)

組織委員会・実行委員会・プログラム委員会合同会議

組織委員長 入倉孝次郎氏選出

AGU 側との折衝, 以下を合意

- ・ 運営・財政については AGU 側が全責任を持つ.
- ・ 実行委員会は AGU にアドバイスをする.
- ・ 日程は 6/27-30 とし, 6/27, 28 は合同大会と会場を分け合う.

1999 年 8 月 連絡会ニュースレターに案内記事掲載

1999 年 8 月 合同大会と共同で代々木会場・宿泊施設予約

実行委員長に井田喜明氏選出

1999 年 9 月 特別セッション第 1 次締切 (43 件)

実行委員会幹事会発足 (井田・平田 直, 住 明正, 榎森 啓元)

連絡会にて進捗状況を報告

1999 年 11 月 特別セッション最終締切 (74 件)

1999 年 12 月 プログラム委員会 (AGU fall meeting において)

2000 年 1 月 実行委員会・JCOM・JTB との初打ち合わせ

2000 年 2 月 合同大会のメーリングリストを使って WPGM の案内メール発送

2000 年 3 月 アブストラクト投稿締切 (約 1410 件)

2000 年 4 月 プログラム委員会 (東京) においてプログラム編成

口頭発表 940, ポスター 470 件

AGU・実行委員会・JCOM・JTB との打ち合わせ (及び 会場下見)

連絡会においてプログラム編成結果を報告 (早川氏)

2000 年 5 月 実行委員会・合同大会・JCOM・JTB との打ち合わせ (及び 会場下見)

プログラム最終決定

組織委員会規約作成・決定 (ビザ申請のため)

ツアー中止決定

企業展示募集 (JCOM から)

2000 年 6 月 実行委員会・JCOM との最終打ち合わせ

代々木会場・宿泊最終申し込み

WPGM

Registration Summary

<u>CATEGORY</u>	<u>TOTAL</u>
Total Participating Registrants	1478
(includes lost-preregs and no shows)	
Total Non-refundable No Shows	66
Total Registration Refunds	7
Total Pre-registrants	929
Total On-Site Registrants	549

No-Show Tally

<u>CATEGORY</u>	<u>TOTAL</u>
1. Regular	27
More Than One Day	23
One Day Only	4
2. Students	25
More Than One Day	22
One Day Only	3
3. Undetermined	14
TOTAL NO-SHOWS	66

Event/Abstract Volume Summary

<u>CATEGORY</u>	<u>TOTAL</u>
Closing Banquet tickets	253
Abstract Volumes	1062

Registered Participants Tally

(Some Lost Preregistrants and No Shows are included in this tally. Refunded registrants and miscellaneous payments are not included in this tally)

<u>CATEGORY</u>	<u>Pre-Reg</u>	<u>On-site</u>	<u>Totals</u>
1. Regular			1096
More Than One Day	585	279	
One Day Only	67	165	
2. Student Members			382
More Than One Day	236	57	
One Day Only	41	48	
Total Participants	929	549	1478

Registrants by Country

	21	TOTAL	1478
AUSTRALIA	1		
AUSTRIA	2		
BELGIUM	1		
BRAZIL	10		
CANADA	35		
CHINA	1		
CZECH REPUBLIC	14		
FRANCE	11		
GERMANY	5		
INDIA	1		
INDONESIA	2		
ISRAEL	1021		
JAPAN	1		
MEXICO	2		
NETHERLANDS	2		
NEW CALEDONIA	7		
NEW ZEALAND	2		
NORTH KOREA	1		
PAPUA NEW GUINEA	4		
PHILIPPINES	6		
RUSSIA	2		
SINGAPORE	37		
SOUTH KOREA	85		
TAIWAN	2		
TURKEY	1		
UGANDA	7		
UNITED KINGDOM	194		
UNITED STATES			

Date: Fri, 15 Sep 2000 16:12:19 -0400
 From: Brenda Weaver <BWeaver@agu.org>
 Subject: Re: WPGM data needed
 To: Kenji Satake <satake@gsj.go.jp>

Kenji:

The attached file has the registration and attendance report.

Unfortunately, I am not able to provide the financial summary as of this time.. We still need to make adjustments to our records and this may not be cleared up for another two weeks. I will be happy to provide a summary at that time.
 Below are comments that the attendees made on the evaluation form.

2000 WESTERN PACIFIC GEOPHYSICS MEETING EVALUATION FORM COMMENTS

- Mixed subjects in "Orogeny, Geochem, Tect." caused poor attendance
- Avoid the schedule conflict with the domestic meeting
- Poor attendance at all sessions - posters were a ghost town
- Do not charge a fee for invitation package (for visa applied)
- Provide bus service between hotel and meeting site
- If field trips have to be canceled, cancel them early (before participants make travel arrangements)
- Provide e-mail service
- There should be an ice-breaker reception.
- I am unlikely to attend WPGM in the future, there is simply not a large enough audience to justify the expense and time to travel so far
- Tokyo in July is too hot and humid, choose a cooler site or season
- Better pre-meeting information
- Avoid rainy season
- Better notice board
- Sign system should be more comprehensible particularly from subway station to the NYC
- Provide coffee and tea during breaks
- Inform of the hotels offered on the web page, where the meeting is held
- Provide better maps of location
- Provide list of rooms in advance
- Hold meeting in some type of conjunction with another major conference meeting, COSPAR in Niagra in 1998 was a prefect choice
- Separate core times of oral and poster sessions for same topics
- Reduce overlap between oral and poster sessions on same topic
- Start oral sessions 30 minutes earlier and allow at least one hour everyday for their inspection
- How do we generate enthusiasm far as none focus?

公益社団法人日本地球惑星科学連合

平成 26 年度 第 3 回理事会

開催日時 平成 26 年 6 月 2 日（月）
午後 14 時 00 分から午後 16 時 00 分

開催場所 東京大学理学部 1 号館 8 階 851 号室
（東京都文京区本郷 7-3-1）

【追加資料】

JpGU2014 年大会ユニオンセッション U07 開催報告	P. 1-2
平成 26 年度「女子中高生夏の学校 2014～科学・技術・人との出会い～」 実行委員会からのお願い	P. 3-6
男女共同参画委員会規則	P. 7
WPGM 開催履歴	P. 8-9
WPGM2000 年大会資料	P. 10-12

JpGU 2014 年大会ユニオンセッション U07
Future Earth – 持続可能な地球へ向けた統合的研究
会場：501 日時：5月1日 09:00-18:00
報告(代表コンビーナ：氷見山幸夫)

2015 年 1 月の正式発足に向け、地球環境研究の新しい枠組である Future Earth の体制づくりが急ピッチで進んでいる。このたびわが国の Future Earth の主な関係者の多くと海外からかつて IYPE(国際惑星地球年)を主導された Eduardo de Mulder 教授を講師としてお招きして日本地球惑星科学連合大会で Future Earth のユニオンセッションを開催できたことは、Future Earth に取り組む国内の体制を固める上で大変有益であった。以下の講演要旨メモに見られるように、講演内容は大変幅広く且つ実質的で、かなり突っ込んだ議論が展開された。セッション終了後ある参加者が U07-2 の講演に関してメールで感想を述べたのをきっかけとして多数のメールが交換され、その後開催された日本学術会議 Future Earth 推進委員会でもそれが取り上げられるなど、大変インパクトの大きいセッションだったと言える。

<講演要旨メモ>

U07-1：安成哲三

「アジアにおける Future Earth の重要性」

Future Earth は地球環境変化を包括的に理解しつつ、持続可能な人類社会構築に向け、研究者だけでなく社会全体が行動する枠組み。日本はアジアでリーダーシップをとるべき。

U07-2：江守正多

「地球温暖化リスクのトレードオフと社会のリスク判断」

二酸化炭素排出量は速やかに減らすべきだが、温暖化のリスクも対策をとった場合のリスクと効果も不確実性があり、国、地域、世代等によっても異なる。どう意思決定するか？

U07-3：大崎満・広瀬和世

「熱帯泥炭地低湿地におけるモニタリング・センシング・モデリングによる MRV システム」

東南アジアには低湿地生態が多く、食糧生産、住民の生活、気候変動への緩和策や適応策などの生産生態として重要。日本は炭素量と炭素フラックスのマッピングで世界を主導。

U07-4：八木信行

「海洋生態系サービスの保全と持続可能な利用に関する国際ガバナンスの現状」

海の恵み(海洋の生態系サービス)を国際社会が適切に管理し最適利用することが課題だが、漁業操業の規制だけに焦点が当たり、海洋生態系や生態系サービスの保全の視点に欠ける。

U07-5：谷口真人

「持続可能な地球環境へ向けた国際共同研究の国内外でのプラットフォームの形成」

日本は Future Earth のアジア地域ハブとして、研究者を含むステークホルダーのネットワークを構築し、研究の手法・データ・能力等を提供するプラットフォームを形成すべき。

U07-6：山形俊男

「東アジア縁辺海の持続可能性イニシャチブについて」

東アジアの縁辺海(MSEA)は人口稠密で社会経済的活動が極めて活発な地域に接する。そこは多様な生物が生息する豊かな海だが台風などの災害も多く、環境の保全が重要である。

U07-7：福井弘道

「Future Earth の議論のプラットフォームとしての Digital Earth」

地理空間情報の高度利用により構築されるサイバースペース「デジタルアース」は多様なステー

クホルダーにより進められる Future Earth のプラットフォームとして活用できる。

U07-8：蟹江憲史

「Future Earth と持続可能な開発目標」

21 世紀の持続可能な開発は、持続可能な開発目標(SDGs)を策定し、地球環境をその基本的な必要条件として、その上に経済や社会が成り立つという考え方に転換する必要がある。

U07-9：Eduardo de Mulder

「How will Humanity Survive and Flourish on Future Planet Earth?」

人類は人口増加、都市の拡大、生活水準の向上などに伴い地球環境の様々な制約に直面しているが、Future Earth に示される英知をもってすれば、この難局を克服できるだろう。

U07-10：小池俊雄

「データ統融合による科学の知の創出」

データ統合・解析システム(DIAS)を基盤に諸科学分野が協働して地球環境問題を解決する科学の知を創造するための分野間の連携と科学－社会の連携への取り組みが始まっている。

U07-11：小口高

「地理空間データとフューチャーアース：デジタル標高モデルを例に」

Future Earth には多様な地理空間データが必要。それらのうち最も基本的なものの一つであるデジタル標高モデル(DEM)の整備状況と、Future Earth と関連する応用例を紹介する。

U07-12：沖大幹

「超高解像度地球環境予測による Future Earth 研究の推進」

全大陸のエネルギー、水、物質循環、炭素収支等を±150 年にわたり推計、持続可能なエネルギーや食料、資源、健康、生態系サービス等の変化や今後の問題点を明らかにしたい。

U07-13：杉原薫

「アジアの経済発展と地球環境の持続性」

広域アジアは全面的に工業化・都市化しつつあり、そこでの資源・エネルギー利用が世界経済の動きを律する。アジアの経済発展は地球環境にどう影響し、将来をどう規定するか。

U07-14：瀧上豊・久田健一郎

「Future Earth の視点から見た国際地学オリンピック」

国際地学オリンピックは国際協力野外調査(国際協力)や国際大会の設問(地学・地球科学=地球理解)を通して教育の改善及び人間を含む地球全体を考える Future Earth に貢献する。

U07-15：井田仁康

「持続可能な地球への教育－国際地理オリンピック」

国際地理オリンピックはマルチメディア、記述、フィールドワークの設問を通して地域の自然と社会、将来像、問題等を観察し考察する力を高め、持続的地球への教育に貢献する。

U07-16：植松光夫

「インド洋-太平洋における沿岸域を含む海洋生態系の持続可能な将来」

Future Earth の一環として、インド洋-太平洋における沿岸域を含む海洋生態系の持続可能な将来を実現するための、学際的で且つ人材育成を含む国際的な研究計画を実施すべき。

U07-17：氷見山幸夫

「持続可能な地球の未来への地球惑星科学的展望」

地球惑星科学は地球環境と人間活動との関係や自然災害を含む地球表層の諸事象を扱う領域を包括しており、地球持続可能性の向上を目指す Future Earth で重要な役割を果たす。

平成26年度「女子中高生夏の学校2014～科学・技術・人との出会い～」 実行委員会からのお願い

平成26年度実行委員長

湯浅 富久子（高エネルギー加速器研究機構 日本物理学会）

毎年、夏の学校に関して多くのご尽力を賜り、ありがとうございます。

下記の要領により、本年も「女子中高生夏の学校～科学・技術・人との出会い～」を行います。

（詳細は、添付の開催要項をご覧ください。）

- 1 主 催 独立行政法人 国立女性教育会館
- 2 共 催 日本学術会議「科学と社会委員会 科学力増進分科会」
「科学者委員会 男女共同参画分科会」 （申請中）

3 期 日 平成26年8月7日（木）～8月9日（土）

4 会 場 国立女性教育会館

〒355-0292 埼玉県比企郡嵐山町菅谷728

つきましては、この夏の学校を開催するにあたり、以下3件につきまして、ご希望をお伺いしたいと存じます。

	依頼項目	締め切り	申し込み・提出先
(1)	協賛依頼調査	6月20日（金）	国立女性教育会館事業課 千装 メールアドレス chigira@nwec.jp
(2)	実験・実習申し込み	5月31日（土）	
	開催資料用の要旨原稿	6月20日（金）	
(3)	ポスター展示・キャリア相談ブース 参加申し込み	5月31日（土）	
	テーマ・開催資料用の要旨原稿	6月20日（金）	

（1）協賛依頼調査

本年度も学会・大学・研究機関・企業等の皆様に協賛をいただきたく、お願い申し上げます。協賛をいただける方は下記の調査書にご記入の上、6月20日（金）までに国立女性教育会館 千装（メールアドレス chigira@nwec.jp）までお送りください。

協賛をいただける団体様には、後日、申請書をお送りいたします。申請書に指定の様式がある場合、また、都合により下記の調査書提出が締め切り後となります場合は、千装までご連絡ください。

平成26年度 女子中高生夏の学校2014～科学・技術・人との出会い～ 協賛依頼調査（6月20日（金）締め切り）

団体名（正式名称）	公益社団法人日本地球惑星科学連合
代表者名	日本地球惑星科学連合会長 津田 敏隆
協賛に関するご担当者名	日本地球惑星科学連合事務局
ご担当者メールアドレス	office@jpgu.org
申請書送付先住所（〒から）	〒113-0032 東京都文京区弥生 2-4-16 学会センタービル 4 階
申請書送付先あて名	公益社団法人日本地球惑星科学連合

* 分担金等のご負担は一切不要です。

* ご提出後、3日以内に返信がない場合は、お手数ですが再送をお願い申し上げます。

(2) 実験・実習の申し込み

夏の学校の2日目(8月8日金曜日)に「サイエンスアドベンチャーⅠ」というプログラムを実施します。その中で、各学協会・団体様に、実験・実習(9:00～11:30)をお願いしたいと考えております。

これは、女子中高生が大学・研究所での科学・技術の一端に触れて科学に興味をもち、将来の進路選択の助けとなることを目的としています。あらかじめ参加決定時に生徒に実験・実習の希望調査を行います。決定した実験・実習にじっくりと取り組み、研究者・技術者と交流しながら自分なりの発見をします。今年も、文理選択を迷っている生徒や中学生向けの「不思議体験コース」と理系の中分野の選択に迷っている生徒向けのより専門性の高い「チャレンジコース」の2種類の実験を用意します。皆様の計画されている実験・実習が2つのコースのどちらに当たるか、申込書に明示をお願いいたします。また、昨年度より女子中高生が行う実験・実習に、参加者である保護者・教員の参加や見学ができるプログラムとしております。女子中高生、保護者・教員の最終的な参加人数は、追ってお知らせしますが、保護者・教員の実験・実習への参加が困難、または人数が増えることで実施が困難な場合は、申込書にてその旨お知らせください。

本趣旨をご理解いただける団体様の参加をお待ちしております。依頼状が必要な場合は、別途依頼状等をお出しいたします。なお、大学・企業関係者の皆様におかれましては、実験・実習中に特定大学・企業への誘致・宣伝とならないように、特段のご配慮をお願いいたします。

実験・実習場所は、研修室(ゼミ室)となっております。したがって水道・排水・ガスなどの設備はなく、通常使用の電気コンセント(数カ所)のみとなっておりますことをご了承ください。長机、イス、ホワイトボード、有線によるLAN接続は使用できます。水道・排水は洗面所使用となりますので、排水には十分の注意をお願いいたします。場合によっては、排水はお持ち帰りください。なお、当会館の研修室は、動物実験等の許可を受けている施設ではありませんので、解剖等、専用の教室がなければできない実験・実習のお申し込みはご遠慮くださいますようお願いいたします。また、お申し込み後、当日配付する開催資料に掲載する実験・実習の要旨原稿をご提出いただきますが、掲載する要旨の内容と異なる実験・実習を行うこともご遠慮くださいますよう重ねてお願い申し上げます。

実験・実習担当者の方は、女子中高生夏の学校の実行委員としてご登録いただき、共に活動させていただく形にしたいと思います。また、お時間の許す方は、出来るだけ前泊、あるいは当日泊していただき、本プログラムの時間以外でも、女子中高生との交流を行っていただけると幸いです。

ご参加いただける団体は、下記申込書にご記入の上、5月31日(土)までに国立女性教育会館 千装(メールアドレス chigira@nwec.jp)まで申し込みをお願いいたします。また、研修室の数に制限がありますので、ポスター展示に変更させていただく場合もございますことを、ご了承願います。

準備などの詳細は、追ってご連絡いたします。開催資料掲載用要旨の最終的な提出期限は6月20日(金)とさせていただきます。

平成26年度 女子中高生夏の学校2014～科学・技術・人との出会い～

実験・実習の申し込み(5月31日(土)締め切り)

団体名	日本地球惑星科学連合	
代表者名	津田 敏隆	
実験・実習のレベル	☒ 不思議体験コース	☐ チャレンジコース
実験・実習の演題	地球惑星科学へようこそ～Dr.ナダレンジャーの自然災害のサイエンスショー～	
保護者・教員の参加	☒ 可	☐ 否
実験のご担当者名	納口恭明(独立行政法人 防災科学技術研究所 防災教育担当専門員) 小口千明(埼玉大学 大学院 理工学研究科)	
ご担当者メールアドレス	(納口)nhg@bosai.go.jp (小口)ogchiaki@mail.saitama-u.ac.jp	
依頼先住所(〒から)	(納口)〒305-0006 茨城県つくば市天王台 3-1 (小口)〒338-8570 埼玉県さいたま市桜区下大久保 255	
依頼先あて名	(納口)独立行政法人 防災科学技術研究所 (小口)埼玉大学 大学院 理工学研究科	

*実験・実習の数は参加者数や場所の関係上、数が限られておりますので、ポスター展示への変更をお願いする場合があることをご了承ください。

*ご提出後、3日以内に返信がない場合は、お手数ですが再送をお願い申し上げます。

(3) ポスター展示・キャリア相談ブース参加申し込み

夏の学校の2日目（8月8日金曜日）に「サイエンスアドベンチャーⅡ」というプログラムを実施します。その中で、各学協会および関連企業や関連大学等の皆様にポスター展示・キャリア相談ブース（13：00～15：40）をお願いしたいと考えております。（女子中高生、保護者・教員とも）

これは、女子中高生に理系の幅広い研究分野の魅力に触れてもらうと同時に、実際に企業や大学、研究機関等で働く科学者や技術者と交流することで、将来のキャリアイメージを掴んでもらうことを目的としています。

ブースのスペースですが、1件当たり、高さ約160cm幅約110cmのパネル2枚（A0ポスター2枚に相当）を割り当てる予定です。奥行きは約2m使用可能です。必要に応じてテーブル（幅約1.8m）2台といすの使用が可能です。その場所で担当する研究者や技術者の方に研究分野の紹介や女子中高生からのキャリア相談にのっていただきます。スペースの許す範囲で、デモ実験などをお願いいたします。たいへん申し訳ありませんが、全体のスペースの都合上、1団体1ブースでの申し込みをお願いいたします。

本趣旨をご理解いただける学協会や大学、企業の方の参加をお待ちしております。また、各学協会からも、関連企業の方にお声掛けをしていただけると幸いです。必要に応じて別途依頼状等をお出しいたします。

なお、繰り返しになりますが、本プログラムは多種多様な研究分野の研究者・技術者の紹介やキャリアイメージの提示を主目的としておりますので、大学・企業関係者の皆様におかれましては、特定大学・企業への誘致・宣伝とならないように、展示や説明内容等に特段のご配慮をお願いいたします。

当日はブース1つにつき最低1名の方に現場でご説明をいただく形をお願いいたします。なお、特に差支えが無ければ、ポスター展示・キャリア相談にご参加いただく出展担当者の方（必ずしも説明者と同一でなくても結構です）にも、女子中高生夏の学校の実行委員としてご登録いただき、共に活動させていただく形にしたいと思います。

本プログラムと同時に行われる保護者・教員向けプログラム「サイエンスカフェⅡ」（13：00～15：40）では、夏学参加者である保護者や教員の方にも、本プログラムでの各研究分野の紹介やキャリア相談の状況等を見学していただく予定となっておりますので、ご了承ください。

また、本プログラム後に行われる学生企画「Gate Way」（16：00～17：30）は、女子中高生が理系の進路についてさらに深く知るとともに、進路選択における悩みを相談できるよう、様々な分野や年代の人とざっくばらんに話し合う時間となっています。本プログラムでのご説明担当者の方あるいは出展担当者の方には、引き続きこの学生企画にもご参加いただき、できる限り女子中高生との交流を図っていただきたいと思います。お時間が許す場合には、できるだけ前泊、あるいは当日泊していただき、女子中高生との交流を行っていただけると幸いです。

ご参加いただける団体の方は、次ページの申込書にご記入の上、5月31日（土）までに国立女性教育会館 千装（メールアドレス chigira@nwec.jp）まで申し込みをお願いいたします。折り返し、依頼等に関する確認のご連絡をいたします。詳細につきましては、追ってご連絡をいたします。テーマ・開催資料掲載用要旨の最終的な提出期限は6月20日（金）とさせていただきます。

平成26年度 女子中高生夏の学校2014～科学・技術・人との出会い～
ポスター展示・キャリア相談ブースの申し込み（5月31日（土）締め切り）

学協会名： 日本地球惑星科学連合
団体名（企業・大学等の場合）：
推薦者：清野直子（気象研究所）・坂野井和代（駒澤大学）・小口千明（埼玉大学）
ポスター展示のテーマ（仮題の場合は最終締め切り日までにお送りください。）： （仮題）地球惑星科学へようこそ～ミクロの美しい世界～
ポスター展示の概要（200字以内、当日配布資料に掲載します。提出は最終締め切り日までで結構です。）： 日本地球惑星科学連合は、地球惑星科学全般の研究・教育をリードする研究者・技術者・教育関係者・科学コミュニケーター、それを学んでいる学生や一般市民からなる個人会員と、地球惑星科学関連48学協会を団体会員とする学術団体です。本年は、顕微鏡で見る美しい世界をご紹介します。
出展担当者（ポスター出展に対して連絡等に責任をお持ちいただける方、追って依頼等に関するご連絡をいたします。） 氏名： 小川佳子（会津大学/日本地球惑星科学連合 男女共同参画委員会） 小口千明（埼玉大学/日本地球惑星科学連合 男女共同参画委員会） 所属： メールアドレス： yoshiko@u-aizu.ac.jp （小川） ogchiaki@mail.saitama-u.ac.jp （小口）
使用を希望する設備 電源の口数（ 1 口） LANの接続（ 無線 ） 机の台数（ 2 台） いすの脚数（ 4～6 脚） その他（ ）

* ご提出後、3日以内に返信がない場合は、お手数ですが再送をお願い申し上げます。

男女共同参画委員会規則

(趣旨)

第1条 この規則は、定款及び法人運営基本規則に基づき、男女共同参画委員会に関し必要な事項を定めるものとする。

(任務)

第2条 男女共同参画委員会は、女性と男性が共に個性と能力を発揮できる環境作りとネットワーク作りを行い、地球惑星科学の発展に資することを目的とする。

2 男女共同参画委員会は、以下の各号に掲げる事項について審議し、必要な活動を行う。

- (1) 男女共同参画事業の企画、運営に関する事項
- (2) 男女共同参画に関する広報、情報収集等の活動に関する事項
- (3) 男女共同参画学協会連絡会に関わる事項
- (4) その他、目的を達成するために必要な事項

3 男女共同参画委員会は前項各号の事項の審議の結果を理事会に報告するとともに、男女共同参画に関し、理事会からの諮問に答申し、又は理事会に対し意見を述べる。

(委員の任期)

第3条 委員の任期は2年とし、再任を妨げない。

(委員長及び副委員長の任期)

第4条 委員長及び副委員長の任期は1年とし、再任を妨げない。

附則

本規則は、この法人の設立の登記の日に遡って適用されるものとする。

WPGM (Western Pacific Geophysics Meeting)

The Western Pacific Geophysics Meeting (WPGM) provides an opportunity for AGU members, and members of the sponsoring societies in the Western Pacific region, to attend a meeting that serves the needs of geophysicists interested in studies in the western Pacific region. However, papers on all related aspects of geophysical sciences are encouraged.

1990 WPGM 国際地球物理金沢会議

1990 年 8 月 21 日 (火) -25 日 (土) 金沢市

主催：AGU，日本海洋学会，日本火山学会，日本気象学会，地震学会，日本測地学会，日本地球化学会，地球電磁気・地球惑星圏学会，日本地質学会，陸水グループ

後援：石川県

http://www.metsoc.jp/tenki/pdf/1989/1989_12_0746.pdf#search='WPGM+Kanazawa'

(1992)

(1994)

1996 Western Pacific Geophysics meeting

July 23-27, 1996, Brisbane, Australia

<http://www.agu.org/meetings/wparchive/wp96summ.html>

1998 Western Pacific Geophysics Meeting

Taipei, Taiwan, July 21-24, 1998

<http://www.agu.org/meetings/wparchive/wp98top.html>

2000 Western Pacific Geophysics Meeting

National Olympic Memorial Youth Center (NYC) Shinjuku, Tokyo, Japan June 27-30,

2000 (Tuesday through Friday)

<http://www.agu.org/meetings/wparchive/wp00call.html>

2002 Western Pacific Geophysics Meeting

Wellington Convention Centre Wellington, New Zealand

9-12 July 2002

<http://www.agu.org/meetings/wparchive/wp02top.html>

2004 Western Pacific Geophysics Meeting

Hawaii Convention Center, Honolulu, Hawaii 16-20 August, 2004

<http://www.agu.org/meetings/wp04/>

2006 Western Pacific Geophysics Meeting

24-27 July, 2006, Beijing, China

<http://www.agu.org/meetings/wp06/>

2008 Western Pacific Geophysics Meeting

Cairns, Australia, 29 July-1 August, 2008

<http://www.agu.org/meetings/wp08/>

2010 Western Pacific Geophysics Meeting

Taipei, Taiwan, 22-25 June 2010

<http://www.agu.org/meetings/wp10/>

<https://unit.aist.go.jp/actfault-eq/lab-seis/WPGM.html> (レポート)

<http://thesis.ceri.go.jp/db/files/00160591101.pdf#search='Western+Geophysics+Meeting>

(レポート)

AGU 主催、日本測地学会、香港気象学会、日仏海洋学会、日本地震学会共催

Fall Meeting の 1/10 の規模

2012 AOGS-AGU(WPGM) Joint Assembly

13-17 August 2012 Singapore Resorts World Convention Centre

<http://www.asiaoceania.org/aogs2012/public.asp?page=home.htm>

http://www.miz.nao.ac.jp/rise/content/news/topic_20121001 (レポート)

(2014)

WPGM 2000年大会 資料 (2014年6月2日 第3回理事会資料)

WPGM 報告 連絡会 2000 年 9 月 19 日

1

開催までの経緯

1998 年? 連絡会 (本蔵事務局長) から AGU へ招待状 (2000 年 6 月に東京で開催)

1999 年 3 月 プログラム委員会発足 (連絡会から各学会へ委員選出依頼)

1999 年 6 月 プログラム委員長 佐竹健治選出

1999 年 6 月 組織委員会・実行委員会発足 (連絡会から各学会へ委員選出依頼)

組織委員会・実行委員会・プログラム委員会合同会議

組織委員長 入倉孝次郎氏選出

AGU 側との折衝, 以下を合意

- ・ 運営・財政については AGU 側が全責任を持つ.
- ・ 実行委員会は AGU にアドバイスをする.
- ・ 日程は 6/27-30 とし, 6/27, 28 は合同大会と会場を分け合う.

1999 年 8 月 連絡会ニュースレターに案内記事掲載

1999 年 8 月 合同大会と共同で代々木会場・宿泊施設予約

実行委員長に井田喜明氏選出

1999 年 9 月 特別セッション第 1 次締切 (43 件)

実行委員会幹事会発足 (井田・平田 直, 住 明正, 榎森 啓元)

連絡会にて進捗状況を報告

1999 年 11 月 特別セッション最終締切 (74 件)

1999 年 12 月 プログラム委員会 (AGU fall meeting において)

2000 年 1 月 実行委員会・JCOM・JTB との初打ち合わせ

2000 年 2 月 合同大会のメーリングリストを使って WPGM の案内メール発送

2000 年 3 月 アプストラクト投稿締切 (約 1410 件)

2000 年 4 月 プログラム委員会 (東京) においてプログラム編成

口頭発表 940, ポスター 470 件

AGU・実行委員会・JCOM・JTB との打ち合わせ (及び 会場下見)

連絡会においてプログラム編成結果を報告 (早川氏)

2000 年 5 月 実行委員会・合同大会・JCOM・JTB との打ち合わせ (及び 会場下見)

プログラム最終決定

組織委員会規約作成・決定 (ビザ申請のため)

ツアー中止決定

企業展示募集 (JCOM から)

2000 年 6 月 実行委員会・JCOM との最終打ち合わせ

代々木会場・宿泊最終申し込み

WPGM

WPGM 報告 連絡会 2000 年 9 月 19 日

1

開催までの経緯

1998 年? 連絡会 (本蔵事務局長) から AGU へ招待状 (2000 年 6 月に東京で開催)

1999 年 3 月 プログラム委員会発足 (連絡会から各学会へ委員選出依頼)

1999 年 6 月 プログラム委員長 佐竹健治選出

1999 年 6 月 組織委員会・実行委員会発足 (連絡会から各学会へ委員選出依頼)

組織委員会・実行委員会・プログラム委員会合同会議

組織委員長 入倉孝次郎氏選出

AGU 側との折衝, 以下を合意

- ・ 運営・財政については AGU 側が全責任を持つ.
- ・ 実行委員会は AGU にアドバイスをする.
- ・ 日程は 6/27-30 とし, 6/27, 28 は合同大会と会場を分け合う.

1999 年 8 月 連絡会ニュースレターに案内記事掲載

1999 年 8 月 合同大会と共同で代々木会場・宿泊施設予約

実行委員長に井田喜明氏選出

1999 年 9 月 特別セッション第 1 次締切 (43 件)

実行委員会幹事会発足 (井田・平田 直, 住 明正, 榎森 啓元)

連絡会にて進捗状況を報告

1999 年 11 月 特別セッション最終締切 (74 件)

1999 年 12 月 プログラム委員会 (AGU fall meeting において)

2000 年 1 月 実行委員会・JCOM・JTB との初打ち合わせ

2000 年 2 月 合同大会のメーリングリストを使って WPGM の案内メール発送

2000 年 3 月 アプストラクト投稿締切 (約 1410 件)

2000 年 4 月 プログラム委員会 (東京) においてプログラム編成

口頭発表 940, ポスター 470 件

AGU・実行委員会・JCOM・JTB との打ち合わせ (及び 会場下見)

連絡会においてプログラム編成結果を報告 (早川氏)

2000 年 5 月 実行委員会・合同大会・JCOM・JTB との打ち合わせ (及び 会場下見)

プログラム最終決定

組織委員会規約作成・決定 (ビザ申請のため)

ツアー中止決定

企業展示募集 (JCOM から)

2000 年 6 月 実行委員会・JCOM との最終打ち合わせ

代々木会場・宿泊最終申し込み

WPGM

Registration Summary

<u>CATEGORY</u>	<u>TOTAL</u>
Total Participating Registrants	1478
(includes lost-preregs and no shows)	
Total Non-refundable No Shows	66
Total Registration Refunds	7
Total Pre-registrants	929
Total On-Site Registrants	549

No-Show Tally

<u>CATEGORY</u>	<u>TOTAL</u>
1. Regular	27
More Than One Day	23
One Day Only	4
2. Students	25
More Than One Day	22
One Day Only	3
3. Undetermined	14
TOTAL NO-SHOWS	66

Event/Abstract Volume Summary

<u>CATEGORY</u>	<u>TOTAL</u>
Closing Banquet tickets	253
Abstract Volumes	1062

Registered Participants Tally

(Some Lost Preregistrants and No Shows are included in this tally. Refunded registrants and miscellaneous payments are not included in this tally)

<u>CATEGORY</u>	<u>Pre-Reg</u>	<u>On-site</u>	<u>Totals</u>
1. Regular			1096
More Than One Day	585	279	
One Day Only	67	165	
2. Student Members			382
More Than One Day	236	57	
One Day Only	41	48	
Total Participants	929	549	1478

Registrants by Country

	<u>TOTAL</u>
AUSTRALIA	21
AUSTRIA	1
BELGIUM	2
BRAZIL	1
CANADA	10
CHINA	35
CZECH REPUBLIC	1
FRANCE	14
GERMANY	11
INDIA	5
INDONESIA	1
ISRAEL	2
JAPAN	1021
MEXICO	1
NETHERLANDS	2
NEW CALEDONIA	2
NEW ZEALAND	7
NORTH KOREA	2
PAPUA NEW GUINEA	1
PHILIPPINES	4
RUSSIA	6
SINGAPORE	2
SOUTH KOREA	37
TAIWAN	85
TURKEY	2
UGANDA	1
UNITED KINGDOM	7
UNITED STATES	194

Date: Fri, 15 Sep 2000 16:12:19 -0400
 From: Brenda Weaver <BWeaver@agu.org>
 Subject: Re: WPGM data needed
 To: Kenji Satake <satake@gsj.go.jp>

Kenji:

The attached file has the registration and attendance report.

Unfortunately, I am not able to provide the financial summary as of this time.. We still need to make adjustments to our records and this may not be cleared up for another two weeks. I will be happy to provide a summary at that time.
 . Below are comments that the attendees made on the evaluation form.

2000 WESTERN PACIFIC GEOPHYSICS MEETING EVALUATION FORM COMMENTS

- Mixed subjects in "Orogeny, Geochem, Tect." caused poor attendance
- Avoid the schedule conflict with the domestic meeting
- Poor attendance at all sessions - posters were a ghost town
- Do not charge a fee for invitation package (for visa applied)
- Provide bus service between hotel and meeting site
- If field trips have to be canceled, cancel them early (before participants make travel arrangements)
- Provide e-mail service
- There should be an ice-breaker reception.
- I am unlikely to attend WPGM in the future, there is simply not a large enough audience to justify the expense and time to travel so far
- Tokyo in July is too hot and humid, choose a cooler site or season
- Better pre-meeting information
- Avoid rainy season
- Better notice board
- Sign system should be more comprehensible particularly from subway station to the NYC
- Provide coffee and tea during breaks
- Inform of the hotels offered on the web page, where the meeting is held
- Provide better maps of location
- Provide list of rooms in advance
- Hold meeting in some type of conjunction with another major conference meeting, COSPAR in Niagra in 1998 was a prefect choice
- Separate core times of oral and poster sessions for same topics
- Reduce overlap between oral and poster sessions on same topic
- Start oral sessions 30 minutes earlier and allow at least one hour everyday for their inspection
- How do we generate enthusiasm far as none focus?

公益社団法人日本地球惑星科学連合特定資産規則（案）

2014 年 6 月〇日 理事会制定

（目的）

第 1 条 この規則は、公益社団法人日本地球惑星科学連合（以下「連合」という。）における特定資産の取扱いに関し、必要な事項を定めることを目的とする。

（定義）

第 2 条 特定資産とは、特定の目的のために使途、保有又は運用方法等に制約の存在する資産をいう。

（西田賞表彰実施資産）

第 3 条 この法人は、西田賞表彰実施資産を保有することができる。

2 西田賞表彰実施資産は、寄付により受け入れた財産で、寄付者が、この法人の公益目的事業の事業費として計上される支出に充当することを指定した資金であり指定正味財産に区分される。

（事業実施資産の管理・取崩し等）

第 4 条 西田賞表彰実施資産は、貸借対照表及び財産目録上、特定資産として、他の資金と明確に区分して管理する。

2 西田賞表彰実施資産は、本公益目的事業の事業費として計上される支出に充当する場合を除くほか、取り崩すことができない。

3 前項にかかわらず、取り崩しを行う場合には、理事長は、取り崩しが必要な理由を付して理事会に付議し、その承認を得なければならない。

（特定資産の運用）

第 5 条 特定資産は、元本返済が確実な方法で運用する。

2. 特定資産は、銀行等の普通預金又は定期預金による安全確実な方法で運用しなければならない。

3. 特定資産から生じた収益は、その全てを特定資産の指定した公益目的事業費として用いなければならない。

（改廃）

第 6 条 この規程の改廃は、理事会の決議を経て行う。

2014年大会収支計算書

平成26年5月27日現在

公益目的事業会計

(単位:円)

科 目	2014年度予算	2014年度実績	2013年度実績	備考
大会参加料収入	60,725,700	64,110,000	40,932,216	
大投稿料収入	13,051,000	13,050,500	9,341,500	
団体展示料収入	13,200,010	12,120,000	17,250,000	
大学インフォメーションパネル収入	1,120,000	1,190,000	770,000	
書籍展示料収入	1,050,000	1,100,000	1,180,000	
パンフレットデスク収入	10,000	60,000	650,000	
会議室使用料収入	2,000,000	1,812,500	2,095,250	
懇親会収入	500,000	302,400	239,700	
学協会展料	270,000	310,000	270,000	
日本ジオパ	0	0	50,000	
その他	250,000	547,360	451,000	
学術大会事業収入	92,176,710	94,602,760	73,634,916	
臨時雇賃金	3,541,000	3,728,475	3,375,500	
ホーンプールバ	300,000	300,000	300,000	
その他ペアル	3,241,000	3,428,475	3,075,500	
会議交通費	1,631,600	1,473,860	372,070	
旅費	2,094,000	1,836,285	1,029,380	内95万円 25周年にて計上
通信費	219,200	362,242	165,248	
消耗品	2,847,525	2,450,423	769,541	USBメモリ-2,000,000
印刷製本費	3,916,750	3,647,739	3,179,189	
プログラム編集費	831,750	637,200	619,500	
プロダクト印刷費	2,180,000	2,283,444	2,176,793	
ポスター制作費	290,000	173,125	125,856	
その他	615,000	553,970	257,040	
賃料	32,301,072	38,055,953	17,960,428	
会場借賃	21,353,760	27,881,928	15,102,444	内350万円は25周年にて計上
設備機材賃借	10,558,512	10,174,025	2,738,584	
その他	388,800	0	119,400	
施設	1,993,896	3,254,764	4,697,056	
税	11,200	12,600	11,200	
支払手数料	10,000	12,944	11,190	
委託	2,345,000	1,537,920	1,747,200	
システム関連	1,800,000	1,537,920		
その他	545,000	0	1,747,200	
雑保	0	20,877	53,021	
除	37,800	75,912	2,100	
学術大会事業支出	50,949,043	56,469,994	33,373,123	
学術大会 収支差額	41,227,667	38,132,766	40,261,793	
昨年無かった項目と金額調整				
消耗品 USBメモリー		-2,000,000		
会場費 特別応接室		-211,680		
会場費 海外参加者対応室PEPS用		-83,808		
会場費 NASA用控室		-127,872		
会場費 受付システム準備1階		-56,160		
会場費 受付システム準備2階		-67,392		
会場費 フェロー メインホール使用料		-216,000		
設備 花台		-864		
設備 賞状盆		-864		
調整後 大会支出金額	50,949,043	40,897,406	33,373,123	
学術大会 収支差額 調整後	41,227,667	40,897,406	40,261,793	

大会会場 検討資料（実績・予算・見積）

	2013 年	2014 年	2014 年	2015 年 A	2015 年 B ^{*2}	2015 年 C ^{*3}
会場	幕張（5%税）実績	横浜 予算	横浜（8%税）実績	幕張・アパ	幕張・展示 H	幕張・展示 H
期間	6 日間	5 日間	5 日間	5 日間	6 日間	5.5 日間
部屋数	18 部屋	23 部屋	23 部屋	23 部屋	20 部屋	初日 14
（コマ数）				メッセ 18+アパ 5	メッセ 20	他 20 部屋
	(432)	(460)	(460)	(460)	(480)	(456)
部屋使用料 ^{*1}	15,049,944	17,853,760	27,881,928	19,356,494	23,094,952	20,028,120
賃借料	5,794,084	10,558,512	9,642,185	7,254,490	8,839,714	8,839,714
設営撤去費	1,685,460	1,993,896	3,254,764	3,290,760	3,611,480	3,611,480
バンケット他	289,269					
合計	22,818,757	30,406,168	40,778,877	29,901,744	35,546,146	32,479,314
算出資料			①			

^{*1} 費目分類（部屋使用料・賃借料・設営撤去費）は、予算書と異なるが、比較しやすいように、各会場の項目をあわせた形で集計

^{*2} 2015 年 B：国際会議場コンベンションホール 2 分割して 300 人 2 部屋 展示ホール 1/2 使用 ポスター会場、団体展示

^{*3} 2015 年 C：国際会議場コンベンションホール 2 分割して 300 人 2 部屋 展示ホール 1/2 使用 ポスター会場、団体展示

大会初日は 14 会場のみ使用とし、重複苦情のあったパブリックセッション、ユニオンセッションを中心に開催、展示ホール設営前日ではなく、初日午前とする

2015 年大会 会場費詳細 検討資料

	2015 年 A			2015 年 B * ²			2015 年 C * ³		
会場	幕張・アパ	幕張 18	アパ 5	幕張・展示 H	幕張 20	展示場	幕張・展示 H	幕張 20	展示場
期間 部屋数 (コマ数)	5 日間 23 部屋 (460)			6 日間 20 部屋 (480)			5.5 日間 初日 14 他 20 部屋 (456)		
部屋使用料 * ¹	19,356,494	13,119,494	6,534,000	23,094,952	15,760,742	7,334,210	20,028,120	13,258,080	6,770,040
賃借料	7,254,490	5,634,490	2,821,500	8,839,714	4,273,474	4,566,240	8,839,714	4,273,474	4,566,240
設営撤去費	3,290,760	1,508,760	540,000	3,611,480	586,440	3,025,040	3,611,480	586,440	3,025,040
バンケット他									
合計	29,901,744	20,262,744	9,895,500	35,546,146	20,620,656	14,925,490	32,479,314	18,117,994	14,361,320
算出資料		②	③+④		⑤	⑥		⑦上	⑦下

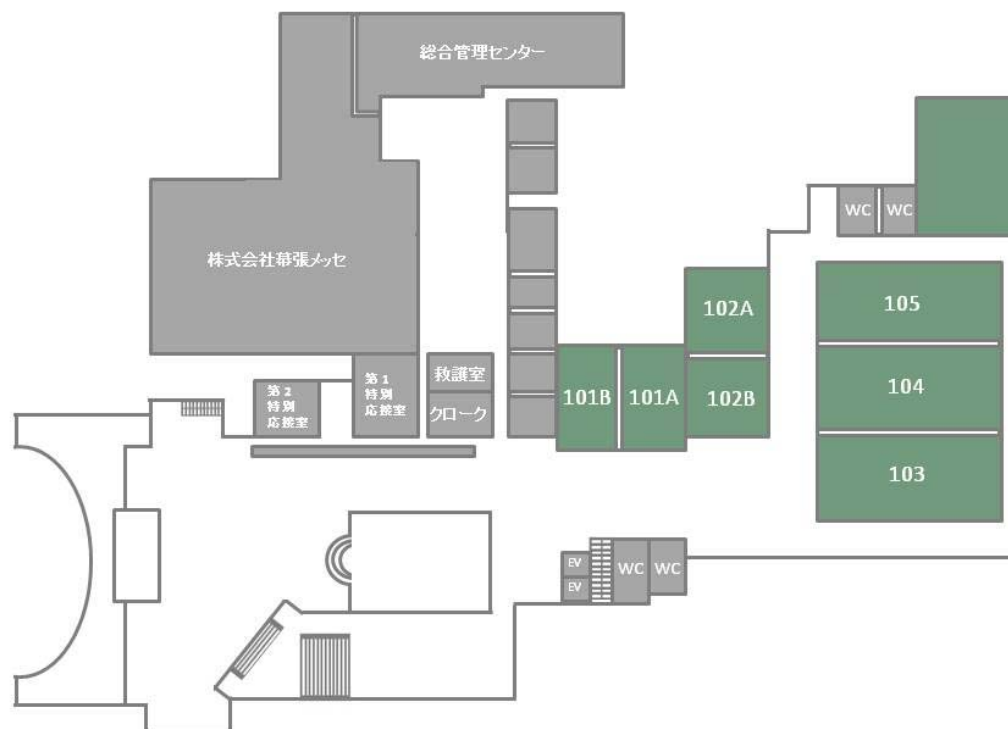
幕張メッセ国際会議場

室区分			面積 (m ²)	東西 x 南北 (m)	収容人数(席)	
					シアター	スクール (3名掛け)
2 F	コンベンションホール	全室	1,390	32.4x42.9	1,664	960
		分割 A	670	32.4x20.7	806	432
		分割 B	670	32.4x20.7	806	432
	国際会議室		635	25.6x24.8	688	312
	中会議室 201	全室	330	13.9x23.7	304	144
		分割 A	165	13.9x11.8	144	60
		分割 B	165	13.9x11.8	144	60
	小会議室 202		83	9.1x9.1	70	36
	小会議室 203		72	8.0x9.0	56	24
	小会議室 204		53	8.0x6.6	48	18
	小会議室 205		53	8.0x6.6	48	18
	213,214,215,216		16	3.9x4.2	□の字 8～12 名	
3 F	中会議室 301	全室	280	14.0x20.0	256	132
		分割 A	130	14.0x9.3	108	48
		分割 B	150	14.0x10.7	126	60
	中会議室 302		194	11.4x17.0	196	108
	中会議室 303		194	11.4x17.0	196	108
	中会議室 304		190	14.4x13.2	172	81
1 F	中会議室 101	全室	160	14.4x11.1	144	96
		分割 A	80	7.2x11.1	72	36
		分割 B	80	7.2x11.1	72	36
	中会議室 102	全室	139	7.8x17.8	160	90
		分割 A	63	7.8x8.1	60	36
		分割 B	70	7.8x9.0	70	36
	中会議室 103		156	19.2x8.1	170	99
	中会議室 104		156	19.2x8.1	170	99
	中会議室 105		156	19.2x8.1	170	99
	第一特別応接室		65	-	8 名掛け 応接セット	
	第二特別応接室		30	-	6 名掛け 応接セット	

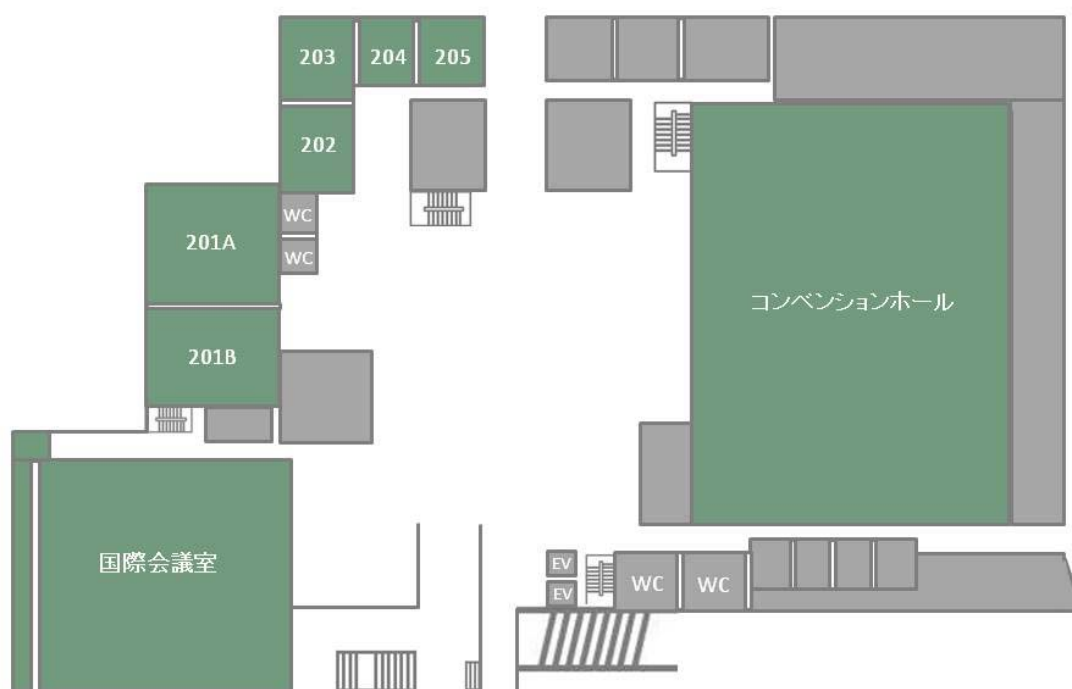
展示ホール

主要施設	
7 ホール 1/2	33075 m ²
■ 主催者室	116m ²
■ 多目的室	181m ²
■ ラウンジ	62m ²
■ 会議室	82m ²

国際会議場 1F



国際会議場 2F

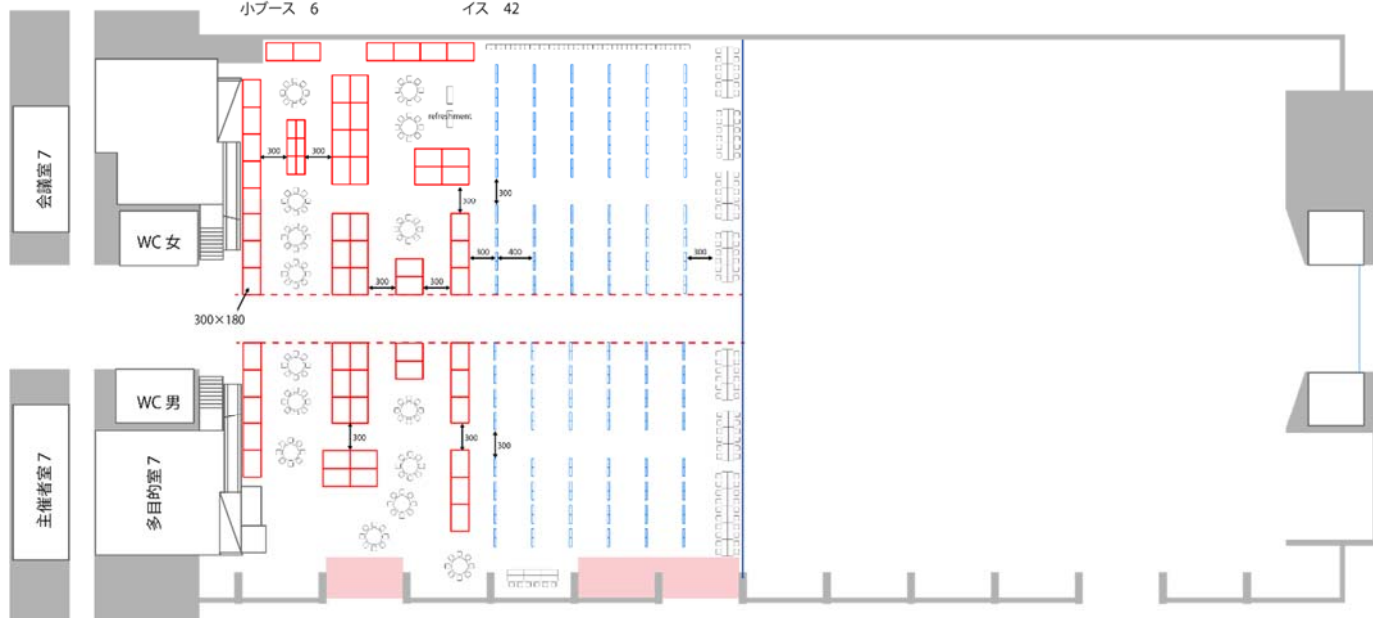


国際会議場 3F



展示ホール

大ブース 60 ボード 408 テーブル&イス 212
小ブース 6 イス 42



アパホテル 東京ベイ幕張ホール

		1space	2space	3space	4space	5space
面 積	坪	52	104	156	208	260
	m ²	172	345	517	690	862
収 容 人 数	スクール・会議	100	200	300	450	540
	シアター	180	360	540	720	900
	ブッフェ	100	200	300	400	600
	ディナー	90	150	250	350	450

周辺図



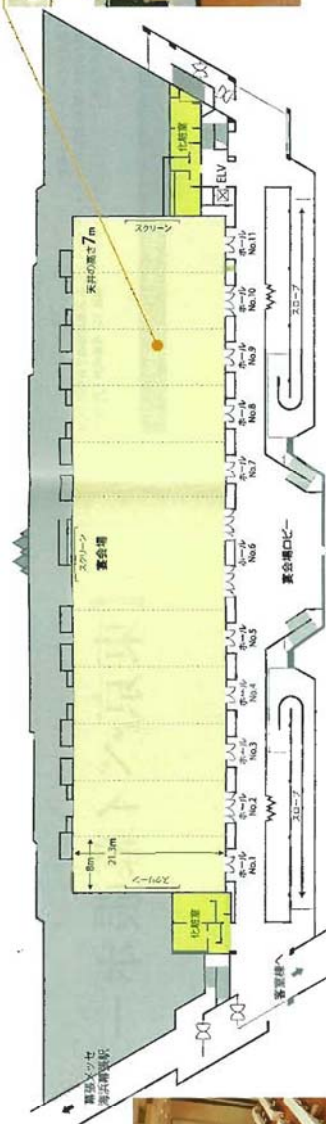
千葉県下最大級 2,200 名収容のスケール感と日本最高層ホテルならではの設備とサービス。 大規模な国際会議からアットホームなパーティまで幅広くご利用いただけます。

「東京ベイ幕張ホール」は 11 分割まで展開可能。その他使い勝手のいい中宴会場・小宴会場がご用意です。披露宴や祝賀会、パーティなど、ご人数や目的に合わせて、様々な組み合わせでご利用いただけます。

2F



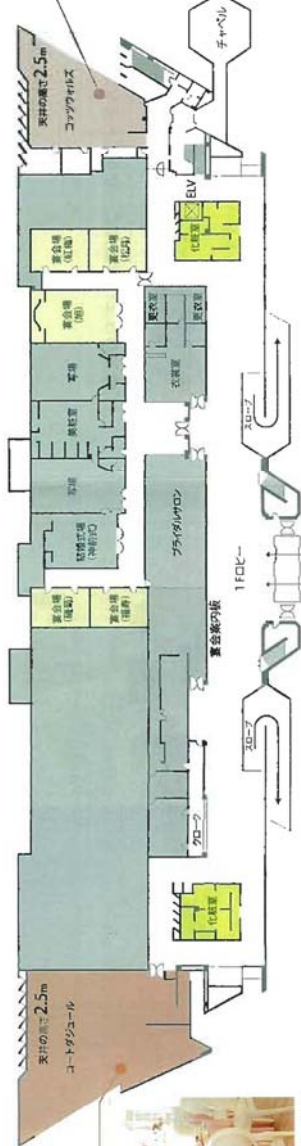
●宴会場 Banquet Room



1F



●コートダジュール COTÉ D'AZUR



この婚礼の日に授意室としてもご利用いただける小宴会場に、結婚式場、衣装室、花嫁室、写真、プライダルサロンなどの婚礼関連施設がひとつのフロアに配置されています。

バンケットルーム「コートダジュール」は大きな窓から緑豊かなガーデンが広がる開放的なスペースです。白を基調とした明るい会場内はさまざまな裏面にひびいたりのスペースです。

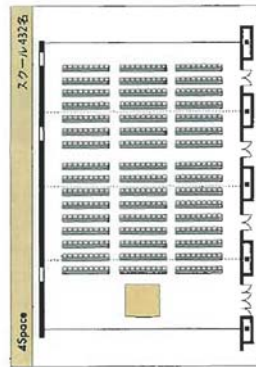
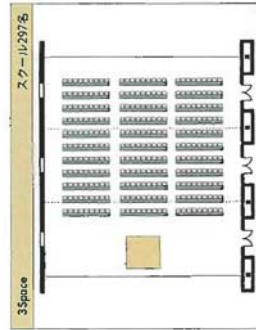
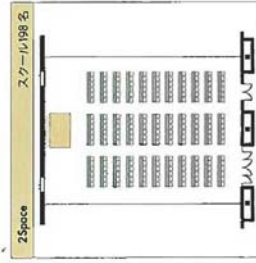
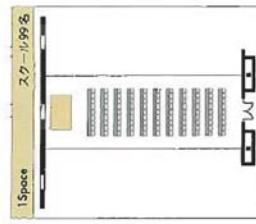
●コッツウォルズ COTSWOLDS



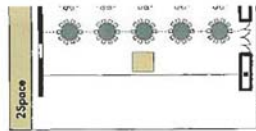
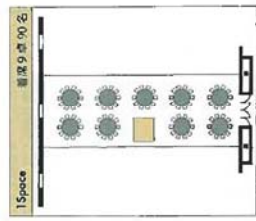
東京ベイ幕張ホールは、最小スペース 172 ㎡から、最大スペース 2,070 ㎡まで、ご人数や目的に合わせてさまざまな組み合わせが可能です。ご婚礼をはじめ、国際会議・イベント・展示会などにぜひご利用ください。なお、提携の交通機関により幕張メッセとつながっています。

広さ 173 ㎡のバンケットルーム「コッツウォルズ」は暖かみのある明るい空間の宴会場です。披露宴、パーティ、ご宴会、二次会と人数や目的に合わせてご利用いただけるスペースです。

●東京ベイ幕張ホール スクール形式 使用例

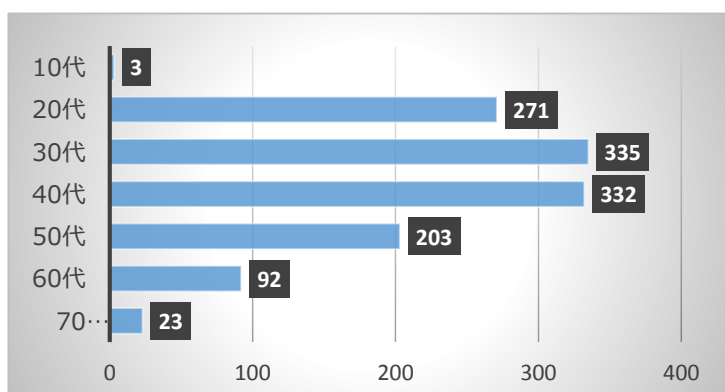
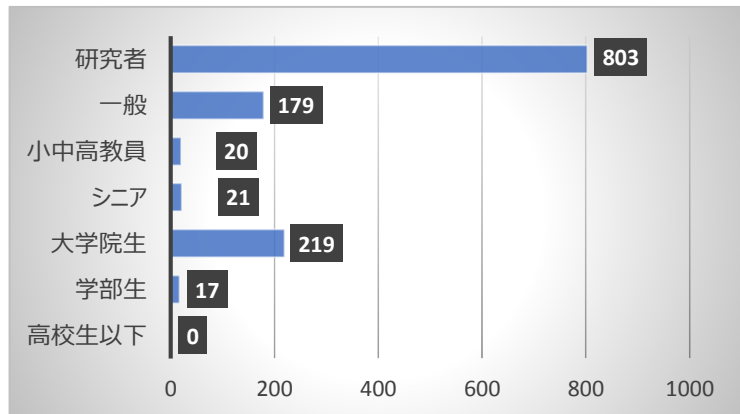


●東京ベイ幕張ホール 着席・ブッフェ形式 使用例



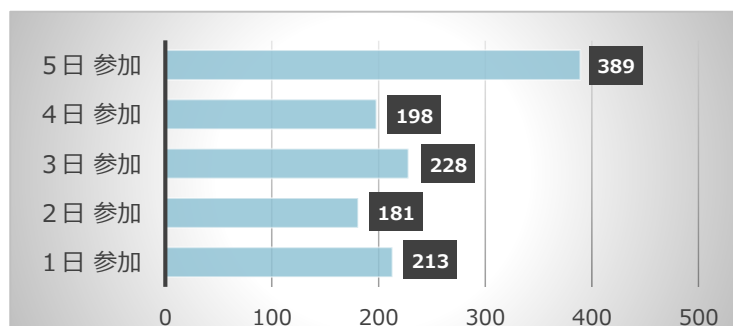
2014 年大会後 会場アンケート （回答数 1259）

有効回答数	1259	人数	%
研究者		803	64%
一般		179	14%
小中高教		20	2%
シニア		21	2%
大学院生		219	17%
学部生		17	1%
高校生以下		0	0%



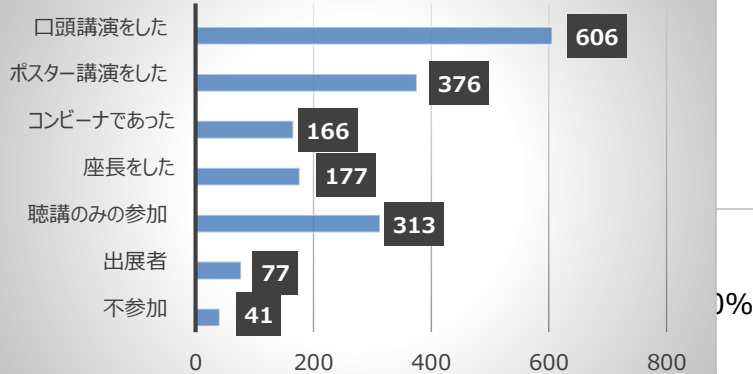
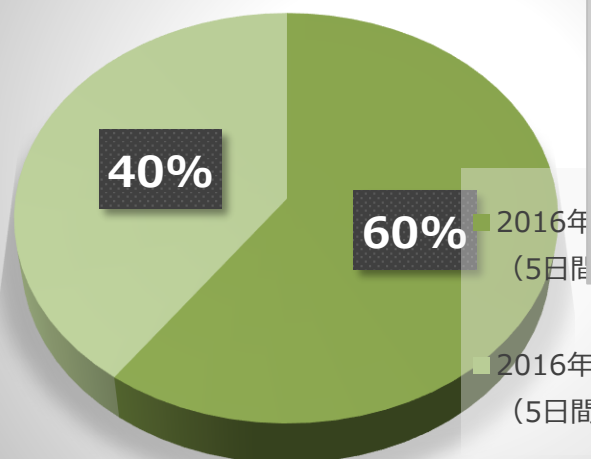
有効回答数	1259		
10代		3	0%
20代		271	22%
30代		335	27%
40代		332	26%
50代		203	16%
60代		92	7%
70歳以上		23	2%

有効回答数 1209		
5日 参加した	389	32%
4日 参加した	198	16%
3日 参加した	228	19%
2日 参加した	181	15%
1日 参加した	213	18%



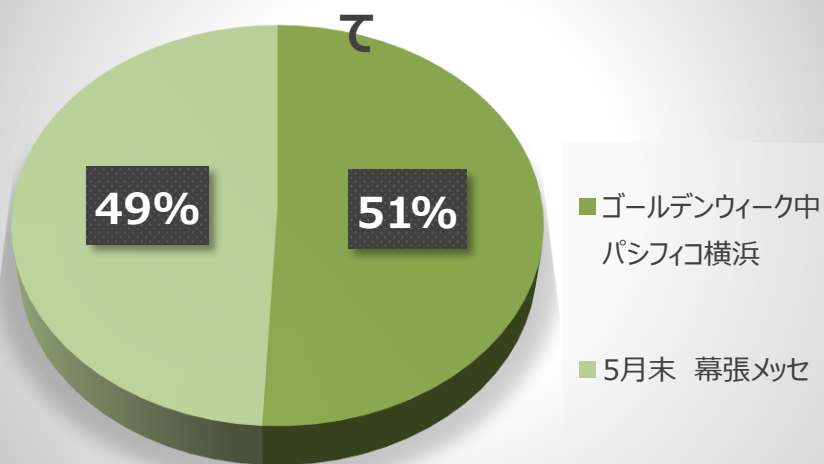
有効回答数 1756 (複数回答可)

★2016年開催地について



5月22日～26日 (5日間) 幕張メッセ	504	40%
-----------------------------	-----	-----

★2017年大会以降の開催について



ゴールデンウィーク中 パシフィコ横浜	640	51%
5月末 幕張メッセ	619	49%

★希望開催日数について



5 日間	561	45%
6 日間	74	6%
どちらでも	624	50%

2014 年連合大会または連合大会全般についての感想、ご意見をお知らせください。

参加費も高いと言われていますが、妥当であると思います。アプリが非常によかった。

幕張に比べると、横浜のほうが食事をするところが豊富な点ありがたいです。ポスターとポスターの間に隙間があるのは、説明者が立つところにしても、会場内を動き回る際の通路に使うとしても、どちらにしても良いことだと思いますので、今後も続けていただければと思います。

東海道新幹線利用者にとっては横浜の方が決定的に利便性が高い。会場もオール会場はパシフィコの方がゆとりがあるように感じた。周辺に施設群、街の雰囲気も横浜に軍配が上がる。

ゴールデンウィーク期間は外してもらいたい。そうであれば横浜でもよい。

首都圏、全国、海外からのアクセス、会場の利便性、出展者の利便性、学会の規模等を考慮すると、パシフィコ横浜以外で開催する理由は見当たらない。

スタンプラリー等、新しい試みが大変良かったと存じます。日数、アクセスとも個人的には便利でした。

2014 年連合大会は日程と場所が悪く、参加できませんでした。2015 年以降、メッセで継続的に開催されることを強く臨みます。

参加料金の横浜と幕張での比較がないのはなぜ？

大会アプリについてのアンケートをお願いします。

似たようなセッションが多数乱立し、同時並行で開催されていました。規模が大きくなることで良い面もあるのですが、これだけの経費、労力が現在の地球惑星科学の実力に相応しいのか、学問の発展や異分野間の連携につながっているのか、常々疑問に思っています。連合大会のあり方を本格的に見直すべき時期にあるような気がしてなりません。

全体的に（特に周辺環境が）とても良かったと思います。室内の空調もちょうど良く、快適な 5 日間でした。欲を言えば、会議室の広さにもう少しバリエーションが欲しかった。小さい会議室で立ち見が目立ったので。あと、ブースの位置（どこに何があるか）が分かり難かった。

パシフィコ横浜は総じて良かったが、会場によっては狭すぎた。最低でも 50 人くらい入る部屋を用意した方がよい。

ゴールデンウィーク中開催が良いと思う理由

1) 勤務する大学で授業のない日が多く、休講にする必要がなく、結果、大会に参加しやすかったこと

2) 大会終了後、ゴールデンウィークに休めたこと（5 月末開催だと休めない）

ということです。一方で、私の今回のケースですが、4 月頭の異動の直後に大会開催があることになると、日程的に厳しいということもあるかもしれません。一つの意見として、参考にして下されば幸いです。

横浜の方が近くて便利

参加費が抑えられるなら、豪華な会場でなくてよい

パシフィコ横浜はいろいろな会合をしやすくて非常によかった。今後もパシフィコ横浜での開催を強く希望いたします。

パシフィコはアクセスが良いだけでなく、周辺の雰囲気なども素晴らしかったです。

自分のポスターの位置が、わかりずらく、時間をかなりロスした。会場が、せまかった。休憩場所の数が少ない。

満席の会場が多かったのは改善して欲しい。

狭い講演会場が多い。廊下まで人が溢れている講演が多数あった。WiFi がブア。接続できても、速度が遅い。

幕張が長く続いたので、パシフィコ横浜は良い気分転換になった。ただ講演会場の中には小さすぎて聴衆が入りきれなかった所があったのは問題である。それに対して 1 階のメイン会場は大き過ぎたと思う。関連セッションが 1 日目と 4、5 日目に分かれたあったのは不便であった。

幕張メッセに比べて比較的広い部屋が多いように感じられたのは良かった。 横浜は、観光地の中にあり華やかさはあるが、その分特に昼食時の混雑は酷かったように感じた。 （会期を5日間としたためか）特に固体地球物理関連は、同時刻に似たセッションが重なることが多く、一方には参加できなかった。
2017 年度についてもゴールデンウィークでない時期のパシフィコ横浜での開催を検討してほしい（例えば GW の前週など）科学の研究発表としての体裁をなしていない口頭発表が通常の学術セッション内に多すぎる。投稿規定にも反していると思われるものも見られた。コマが余っているのであれば講演数を減らし、会期を4日に短縮した方がよい。
1. セッション数が増えた分、開催日程が5日間と短かったため、多くのセッションがパラレルに開催という事態であった。開催日程を6日間とすることにより、少しでもパラレルセッション数を減らせると思う。 2. ポスター発表のボード番号が通し番号となっていたため、なかなか目的のポスターを探すのが難しかった。従来通り、プログラムに記載されているポスター発表番号を使用することを提案する。
会場としてはパシフィコのほうが良いが、期間としてはゴールデンウィークは避けたほうが良い。
アプリが便利だった。今後さらに発展することを願う。
会場がパシフィコ横浜というのが、個人的には良かったと思います。また、申し込み時に何曜日になるかわからないのが、講義や実験の授業を抱える立場としてはつらいので、申し込みの時点でセッションの具体的な日にちがわかったほうが助かります。
良い点：幕張と比べて交通の便が良い。 改善したほうが良い点：（講演会場）狭い。（ポスター会場）狭すぎる。ポスター会場にある出展ブースは人の往来を大きく妨げていた。出展はポスター会場と完全に分離したほうが良い。ポスター会場内の特設講演ブースがうるさく、ポスター発表が聞こえないことがあった。（タイムキーパーのアルバイト）講演中に居眠りするのはやめてほしい。
一部の会場が狭すぎて席が足りなかった。
横浜に自宅があるため毎日通いました。例年幕張では横浜からの日帰りとなり、発表日と委員会の日しか参加しませんでした。逆の方もおられるとは思いますが、勝手な感想ですみませんが、今年は本当に最高に楽しめました。ありがとうございました。
部屋のサイズが小さすぎると思われるセッションがいくつかありました。三年連続で部屋に入れず聞きたくても聞けなかったセッションもあります。コンビニから要望が出ているはずなのでできるだけ対応をお願いします。ポスターセッションのボード番号とポスター番号の対応がわからずかなり迷いました。アプリがボード番号にまで対応してくれるとありがたいです。フェロー表彰式はあまりにも会場に人が少なく壇上の先生方に失礼なのではと感じました。タイムテーブルにのっておらず、アナウンスもなく、場所もわかりにくかったためと思います。来年以降同様のイベントを計画されていたら改善を望みます。
幕張には戻りたくない。
口頭発表会場が狭すぎました。津波堆積物セッションですが、会場では側面、後側のスペースは全て埋まりました。中央のスペースでは、体育座りで、埋まりました。会場の外にもあふれていました。より大きい会場を用意していただければならないだろう、というのが感想です。幕張メッセの会場の方が、広かったです。
スケジュールはGWを外していただいた方が良いが、場所は横浜が便利であった。会場と宿泊環境が横浜の方が良い。会場外建物内廊下などでの休憩や着席箇所を増やしてほしい。
学生としての希望を述べさせていただくのであれば、参加費が値上がりしたことは大変遺憾です。諸般の事情があろうかと存じますが、昨年度までの大会参加費に戻していただけるよう期待いたします。 また、本年は記念品としてUSBメモリ付きのボールペンが配布されましたが、予稿集が入っているわけでもなく、特に配布しなくてもよいのではないかと思います。 USBメモリ付ボールペンの配布をやめる代わりに、その費用分参加費を（100円単位でも）安くしていただける方が、助かります。大会参加記念グッズは、別途「販売」する形式でよいのではないかと感じました。
・良かった点

周囲にレストランが多い、宿泊施設が充実している、会場が綺麗、観光スポットが多い、アクセスが良い ・悪かった点 セッションによっては会場が狭く、立ち見も出来ない状況が多々あった、 私たちのセッションは、50 人部屋が割り当てられていたにも関わらず、実際は、40 席未満しか準備されておらず、立ち見が多く出てしまった。 会場サイズと実際の聴講者数がマッチしていない（会場が狭い）セッションがいくつかありました。パシフィコは幕張よりも良会場ですが、ゴールデンウィーク中の開催は賛成しかねます。 部屋が狭く、立ち見をすることが多かったし、時々入れないこともあった。どのぐらいの人数が集まりそうかを把握し、余裕を持った部屋割りにして欲しい。 幕張より横浜で毎年開催してほしい 今年度の各セッションの会場は少し狭いように感じました。また、セッション開始までに発表の資料チェックをするような局面で座れてパソコン作業ができる場所がなく難儀しました。 連合大会の運営大変お疲れ様でございます。登録料について意見申し上げます。従前、気象庁のような現業機関の方が連合に参加するには、現業機関ゆえ学会参加経費が認められず、自費で参加されてきた経緯があります。近年、登録料が非常に高くなり、これは運営上止むを得ないことと認識していますが、気象庁の職員の方が業務向上のため私的に 1 日だけ参加したい場合などの対応が難しくなっております。このため、機関参加料金のようなことを検討されることを提案します。たとえば、気象庁という機関で規定の参加料を払えば、それに対するネームタグをある枚数発行することを行うといった措置です。気象庁をはじめとする現業機関の方々は、地球惑星科学を支える重要なメンバーであり、意欲ある現業機関の方々に参加しやすいような方策をご検討頂けますよう、ここにお願ひ申し上げる次第です。 パシフィコ横浜は幕張に比べて会場へのアクセス、周辺の食事環境がとても良かった。 ポスターセッションの時間が遅すぎるので改善して欲しい。 セッションが細かく分かれすぎ。同じような内容のセッションが複数あるので、これらは統合して一つにすべき。参加者、発表者が非常に少ないセッションはやめてしまっても良いのでは。 パシフィコ横浜は交通の面でも宿泊、食事の面でも立地が大変良かった。遠隔地から幕張の場合、当日出発では午後間に合うように会場にたどり着けず授業を休講にしなければならず一部しか参加できなくなる。今回は参加できる日数が増え、ためになった。パシフィコ横浜は会場費が高いという噂であるが、高価と思われる大ホールの講演の参加者が 50 名足らずで、これらの企画の需要は少ないと思われる。参加者の多くはサイエンスのセッションを重視しているのだから祝祭的な企画は縮小し大ホールの使用を削減節約して横浜で開催していただけると助かります。 開催場所は横浜でも良いのですが、ゴールデンウィークにひっかかる日程は不便です。ゴールデンウィーク中の開催は、地方からの参加者にとって、首都圏への往復が混むだけでなく、費用も高くなります。学生や若手研究者の参加も考慮して頂き、開催期間の善処を希望します。 交通の便が良く、繁華街にも近いので、会場としての雰囲気はまくりより格段に良かった。ただ、日程が混みすぎて、ポスターのコアタイムと夕方の集会在重なり、学生賞審査ができない間合いがあった。 幕張までの交通費を考えると、参加費が少々高くても横浜でも費用は変わらない。雰囲気は横浜の方が良い。 地方から参加する立場としては圧倒的に横浜が良い。食事や宿泊の選択肢が多く、リーズナブルなものまで選べる。幕張は食事場所が限られ、いつも混雑している。宿泊場所も学会場付近の不便な場所か、離れた不便な場所しか選べない。幕張の唯一の利点は、会場が狭く部屋間の移動が楽。しかし満員のセッションが多く聞けないことも多い。総合的にみて幕張にするメリットはない。 パシフィコ横浜はアクセスが抜群に良かった。会場近くを選べるホテル・飲食店等の選択肢も多く、また、学会会場近くに別会議のための場所を確保しやすく、幕張に較べてとても快適であった。今後も是非パシフィコ横浜で実施すべきと考える。

品切れのため、ポスター発表時に提供されるドリンクを 5 日間にわたり手に入れる事ができなかった。
参加費・投稿料が昨年度に比べて高い
参加料値上げに対する還元率が低いような気がしました。 例えば、ポスターセッション時のアルコールの配布はとてもよい試みだと思いましたが、多くの人に行き渡っていなかった問題があります。また、海外の学会のように企業ブースも特典がもらえるような試みをもっと広まるといいと感じました。 会場に関しては横浜がいいですが、日程は例年（5 月中-下旬）がよいという人が私を含め周りには多かったです。運営などいろいろと大変だったと思います。お世話になりました。また来年参加します。
関連するセッションが同じ時間帯に重なっている場合が多かったように思います。そのため、どちらかを聴けないなどの不便がありました。
スマートフォン向け App は中々便利でした。順当に brush-up されたものであればまた使いたかったです。
ポスター会場が狭過ぎたため、聞くのを諦めた発表が幾つもありました。 特に、NASA ブース前は立ち見の人まで大勢居たため、遠くから見るのすら困難でした。
会場が狭かった。立ち見も初めから出ていた。
今年度は大会期間が 4 月下旬だったため、学振の科研費の交付内定が出ておらず、出張費を出せないという問題が生じた。年度初めの大会開催だと、こういった問題が多く機関で生じるのではないかと。5 月下旬開催がパシフィコで開催できない以上、幕張メッセで今まで通り行う方がいいと思う。
あまりにもレジストレーションが高過ぎると思う。 海外の査読付きの国際学会なら未だしも国内の学会にこの金額を出して発表しようとは思えない。
・個々の会場（ポスター会場含む）が狭く、あまり落ち着いて話を聞くことができなかった ・企業ブースの配置がわかりにくかった ・ジオパークのブースが減っていたことが残念だった ・PC のケーブルに HDMI も用意してほしい ・参加費全般が高かった ・受付がスムーズにできてよかった ・アプリは興味深いものであったが、じっくりと操作する時間はなく、慣れないままに終わってしまった ・くまモンのイベントは意外であったが楽しめた
今年は、EGU が重なっており残念です。また、地方からだ、連休中は予約が取れない、混雑する等、移動が大変です。時期を考えて開催して頂けると助かります。
アプリの試みは面白いと思いましたが、あまり使いこなせていないと感じました。 またパシフィコ横浜は幕張メッセよりも周辺施設が充実しており、大会以外の楽しみもあり大変満足致しました。 部屋が狭く立ち見が出るよりは広く席が余るくらいが良いと感じました。
AGU FM のように、できるだけ同じ時期に同じ場所で開催するのが良いと思います。
幕張の日程で横浜開催が理想。横浜は駅直結で食事するところも多くて良い。連休中は家族サービスほかで忙しい
一部の会場が小さすぎると感じました。一番小さな会場はできれば使わないでほしいです。
ポスターコアタイムは昼食時間帯がよい。夜のコアタイムはしんどいです。あと、平野地質の講演をききに行こうとしたら満員で入れず残念。もっと大きい部屋を手配して欲しかった。横浜は幕張にくらべてホテルや飲食施設が豊富で気に入りました。
立ち見が減ったのは良かったと思います。また歩ける距離にホテルがとりやすいのも良かった点です。 これは今年度に限らず、全般についてですが、似たセッションをある程度整理統合していただけないでしょうか。 それから、防災に関するセッションなどがあるわりに、連合大会自体の災害対策が見えてこないのが残念です。もし地震があったら、津波があったら、豪雨があったら、火災があったら、どうすれば良いのか、参加者にきちんとお知らせをした方がよいように思いま

す。いろいろ難しい面があると思いますが、ご検討いただければ幸いです。
設問の 4 と 5 は、開催時期と場所について分けた設問にして欲しかった。時期については、大学の授業への影響のため GW 期間中の開催に賛成だが、場所については幕張と横浜のどちらでもよいと思っている。隔年で開催場所を変えるのも一手だとさえる。
2014 年連合大会への感想 アクセス：（新宿基準で）幕張より横浜の方が近い・アクセスがよかった。新幹線停車駅は（新横浜）から近いので遠隔地からの参加にも便が良いのではないかな？ 高校生セッション：ゴールデンウィーク中の開催のほうが高校生が参加しやすいかもと想像しました。 ポスター会場：横浜より幕張の方が広いとは！これは意外でした。
今の状況で EGU と同日に JpGU を開催すると、JpGU の国際化に大きなマイナスになると思います。僕が中国人なら、英語が通じるという理由だけで EGU に行くと思います。
パシフィコ横浜はアクセスが大変よく、便利でした。出来れば今後もパシフィコを希望します。ただし、時期は GW を外していただけるとよりよいと思います。
幕張と横浜で隔年開催というのはいかがでしょうか？ 横浜での開催は目新しくて良いのですが、参加費が高くなるのが難です。
会場近くに遊べる場所・食べる場所が多くてよかった。人も多いし、飛行機代も高くなるのでゴールデンウィーク期間中でなければなお良し。
パシフィコ横浜は、周辺施設にもめぐまれた良い会場であった。しかし、観光地ゆえ GW 期間は非常に込み合うので、今後横浜での開催の場合、開催時期を変更すべきだと感じた。
パシフィコは交通の便もよく、よい会場だと思いました。ぜひ再度の開催を希望します。
会場は横浜でも幕張でも良いが、GW は外した方が良い。
横浜にきて参加費が高くなったのは問題だと思う。
パシフィコ横浜のポスター会場が幕張メッセより狭く感じた。
近年の流行でもあり不利益ばかりではないであろうが実質的な学術的議論の充実ではなく参加人数の多寡の計数が評価となるような大会開催に経費をかけることはそろそろ反省すべきではなからうか。
大会運営お疲れさまでした。非常に有意義な時間を過ごすことができました。また参加したいと思います。パシフィコ横浜は、宿泊施設、飲食店が近隣にたくさんあり、参加する人間としては、大変快適でした。今後も、会場はパシフィコ横浜で良いのではないかと思います。
モバイルアプリをタブレットで使ってみようと思いましたが、途中で使いづらくなり止めた。特に、画面を戻ると表示が初期化されるのがイライラした。使いづらいのでもう必要ない。講演予定表が会場で配布されたが、サイズが大きすぎる。A4 サイズで事前に PDF でダウンロードできるようにしていただきたい。
関東以外での開催も検討して欲しい。
ゴールデンウィークはきつい。が、会場は横浜のほうがよい。
5 月末、パシフィコ開催がよい。回答選択肢に不満あり。
18 時までには終了した方がよいのではないのでしょうか。
部屋が狭かった。参加人数が少なかったのか分からないが、ポスターの数が少なく感じた。他の学会(EGU,アメリカ地震学会)とかぶっていてよくなかった。
・横浜のほうが宿泊施設・飲食店ともに多く、幕張よりも断然良かった。特に、廉価な宿泊施設が学会直前でも空いているのは地方からの来訪者にとってプラスだと思う。

・会場もおおむね良かったが、唯一、1 階の大ホールは広すぎてセッションが緩慢になった。1000 人満員になることが確実と予想されるセッション以外は使わない方がよいと思う。 ・GW 中開催というのはいただけない。新年度で忙しい時期であるし、学振の締め切りが近く院生は大変なのではないか。また、プライベートでも休みたい。そのうえ今年は EGU, SSA と重なったのもよくなかった。横浜で 5 月中旬以後開催はできないか。 ・細かいことだが、名札の字が小さくポスターセッションの際に読みにくかった。名札一杯ぐらい大きくてもよいと思う。
東海道新幹線沿線からのアクセスは、横浜は圧倒的に便利です。幕張だったら、参加しなかったかもしれません。将来的には、横浜開催に一本化していただくよう希望します。
会場周辺は良かったが、口頭発表の会場で、一部非常に狭い部屋があったのが強く印象に残っている。
パシフィコ横浜はセッションの会場が狭く、立ち見が散見されたので、改善していただきたい。 新幹線駅からの利便性を考えると、パシフィコ横浜での開催は好ましいが、日程については、EGU との重複は避けていただきたい。
連合大会へは毎年参加しているが、パシフィコ横浜での開催は、新鮮で良かった。会場内の雰囲気も良く、特に、周囲の環境（レストラン等）がとても良いと感じた。
会場が狭すぎて立ち見でも入らず、講演が聴けなかった。同じようなテーマが同じ時間になってしまい聴けなかった。ポスター会場が狭かった。幕張メッセに戻してほしい。
会費は若干割高であったが、様々な特典があって良かった。もう少し価格をあげても、それに見合うのであれば、納得できる。
アクセスや会場の広さは良かったと思う。一方、一部のポスターが別会場になっていた点と、口頭発表用の部屋がやや狭い点、またプロジェクターと PC が 1 台しか接続できない（変換機がない）点が、今後改善されると良いと思う。
プログラムブック p24-25 のスケジュール表背景は白抜きにして欲しい。グレイの背景はコントラストが悪く、読みにくい。 1 日ごとのプログラムもグレイ背景は止めてほしい。薄暗い講演会場内では判読しづらい。座長が講演者と題目を読み上げるのに困っていることがある。
パシフィコ横浜の方が利便性が良いが、ゴールデンウィーク前は日程が早い
津波堆積物セッションは会場が狭かった。しかし、参加者の利便性を考えると、パシフィコ横浜の方が好ましいと思う。GW の開催も悪くないと思います。
横浜開催はよかったが、4 月末は年度が変わって早々なので、ゆとりを持って参加できない。
横浜は周辺に色々と施設があり、また観光地も多く、外国からの参加者も満足していた。研究交流が第一であるが、参加者にとって楽しみのある横浜が良いと感じた。
EGU と日程を重ねないでほしかった。部屋が狭い会場がいくつかあった。
パシフィコ横浜は、都心に近く交通の便も良いことから、今後も利用を検討していただきたい。 会場が狭く座れない場合が多々あったことが、残念だった。
各会場で Mac と PC を各一台ずつ用意したほうがよい。個人の持ち込みノートパソコンがプロジェクターにつながらなかったり、バッテリー切れになって使えなかったり、という発表があった。
場所は横浜で、ただし GW は避けてほしい。お願いします。
パシフィコ横浜の方が場所的にも会場的にも便利である
It was a really great experience for me to attend and present in the JpGu conference. Actually I have a few comments that entry ticket for the students should be free or just a minor price for the universities and college students, I was really a quite expensive for a student about 8000 for just a day. Secondly there should be some companies exerts related to topics and section who can suggest their

requirements and further recommendations to the presenter also for further improvements in the research work as well.
スタンプラリーは面白い企画だったと思いますが、参加企業への景品の集め方(価格帯や個数を指定すべき)や景品の配布方法(各企業の景品が最終日まで残るように配布すべき)については、「見直しが必要」と思います。パシフィコでの大会を経験すると、できれば、幕張には戻りたく無いと言うのが正直な感想です。(また、代々木には二度と戻りたくないです...) また、来年、お世話になる予定でいます。引き続き、よろしくお願い致します。
今年は横浜だったので、大阪から始発に乗ると9時に間に合いましたのでよかったです。
・講演会場が狭い。 ・ドリンクサービスがすぐになくなる。 ・講演要旨の検索機能がない。 ・講演要旨集の pdf ファイルがダウンロードできるようにすべき。逐一ダウンロードなんてやってられない。他の国際学会で普通に提供されているサービスをもっと学んで取り入れるべき。 ・立地としてはパシフィコが良いのだが、ゴールデンウィーク中の開催はやめて欲しい
The scientific content of this meeting is clearly exceptional compared with other international meetings (including AGU Fall meeting). There is, however, limited non-Japanese participation because a large majority of the sessions are in Japanese, which are quite difficult to follow. I hear from numerous interactions with my international colleagues that they would be much more likely to attend this meeting if it were possible to make the Japanese-only sessions more accessible.
EGU に加えて、同時期に開催される米国地震学会 SSA と重ならないことを希望する。また、東京・つくばからの参加者の大半は宿泊を伴う出張が認められないため、開始終了時間についても、十分な検討が必要に思う。
パシフィコ横浜は新幹線の駅からも近くて立地が良いと思うが、連休前・連休中なのがやや難点。ホテル予約が困難で宿泊費も高くつく。一方、都心勤務であれば、幕張は電車で都心を横切る点で不便である。いずれも一長一短であるから、時期で決めると5月末の幕張の方が分がある。
各公演会場やブースの狭さの問題はありますが、金額が変わらないようなら、横浜のほうが圧倒的に評判がよいと思います。
口頭発表会場が狭過ぎる、広過ぎることが沢山あったと思います。
概ね順調に運営されていたと感じました。
神戸からの参加ですが、みなとみらいはメッセよりもアクセスや食事・宿泊の便が良いかと思いましたが、実際は意外と思ったほど便利ではありませんでした。連休期間中の開催は家族の評判が悪かったので好ましいとは思いませんでした。
ビデオプロジェクターのためにアナログケーブルしかないのが困りました。HDMI ケーブルで接続できるのが必要だと思います。
ポスターに比重を置く余りに、口頭希望の投稿の半数近くをポスターに回さざるを得ないような状況は回避してほしい。同時に、ポスター口頭3分発表についてもコンピーナーの権限で判断できるようにしてほしい。
会場でビールが配られていたらしいが、缶ビールということで、ぱっとしなかった。日本のおいしい地ビールやワインを提供してほしい。また、昼間は、コーヒーなどを提供してほしい。AGU や EGU を見習ってほしい。また、ポスターセッションの時間と合わせて、時間も、もう少し早くしてほしい。ポスターセッションの見通しがとても悪い。上から吊るして、なにがどこにあるのか分かるようにしてほしい。EGU と日程が重なっていたのは最悪。AGU と EGU とに日程が重ならない時期に開催できないのか？会場は横浜の方が絶対良い。来年は参加しない。
地方からの参加だが、今年のGW ならば5月2日さえかなければ交通期間に問題はなかった。また、宿も横浜はビジネス向けが多く、逆に空きが多い(5月2日だけだめ)。会場は幕張はあまりに狭く(部屋が少ない)、今回は落ち着いて参加できたし、環境がやはりはるかによいので、私はずっと横浜にしたい。
小部屋で聴講者が入りきれないというセッションをいくつも目にした。(420 番台の部屋)

会期が 5 日間になったせいか、近いテーマのセッションが同時進行しているケースが目立った。(津波とか、地震予知とか、地学教育とか) パシフィコ横浜は交通や周辺の飲食店などでは優れていると思う。
口頭発表の会場ですが、一部では部屋の収容人数が足りず立ち見が多い印象でした。 ポスター会場は、幕張と比較しボード間のスペースに余裕があり良かったです。 参加者へ配られた USB メモリに公演要旨か発表プログラムのデータが入っていると、より便利になると思いました。
横浜での開催は、幕張での開催より良かったです。横浜で開催する場合は、GW の中しか空いていないのでしょうか？できれば、横浜で、GW 以外がよりよいと思います。
関連 session が裏番組になると、残念ですね。横浜は夕食を楽しむには最高です。幕張もあれくらい充実すると良いのですが。会場の費用が同程度であれば、どちらの会場でも構いません。
ポスターの入れ替えが早すぎた。全期間掲示を目指して欲しい。 アクセスの利便性を考えると、幕張開催という選択肢は無いと思う。
場所について、食事場所が多くて便利でした。日程についても、学振の書類の提出日と離れたのが大変助かりました。
開催日は 5 月末、場所は横浜がいいです
狭い会場は話にならないくらい狭い。これなら幕張の方がまし。
参加費用が高すぎる。プログラムが見にくいので、コンパクトで探しやすい形にしてほしい。
会場の立地は（幕張に比べて）パシフィコ横浜は非常に利便性が高いと感じました。ただし、部屋のサイズが狭く、また空間的な配置が広いため、セッションの間の行動や移動そのものにつかれた間隔を受けます。
パシフィコ横浜の方が交通の便もよく良いですが、毎年連休に重なるとなると考えるものがあります。
とても便利だった。5 月末にパシフィコで開催はなぜ無理なのか？6 月に開催は検討できないのか？
専門的にはまとまりがないが、趣味的には楽しい発表もある。プロジェクトリーダーには、使いやすい会場場所だと思う。最新の研究成果発表というよりは、お披露目発表が多い。
パシフィコ横浜は便利でした。できればこちらで開催がよいです。でも時期は 5 月末のほうがよいです。
ポスターセッションの開始終了時刻がやや遅すぎないように思います。会期を 1 日増やして、午後 6 時までにはプログラムが終わるように日程を調整すべきだと思います。
大会が大きすぎて、関連セッションの重複回避が不可能なレベルに達していると感じます。「ごく一部の発表のみを大会場での口頭発表として、その他は原則としてすべてポスターにする」など、大胆なシステム変更をしてはどうかと思います。
セッションが多くて、行きたいところにかぶって発表があったりした。隕石解剖学と地球化学がかぶっていたのは気になった。
ポスターのコアタイムと各学協会関係の会合が重なることが多く見受けられます。パシフィコでの開催ではオールセッションの並行数がそもそも多いのだから、それにポスターのコアも重ねてしまう、つまりは AGU と同じスタイルで良いのではないかと思います。
開催日数が少なく、口頭発表の会議室が増えてとても良かった。ただ 1 つあたりの部屋の大きさが少し狭い気もした。ポスター会場に置かれている椅子と机（談話スペース）がもう少し増えると良いと思う。
街中 + 観光地である横浜が開催場所であるので、海外の人の参加も促せると思う。
重要な国際 SuperDARN Workshop が例年 5 月下旬の 1 週間開催されている（2014/5/25-30, 2013/5/26-31, 2012/5/27-6/1,...）為、そちらを優先せざるを得ない為、5 月の最終週に JpGU 開催というのは是非避けて戴く事を希望する。以前は、最終週の一週間前の JpGU 開催が多く、SuperDARN Workshop と連続週となるものの、問題はなかった。また、黄金週間の開催は、国民の長期休暇取得促進の為にも、また遠方からの参加者の航空券代金が高い時期ともなり是非避けるべきであると考え。特に今年は GW が前半と後半に分断されていた為 GW 中でも平日の多い期間とはなったものの、GW の前後の方が GW 中より遙かによい。更に今年は EGU GA と重なり、一部からは大変不評であった。また、Europe の人からも、JpGU が EGU の存在を重要視していないと見られるとの懸念の声があった。開催場所は不便な幕張より

横浜や都内の方が個人的にはかなりありがたい。但しパシフィコ横浜の各会場の収容可能人数が少なめなのは多少気になった。
Breaks between the sessions should be at least 30 minutes. 15 minutes break is insufficient because most of the sessions end with few to several minutes delay. Breaks between sessions is time for effective interaction and hence needs to be optimum. Thank you.
・発表者にとって快適な PC がらみの環境整備を願う。 Internet 上で立ち往生することがまある。 ・全体像（セッション構成）がより見やすい／探しやすいとより参加者にやさしい環境になる。 ・貴重な場なので、ご努力を！感謝！
口頭発表の部屋が狭く、席数が足りなかった。70 名となっている部屋は 2 つ繋げて使う方が良い。
ゴールデンウィークは、遠方からの航空券が高額な上に混んでいて取れない等の問題が大きいので、避けていただきたいです。パシフィコ横浜の会場は問題ないのですが。
会場周辺の食事場所など選択肢が多く良かったが、自宅からはやや遠く、毎日通うのは大変。会場は大変良かったが、参加料が高額であった。もう少し安くなるとよい。
盛会だったと思います。E G Uとの重複はさけるべきだと思います。
幕張より交通の便が良いので、初めて参加しました。セッションの参加者と会場（会議室？）の大きさのミスマッチが多かった気がします。幕張と横浜では、参加する分野の人が違うのでしょうか？そのあたり興味があります。
大変広い会場で、新しく、充実感のある大会でした。横浜は交通の便もよく、レストランも楽しめるし、大きな会議にふさわしいと思います。
広くてわからないところが多かった。入場料を下げしてほしい
場所はパシフィコ横浜の方が良いが、期間はゴールデンウィークを避けて欲しい。
口頭講演会場やポスター会場がやや狭かったが、一般人の展示などへの参加が多く、アウトリーチの観点からは良かったと思う。学生発表賞審査のやり方、それをやる意義そのものについての検討が必要であるように思った。
ポスターの掲載順序が分かりづらかった。せめて AGU の様に各ドメインに分野を示していただけると分かりやすくなると思う。ブースも見回りにくい配置だったけど、もう少しなんとかなると思う。
ゴールデンウィークの開催は、参加するのが大変困難です。遠方からの参加者は、宿泊施設も繁忙期の料金になり、負担が大きいのではないのでしょうか。
また、ポスター会場の広さが、幕張メッセより狭いのではないかと感じました。さらに、出展者スペースが複数階にまたがっていて、ポスター会場以外のフロアに展示していた出展スペースにはあまり行こうと思いませんでした。
スタンプラリーで回るというのは画期的のようですが、参加者も出展者もスタンプだけの対応で、研究や商品の会話をすることはほとんどなかったように見受けられました。しかも、スタンプラリーの景品も祝日の 29 日にはほとんど出払ってしまい、その後はモチベーションもなかったのではないのでしょうか。
とはいえ、新しいことに挑戦していき、一般の方にも興味を持ってもらうことは大変重要なことだと思います。例年見かけなかった小さな子供連れの親子を会場で見かけたということ、今後も大切にして頂きたいと思います。
勝手なことを書かせて頂きましたが、やはり本質は発表だと思います。その中でも高校生の発表はいつも楽しみにしていて、今年も素晴らしかったです。飯山北高校の温泉沈殿物防止に関する研究や、加古川東高校の 4 つの班のそれぞれの研究、鳥取東高校の鳴き砂の研究は面白く、興味深かったです。
最後に、準備・運営など、大変お疲れ様でした。また来年も大変だと思いますが、よろしくお願いします。
横浜のほうが圧倒的に素晴らしい
上記回答は、参加登録費用がほぼ同じで、ゴールデンウィークのうち後半はつぶれない、という条件での回答です。明確に幕張の方が経済的となる場合や、GW 後半の連休にかかる場合には幕張の方が良いと思われます、

横浜は羽田から近く、便も良かった。近くに食事場所や観光スポットがあって良いが、GW 中（前後）は混雑するので、時期をずらして欲しい（ホテルも取りにくいので）。
横浜は近くて行きやすくてとても便利でした。ポスター会場も快適で、夕方のコアタイムも良かったです。参加料が少し高かったです。 ポスター会場でのビール配布はいらないと思います。
当方が関係したセッションでは部屋のサイズは幕張と変わらないかややマシだった。いろんな都合の人がいるだろうから会場は横浜と幕張で交代に実施するのも悪くない。
会場はパシフィコ横浜のほうが使い勝手が良いが、日程がゴールデンウィークというのは非現実的である。
横浜パシフィコは特に自分のような地方大学または海外からの出席者にとって地理的にもリフレッシュメントと刺激の要素が大きく参加のモチベーションが高まる大変良い会場だと思いました。口頭発表の部屋はやや手狭な場合もありましたが、ポスター会場は幕張と比べてスペース的にとても良かったと思います。再来年以降も是非横浜パシフィコでの開催して頂ければと強く希望致します。ご検討宜しくお願いいたします。
上の意見は登録費によっても、意見がかわります。2カ所での登録費が同じとした場合の意見です。
セッションのプログラム作成（講演時間など）にもう少し自由度があってもいいのではないのでしょうか。
International sessions were good; should be continued.
2017 年以降開催地について、5 月末パシフィコ横浜開催はベストです。どうぞよろしくお願いします。
会場が狭い。乱立するセッションを整理すべき。ビール代は飲みたい人が払い、その分少しでも参加費を下げよ。
スタンブラリー楽しめました。 無線 LAN 接続状況が悪く、オンラインでアブストラクトを見るなどには使えなくて残念。
災害や資源、環境、軍事、宇宙開発など「科学と社会」関係の問題に連合として真摯に切り込むべきではないか。日本というか、西太平洋地域独自の貢献が可能なのか、可能ならどのような形態なのか、非常に気になります。
飲み物などのサービスをするかわりに少しでも会場費を下げていただければ助かります。
今年は参加費が少し高かったです。
連休をはずして、パシフィコ横浜での開催を希望します。
2014 年は幕張より、人が少なかった気がする。 幕張も横浜も好きです。
周囲の学生の意見も含めると： EGU 開催期間と離れていたほうがよい。 幕張は他に何もないので大会に集中できる点が、大会の趣旨にあっている。 ゴールデンウィークにかかるのは可能な限り避けてもらいたい。 横浜は、東京在住者には近いのは便利である。パシフィコは狭い感じがする。
ゴールデンウィーク期間中の開催は移動が大変なので、少し考慮していただきたい。
大会参加費の料金設定を考えると、会場及びサービス内容が貧弱に思われる。
発表するための費用がとんでもなく高価であり、参加する価値と釣り合わない。会議場使用料も高すぎるので、別の会場を借りて会議を行った（半額）。時期は今年と同様、場所は幕張がベター。
普段見慣れない分野が多く、楽しませて頂きました。
口頭講演の開始が朝 9 時なのは、厳しい。あと 30 分繰り下げられるとありがたい。
Please provide more chairs to sit, and private room for moslem to pray.

It would be best if the exhibitors and NASA Hyperwall were in a different room from the science posters, so they don't compete.
参加費が高い。企業展示を増やしてほしい。
初参加。高校生セッション、NASA ブースなど新鮮だった。論文ではなく、印刷しないので投稿料は不要ではないか。場所は横浜で良いが時期は連休を外してほしい。
口頭講演を2～3聴いたが、必ずしも高いレベルとはいえないように感じた。 ポスター展示を2～3見たが、説明人が広報担当者とうで意味がなかった。研究者は張り付いているべきです。総体的に言うならば、学会としてはもっと質の向上の努力すべきだと感じる。
休日（週末、祝日）開催は、ワークライフバランスの観点から、避けた方がよいと思います。
連合大会の開催自身は賛同しますが、今後セッションの国際化を本気で図るとなると、既存の WPGM および AOGS との共催を検討されるのがよいかと思います。特に、中韓ほか東～東南アジアから旅費を出してでも参加したいと思われる国際学会に育てていく意気込みも必要でしょうか。
会場が狭く、入るのが困難なセッションがあり、改善して下さい。
●参加したい企画が重複していた。ゆとりのある日程で実施して欲しい。 ●受付を担当している方の中で、参加者の支払っている参加料で（結果として）日当をいただいているという意識が低い方がある。「こんにちは」さえも言えず、様々な対応が遅く、大会に関する質問について聞いても答えられず、横柄な態度で、参加者に対して失礼な態度であると感じた。コンビニのアルバイトにさえも劣る。責任者や苦情係を、すぐに苦情を言えるように配置して欲しい。
大変良くオルガナイズされていた。事務局、大会運営委員会のご努力に敬意を払う
初めての場所だったので、移動に手間取ってしまったが数年は同じ場所で開催して欲しい。
ポスターのコアタイムはもっと早い時間帯（たとえば17時～18時半）を希望します。 ポスターの3分紹介はなくてもよいと感じました。
・そもそも、今回なぜ会場が横浜になったのか、その理由を把握しておりません。何か幕張メッセでの開催に問題点があるのでしょうか？ ・上記質問中、横浜での開催の場合、なぜ開催日程がゴールデンウィークになるのでしょうか。幕張の場合と同じく5月後半の開催は不可能なのでしょうか。個人的な理由なのですが、ゴールデンウィーク中には地元の行事やその準備があるため、できれば一週間近い出張は避けたいところです。
あてがわれた部屋が狭すぎて、多くの聴講者が座れず迷惑をかけてしまいました。あれは講演会場として使えるような部屋ではないです。ただし周辺環境は横浜のほうが断然良いので、狭過ぎる部屋の問題が解決されることを期待して、次期会場として横浜を推します。
全般的に幕張よりよかったと思うが、レストランなどが混んでおり昼食の場所を見つけるのに苦労した。弁当の販売も検討してはどうか。また休憩スペースも少なかったように思う。
意図の不明、もしくは明らかに企画倒れのセッションがある。セッションを立てるときに事前にしっかりと構成などを考えて頂きたい。特に学術会議との連携セッション。
新幹線の駅から近いことが、参加者にとって、何よりも便利と思いました。
要旨締切日をあと1週間延ばしてほしかったです。
会場配置がわかりやすかった ポスター会場も広くはないがゆったりして、集中して議論ができる雰囲気だった
幕張より横浜の方がアクセスや飲食店などの周辺の環境がよいと感じました。

2014 年大会は、参加したいセッションが時間的に重なっていることが多く、残念でした。
学生賞の審査が大変だった。
会場が狭すぎるセッションが目についたが、利便性、（他の研究者から聞く）宿泊施設の選択肢の多さを考えるとパシフィコでの開催が好ましいと感じた。幕張ではホテルが高く、関東圏でも宿泊しないと全日参加を通いで参加するのは厳しい。6 日間にして広めの会場を使うなどで狭すぎたセッションの解消を図れば尚良いと思う。
非常に充実したプログラムでした
同時に 2 つ以上聴きたいケースがいくつもあった。
小中高教員は GW 期間中は忙しいため、5 月下旬の開催を希望します。
やはり、中華料理が美味しく、活気のある横浜は最高！
少し会場が狭かったように思います。立見になることが多く、廊下で少し休むようなベンチのスペースも少なく感じました。ポスター会場に当日のセッションの区切りを看板のようなもので示したらわかりやすいかと思いました。
発表会場が狭かった。立ち見がたくさんいるほどであった。
今回は会場の広さとの兼ね合いがあったと思いますが、学会や協会等の出店が少なかったですね。
その点、幕張会場はよかったです。横浜の場合でも、出店数を増やすことを考えて下さい。
パシフィコ横浜は便利で雰囲気も良かった。幕張は遠い。
開催地と日時ですが、5 月後半に横浜でという選択肢もお願いします。是非横浜での開催をお願いしたい。
会場の大きさのバランスが余りにも極端で、自分の参加したセッションでは多くの人が立ち見になっていた。
アプリが良かった。幅広い分野の講演を聞くために役に立つ。
①聞きたい発表が重複することが多い。異分野でも同一研究対象の（多い）セッションのプログラム配置に更なる配慮を願いたい。
②50 人部屋に 90 名以上が集まり聞けない状況は改善願う。
③会場は、廉価な宿泊施設の多い横浜会場を望む。
パシフィコ横浜は、会場そのもの、ロケーションともに、幕張とは比べ物にならないくらい良いです。参加費が高くなってもいいので、今後は横浜開催を希望します。会期は、6 日にすると長過ぎて部分参加が増え、かえって交流が少なくなると思います。
幕張よりアクセスが便利で、会場もきれいだった。
初めての参加でしたが有意義な大会でとても良かったです。幕張メッセの展示会等に時々行きますが交通の便、近隣のホテル事情、昼食時の移動を考えるとパシフィコ横浜は大変便利かと思います。
会場が変更になり色々作業が発生したと思いますが、滞りない運営は素晴らしかったと思います。駅からも近く、食堂も多くて助かりました。
横浜での開催には賛成。とてもよい雰囲気でした。ありがとうございます。またスマートフォン用のソフトも大変助かりました。ただ、今回はセッションがずいぶん小分けになり、部屋も狭く、聞きたい発表の時間帯が重なることが多かったです。また各学会の思惑がお有りなのでしょう、連合大会と銘打ちながら、ユニオン・ジョイントセッション以外は個別学会の発表会の様相が強かったように思います。y にオン・ジョイントセッションをもっと増やすほうが良いのではないのでしょうか？
それに関係しますが、一つ目についたのが身内ばかりのセッションです。例えば下記セッションを聞きましたが、ある大学のイチ研究室からの発表がセッション内の 8 割（全 22 発表のうちの 18 発表）を占めていてウンザリでした。こういう活動は研究室で別途シンポジウムなどを開いていただくべきで、連合大会にはふさわしくありません。今後はこのようなセッションは締め出すべきではないのでしょうか？
http://www2.jpgu.org/meeting/2014/session/S-TT07.html
部屋の大きさが小さ過ぎて聴衆を収容しきれない会場が多かったことを除けば、全般的には良かった。

休日が 4/29 の 1 日しかないのは、出張で参加できる研究者でない者にとっては参加しづらい。
連休中の開催は、家庭サービスとの両立が難しいです。
上記の選択は時期のみによる判断。会場としては、諸室の面、アクセス面、会場外の状況から、横浜の方が良い。5 月後半／横浜開催がより良い。
iPad のスケジュールに間違いがあったのが残念。会場と周辺施設は良かった。2016 年はゴールドシュミットコンファレンスが 6 月末にパシフィコ横浜で開催されるようなので、同会場での開催は避けてほしい。
ブースのスタンブラリーは良い企画でした。ジオパークのセッションは連続して開催したほうがよかったと思います。
できれば 5 月末（あるいは中旬）に横浜で開催してもらえるとよい。理由：4 月開催では学会総会の準備期間がとれず、学会事務局が極めて多忙となるため。
会場はアクセスもよく快適であったが、割り当てられたセッションの会場が狭すぎて大変であった。再考をお願いしたい。せめて 70 人程度は座ることのできる部屋がほしい。
パシフィコ開催の場合は参加費用が上がるのでしょうか？
写真撮影は原則 O K にすべきです。
会場設備はパシフィコの方がよい、しかし宿泊は幕張の方がよいーバリアフリーの部屋の設備の問題のためインターコンチネンタルが使えず宿泊しても自動車での往復が必要になる、今回は関連セッションが平行であることが多く聞き逃した講演が多いこれはセッション配置の問題で会場問題ではないが平行セッションを減らす意味で長い会期を希望した
パシフィコで GW 以外での開催を希望いたします。
津波堆積物を、2 年連続で聴講したが、2 年ともに会場の定員を大きく上回る参加者があり、今年は、立ち見どころかドアを閉められない状況であった。（光が入り、プロジェクタが見えにくい）
火災など非常時には危険であり、管理上の責任も問われかねないので、来年からは大きな会場に変えたほうが良いと思います。
横浜は時間を潰す場所がたくさんあって良い。食事にも困らない。
大学の授業を抜けられない場合が多いので、毎回、参加できるか間際（プログラムが確定してから）にならないとわかりません。参加できる曜日は大体毎年同じです。何か良い方法はないのでしょうか？内容が重複する小さなセッションが多すぎる気がします。うまくまとめられないでしょうか？2 日間のセッションならコンビーナにどちらかの日程で発表日を割り振ってもらうこともできそうです。高校生セッションは良いと思います。中高の先生のセッションもあっても良いかもしれません。
羽田空港から便利なので、地方の人には大変良い。昼食をとる場合、価格的に高価な店が多いので、学生には利用しにくい。移動販売のサンドイッチ店など入口に置けないでしょうか？
ポスターセッションの時間が短かった。
Find low cost hotels
研究者の最新の情報を聞くことが出来て、大変勉強になりました。
横浜は会場付近に手ごろな料金のホテルがなく、宿泊場所を探すのに苦労した。ゴールデンウィークにかかっているというのもあってか、ホテル料金が高く、また、新幹線も混んでいた。時期、ホテルの確保を考えると幕張のほうがよい。
全般にセッション会場が狭すぎる。
・会場案内は良かった。わかりやすかった。 ・スタンブラリーの景品のはけが早すぎて最後のほうは一つひとつにもらえるはずの景品が、全部集めて 4 つまでとか勝手なルール変更があり、よくなかった。
大会運営には大変満足しております。一部のセッションは部屋のサイズが適切ではありませんでした。
横浜の方が幕張に比べてホテルや食事場所に余裕があり、快適に参加できました。
パシフィコ横浜は、幕張の会場より設備（WiFi）が非常に良かった。

議論をしたり作業をしたりするためのテーブル、いす、電源が極めて少ないです。AGU 並みに各地にあると助かります。
2014 年大会について、一部会場が出席者数に比べてあまりに小さい例が目立った。連合の企画であるという理由で大会場を占めるのは効率的ではないので、過去の出席者数を参考にした適切な会場割り当てを行うべきである。 横浜は交通の便もよく、夕食の場所にも困らないので、大会を開催する地としては適当であると思う。
色んなセッションに参加してみて、研究者同士の雰囲気や関係が分野によって異なると感じました。地震波のセッションはとても雰囲気が良く、若い方も生き生きして好印象でした。来年も院生になっていたらもちろんのこと、就職していても参加したいです。
羽田からのアクセスがよくホテル数が多いので、今後も横浜で開催してほしい。できれば、ゴールデン週間を外してもらいたいが、他の期間が空いていないのであればやむを得ない。
・祝日と重なった日は周辺の飲食店（ファーストフードを含む）の待ち時間が非常に長く不便でした。 ・理想を言えば、ゴールデンウィーク以外の日程で横浜開催がベストと思います。
マイルスケジュールを組めたり要旨を読むことのできるアトラスのモバイルアプリが便利であった。
ポスター会場が手狭で込み合うのが問題だと思います。週末に幕張メッセの展示場を借りて、すべてのポスターを全部一日で広々と発表するのは如何でしょうか。
聴衆の数にあわない大きさの会場（50 名の会場に 90 名以上の聴衆や数百人規模の会場に数十人の聴衆）が多すぎた。セッションへの講演申込数や最近のセッションの様子を見れば十分に予想できたものが多い。特に横浜は小さな会場が多いようなので、大変だろうがアレンジをしっかりとらないといけない。
2 階で展示・販売をしましたが、特に 29 日（祭日）は高校生も沢山立ち寄られ、活気がありました。また船上での懇親会は楽しく、美味しかったです。もちろん懇親という目的も達しました。人数に限りがあって参加できない方もいらしたようですが。
幕張の会場より、メインホールの施設はよかったが、座長から会場が見難いらしく、質問者が見えていないようであった。そのほかの発表部屋が、やけに狭く感じたが、メインホールとは逆に発表者との距離が近く、内容、質疑は座長が適切に行え、よかった。
横浜開催を希望しますが、日程については 4 月末とし、5 月 3 日以降にはならないようにしてほしい。
興味ぶかい話題を選んで聞くためには部屋を入れ替わらなければいけませんので、極端に混んでいる部屋がないほうがありがたいです。また、システムなどが年々便利になってきていますが、もう少し、参加費を抑えてもいいかもしれません。
パシフィコ横浜の開催は極めて良かった。交通の便、会場の良さ、その他どれをとっても幕張より断然良いと思う。来年が幕張の開催なのは残念だが、それ以降は多少参加費が高くなっても、ぜひパシフィコ横浜で開催してほしい。
連休中の開催は、よいところもあるのですが、前後が忙しいので、5 月後半の開催を希望します。開催地としては、横浜が参加者にとっては周辺環境も含め楽しいかもしれません。横浜は会場と昼食場の距離やテーブル数の関係で、昼時間を長くとる必要があります。また、GW は一般客の来訪ともバッティングするので、昼食をスムーズにとるのが難しかったです。
私個人としては、幕張よりも横浜の方がアクセス面でも気分面でもよい。幕張は言わば人口の街なので、海外からの参加者にも歴史のある横浜の方が良いのではないだろうか。横浜の方が部屋が多いので 5 日間構成にできるのもよい。一方で遠方から参加する方々の話によると、連休にかかるため交通機関のチケットを非常に取りにくかったということだった。また、そもそも連休にかかること自体が困る場合もある。2014 年のように、なるべく休日にかからないで済むような年に、ときどき横浜で開催するというのがよいのではなかろうか。
横浜で行ったのが非常に良かった。幕張は周りに店がなく、都心から遠く、良い点が見当たらない。幕張で行うことだけは今後もやめてもらいたい。
初日に全日分のプログラム（会場、タイトル、講演者がまとめてある新聞紙状のもの）を頂けると良かったです。 HP のプログラムもセッション、タイトル、講演者の一覧表があると、聴きに行きたい発表を見つけやすかったと思います。あと、名前やキーワード検索できるようにしてほしいです。
ポスター会場の空間が結構広くて良かったです。所々にあったイスと机がもう少し多くあるとありがたいです。

名札の文字を大きめにしたい。ある程度離れていても名前を確認できるようにしたい。
場所、会場について不満なところはなかった。 セッションについては多くの重複するセッションが平行で行われているように思う。整理する権限を大会事務局を持ったほうがいいと思う。
JpGU should arrange a space for muslim participants for their prayer, also asking any nearby restaurant for arranging halal food.
2014年：部屋によっては椅子をもう少し入れることが可能ではあったと思われる。ポスターボードの番号がプログラムに掲載されていないのは不便であった。横浜は場所としては魅力的なので、1年ごとに横浜と幕張で行う案もあるかと思う。
Yokohama Pacific had excellent facilities; the organisation was excellent too. Congratulations to the secretariat for such a magnificent conference. As for the JpGU Awardees, I will also like to suggest considering giving awards to the new generation of scientists or even outstanding postgraduates as this will also encourage them to continue in their efforts... the new generations are the seeds in the future of science.
All sessions should be in English and or Japanese given that this is an international conference. This would of course attract international researchers
横浜の会場はいいが、年度開始後間もないことと連休がかかることで、4月開催は忙しすぎる。
1) ポスターコア時間が遅かったので、1時間早いとありがたい。 2) 興味深い発表、展示が多々有った。出展者の了解を得て、展示品の写真撮影をしたい。
横浜は遠いです。幕張での開催を希望します。
2014年のポスター会場のレイアウトが分かりづらかったのと、ポスターボードが90度回転した配置の方が、歩きやすいと思います。5日間と同じ分野のセッションが重なりすぎると、ポスターの終了が遅くなるのがつらいです。あとは会場がせまくて入ることすらできないセッションがいくつかあったのが残念です。
セッションが多すぎるので、重複する内容のセッションの統廃合が必要。 一人あたりの講演数に上限を設定して、大会規模の肥大化を防ぐ必要がある。
ポスター発表会場のボード番号が分かりづらかった。
高校生の発表など素晴らしい企画が多くすばらしいと思う。 その一方で、参加費がとて高いため、なかなか毎回参加というわけにいかない。
会場、運営などについて満足でした。
65歳以上70歳未満の人の参加費を半額にすることはできないでしょうか。団塊の世代がこの年齢層になっているので、ほっておくと参加者が減少すると思います。
The sessions in JpGU meetings were well organized. Almost every session focused on in the same issue and going to the same direction to address the same issue. But I think it will be more interesting if each session can solve the same matter/ topic from the different directions and open the possibility for research collaboration.
一部では、部屋に入れない状況も発生していた。この部屋割の改善が必要だろう。
全体的に良かった。午前中だけのセッションの場合のポスターコアタイムを夕方に設定されるのは不便だった。
自由に座れる椅子がもっとあれば良いと思った。4階の会場が狭すぎる。スクリーンも見にくかった。
男女共同参画の企画はいいのですが、それを他のセッションと重なるように設定することは良くないと思います。他のセッションを逃してまでそこに長くいたい人は誰もいないと思いますよ。

会員の啓蒙が目的だったら、大きい部屋でお弁当無料配布でお昼休みの時間帯に開催するのが賢いと思います。
部屋の大きさがバラバラで、セッションによっては立ち見すらできないほどであった。その点では幕張メッセの方が良い印象がある。
U-08（環境災害）、U-10（地球惑星科学と行政・社会）などの重要なセッションは、もっと多くの会員が出席できる、さらには、一般市民の参加も可能とする、などのプログラム構成（パブリックセッション化を含む）の検討が必要である。
関連する分野の会場座席数は少なく、立ったまま聞くのがつらかった。
EGUと同じように、数年先までの日程を公表しては如何か。会場も、全国に数カ所は大きなコンベンションホールがあるのだから、首都圏と地方で交互（隔年）に開催するなど柔軟に検討していただきたい。
自身が神奈川在住なので、横浜の会場はとても便利で期間中 初めて 4 日間の参加が可能だった。首都圏にいても、毎年幕張は遠く通えず 参加スケジュールが限られる。コーヒーやポスターセッション時のリフレッシュメントは嬉しいが、全員には数も限りあるので（飲めないことも多かった）参加費を少し押さえる方が有難いと思った。
セッションによって、部屋が狭すぎた
同伴者券の実体がわからないが、経費はなんのため？ ホームページに情報がない。 AGU メンバーの会員料金での登録方法がわからない。こちらも情報がない。
参加費が高い…
例年通り幕張メッセで開催すべし。横浜開催の場合、今年と同様不参加宣言。
The end of April is a very busy time in Japan. The airports and the stations are crowded. Is it possible to organize JpGU meetings at Pacifico Yokohama at the end of May?
パシフィコ横浜は、会場が 1 階から 5 階にわたっているので、会場間の移動が面倒すぎる。また、開催期間については、4 月下旬では早すぎる。例年通り、5 月下旬のほうがよい。
この度は、25 周年大会のご成功おめでとうございます。出展に際しましては、お世話になりましてありがとうございました。出展者として参加させていただき、スタンプラリーは大変良い企画だったと思いました。来年以降もぜひご検討いただければ幸いです。
EGU と重複していたことによるデメリットは大きかったと感じる。
会場周りの交通の便利さ、飲食店の豊富さ、ホテルの多さ、がよかった。
パシフィコの会議室には収容人数に差が大きく、部屋が大きすぎた、小さすぎたの問題が多かったように思う。 また、GWシーズンの開催は、近隣の飲食店の混雑が、学会参加者以外にも影響をおよぼしていたと感じた。
場所よりも時期の方の制約が大きい。会期の前後いずれかが GW に掛かると、地方からの参加者は切符の手配が困難になるので、避けて欲しい。
開催時期はなるべくそろえた方がよい。GW は避けるべきと思います。
HP ページが見づらすぎる。自分の発表時間やセッション・会場へのアクセスを探すだけでも大変な苦勞をした。一方で大会アプリの宣伝に力が入っていたり、不要な部分にエネルギーが注がれていると感じた。必要な情報に最短でアクセスできるようにするべきである。
地形学、第四紀学、火山学のセッションでほとんどの講演において会場定員オーバーで入室もままならいような状況が見られた。アプリの参加スケジュール登録を利用するなどし、改善をお願いしたい。また、同アプリの機能を大会事前に解放し、会場の最終調査等ができないでだろうか。
今年はポスターの会場が狭く感じました。
学生アルバイトをさせていただきました。スタンプラリーの景品を渡す係をしたのですが、こちらも来られる方もルールを把握していなくて、かつ商品もどれがどのブースののか分からなくなってしまう、混乱させてしまったかなと反省しております。こちらに書くべきことではないかもしれませんが。

幅広い分野の最新の研究に触れることができて刺激的でした。
会場の収容人数が不足するセッションがいくつかあった。参加料が多少あがっても、広めの部屋を確保するように努力して頂きたい。
学期中の開催であることはやむを得ないが、4 月末は EGU と重なるため 5 月末の幕張が良いと思います。
場所は横浜、期間は GW を避けてくれると良いです。
日刊紙の色を、口頭とポスターで分けて欲しい。また、網掛けが黒過ぎて、少し暗いと読み取れない。
GW 以外にパシフィコ横浜開催がのぞましい。
プログラム内の展示場所案内地図の表示番号が小さく、ポスターの展示場所が分かりにくかった。 ボードの番号も講演番号でなかったため、探すのに戸惑った。 セッションごとの集まりが今までと異なり、縦（奥行）方向だったので、その点でも戸惑った。ボードの番号は、講演番号にしていたきたい。毎日の張替は大変でしょうから、期間中の全ての番号の書かれたものにすれば良いと思います。
ゴールデンウィークでの開催の場合、博物館では特別勤務態勢になるため、博物館に勤務している私はきわめて出席が難しい状況で、今年は 1 日のみの出席となりました。また、GW は 4 月中旬まで勤務体制がわからず、学会への出席が可能な日は全くわからないため、発表の申し込みは困難な状況にあります。このため、GW 期間以外での開催を強く希望します。
場所は横浜で、時期は 5 月末開催が希望です（選択肢にはありませんでしたが）。
横浜は素晴らしい場所ですが、GW 期間開催という点が不満でした。他は何もありません、素晴らしい学会でした。
パラレルセッションが多すぎて中身が薄くなっていると思います。
GW を挟み、また海外の大きい学会（EGU など）とも日程が重複していたため、セッションによっては（著名な先生が来れないなど）参加者数にばらつきがあったように思える。会場確保の点で厳しい実情はあると思うが、他学会との調整をしていただけるとありがたい。
PC の貸出をしていただけてとても助かりました。
横浜はアクセス等の意味で大変都合が良かった。今後も是非横浜にして欲しい。
GW 前の横浜はホテルも安く空いているので、ホテルが少なく高い幕張より便利がよい。GW 中はホテルを考えると開催はいずれも不適當。以上、遠隔地から参加の場合の感想でした。
今年はタイミングが合わずに久々に不参加となってしまいました。横浜開催は魅力的ですが、参加費が高いことが気になります。ゴールデンウィークにかかることについては賛否両論あると思いますが、私は 5 月末開催の方が落ち着いていて良いと思います。
ポスターのコアタイムをせめてあと 30 分ぐらいは延ばしてほしい。貼られている数が多いことを考えると、今の時間では少なすぎる。
地下資源関係のセッションが無いのが気になる。海外の資源開発、海底資源の開発などテーマはまだ色々あると思う。是非この分野にも脚光を当てて欲しい。
場所は幕張メッセよりもパシフィコの方が良かったです。（会後に食事をしたりする場所の選択肢が多い。）私の理想は「5 月末開催で場所はパシフィコ」です。
・発表者がスライドやポスターの撮影 OK を簡単に意思表示できる仕組み（「撮影 OK」ロゴなど）を作って欲しいです。SNS を通じた他人の研究紹介がやりにくいという声を複数人から聞きました。 ・アンケートの選択肢に「ゴールデンウィーク中開催」があるのは、運営の良識が疑われます。仕事で参加している人も多いのですから。
Some presentations in the Japanese sessions were actually in English, but there was no this information in English program book. So, foreign participants sometimes missed the opportunities to attend those presentations.
横浜での開催は良かったが、4 月末というタイミングが良くなかった。

参加費が高い。今まで参加された方も、参加費が理由に参加を断念したとの声を聞きました。
会場については部屋のサイズを勘案して幕張とした（詳細下記） セッション提案について、類似セッションについては事務局がより積極的に統合を働きかけてはどうか。現状ではセッションが多く、小さい部屋まで使うことになり、オーディエンスが部屋に納まらないことがある。セッション数を減らすために、発表件数を絞ることを考えてはどうか？現状で「同一セッションについて口頭 1 件まで、ポスター合わせて代表者として 2 件まで」を同一セッションについて 1 件までに変更し、それに加えて、大会全体について合計 2 乃至 3 件という制約を加えるのが良いのではないか？
新幹線からのアクセスが良く、ホテルも比較的安価であったため、参加費の値上げを考えても、幕張開催に比べてトータルコストは低くなった。今後も横浜開催を望む。
学会参加費が昨年よりも高くなっているのに困惑した。横浜だと高くなってしまうのなら、幕張開催でよい。また、ゴールデンウィーク中の開催でないほうがうれしい。
4 月下旬開催は、学振の申請を受け入れ先と相談したり、申請に関連する情報を仕入れたりするのに役立った。よって少なくとも院生やポスドクにとっては悪いことばかりではないと思う。 セッション会場は参加者数に対して部屋が狭すぎるものがあつた。1 日減ったことで、関連分野の平行セッションが増えた。特に宇宙プラズマ関係は 3 学会合同セッションが開催されていたので、今回に限っては 6 日でもよかったと思う。来年は 5 日で十分だと思う。
ポスター会場、出展会場が広がったのは良かった。
さまざまな企画が増えており、良かったと思いました。
とくにありませんが主催者の皆様、本当にごろうさまでございました。何も問題を感じなかったことは、良く準備された大会だったからだと思います。
昼食をとるのに苦労した。どこも行列で待たされた。
横浜はアクセスがいいが部屋の大きさが半端、毎年連休半分つぶれは気が重い
Hope meeting rooms can be arranged more reasonably.
開催時期は 4 月末の方が良い。5 月末開催だと、秋の学会までそれほど間がなく（9 月だと 3 ヶ月強）、研究の進展がないため、発表内容が似たようなものになってしまう。
幕張よりも、近くに色々ある横浜の開催の方がいいなと実感しました。今後は横浜で開催を希望しています。
パシフィコ横浜の講演会場（津波堆積物）が狭すぎ、問題である。
横浜の方が交通の便や周囲の食事場所があつてよかったと思うが、会場の部屋 1 つ 1 つが狭く少し無理があつたと感じた。また、大部屋でガラガラのセッションもあれば、人気セッションにも関わらず小部屋で人が溢れて見たくても見られない人が発生するなどのトラブルもあつたので、運営上の工夫が欲しいと思う。また、印刷物や名札などを可能な限り簡素なものにして、参加費をなるべく抑えていただけると学生としてはありがたい。
会場はよかったです。横浜会場は幕張よりアクセスが良く、周辺のホテルも昼食場所も多いので、便利と思います。上記の設問から、パシフィコ横浜ならば、ゴールデンウィーク中でなければならぬようですが、できれば横浜会場で、時期が 5 月中～下旬がよいです。
会場へのアクセスは良かったと思います。ただ、自由に使える AC 電源を探せませんでした。是非、必要です！ セッションに依っては混雑していたところもありましたが、人数予測を見誤ったかなとも思いますが、そこは修正できると思います。また…GW は避けていただきたいと思います。
パシフィコ会場はよい環境であつた。しかし、自宅が千葉なので幕張が便利と考えています。
横浜パシフィコ会場では、自由に使えるテーブルコーナーがなかったのが、不便であつた。また、会場によっては、無線 LAN の電波が弱いところがあつた。

学振の提出を控えている大学院生のことを考えると、5 月末のほうがよいのではないのでしょうか。
横浜パシフィコの会議場では、部屋が大変狭く、立ち見ばかりだった。横浜は場所は良いにしても、部屋が狭いので会議場所として失格。幕張のほうがましでしたが、それでも狭かった。
せっかくの連合大会で日頃朝貢する機会のない興味ある発表が多数あったが、同時に行われるセッションが多かぶってしまうものが多かったため、聞きたいものの半分くらいしか聞くことができなかった。
また、多分野が集まって大会を行っているにもかかわらず、限定的な内容のものも多く、もったいない。
impressed by the conference facilities at Pacifico Yokohama.
事務局の皆様、ご苦勞様でした。来年もよろしくお願いします。
調整が大変なことと思いますが、似た分野のセッションの開催日は近い日にまとめていただきたい。
とても良く組織されていて参加しやすかったです。ポスター会場がとても狭かったのは辛かったです。
セッションプログラムにはセッション記号と発表番号しか入っていないのに、ポスター板には板番号しかなく、発表者にも発表番号のポスターへの記載を徹底していないので、ポスター会場入り口のマップだけを頼りに目当ての発表を探すのが大変でした。
是非発表番号のポスターボードへの掲示あるいはポスターへの記載の義務付けをお願いします。
ポスターコアタイム終了後の見学時間が欲しい(ポスター発表の後で何も見られなかった)
有意義な試みである。期間はせいぜい三日間でよい。登録手続きをもう少し簡単にする。
ポスターはやめてすべて口頭発表が良い。かつ、できる限り時間をとり、討論時間を作る。
開催地は横浜がよい。 期日は 5 月末。
狭い部屋から人が溢れて聞くことのできなかった講演があった。十分な広さを確保してほしい。ポスターの各ブースには講演番号の表示がなく、ポスターが探しづかった。ポスターに講演番号を記載するようにしてはどうかと思いました。
幕張よりもアクセスが良く、助かりました。会場回りも公園あり、フードコートありで合間に上手くりラックスできました。
別分野からきた外部からの入学生からすれば、GW というはやい時期で右も左もわからない状態だったのでできれば 5 月下旬の方が少しは自分のテーマも固まりつつあって良いかなと思いました。場所はやはり幕張より横浜のほうが、ご飯を食べにいくにもいろいろあるし交通の便が良いので横浜がよいかなと思います。(しかし日時と会場は両立が難しいですね・・・)
講演会場がもう少し広いと良い
今回は聴講のみで参加。パシフィコ横浜の一部の会場が大変狭かったので、座れない人がかなりいた。改善の余地があった。毎年幕張開催より、それにしても 3 年に一度くらい横浜開催の方が良いのではなかろうか。つくばからの参加者でもそのような意見がかなり聞かれた。
パシフィコ横浜のほうが交通アクセスや宿泊施設の点で幕張よりも便利であった
パシフィコ横浜は狭い会場が多く、階の移動が多いのが難、ポスター会場は通路が必要と感じた。
非常に近い分野のセッション（発表）が同時にあり、一方しか聞けずに残念であった。
私が特に聞きたかったのは、“地震予知”と“CSE P”のセッションです。
やはり他の国内学会に比べて参加費の負担が大きいのが気になる。学部生以下の参加費無料の参加者にとっては敷居の低い学会だが、一般の研究者にとっては気軽に参加しづらいのでは。学会の位置づけにもよるが、最先端の研究者を集めて活発な議論を進めたいのであれば、会場の選択や設営に際して、金銭的な意味での参加しやすさも加味してほしい。
横浜は、東武・西武～メトロ副都心線～東横線直通化によりアクセスが格段に良くなり、行きやすくなりました。今回、私にはそのメリットがあったので、今後も行きやすい横浜を希望します。
横浜開催は、多くの方にとって負担が少なく思います。ただ、GW 中という期間設定はもっと前後にずらせないでしょうか？ EGU をはずした 4 月中か 6 月の可能性はいかがでしょうか。5 は、横浜がいいですが、GW 中では参加しづらいです。
横浜での開催は羽田空港からのアクセス、ホテルやレストラン確保の容易さなど、従来よりよかったと思います。

初めての学会参加だったが、思ったよりも楽しかった。今回は自分の発表が大変で他の発表を見ることができなかったのも、次に参加する機会があったら、他の人の発表も見たいです。
会場が横浜になって自分にとっては行きやすくなったが、参加費が高くなったことと発表会場の部屋が狭かったことが残念でした。
大学の授業期間を避けていただけると幸いです。
パシフィコ横浜の会場は都心に近くて良かったです。
似た分野のセッションが同じ時間帯にあって移動が大変だった
ポスター会場が狭い。プレゼン準備や休憩するためのスペースが十分ではなかった。連休中はよくない。数ではなく、面々として参加者が限られる傾向にあった。
トイレが混んでますね。
オーラルの会場数が増えたが、一部屋あたりが狭く、立ち見が多かったように思う。また、ポスター会場も狭かった。ポスターでのビールの配布は、時間帯を考えたほうがいいのかもかもしれません。発表中に、かなり酩酊している人を相手にし、不快な思いをしました。
JPGU is an international meeting, which has participated from many different countries. In this case, English proficiency is an important pillar for staff. I was presenters on April 28th, I went to help counter for paying the fee, but I faced with a strange behavior which made very bad image from this year JPGU for me. A Japanese lady made me waited for a long time. she couldn't speak English at all. But I understand Japanese because I study in Japan. My Family name is long because some historical background, but She mocked my family name several times(in Japanese). Her behavior was so racist, which made me and my husband(he also participated) so disappointed. she gave very guests and presenter pen and meeting information book, but she didn't give none of them to us. I think this kind of behavior is very inappropriate in these decades and especially in the academic place an international conference. I strictly suggest you to pay more attention for your staff selection.
西日本居住者にとっては千葉より横浜の方が便利である。平日に長期間、勤務を離れることが難しいので、連休期間を利用した方が参加しやすい。
休憩者が座れる椅子が少なかったのも、休憩室を設けて欲しかった。セッションによって明らかに狭すぎる会場があったので改善を望む。
・通路など会場内のスペースに余裕があり、空きスペースを展示やうち合わせスペース、ポスター発表等に有効に利用できると良い。 ・リフレッシュのためのコーヒーの販売が無いのがつらかった。喫茶店があったが、いつも込んでいた。 ・プロジェクトのトラブルが少なかったのは、P C切り替え器を使わなかったためだと思う。P C切り替え器は電気信号の口スが大きいため、P Cがプロジェクトを認識しないことが、これまでのトラブルの原因に思う。今はP Cの起動が早いので、講演前に接続して待機する（切り替え器を使う）必要はないだろう。 ・ゴールデンウィーク開催でなければ、横浜会場開催に賛成。
個人的ではありますが、就職活動の一番忙しい時期（4月）と重なり、就職活動と発表準備の両立が難しく、就職活動の進み具合によっては、連合大会期間中の説明会や選考活動等とのスケジュール調整で不安があった。
5月末開催で横浜パシフィコが良いですね。
会場へのアクセスの良さは横浜が勝る。EGUや連休後半（5/3-5）と重なることは避けていただきたい。
開催地・場所はたいへん魅力的ですが、他行事と重ならないゴールデンウィーク以外の日程での開催が、（関係発表者のスケジュール調整等）望ましいかと思います。
立ち見もあふれて入りきれないくらいのセッションがありました。どのくらい人が見にくるかを予測するのは難しいとは思いますが、善処

して頂けると幸いです。
ポスター会場やロビーなどにフリーの机と椅子を、もっと設置してほしい。
Goldschmidt のように、会場系の学生はボランティアにすべき。人数の確保に不安があるのかもしれないが、ボランティアでも学生が手伝ってくれるような呼び込みを考えなければならない時期なのではと思う。
パシフィコ横浜は東京からより近いので便利ですが、ゴールデンウィークしか取れないので、地方から来るのが大変です。幕張は時期は良いのですが、東京から遠いのが欠点です。2カ所を候補として、交互開催とか、毎年状況を見ながらどちらかにするのはどうでしょうか？
連休期間を外していただけたら、場所はパシフィコ横浜の方が良い。
横浜が場所としては断然いいのですが、時期がGW あとの方がよいです。
ポスター発表会場が AGU ぐらい広くできることが望ましい。
高校生の発表の質が高く大変興味深く聞かせて頂きました。引き続き楽しみにしております。
・口頭セッションの会場が狭かった。
会場の雰囲気は良かった。アクセスが良く、周辺の宿泊施設も、幕張メッセよりも充実していたが、ゴールデンウィーク中であり、EGU と重なっていたためか、研究者の集まりは悪かったように思う。
横浜は新幹線の駅から近く、また、徒歩 30 分圏内に幕張の会場の周りのホテルの半額で泊まれるホテルがたくさんある。朝ご飯、昼食、夜ご飯も、横浜の方が選択肢が多いので、うれしい。来年、また、幕張に戻るとおもうと、気が重い。甲子で日本酒が飲めることが唯一のメリットか。
今回の出席者が例年通り(7000 は、例年通りでしょうか?)なのに驚いた。なぜなら、あまり知り合いに会わなかったとおもった。これの理由は不明。部屋が多かったのか？ポスター数は少なかったようにおもう。講演数は少なかったのではないかと考えていた。もし、そうなら、場所が便利だから、ちょっと参加した人が多く、長く滞在した人は少なかったのかもしれない。もうすこし人に会える工夫が必要だとおもう。懇親会にも参加せずにそんなこと言われても困るかもしれないが。
ジャーナルセッションについては、多くの参加者に前もって情報を出すべきだとおもった。招待講演者に旅費をだせるなど、多くの人は知らなかったとおもう。もっとオープンにする努力が必要なのではないだろうか。
スケジュールののった新聞は、読み易い。それに比べて、HP でのスケジュールは読み難いし、ハンディーじゃない。新聞紙を DL できるようにすべきなのではないか？新聞紙の唯一の欠点は、片面が英語であることだ。分ければ、量が半分になるので、考慮すべきではないか。
Nothing special. Meeting during Golden week is better in a sence we don't need to worry about lectures, but if we think for family life, it affects as kids/wife may waat this time to share.
都内に住んでるものとしては、横浜は移動しやすくよかったです。日程については多少休日に重なるのは仕方ないとは思いますが、4 月下旬はまだ年度始めの部分があり、慌ただしい気もしました。連合大会アプリは多少改善点はあるものの、興味深い機能が搭載されていてよかったです。
開催場所は宿泊が便利な横浜が断然よく、ゴールデンウィークをつぶしてしまう開催期間は避けて欲しいです。4、5 はどちらかを選ばねばならないアンケートですが、本心はどちらも選びたくありませんでした。（それに、参加費が高すぎる印象です。公費で払ってはいますがもったいない感じです。）現在は関わっている研究プログラムがこの大会にお世話になっていますが、このままの日程・参加費が続くならば、そのプログラムが終わると出席しないと思いますし、必然的に連合学会も退会する方向になると想像しています。
一部を除いて会場が狭過ぎで発表を落ち着いて聴けなかった
参加者数に対して部屋のサイズが小さかった。開催日程が EGU と重なるのは好ましくない。
・会場は幕張より近かったので、交通の面は良かった。 ・祝日と GW 初日と被っていたため、昼休憩の際の混雑がすごかった。

パシフィコは立地の上では幕張より魅力的で、GW をもう少し外すことができれば次世代の候補として有力です。 が、GW にかかるのは家族もちには NG です。
社会インフラの成熟度を勘案すると、幕張より横浜開催を希望します。
・最終日帰宅者が 5 月 3 日の行楽便とバッティングしないようにして欲しいとの希望を聞かされている(その意味で 2016 の開催日案は妥当)。 ・ユニオン・合同セッションなどの制約をやめ、実績ベースをより重視した部屋割りが必要。がらがらのユニオンセッションに大きな部屋をあてがうことはもう正当化されないだろう。 ・2017 以降もゴールデンウィークとはいえ、2016 案と同様の期日：ゴールデンウィーク前半にかかる、が望ましいだろう
一課題当たりの持ち時間はもう少し長い方がよい。
横浜の方がアクセスがよく、遠方からの参加者にはよいと思う。千葉の方がいいのは、会場の広さくらいか。
部屋の広さと、聴講者の数のバランスを失したセッションが地震関係では多く認められましたので、改善を希望します。幕張、横浜の両会場の選択の指標の一つにもなると思います。
非常に多くの情報を得ることができ、参加した甲斐があった。
どちらの会場でも構わないが、参加費が押さえられる会場のほうが良い。開催時期については、各々メリットとデメリットがあるため、優劣つけがたい。
横浜で 5 月末ということができれば、そこが一番希望。セッション数が多すぎる。もっと統合できるものがある気がする。終了時刻が遅い。AGU のように、ポスターのコアタイムをオーラルのコアタイムと同時並行で行って欲しい。
パシフィコ横浜の方が条件はよいと思うが、開催日がゴールデンウィーク中でないとならない理由がよくわからない。
EGU との重複は絶対に避けて欲しい。極めて遺憾です。
満員で入れないセッションがありました。難しいとは思いますが、会場の選択など調整をお願いできればと思いました。
聴講者が多い割には会場が狭く、廊下まで聴講者がはみ出るセッションがあった。聴講者全員が座って、集中して発表を聴けるような会場とする必要がある。また、参加費が他の学会の大会よりも高い印象がある。改善をお願いしたい。セッション自体は多彩で、発表内容も興味深いものが多く、学ぶものは多かった。来年以降も、毎年参加したいと考える。
5 月後半、パシフィコ横浜での開催がよいと思います。 (場所は、羽田からの交通のよい横浜が、期間は GW と重ならない 5 月の方が参加しやすいと思います。)
初めて出展させていただきましたが、たいへん有意義な展示会でした。お世話になり、まことにありがとうございました。
312, 313, 315, 414, 416 の部屋が狭く、興味があった発表を聴けませんでした。会員が比較的多いと思われる地震学会関係の発表は、もう少し広い部屋で開催していただけないか。
学生の就職活動の解禁日が遅くなっている。4 月後半の大会開催では就職活動中の学生が発表できない。授業や就職活動の影響を受けない 3 月か 7 月開催も視野に入れてはどうか？
素晴らしい会場で、スタッフの対応も素晴らしかったと思います。昼食についてですが、会場内で弁当販売等があっても良かったと思いました。周辺の飲食店が混雑し、昼食をとるのに難儀しました。
公務員の休日出張は、勤務管理担当者が特別嫌がることがわかりました。ゴールデンウィークは避けてもらいたいです。
パシフィコ横浜で開催ということで広い会場を期待していたのだが、実際には幕張メッセと同等かやや狭かったので、パシフィコ横浜で開催するメリットが何なのか良くわからなかった。
狭くて入れない部屋があった。
・都心から遠い ・(出席したセッションでは) 部屋が狭い場所が多く、2 時間近く座れないこともあった ・駅から近くて良い

・企業展示が分散していて見づらい ・荷物を整理したり休憩するための椅子がほとんどない ・ポスター会場が二部屋に分かれていて、奥の部屋は気が付かなかった
4.と 5.の設問が「開催地について」となっているにも関わらず内容は開催地と開催時期がセットになっているのはおかしい。ゴールデンウィーク中は参加しづらいです。個人的には、開催地は横浜、開催時期は5月末が望ましいと思います。
GW 中に観光地で連合大会を開催しても、混雑していて昼食を取れない事があったので、横浜で開催するのが最適とは思いますが、GW 前か後に開催するのが妥当と考える。
地質学会関東支部の巡検の打合せを、5/2（金）に会場内の喫茶室で行いましたが、入場料金が17,000円で高すぎおると思いました。入場料金をもう少し安くしていただきたいと思います。
場所は横浜の方が良いです。でも、時期がゴールデンウィークというのはやはり好ましくないと思います。将来的に5月末に横浜という、良いとこどりは考えられないのでしょうか？
GW 中の開催は、辛い。5/1のメインホールの発表の聴講者がとても少なく感じました。メインホールで行うのだから、目玉的な発表かと思うのですが、その裏でもいろいろ聞きたい発表があり、困りました。
The rooms at Pacifico were all too small for the sessions. It would be nice to have more international sessions and food and drink available in the evening during the poster presentations.
5 日開催はなかなか忙しかったです。連合で開催する利点として異なる分野のセッションを聞けるということが大きいと思うのですが、その余裕はあまりありませんでした。とはいえ、今回はよい意味で締まったスケジュールだったと思います。セッションの設定や時間割り振りで解決できると思います。文末になりましたが、今大会の運営関係者のみなさまにお礼申し上げます。
会場の広さは幕張と比較してもおおむね余裕はあったが、20 席程度しか無い、明らかに狭い会場があったのは残念であった。開催日時については、GW 期間中というのも問題であるが、EGU と開催期間が完全に重なっているのは論外と言わざるを得ない。
場所は横浜の方が個人的にありがたいのですが、GW 期間中でない方が（もっと遅い方が）うれしいので難しいところですが
ゴールデンウィーク期間中の開催は、子育て世代にはあまりに負担が大きいと考えます。
5 月末にパシフィコ開催の選択肢は無いのでしょうか？
パシフィコで開催されるとアクセス面で便利である。しかし、部屋の配分が適切ではなかったため、聴講できなかったものがたびたびあった。
聴講者が多すぎて会場に入れないセッションがありました。立ち見はともかく、会場に入れないほど混雑することがないように会議室の割り振りをして頂きたいです。
ポスター会場が明るく、幕張メッセよりも見やすく良かったです。 海外からの参加者向けに横浜観光関連の特典があると良いと思います。
・部屋が狭く参加者が入りきれないという状況は、参加料返金を求められてもおかしくない問題。このようなことがどうして起きるのか、根本的なところから考えるべき。 ・セッションが多すぎる。プログラム編成会議の裁量で似たセッションの乱立に歯止めをかけないとどうしようもなくなる。 ・発表数やセッション数で大会が盛況だと言うフェーズは終わったと思う。
パシフィコ横浜はアクセスや周辺環境含め、非常に良かったです。今後は幕張ではなくパシフィコ横浜での開催を希望します。
特にありませんが、聴講セッションのうち、会場には入れないものがあった。荷物預かりが階にあるのに途中まで気づかなかった。
口頭講演やポスターの会場がやや狭かったが、横浜 & ゴールデンウィーク中の開催ということもあり、一般人の展示などへの参加が多く、アウトリーチの観点からはよかったと思う。学生発表賞審査のやり方やその意義については、今後も検討が必要であると思う。

特にありませんが、聴講セッションのうち、会場には入れないものがあつた。荷物預かりが 1 階にあるのに会期途中まで気づかなかつた（人に教えられた）。
期間中お世話になりました。 ・ホテル数が多く選択の幅もあるのがよかった ・今年のように GW 後半にかかると切符類が取りにくい。前半だけで終わるようにして欲しい ・展示物の事前送付で、荷物の保管場所が曖昧で 2F・3F を探しまわる羽目になった。ブースに移動して貰えるなら最後まで対応して欲しい ・展示終了後の発送で、荷物の保管場所が曖昧だった。案内札を配置する等の配慮が欲しい。他学会では送付物の盗難防止のため専任の係員を配置する場合もある ・書籍類販売ブースで、ライト付展示パネルが OK で電源が NG の意味がわからない。電源も一定量まで OK にして欲しい
場所に関して、パシフィコ横浜はアクセスが思ったよりよかった。内容的には「海溝型巨大地震と原子力発電所」のセッションがもう少し盛り上がりで良かった。（2013 年の連動大会では同様のセッションでもっと活発な議論があつた。）
パシフィコ横浜は会場へのアクセスや会場設備などの点において幕張メッセよりもやや良いと感じた。しかしながら発表会場が全体的に小振りで、立ち見が出るセッションが多かつたのが気になる。
会場はよかったとおもいます。ポスター終了時間を 19.00 としていただきたいと思います。会場までは便利でしたが、食事場所が簡単に選べなかつた。開催日を GW を避けていただければよいと思います。
パシフィコ横浜では、狭い会場は幕張メッセより狭く、講演によっては廊下まで立ち見であふれていた。
部屋が狭すぎた
横浜は電車のアクセスがよく、昼食の際のレストランも近くに多く存在し便利であつた。みなとみらいという場所もきれいで快適であつた。コンビニとしては、幕張の時よりも部屋が狭い気がした。（椅子と椅子がぴったりくっついて並んでいたせいか？もしくはただ単に想定以上の人数が聴講しただけかもしれないが。）
横浜であれば開催期間を GW 前もしくは後に何とかできないものでしょうか。
ゴールデンウィークにかからない日程でしたら、みなとみらいでも良いです。
都心から参加するにはパシフィコ横浜の方が便利でした。ただ GW と日程が重なってしまうのは厳しいと思います。
ポスターセッション会場はやや狭く、身動きが取りづらかつた。 ポスターの講演番号がボードに掲示されておらず、目的のポスターを見つけるのが難しかつた。 口頭セッション会場で聴講者の人数に対して広すぎる、または狭すぎるケースがいくつかあつた。
パシフィコ横浜の方が、交通アクセス、周辺の飲食店の利用のしやすさなど、圧倒的に良かった。 5 月末よりも連休にかかる方が、教職者や民間企業社員にとって参加しやすい。 参加費の高騰が目に残ります。研究情報の交流が主目的であるはずで、そうなら、より参加しやすくしてほしい。
ゴールデンウィークだと参加できないので、別の日程にして欲しい。5 月末でパシフィコならば、場所的にはその方がよい。
部屋が狭かつた。また参加費が高いので、将来これ以上値上げされると参加できない。
・EGU と重ならないほうが良いと思う。 ・企業等の出展の場所がばらばらにあり、全部見れたのかわからず、パンフレット等を見なければならず、面倒。
幕張と横浜しか選択肢がないのはおかしい。名古屋、京都、大阪などの大都市圏で回り持ちすべきだと思う。
終日セッションに参加し、約 1 時間の昼休みに出遅れたせいもありますが、休日に重なつたため昼食の確保が時間的・場所的に困難でした。午後最初の発表だったので遅れるわけにもいかず連休開催には問題を感じました。5 月下旬の横浜開催を希望します。
横浜での初めての開催でしたが、私にとっては便がよく連日通いやすくなって参加率が上がりました。

GW 期間というのも会社の仕事を気にしないで済みました。
We hope for the next JpGU meeting, the Steering Committee will give some additional support to participant coming from developing countries, such as my country Indonesia. Thank you.
総合評価として、パシフィコ横浜が幕張メッセよりも良いと感じた。しかし、細かな点としては、パシフィコ横浜においては、フリースペース、すなわち、イス・ソファ・テーブルなどの数が、幕張メッセよりも少ないと感じた。その点を改善してもらえるとより良くなると思う。
人が溢れる狭い部屋での聴講を強いる口頭発表の部屋設定は問題があった。また今回の参加費は高いという印象が強い。自分はGW休日との兼ね合いから参加はかなり大変であったが、これは立場毎に変化する事柄と思われる。ただ、できれば考慮頂きたい。
横浜の方が駅から近く交通の便がよいため、ありがたいです。ただ、GW 中はみなとみらい付近が混雑するため、できれば GW を避けた日程が望ましいかと思います。
一般の参加費を安くしていただきたい。特にジオパークをテーマにしたものは、口頭発表でもパブリック性が高いと考えられるので、無料で聞くことができるようにしてもらいたい。
パシフィコ横浜は設備もよく、幕張より良いと思います
会場はパシフィコ横浜の方が良いと思いますが、開催期間は GW 中は外して頂きたいと思います。
横浜での GW 中開催は一般の観光客が多く、昼食等で不便。可能な限り GW を避けていただきたい。
部屋が小さく、立ち見の人が多くいた会場が多くあった印象がある。部屋の適切な配分を希望する。
部屋が狭いという感想が他の参加者から聞かれましたが、自分の参加した限られたセッションでも若干狭く感じました。ただし、コンビーナの人数読みが甘かったのか、実際狭いのかの判断は必要と思います。
口頭発表部屋はいくつかを除けば広さなどがほとんど同じでしたので、分野横断的なセッションでなければ、分野ごとに口頭発表部屋がある程度は集まっているほうが良いと思いました。せめてフロアが同じとか。
また、将来的な話ですが、ゴールデンウィーク以外でパシフィコ横浜、という選択肢は無理でしょうか。事情を何も知らない勝手な意見で申し訳ありません。
お疲れさまです。大変楽しい学会でした
よく組織されていた。フリーのスペース（椅子とテーブルが有りノート P C で仕事ができる）をもっと作るべきでは無いかな？
駅からのアクセスがよく、会場の案内もよく、ポスター会場も広く、大変良かったです。スタッフの皆様のご尽力に毎年感謝しております。
パシフィコ横浜は講演の部屋数も多く、会場としては幕張よりも良い印象を持ちました。ただし、ゴールデンウィーク中の開催は避けていただければということで、上記のとおり幕張を希望する回答となっております。
もう少し安くできないか。特に 1 日のみの参加料が高すぎる。
そうすればもっと広く一般の方や学生も聴講しやすい。
せっかく、一般の方々の興味を引くものも多いので。
1) ポスターの掲示場所が講演番号ではなく、別の数字で示されており、場所がつけにくかった。 2) 受付場所が 2 階と 1 階に分かれていたのは不便だった。 3) パシフィコ横浜は幕張メッセよりアクセス・周辺施設（飲食店や宿泊施設）が充実していてよかった。 4) 聞きたい講演が重なったため、聞けなかった講演が例年より多くあった。
スタンプラリーに参加してよかったです。
会場は幕張メッセを希望。パシフィコ横浜の場合、セッション会場の部屋が狭く、立ち見が多く発生した。また、本年度は祝日に一般公開したことから、人口密度が非常に高く、のどの痛みを訴えるメンバーが多かった。よって、広々とした幕張メッセを希望。しかしながら、祝日に一般公開をするのは大賛成。高校生や一般にとっても大きな利益。結論として、「ゴールデンウィーク中」の

「幕張メッセ」がベストと考える。
開催地はパシフィコ横浜の方がよいが、時期は5月下旬がよい。ゴールデンウィーク中は開催しないでほしい。
パシフィコ横浜よりも幕張メッセのほうが便利だと思います。
全般に講演時間が短すぎるように思う
会場の設備がとても快適でした。（駅から近い、wifiが早い、広いなど）
1. 学生発表賞 審査依頼が直前すぎるので困りました。少なくともプログラム発表直後に依頼するなど計画的に作業を進めてくださらないと、聴講するセッションの計画や会場での研究者との打合せのアポイントに支障をきたします。 2. 適切な大きさの口頭発表会場を割り振れない場合の対応 立ち見どころか講演者すら部屋内に入れないほど混雑する会場（「津波堆積物」など）がありました。そこでの講演が審査対象に含まれていて、どうしても入室する必要があったのに、廊下で聞かざるを得なかったのは、最悪でした。適切な大きさの部屋を割り振ることが困難な場合は、無理に小部屋を割り振らずにポスターのみのセッションに切り替えさせる運営を強く要望します。それが難しいならば、最低限、コンビーナ・座長（＋会場係）・講演者（＋共著者）・審査員用のいわゆる優先席を設けて、セッション運営への支障を最小限に食い止める仕組みは必須です。
横浜はアクセスが良かったが、会場のフリースペースが少なく、またブースも点在していて見にくいと感じてしまった。 それでも、幕張よりは横浜の方が海外からの参加者にとっても便利であると思う。
ポスター会場が狭すぎました！
準備関係者の方、おつかれさまでした。 一点だけ申しますと、聴講者が多すぎて口頭発表の部屋に入りきれないセッションがありました。見積もりは難しいところですが、今回のコンビーナから会場の混雑具合を聞いておいて、来年以降の類似分野の部屋選択にいかされてはどうかと思います。
ゴールデンウィーク中の開催はやめてほしい。航空券や宿泊の予約が困難であると同時に、料金も高いので。横浜で5月末に開催がベストである。
<大会の場所について> 個人的には幕張よりも横浜が便利 <開催時期について> ゴールデンウィークにかかる、家族との予定が立てにくいので困る。今年は、前半に既に予定を入れていたため、投稿時点で何日の発表になるかが不明の連合大会への投稿は断念した
横浜開催は大変良い環境で、これからも継続して頂きたいと思います。大会実行委員会の皆さま方に感謝します。ただし唯一、上記スケジュールでも言及されている通り EGU と完全重複したことだけが残念です。
・横浜は便利でよかった。しかし、ゴールデンウィーク中は、周辺が観光地のため、騒々しい。昼食も人が多くて大変。（ゴールデンウィーク中は研究者といえども休みたい。研究以外のことでリフレッシュしたい。）横浜で5月末開催はできないのでしょうか？ ・傍聴者に対して狭い会場もあった。
セッション数が増加の一途で、また、内容の一部が重なるセッション（国内-国内、国内-国際）があるように見受けられます。それぞれに主張があり難しいことと思われませんが、必要以上に大会が膨れないように整理が必要かもしれないと思います。
ゴールデンウィークの開催は反対です。若手研究者にとっては、家族サービスをする重要な機会です。（子供が手を離れた年代の方ばかりではない）地方研究者にとっては、チケットの取りにくい時期、かつ、ホテルも取りにくい（高額）ゴールデンウィーク開催となると部分的参加を余儀なくされる。EGU と重複するような日程は避けるべき。
（夜間会合のみ参加） 今年度から講演の一覧が冊子になったのがとてもよかった。 横浜での開催はアクセスが良かったが、会場が狭く感じた。 今後の開催時期については EGU と期間をあけて開催されるのであれば幕張でも横浜でもどちらでもいいが、ゴールデンウィーク

中は避けてほしい。
昨年に引き続きこの度は大変お世話になりました。運営の皆様には本当に良くして頂き感謝しております。 会期と会場ですが、パシフィコで 5 月末開催というのは難しいのでしょうか？ 販売は専門家の方々の反応が嬉しく、とても楽しい時間でした。 また来年もよろしくお願い致します。ありがとうございました。
パソコンが用意されていないことを知らずに USB だけ持って口頭発表に臨みました。幸い PC をお借りできましたが、ノート PC を持っていないので今後用意していただくと助かります。
パシフィコの会場は、部屋サイズが小さすぎるようなセッションがいくつか見受けられた。かえって大きすぎるようなセッションもあったので、部屋サイズの見直しは必要かと思う。また、ポスター会場はやや狭く感じたので、壁際のブースを別の場所に移したほうがよいと感じた（どこに移すかが問題ではあるが）。
年々巨大化、活発化傾向にあり、今回の会場も申し分ないのですが、敢えて辛口コメントです： 1) 参加登録料が高いな（学生、個人の方等負担大）、2) プログラム編成に問題？（同じようなテーマの複数セッションが同時時間帯に）、3) 会場割り当てに工夫を（少人数の会場でドアの外に人があふれていた）。
ゴールデンウィーク中の、都心に近い会場ということで、非常に混雑しており、移動や食事が大変でした。また、連休が学会でつぶれるのは辛いです。5 月末の幕張メッセの方が、移動手段（航空便）や宿泊地の確保など、よりスムーズだと思います。
スマホアプリが、たいへん役に立った。是非、今後も継続、発展させてほしい。
会場の立地はパシフィコが非常に良かった。しかしパシフィコだと開催期間が早いようなので、幕張なら五月半ば以降に開催されるのでしたら、幕張が良いです。
会場の配分が悪く、例えば、地殻応力セッションは、我々がふだんやっているセミナーでも使わないような狭い部屋が割り当てられていて、会場に入れない人が多数いた。この点からパシフィコは使わない方が良いと強く思う。
横浜は利便性が高く、幕張開催よりも経済的であると感じました。
1 年交替でに横浜・幕張で良いと思う（横浜開催時は狭い部屋を避けるため、6 日間開催のほうが良いのでは）。 春に開催するのではなく、学生の研究がまとまりつつある時期である秋(9-11 月)開催の可能性の検討をお願いします。
登録料が高い。これが今後も継続するとしたら非常に憂慮すべきことだと思う。 関連するセッションをできる限り、まとめるべき。そうでないと、長期間滞在せざるを得なくなり、費用がかさむ。
場所として横浜は事務所から近く大変便利で良かったのですが、ゴールデンウィークの開催は他の都合との調整が大変でした。場所を選ぶか、開催時期を選ぶかとすれば、開催期間で選びたいです。
幾つかの不具合があったと思う。改善してほしい。1) 会場の狭さ。津波堆積物セッションは常に 2 倍の客であふれた。一方で、ガラガラだった部屋（とくにホール）があった。 2) ウェブでのプログラム編成がままならず、修正が出来ない事が多かった。 3) 複合セッションについては、どこと何処のセッションの複合なのかが分かるようにし、かつ、当該セッションからもとどり着けるようにしてほしい。EGU はそうなっている。
一部の会場が狭く、不評であった。会場の西側の展示場？を仕切って、中規模会場（百人程度の椅子）を多くしていただけないでしょうか。（そのような設営が可能かどうか把握しておりませんが。） スマホ向けアプリを含め、その他の運営は良かったと思います。
パシフィコ横浜の会場は狭いように感じた 口頭発表会場は 30 ～ 40 名くらいの部屋だったと思うが、もう少し広い方がいいと思う またポスター会場では、どのセッションのポスターであるのかわかるような表示があった方がよい
4 月 29 日（昭和の日）は、右翼の街宣車が大きな音を立てて、セッションの進行を妨げました。パシフィコ横浜は大通り脇にあるので、道路から大音響で音が鳴った場合には建物内部まで響きます。4 月 29 日にパシフィコを使う場合には、このような問題

が生じる可能性を考慮しておく必要があります。
5月下旬のパシフィコ横浜という選択肢はないのでしょうか？
The Yokohama venue is quite spacious and has convenient access for participants from Tokyo, Yokosuka, and possibly Chiba but the hotels could be more expensive than in Makuhari-Messe. Maybe alternating the venue between Makuhari and Yokohama is best. Seeing that Volcanology, Geochemistry, Petrology is a huge community here in Japan, there should be more of these themes in International Sessions and students should be encouraged to use the venue to prepare them for international meetings like AGU, EGU and Goldschmidt.
幕張でやっていたころから思っていたが、口頭講演会場は立ち見のしやすい、出入りのしやすい会場設営をしてほしい。特に、もともと狭い部屋や、予想される聴衆に比べて手狭だと見られる部屋を割り当てられたときは要注意だ。（今回経験した中では「応力と地殻ダイナミクス」が最悪） 最も簡便な手法は、椅子の数を減らして適切に配置することだ。狭い部屋でかつ混雑も予想されるのなら、部屋の最後列まで椅子を並べる必要はない。場合によっては2～3列分のスペースを作るべきだ。また、椅子同士や壁との間隔も室内移動を考慮した方がよい。小～中程度の広さの部屋なら、3人以上連続した席は1列あれば十分ではないか。特定の講演者の発表のみ聴いて出ていく人も少なくないだろう。客（聴衆）層を事前に予測して対処するというのもなかなか難しいのと思うが、一度講演が始まったら並べすぎた席を減らすのは不可能である。 逆にポスター会場については、パネルの配列が細分化（ほとんど2枚続き）されすぎていて1つ1つの通路が狭くなって移動しづらかったし、どこがセッションの切れ目かもわかりにくかった。パネルの連結はセッション単位の方がよい。何よりも、4ケタの通し番号しかパネルに貼られていないというのは、見学者の便を考えていないと言わざるを得ない。パネルに貼るのはセッション番号にする、あるいはポスター講演者全員にポスター内にセッション番号およびセッション名の明記を義務付けることが必要である。現状、ポスター会場の運営については幕張側の圧勝である。
ますます肥大していて、どうにもならない。 目代さんはじめプログラム担当のご尽力には敬服する次第であるが、この状況は連合を設立した理念に沿っていないと感じる。似たようなセッションの整理は不可欠だし、秋には諸学会が独自の会を行なっているので、この大会中に独自のセッションを開催することはおかしい。
保育室のお知らせをもう少し早めにしてくださいと助かります。あと、トップ画面から色々なコンテンツへの案内が、私の目にはゴチャゴチャ（写真を背景にした目次がタイル状に敷き詰められている感じ）していて少し分かりにくかったかなと思いました。
学問があまり進歩していない、と感じた。
今回も出展者として参加いたしました。特に事務局の方、会場のご担当者様には、大変お世話になりました。パシフィコ横浜は駅から近く、書籍展示のスペースも非常に明るいなど、幕張と比べ、改善された点は多かったのですが、会期が短縮したことや周囲に魅力が多かったことも影響したのでしょうか、小会は一昨年・昨年と比べて、売り上げを落としてしまいました。上のアンケートでは、会場は、幕張を希望しましたが、5月中旬以降に6日間の開催であれば、むしろ横浜を希望いたします。今後ともなにとぞよろしくお願いいたします。
カタログ展示のみで参加させていただきました。事務局の方が大変丁寧に対応してくださり、助かりました。どうもありがとうございました。今回は申込が間に合わず残念でしたが、次回はぜひ展示で参加させていただきたいと思います。
家族がいるとゴールデンウィーク中の開催は避けていただきたいです。会場としては、横浜でも良いと感じましたので、ゴールデンウィーク期間を外して、横浜で確保できないものでしょうか？
横浜の会場は便利で良かったと思います。もしGWを外して頂けるなら、ありがたいのですが・・・。
1) Could consider having all international sessions at the beginning or end of the conference. 2) Field trips, short courses and other formats for transfer of knowledge would be a good addition.
ポスターの掲示方法を工夫すべきだと思います。今回は特に、通し番号しか掲示用の板に貼っていなかったため、目的のポスター

ーを探すのに例年よりも苦労しました。
よかった点 ・開催場所が変わることで、飽きることなく全日程を過ごすことが出来た。 ・公式アプリがすごく使い易かった。 悪かった点 ・セッションによって部屋が狭く、立ち見が多くなった。 ・GW と重なると遠方からの参加者にとって旅費や宿泊費の負担が大きい。 ・日程を縮めたためか、興味のあるセッションが同時刻に開催されることが多かった。
口頭講演や関係ポスターセッションなど、各地域の情報を一度に得ることができ、大変参考になった。
2014 年大会は全般的にはよかったですが、部屋が狭いと感じるものも一部ありました。
GW 混雑による不便は思ったほど感じませんでした
会場の綺麗さ、周辺環境については、横浜の方が幕張より勝っていると思います。しかし、会場の capacity という面では、部屋に入りきらず、廊下まで聴衆がはみ出している部屋も多く見受けられ、幕張の方がまだいくらマシだったようにも感じました。
関係するセッションが 3 つ同時に平行だった時間帯があり（プラズマ、space weather、太陽圏）聞きたくても聞くことができない講演があった。この点は今年に限ったことではないので、セッション間の時間帯の調整をして改善して欲しい。
幕張に比べて、セッション会場がやや狭い場合が多かった点はマイナスだが、その他については横浜の方がよかった印象です。
会場周辺案内がなかったような気がする。会場周辺の情報がないと、ゴールデンウィーク中の昼食探しが大変だと思う。
場所的には横浜を支持するが、時期が GW の連休にかぶるのは移動手段や宿泊先の確保が難しく、学会参加の支障となる。また新年度が始まって 1 か月しかたっていないという意味でも、多忙期にあたり好ましくない。以上の理由より、従来通りの 5 月後半の開催を強く希望します。
横浜はホテルがたくさんあってよかったが、ゴールデンウィークのため、帰りの交通機関が予約しにくかった。
2014 年大会のような GW 中の開催は、今後避けてほしい。
休憩スペース、談話スペースというものが欲しい。
横浜会場は、東京、新横浜、羽田空港などからのアクセスが良く、周辺の飲食店も充実しており、非常に参加しやすかったので、今後も是非横浜会場で開催していただきたいと思います。
パシフィコ横浜で 5 月末と言う選択肢はないのか？
場所は横浜パシフィコで満足したが、時期が 5 月末だとなおよかったです。パシフィコ内に椅子・机が少なく、座って作業をすることが難しかった。口頭発表会場内に椅子が少なく立ち見が多かったと思う。いくつか改善点はあるかと思いますが、概ね横浜開催は好評だったように感じます。
EGU と会期が重なったこと、また参加料の値上げがあって、セッション参加者を広げていくことに困難を覚えました。来年以降 EGU にはご配慮頂けるようですから残りは参加料です。
部屋数が増えたから経費がかかるという話も聞きますが、参加者が増えたからである筈で結局中規模の会議室あたりの借料水準が経費の大宗を決めるはずです。相場について具体的に知りませんが人気の横浜は高くないわけではないと思います。
ポスターセッションの終了時刻が遅すぎると感じました。3 分の概要発表をとりやめるなど時間短縮をして欲しいです。またポスター会場に掲示されたポスター配置図が分かりにくく、導線もよくなかったように感じます。近年、研究者ではない一般の方が発表や口頭発表会場での質問をする場合があり、しばしば問題となっています。発表者はもちろん、コンピーナーや座長あるいは聴衆も、それぞれがどうあるべきかを考えてほしいと思います。
私は宇宙惑星科学のセッションを中心に聴講致しましたが、inner magnetosphere と VarSITI や磁気圏構造とダイナミクスと JUICE の時間帯が重複しているなど、大変似通った内容のセッションが重複していたことが多く、残念でした。来年度以降はあ

る程度の時間割に対する配慮があることを期待致します。
This year there are lots of English sessions. It is good for international participants. In my session we were two English speakers. Hope for the next year English speaker will more.
横浜での開催は海外からの参加者からの評判もよく、良いと思いました。ポスドクなので、一般参加費は高く感じました。開催期間を短くすることで、参加費をおさえることは可能でしょうか？
今年のパシフィコ横浜での開催は、交通便が良かったので、個人的にはとても参加しやすかったです。
ポスター会場は幕張メッセより空間的余裕がありよかった。
今回は家から近いので通うのが楽であった。部屋が小さくて入れなかったセッションがあった。難しいとは思いますが、もう少し大きい部屋が揃った方が良かった。
会場が狭く椅子が不足していた。しかし、幕張よりもアプローチが良く安価な宿も確保しやすかった。参加費など費用はたかすぎる。様々な分野、学協会がなぜ連合しなければならないのか、連合しているメリットが具体的に見える形で出ているのかを明確に示して欲しい。
せっかく多くの学会が集まっているのに、そのセッションのテーマにはそのセッションの研究者しか来ていない。また、発表者も同じ研究テーマの聴衆に発表するつもりで話している。さらには内輪ネタも盛り込んでいる場合がある。 これでは初めてその研究を知る人には理解できないため、結局連合大会として動いている意味がない。 学会の垣根を越えて意見を交わすことができる仕組みと、その雰囲気を作っていくことが課題であると思われる。
Excellent organization always, Thank You!
パシフィコ横浜は会場設備はよかったと思いますが、口頭発表会場が小さめで、立って聴いている人が多かったと思います。
セッションが多すぎて、同じようなセッションが同じ時間帯に被っていることが多々ある。抽選などを行うことで、セッションの数を制限してほしい。セッションの乱立が諸悪の根源だと思うが、一人が発表できる件数も制限してほしい。
会場はともかく、連休中の開催はあまりにも不適切。
ゴールデンウィーク中でない横浜が良いです
ブースが狭く、隣との間隔もなく非常にやりずらかった。もう少し考えてほしい。
横浜は幕張に比べて、自宅からはるかに近く便利でした。北海道などの地方からの参加者にとっても、羽田空港から近いので、好評だったようです。また、会場もパシフィコ横浜は施設も良くて使いやすかったです。 ただし、参加費がかなり高くなったと思います。研究者の場合、研究機関から参加費を支出してもらえることが多いので、その点では高くても便利度から横浜の方が良いと思いました。
今回の JpGU のスマートフォン等の携帯端末向けのソフトウェアはとても使いやすく、前回に比べて、内容も充実していてよかったと思います。ただ、ポスターの会場マップはあったのですが、できれば、自分の発表のポスター番号も会場で使用している 4 ケタの番号を予稿のところに併記して下さるともっと便利だったと思います。それと、講演メモを複数作成した場合に、一括してメールで送信できるような機能があるととても便利だと思いました。
スタンプラリーは、なかなか面白い企画だったと思います。
ポスターセッションの 3 分紹介を、発表者の希望によってやるやらないの選択ができるのは良いと思いました。ポスター会場で昼間はコーヒー、夕方に缶ビールが配布されたりしていましたが、その辺の情報が流れておらず、知らなかったと怒っていた方もいらっしゃいました。数に限りがあるのかもしれませんが、周知したほうがポスター会場への来場者を増やす意味でも良いのではないかと思います。EGU や AGU では積極的に周知していて、それを目当てにポスター会場に来て、講演を聞いてくださる場合もありました。
はじめての横浜開催でしたが、交通の便もよく良かったです。横浜での開催は、サンフランシスコで開かれる AGU を思い出しました。
立地としては幕張より横浜の方が便利だと思います。GW 以外の日程で開催することはできないのでしょうか。
<アクセス> 幕張と比べ、パシフィコ横浜の方が会場までのアクセスがよい事と豊富なアクセス方法を選ぶ事ができるので、海外

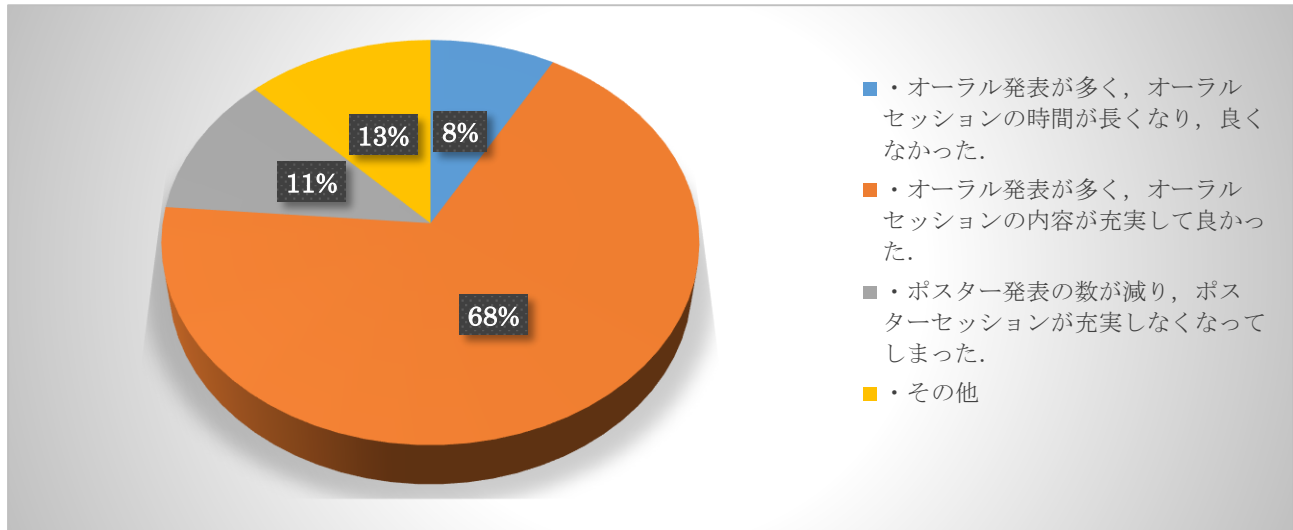
からの研究者さん達にも来ていただける機会が多くなると感じました。 <日程> 開催日程は、ゴールデンウィーク期間だと宿泊費が割高になるので、連休期間を外したパシフィコ横浜会場がよいと思いました。 <聴講部屋> 発表会場の部屋の大きさが、小さいと感じました。立ち見や座り込んでの聴講も多かったと思います。少しゆとりを持たせた広さを希望致します。ポスター会場が狭く感じました。 <休憩時間> 飲み物のサービスは、全体にゆきわたり難いので、もう少し量を増やしてほしいと思いました。アルコール類は午後のセッションの合間だけでもいいと思います。飲料水が随時補充できるサーバーがあるといいと思いました。 座って休憩が出来る場所が少ないと感じましたが、それは幕張も同じことです。
・発表会場のプロジェクトと持ち込んだ PC との接続がスムーズに行えない方が数名いました。 ・スクリーン周辺のみ照明を落とせると良かった。 ・PC を使用できる作業スペースが、もう少し確保されていると良かった。
また来年も出展をさせていただければと思います。よろしくお願いします。
研究者のワークライフバランスを考えるのであれば、大型連休中の開催はぜひとも候補から外して頂きたい。もしアウトリーチを行ううえで大型連休中の開催が望ましいのであれば、本年度と過去の参加者の人数をきちんと示して本当に効果的なのか議論すべき。
大会ではお世話になりました。横浜パシフィコは幕張よりもアクセスが便利な点がよかったです。2017 年以降もゴールデンウィークを避ける事ができれば、横浜が良いと思います。
JpGU needs to decide if it wants to be an international meeting or just for Japanese. It cannot be both. You cannot invite foreigners and then have the majority of the sessions in Japanese. When I go to EGU in Vienna, the sessions are not in Austrian. If Japan wants to have its own meeting closed off from the rest of the world of science, then fine. If it wants to facilitate the advancement of science, then all of the sessions need to be accessible the scientists attending. Even if JpGU wants to allow speakers to give presentations in Japanese, the slides and posters could still be in English. If JpGU waits too long to transition to an international meeting, then it will be too late and all foreigners who might be interested will have decided that it is not worth the travel time and cost.
関連するセッションの重複が多かったのが残念。メインホールへのアクセスに時間を要した。
パシフィコ横浜は、交通のアクセスも良く、飲食店も多く、非常に良かった。
セッションを細分化しすぎていないだろうか。共通性のあるテーマについてはコンビナー間で調整して統合すべきだと思う。いくつかのセッションの講演会場は聴衆の数に対して狭すぎた。 プレゼン用 PC をプロジェクターに繋ぐケーブルは幕張の時には 2 口用意されていて切り替え機が使えたが、横浜ではその対応が出来ないのか？
ポスター会場の見取り図が判りづらかった。ポスターボードに発表番号が張られていなかったのは不親切であった。 ロビーの椅子の数を増やしてほしい。
開催地は横浜のほうが交通や宿泊に便利だと思うが開催期間は 5 月末がよい。
開催日程と場所について。ゴールデンウィーク以外でパシフィコ横浜がよい。理由は、GW 中のフィールド調査の予定が組めないのが問題があることと、交通の便は横浜の方がよいこと。
・GW 中の開催は移動、宿泊もさることながら、家庭的にも問題があると思う。休暇をつぶすような連合大会の開催は避けるべき。 ・遠方から来る参加者にとっては横浜でも幕張でもどちらの場所も移動時間に大差はない。 ・発表会場が多いと同時に複数のセッションを開催可能になるが、聴講したい発表が重なる機会が増えるのがデメリットと感じられた。セッションを細分化するのではなく、同趣旨のセッションをまとめるべきかと思う。

パシフィコ横浜の会場はせまくて、聴衆が入りきらないことが多々ありました。また、4月末開催は、年度初めと重なり、忙しいのでやめてほしい。
幕張に比べるとやや手狭感があった。とくに展示スペースが狭かった。その点では幕張の方がよいが、宿舎や食事を考えると横浜が勝っていた。どの条件を優先するかで、場所が変わると思う。
横浜は交通面で便利であり、時期も良かった。
部屋が狭く聴講できないセッションがあった
中規模の会場が少なく、聴衆が溢れている部屋が多い印象でした。
横浜の参加費等が高いと思う。安いのであれば幕張のほうがありがたい。
部屋が狭くて立ち見が多かった。もう少し広い部屋を用意してほしい。
中規模の会場が少なく、聴衆が溢れている部屋が多い印象でした。
以前に開催されていた年度末3月であると、予算執行できますので、助かります。
GW中の学会開催は、家族サービスや旅行手配の観点からみて、よくないと思う。会期が7日以上になると、冗長に感じる。今年はイクメンなどの余計なセッションがなくてよかった。
GWを除いた期間で横浜開催が一番助かる。しかしながら、横浜の場合には個々の会場のキャパシティが小さいと思った。
運営お疲れさまです。宿泊、飲食、新幹線からの便を考えると横浜の方が便利と思いました。
ゴールデンウィークを外して、横浜にして頂けるとベストですが、費用的に難しいのでしょうか。
参加費が年年高額になってきている。スリム化してもう少し値下げできないものだろうか。
極端に席数の少ない部屋がいくつかあった。部屋に入れなくて困った。
JPGU encouraged us to invite some famous scientists from the world, and we did. They came to JPGU, on the strength of our recommendation. However, all of them (3 in particular) left JPGU saying that they felt the meeting was not worthwhile and would probably not attend in the future. JPGU had a wonderful opportunity to develop a high profile international meeting, but instead the organizers chose to have a strictly Japanese meeting with only a few International sessions. I personally attended some sessions in Japanese, where I personally knew all of the speakers, and I also knew that they could speak perfectly well in English, yet the entire session was in Japanese. This is very odd, to say the least. JPGU needs to decide if it is a Japanese meeting, or an international meeting. Trying to mix both has been a complete failure, and has the effect of giving JPGU a bad reputation internationally. I can guarantee that they do not speak Austrian at the EGU meeting, so why does anyone speak Japanese at JPGU?
Best Regards, John Hernlund Professor, Earth-Life Science Institute, Tokyo Institute of Technology
大規模な大会を効率的に運営できたと思う。Special Lecture もよかった。
ポスター発表が夕方から夜で時間が遅いと感じた。なるべく昼間の時間帯がとれるとよいのでは。
固体地球関係について、セッションの総数自体が多すぎるし、似たようなセッションが存在しており、関連セッションの重複も散見されるので、セッションの整理をしたほうが良いと思います。
中部方面から参加しており、アクセスのことを考えると開催場所は横浜の方が便利ですが、ゴールデンウィーク中はホテル・新幹線などが混むので、できることなら横浜で5月末開催というのが一番望ましいです。
横浜会場は設備は良いのですが、GW中はスケジュール調整が難しいです。

会場までの移動、食事についての心配が少ない分パシフィコの方が安心でした。
移動・宿泊が大変なのでゴールデンウィーク中は避けてほしい。場所は横浜のほうがよいが、会場費(参加費)が高価になるのは困る。
幕張メッセよりも展示スペースが狭かったが、展示場所は大変良かった。今まで 6 日間でこなしていた事を 5 日間に詰め込んだためか、参加者に時間的なゆとりが無く、例年よりも立ち寄ってくれる方が少なかった印象がある。今後 5 日間開催にするにあたっては、もう少しスケジュールに余裕を持たせていただきたい。
個人的には、GW 中は避けて貰いたいです。特に、2014 年のように GW 中に 2 日間以上会期が入るようなら、5 月下旬の方が良いです。2016 年に関しては、GW にかかるのが 4/29 だけなので、横浜でも幕張でも良いとは思いますが、授業は、GW 中の祝日にも入りますので（今年度 4/29 は授業日でした）、GW だから本務校での授業が潰れないということはありません。つまり、大学教員の立場からは、GW 中の開催だからというメリットはありません。むしろ、GW 中ですと、4 月が新学期開始早々と重なり、非常に多忙となり大変で、デメリットの方が多い感じがしました。そこで例えば、横浜で 5 月下旬開催が可なら横浜と幕張とで隔年、交互の開催でも構いませんが、横浜でという声が大きい場合、横浜が GW 期間に掛かるようなら、幕張、幕張、横浜、のように、2 対 1 程度くらいの頻度なら許容範囲かも知れません。選択肢ですが、4. の間には、「どちらでも」もある方が良かったと思いました。
参加費の高騰で（特に修士の）学生さんが参加しにくくなっているように感じました。研究室にとって負担が大きいという声を聞いています。
各ブースが散逸していて、見学者の流れが悪かったように思います。
EGU と日程が重ならないことを重要視してほしい。翌週の開催であっても、外国からの参加者は二者択一になってしまうと思うので、一ヶ月程度は開催時期をずらす方が良いと思う。
1) プログラムを分野別にもう少し整理してほしい（昨年よりだいぶよかったが）。 2) 参加費をもっと安く（年金生活者にも配慮を！）。 3) 各分野の動向をレビューする講演を充実していただきたい（各分野の動向を紹介して、総合的な視点の育成・研究交流促進へ。これは一般参加者も聞くことが出来る）。
担当したセッションの部屋が狭すぎ、30 名以上の立ち見となり肩身が狭かった。部屋の確保が困難であったことは理解するが、参加費を払っている方々のことを考えると申し訳なく思う。
アプリが便利でよかったです。
セッションの部屋が狭く、立ち見が多かった。幕張メッセの方が部屋が大きく聞きやすいと感じた。
狭い講演会場の場合、聴講者が多数押しかけると、この時期は会場内が大変暑くなってしまう。またこれら狭い会場は窓側が道路に面しており、遮音が不十分であり、4 月 29 日の 16 時頃、その道路に街宣車が現れ、会場内で講演者の説明が聞き取りにくい状況があった。
幕張よりも横浜の方がいい。 セッションが多すぎる。もっと連携セッションみたいなものがあった方がいいと思う。

コンビーナアンケート

- 今回の大会は、これまでの大会と異なり、ほとんどの発表について、オーラル／ポスターの選択は、発表者の希望通りに発表していただきました。この点についてご意見、ご感想をお聞かせください。



■その他意見

【良かった】

- ✓ 結果はどうあれ、発表者の希望が充たされたのはよかった。
- ✓ オーラル、ポスターの数がバランス良く申し込まれており、どちらも充実して良かった。
- ✓ 発表者の希望通りになったために、より満足度が高いものになったのではないのでしょうか？

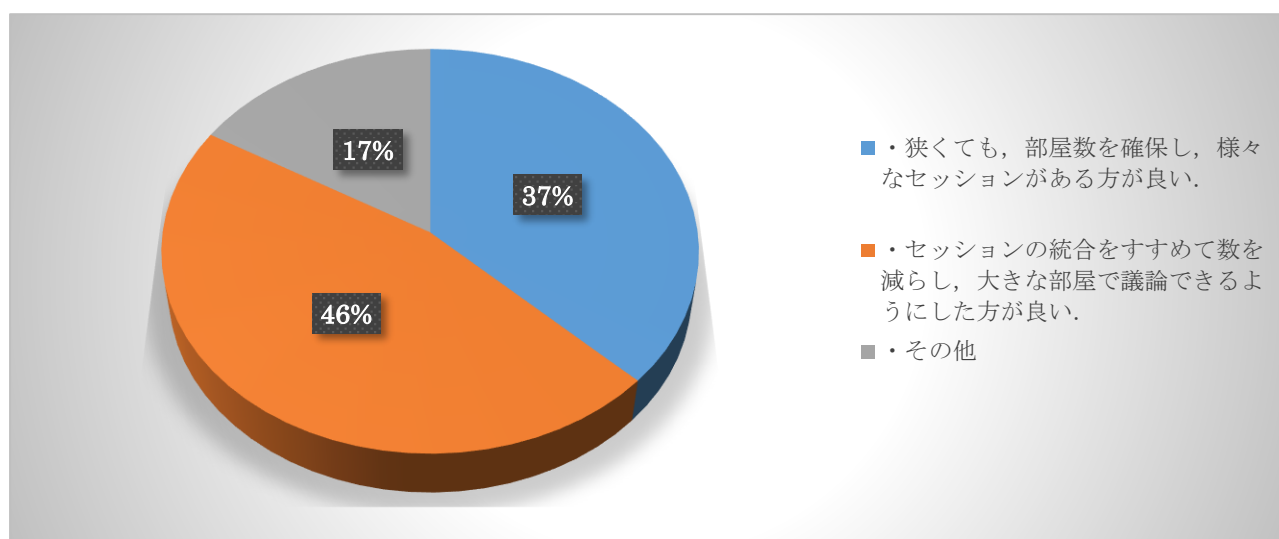
【良くなかった・改善の必要あり】

- ✓ ポスター発表の数が減り、オーラルの数が増えるということは、聞けないオーラルが増えるということで、これでは困る。今回は会期も短く、聞けない講演数も多く、残念な大会だった。
- ✓ オーラルが増えたことだけをセッション単位で見れば良いのですが、全体としてみると、並行開催回避の希望がほとんど通らなかったため、関心のあるはずのひとが参加できない場面が多かったように思います。
- ✓ 個人的にはポスター発表は嫌いです。ほとんどオーラル発表しか聞きませんでしたので、評価できません。
- ✓ オーラルについては、幕張のケースより改善されていたと思いますが、大きな会場でガラガラなケースもあり、プログラム構成も含めて考える必要があると思います。
- ✓ (参加者の視点で)レベルの低いオーラル講演が目につき、時間のムダと感じた。これは、連合大会のサイエンスのレベル低下に繋がる問題である。
この時間は、ポスターセッションの議論の時間にまわす方が有意義だと思う。

【その他・分からない】

- ✓ 私が主催あるいは参加したセッションではオーラル発表は充実していましたが、これまでの大会と比較してどうだったかは分からないのでその他としました。コンビーナであったセッション(オーラルだけの一般公開セッション)は、本質的に該当しないと考えられるが、無回答の選択が出来ないため、その他にチェックを入れました。
- ✓ 特段本項目についての良し悪しを認識出来なかった。

● 部屋の大きさについてご意見、ご感想をお聞かせ下さい。



■その他意見

【改善の必要あり: 部屋が狭い】

- ✓ 会場の都合で難しいのかもしれないが、もう少し部屋の広さのバリエーションがあった方が良い。
- ✓ 今回は幕張と違って中程度の大きさの部屋がなかったので小さめの部屋に割り振られた場合に立錐の余地なしといったセッションがあったようです。
- ✓ 大きさのバリエーションがすくなく悪かったね。どうしようもないのだろうか。狭い部屋で廊下まではみ出している会場をよくみた。中くらいの部屋が多いとよかったのにね。その点では幕張の方がよかったね。
- ✓ 小さな部屋が多く、立ち見や入れないケースが多々あった。
- ✓ 現状のセッション数で、もう少し大きな部屋が確保できればもっと良かったと思います。
- ✓ 30 名台の小さい部屋は立見がそれと同数くらいになってしまったところもあったので、流石に小さすぎます。初開催のセッションで広い部屋が与えられない場合に、人気が出るとひどいことになります。部屋数を確保して様々なセッションがある方が良いことには賛成で、最低サイズを 60 席以上にして頂ければ良いのですが。
- ✓ セッションの数とは別の問題として、部屋が狭すぎて聴衆が入りきれないケースが少なからずあったのは残念だった。(聞きたいセッションが聞けなかった。)
この観点からは、セッション数を減らし、大きめの部屋だけでも連合大会を開催できるようにするのがよいと思う。
- ✓ 会期としては今回の 5 日間が適当と思うので、それが可能となる会場が利用できれば素晴らしい。今回は狭い部屋が多かった印象があるので、もう少し広い部屋が増えるとよい。
- ✓ セッションの統合云々はともかく、部屋が狭すぎる。少なくとも 80 人くらいは入れる部屋を確保すべき。

【改善の必要あり: 部屋と参加人数が合っていない】

- ✓ 参加人数と部屋のサイズが必ずしもマッチしていなかった
- ✓ 担当したセッションでは、部屋の大きさと聴衆の数とは適度であったが、部屋の大きさと聴衆の数とのバランスが悪いセッションが多かったと感じた。セッション数や部屋数ではなく、部屋の大きさと聴衆の数とのバランスが取れる配置となるようにして貰いたいと感じた。

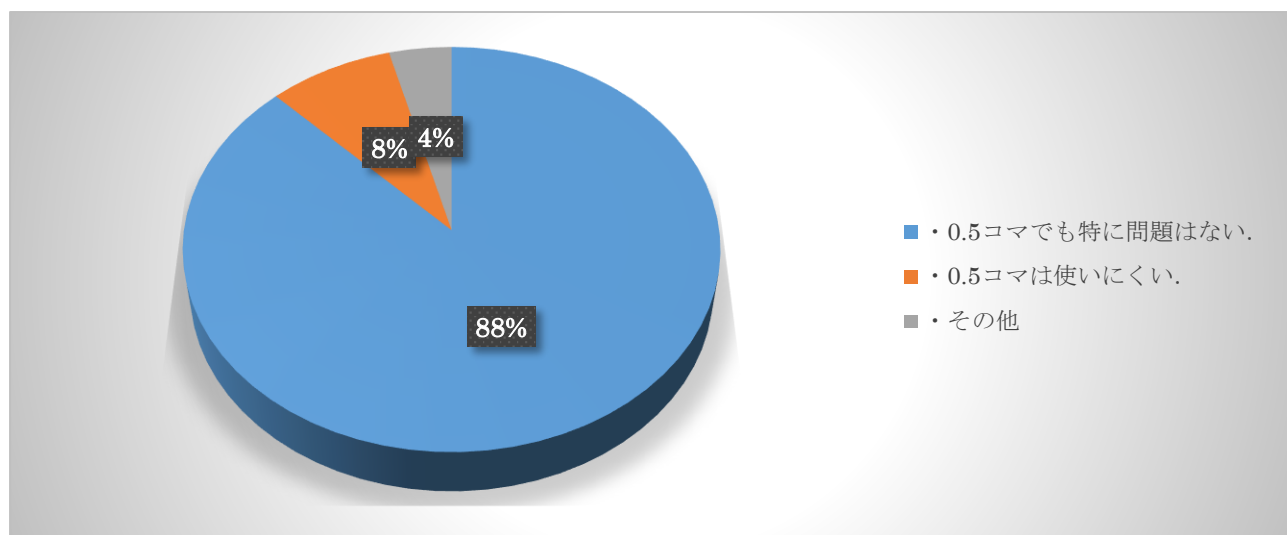
【改善の必要あり: 部屋のレイアウト】

- ✓ どちらも一長一短はありますが、狭い部屋の場合は横長なレイアウトではなく、縦長なレイアウトの方が、観客が全て座りやすいように思いました。パシフィコ横浜の会場ですと、人数の少ないセッションでは部屋のレイアウト的に横長になってしまっていたので、その点が気になりました。

【どちらともいえない】

- ✓ 部屋が大きいほうが、多くの参加者が座って聴けるので良い。一方で、参加者数が増えたからといって、質疑の時間が増えるわけではないので、議論が深まるとは思えない。
- ✓ ケースバイケースと思います。コンビナー同士がよく納得できるような統合であれば、やや広い範囲の講演をきくことができるのは聴衆のためにもなると思いますが、無理のある統合はよくないと思います。あまり実態を知らないのもそれ以上はコメントできません。
- ✓ 160 人の部屋で開催した。参加者にたいしては少し小さめだったが(立ち見がいた)、概ねちょうど良いサイズであった。300 人の部屋では(我々のセッションでは)大きすぎたと思う。セッションの性質によって、適切な部屋サイズは変わらと思うので、一概に、統合をすすめるべきか、すすめないべきかを判断することは難しい。
- ✓ セッションの規模や状況に依存すると思いますので、一概には答えられません。今回は、部屋の大きさが聴講者に対して不足したセッションがそれなりに見受けられましたが、細かい部屋で近い距離感で落ちついて議論できるほうがよい印象はあります。一方で質問がなかったり反応が良くない講演も聴講したセッションでは見受けられましたので、ポスターにするか統合するほうがよい場合もあると思います。

- セッションの時間について、今回 0.5 コマを導入しました。これについてご意見、ご感想をおきかせください。



■その他意見

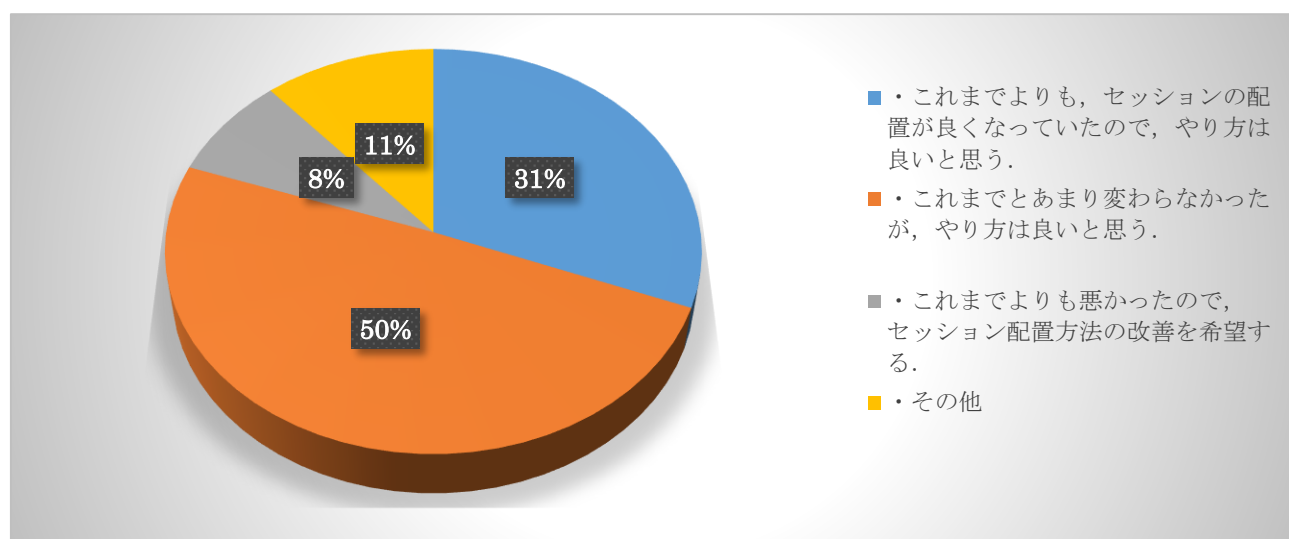
【良くない・改善の必要あり】

- ✓ パラレルセッションの基本は、同時刻始まり、同時刻終わりだろう。それがいろんな時刻に始まるのは困る。仕方ないのかもしれないが。時刻に関してコンビナーが融通を利かせすぎると、複数のセッションを聞き歩くものにとっては、困る。
- ✓ 1.5 コマ、2.5 コマはよいが、0.5 コマは意味がない。
口頭セッションでは、そもそも少なくとも 10 件近くの口頭発表がなければ議論をする場として成立しないはず。口頭セッション実施に最小必要な発表数の規定も設けて、集まらなければ自動的に他のセッションと統合するか、ポスター発表のみのセッションに切り替える、といった運営をすべきです。

【分からない】

- ✓ 今回、0.5 コマのセッションに参加しなかったもので、わからない。
- ✓ 今回は別の出張とかぶってしまい、会場に足を運ばなかったもので様子がわからないため、回答として保留させていただきます。

- 今回の大会は、各セッションの重複回避希望を元に、セッションのグループ分けを行い、それを元に、セッションの配置を行いました。この点についてご意見、ご感想をお聞かせ下さい。



■その他意見

【良くなかった・改善の必要あり】

- ✓ セッションのグループ分けのしかたに、もっと工夫が必要なのではないか
- ✓ そんなことをしているとは夢にも思わなかった。重複回避希望は考慮されなかったのだと思った。もしそうならちゃんと明示すべきだった。どの程度の満足度が得られただろうか。固体地球は中日はヒマだった。例年より、セッションのバランスは悪くて、聞きたいセッションは重なっていることが多かった。なぜかわかりません。
- ✓ いい方法だと思ったのですが、結果として重複の回避がほとんど希望通りにいきませんでした。
- ✓ 今回は従来よりも、関連セッションが重なったり、離れてしまったりということが多かったように思います。(他のコンビーナからもそのように聞きました)会場の制約などのため、今年は調整が難しかったのだとお察しいたしますが、次回は何とか改善いただけることを望みます。
- ✓ セッションの重複回避希望を尋ねるのはいいと思いますが、それでもいろいろと関連するセッションが重なったケースがあったようです。
大変だと思いますが、基本的にボトムアップを優先する現在のポリシーを維持する限り、限界がある。個人的には、個別の学会セッションはやめにして、連合独自のセッションのみで構成する、というスタンスに変更すべきだと思います。

【編成作業の連絡に問題あり】

- ✓ 初めに示された案で、講演者の調整を行っていたが、その後の二次案で、日時が変更になってしまい、問題が生じてしまった。一度提示された案を変更する際には、一言声をかけていただきたかった。最終的には、元の日程に戻していただいたので、セッション自体はうまくいき、感謝しています。

【これまでと変わらない】

- ✓ これまでとあまり変わらなかったが、優先順位は、1.連続開催、2.重複回避にして欲しい。

【セッション数が多すぎる】

- ✓ セッションの数が多すぎる以上、どうしようもない
- ✓ セッション編成方法が例年に比べてやや複雑で、理解するのに時間を要しました。根本的には、セッションの数が多すぎるのが問題だと思います。この点を早急に改善すべきだと思います。

【プログラム変更の連絡に問題あり】

- ✓ 似たようなセッションが重なっていた。また、発表時間が20分なのに15分とプログラムに掲載され、その変更が周知されていなかった。携帯用アプリには知らされていなかったと思っています。

● セッションの配置について御意見, ご感想をお聞かせ下さい

【配置はよい、概ね良い】

- ✓ 限られた日数の中で、非常に良い配置となったと思います。
- ✓ 今回のセッションのグループ分けに基づくセッションは配置は大変良かったです。制約がある中で上手く編成されたと思います。
- ✓ 日程が集中していたので参加しやすくなっていたのでは、と思います。
- ✓ 今年の「グループ化」は、よかったと思います。
今年作った「グループ」を来年以降も継承していただければ、時間割作成作業が少し楽になるのではないのでしょうか。
- ✓ 関連セッションが近い日時に設定されたおかげで、出張日程が組みやすかった。
- ✓ 今回の方法は、従来に比べると比較的スムーズになった気がします。もちろん全ての要望を満たすことは不可能ですが、コンビナーの要望をきいていてもきりがないので、もっと割りきっても良いと思います。例えば、セッション提案の際の重複回避希望セッションの数に制限を設ける(極端には「一切考慮しない」)などです。
- ✓ グループ間の重複が無くなった代わりに、今回は同日内に同じグループのセッションが開催されず単独のセッションとなったので、参加者が少ないのでは無いかと心配されたが、予想に反して例年と同程度の参加者があった。このことは、重複回避の方に重点を置いた今回のセッション配置が良い結果を導いたのではないかと考えている。
- ✓ 一つのセッションが二日にまたがるのを避けていただく、というのが最低限必要なことなのではないかと思います。昨年は第一案の時点で二日に分かれ、交渉して一日にまとめていただいたのですが、今年はそのようなことがなかったのが良かったです。重複回避に加え、一日にまとめることにも留意していただければ幸いです。
- ✓ もう少し、関連セッションが前半、後半などに集中しているとよかった。すべてのコンビナーの意見を反映させるのは不可能なので、今回のコマ割りのやり方はスムーズでよかった。
- ✓ 会場間の移動では、建物配置の関係で幕張より若干不便であり、多くのセッションにわたり細かく移動するのは難しかった印象があるが、プログラム上のセッション配置については良好であった印象を持っている。
- ✓ あちらを立てればこちらが立たずとなるので、本当に事務局が大変だと思います。セッションの配置については、最大限の努力をいただいていると思いますが、逆に事務局の負担を軽減する方策も考えるべきかと感じます。
- ✓ 聴衆のかぶるセッションが重なったり、特にこれというセッションがない時間帯があったりもしたが、発表コマ数の異なる多数のセッションを並べる以上、全員を満足させられることはできないと理解しています。おつかれさまでした。
- ✓ ここまで規模が大きくなるとある程度の重複は致し方ないと思います。
- ✓ 多数のセッションを限られた日数の中で配置するのだから、どうやっても不満が出てくるのは(学会の開催形態の大幅な変更を行わない限りは)仕方がないと思います。

【セッション数が多すぎる・セッションの統合】

- ✓ セッションの数が多くなりすぎ、時間の重複が多くなっている。
- ✓ セッションの配置は、セッション数に依存します。改善すべきと考えるのであれば、セッション数を減らす、投稿数を制限する、といったことを導入するしかないと思います。
- ✓ 重複しないでほしいセッションでこま割が困難な状態なので、セッションをまず整理すべきであろう
- ✓ セッションの統合を積極的に行うことにより、関係セッションを同一日に開催することを要望します。

【スペシャルセッションの配置】

- ✓ 全てのセッションの希望を叶えることは不可能なので、現状でやむを得ない点はある。ただし、スペシャルセッション同士の配置の調整については、もっと配慮が必要。

【部屋の配置を改善すべき】

- ✓ 部屋が小さすぎて入れない人が多くいた。部屋 70 名、参加者 100 名程度(リアルタイム地震情報)
- ✓ セッションの配置そのものではないですが、4, 5階は人口が少ないように思いました。1, 2階ロビーに、その日のセッションを紹介する大きな掲示があればよかったのではないのでしょうか。
- ✓ セッションの数が多いので、どうしても関連するセッションの重複が起こりやすくなる。重複をすべて避けるのは困難(無理)であるのもわかるが、考えねばならない問題である。また、部屋の配置についても問題が大きかったように思う。セッション毎の講演申込数をみれば、聴講者が多いか少ないかはある程度判断できたのではないだろうか？部屋の配置はセッションの配置にも関わる問題と思うので、あわせて考慮されたい。

【ポスターコアタイムの時間が遅い】

- ✓ 最終日のポスターの時刻が遅すぎた。なぜか一つだけははやかったが、なぜそんなことができたのかわからない。コンビナーの思いの違いか？最終日のポスターのコアタイムを早くできるようにしてもらわないと困る。
- ✓ ポスターのコアタイムも通常のオーラルセッションと同じ時間にすると良い。
今回はコアタイムの開始時間、終了時間ともに遅すぎると感じた。

【編成方法を改善すべき】

- ✓ プログラム調整の最後の段階で、複数の重複回避希望セッションと重複してしまい、非常に残念だった。
- ✓ セッション配置の優先項目をあらかじめ決めて欲しい。今回など連続開催の希望をとった意味はどこにあるのか？
- ✓ 今回はセッション組み合わせが最初の提案から最後の提案で大きく変わった。少なくとも地球生命のセッションは、最終案では重複希望回避の意見が全く反映されず、オーバラップが激しく、最悪の状況であった。セッション配置に対して優先順位をつけて、事前に開催日を固定するセッション(国際セッションやユニオンセッション)と、柔軟に再配置するセッションなど差別化して取り組んだ方が良い。現状ではコンビナーのわがままが目立ちすぎる。
- ✓ 難しいと思いますが、セッション配置調整で、「意見が出さないとこ」は動かさない、という調整方が大事かと思います。最後の最後の段階になって、突然時間を動かされ、他の関連セッションとバッティングが起きている例があると思います。

【編成にコンビナーが関与すべき】

- ✓ 一度提示した後の変更は、グループ内のコンビナー同士で、個別交渉した方が、良いのかも。ただし、リアルタイムで、全体の日程の状況がわからないと、やりにくいのかもかもしれませんが。
- ✓ 重複回避希望に加え、分野の類似性をもとにグループ分けをして頂けるとありがたい。プログラム委員長だけでこれを行うのは酷であるので、各セッション毎の委員もしくはコンビナーに協力してもらって行う。

【配置を改善すべき】

- ✓ 会期中に関係のセッションが散らばるようにすべきで、1, 2 日間に集中してしまっているように感じた。時間的にタイトであるのは理解するが、総会がセッション開催中に行われるのはいかなものか。
- ✓ 関連のセッションが複数重複して、両方聞けなかったのが残念だった。
- ✓ 関連する学会は前半に集中するなど、ある程度まとめてほしい。
今年は毎日セッションがあり、しかも半日程度だったので、手持無沙汰な時間が生じた。
- ✓ 下記のセッション群は学術的にかなり重なり合っているにも関わらずプログラムで分散していて極めて非効率であり、本学会に期待される統合的な効果と日本国の本分野における国際競争力を著しく損なっているため、今後はより連結したプログラム編成とすべきである。

4/29:HW07

4/30-5/1: HW28

5/1-2:HW25-27

5/2:HW29

【開催日程を考慮すべき】

- ✓ 曜日との関係もあると思います。アウトリーチを考え、できれば、大会期間中に世の中一般での休日を2日は入れて貰いたいと思います。
例えば、土日が入る、日祝が入る、祝土が入る、, , , など

- 参加者からは、セッション統合を望む声が上がっています。この点について、ご意見をお聞かせ下さい。

【賛成】

- ✓ 同感です。
- ✓ 賛成です。
今大会は、日によっては部屋間の移動が忙しくなっていました。
これは上記のセッション配置の問題ではなく、セッションの統合によって解決すべき問題だと思います。
特に、重複回避を希望しているセッション同士がまず統合されるべきだと思います。
- ✓ 確かに似たようなセッションが企画されているような感じもします。一定数以上の投稿がない場合はセッション統合を促すしくみをつくったほうがよいかもしれません。
- ✓ 小さいセッションを統合して大きなセッションとする方向はありだと思います。実績のあるセッションを大きな部屋に配置し、新しいセッションは小さな部屋に配置する等で自然に淘汰されると思います。
- ✓ 専門的な議論は各学会で実施すれば良いと思うので、JpGU では様々な分野の研究者による総合的な議論が可能なセッションを構築した方が良いと思います。
- ✓ 必要であると思う。これもプログラム委員長だけにまかせるのは酷であるので、各セクション毎の委員等に協力を求める。
- ✓ セッション統合することは、コンビーナ同士が学会やそれぞれの分野や派閥を超えて意見を交わすことができるいい機会だと思う。ぜひ柔軟に統合すべきである。
- ✓ 類似したセッションをまとめたほうが、連続して聞けて良いと思います。
- ✓ 明らかに重複している(もしくは近い)内容のセッションに関しては統合した方が、発表する側も聞く側もありがたいのではないかと思います。
- ✓ ぜひ統合すべきです。
- ✓ セッション統合に賛成します。地方参加者にとっては、なるべくまとまっているほうが参加しやすいです。

また、セッションが乱立しているとプログラム編成が大変な上、重複の可能性が高くなります。せっかく大勢が一堂に会する連合大会なので、小さなセッションよりも統合したセッションを優遇すべきだと思います。小さいセッションは、それぞれで関係者を集めてワークショップをすれば良い話です。

- ✓ 似たようなセッションは統合した方が良い。各セッションのプレジデントや代議委員の責任で統合した方が良い。
- ✓ 賛成です。上記の通り、個別の学会セッションはやめれば良いと考えます。それから投稿数の制限をすべきです。AGUと同様に、一人1件、招待講演は1件以内と言った具合に。また、大規模プロジェクトが乗っ取るようなセッションもいかなものかと思います。
さらにいえば、1週間はやはり長いです。せめて3日以内にしたい。自主的にそうしたいと思っても、自分のホームグラウンドでの発表とコンビーナーのセッション、さらには所属学会の総会など散らばってしまい、なかなか難しい。解消するには、物理的に3日以内に納めるような今年かあり得ません。
- ✓ 担当セッションの参加者からセッション統合の希望は聞いていないが、世話人としてセッション統合は望ましいと思う。しかし、それよりもむしろ、セッションの分離独立の方が問題に感じている。担当しているセッションは分野包括的な性格のもので、あるていどの数の「同士」が集まると、テーマ特化型のセッションを立ち上げて独立してゆくケースがあとをたない。それはそれなりに意義のあることかもしれないが、いつのまにかセッションが消滅していることもあり、割り切れなさを感じている。仮に統合を推進するとなれば、このように独立していったセッションを呼び戻すことが考えられるが、親元であるこちら側から見ると「対等合併」はありえず「吸収合併」ということになる(仮に親元の勢力の方が小さいとしても)。独立を果たした側からすると、これには心理的抵抗があるに違いない。さらに、後援学会としてセッション数を減らしたくないという事情もあり、今のところ具体的な成果はあがりそうにない。
- ✓ ルール作りが難しそうですが、可能であれば、提案後にある程度の調整があった方がよいと思います。
- ✓ セッション統合は1参加者として歓迎するが、それぞれ設立の歴史的経緯があるので、主提案学会間の調整を連合から促してほしい。また、統合した場合、セッション内でテーマごとのサブ・セッションの設立を認めるなど融通がきくシステムをつくって欲しい。
- ✓ 裏番組で参加出来なくなることが減るのは良いと思う。
- ✓ 部屋やコマ数の許容量を越えた場合、統合はやむなしと思います。
- ✓ あまりにもセッションの数が多すぎる。各学会の出先セッションみたいなものを連合大会ですることの意味を感じない。基本は複数学会による共催セッションにするなどして、似たようなセッションの統合を進めるべきである。また、同じスコープで日本語と国際セッションの両方を開催するのはいかなものかと思う。

発表数やセッションなどの規模を大会が盛況かのものさしにするフェーズはもはや終わった。連合大会だからこそできる議論をもっと大切にするべきだと思う。

- ✓ 細かくなりすぎると、連合が主催している意味が薄くなると感じます。単に、複数の学術学協会が同じ場所で春季大会を開催しているという形になってしまうからです。連合主催の意義の消失にならないようにするためにも、学際的なセッションをより多く置き、そのためにはセッションの統合が必要になると考えます。
- ✓ コンビーナー提案セッションがほぼ通り類似セッションが乱立しており、連合にて類似セッションの統合を進める必要があると考えます。
- ✓ ほぼ同じ分野のセッションが乱立している。中にはある分野の中でも特定の狭い範囲を研究する人たちが立てている「定期的シンポジウム」「定例研究会」と化しているセッションが見受けられる。セッションを統合し、大人数が(比較的)多分野の発表をすることを目指すか、セッションの細分化を進め、その分野

を専門とする研究者だけが集まるセッションにするか、JpGUとして方針立てをするべきである。個人的には前者に賛成する。

- ✓ セッションが細分化されると、細かい議論ができる反面、参加者の関心が狭い分野に絞られがちになる。細かい議論は、会場の外でもできる。周辺分野への関心を広げ、分野融合的な研究を立ち上げる機会を増やすためにも、セッションのくくりは緩く、大きめにするべきと考えます。
- ✓ 個人的には今回のセッションでも悪くないと思うが、むしろ運営側の苦労や学会間の連携、交流の観点からは統合したほうが望ましい。一方、統合を望む声が多いのは理解できます。関連するセッションが重なってしまい残念なことも多いので、統合が進むように事務局から働きかけることは良いと思います。
- ✓ セッションの統合は適宜必要だと思います。JpGUでセッションを立てること自体が目的化しているような状況も、耳にします。似たようなセッションが増え続けている様子が散見されます。また、個別のテーマだけで議論を深めていくのは「蛸壺化」につながると思います。多くの人が集まる機会なのに、個別のテーマのセッションが平行で乱立してしまうのは、一堂に会する意味が薄れてしまうように思います。
- ✓ 分野的に近いセッションは、統合した方が良い
- ✓ 参加者の視点で見ると、整理統合を望みたい。
少なくとも自分の周辺では、類似のセッションが乱立していると思う。
各コンビーナはそれぞれにセッションを立ち上げる目的があるのだろうが、コンビーナやその近くのコミュニティのエゴとしか思えない場合もあり、参加者のことを考えていないと感じることもある。
連合大会はどうあるべきかとの基本方針をしっかりと確立し、それに基づき適切に取捨選択・整理統合する手段を策定し、実施していただければと思う。
- ✓ 各学会を背負ったセッションがあるのは十分に理解できるが重複が多いので、複数学会共催のセッションを作れば良いと思う。その方が共同研究の芽もたくさん生まれるのではないかな？
- ✓ 以前から指摘されていることであるが、内容の近いセッションが多く立ち上がり、発表者の取り合いで、同じ人が別のセッションで同じような話をしているケースも見受けられます。セッションの統合を進めないと、魅力的な大会にしていくことが難しくなってくるように思います。他の方からも同様の意見を聞いています。
- ✓ 対象が重なるセッションが複数ある場合があるので、可能であれば、セッションを統合するための調整ができればよい。しかしながらセッション数も多く、プログラム編成にかけられる時間も限られているので、そのような調整をすとしても、事前に手順をよく検討しておく必要がある。
- ✓ テーマが類似するセッションが複数あるように感じました。実際に、発表者から「どちらに投稿すれば良いかわからなかった」という声も出ていました。統合できるものは統合する努力が必要だと思います。
- ✓ 類似のセッションが複数存在していたり、日本語セッションと同一テーマの国際セッションの存在など、おかしい状況になっているのは確か。セッション申込を受け入れるだけでなく、運営側の判断でもう少しおおざっぱな枠組みでセッションを仕切り直す必要があるのではないかな。

【部分的賛成】

- ✓ 整理できるものについては、整理するのは良いと思うが、無理にくっつけるのはよくない。
- ✓ それは望ましいが、「地球史」のようになんでもありのセッションを組んでしまうと、堆積岩を扱う地質学は全部そこに含まれてしまい、本来の意味が失われているので、「大きすぎるくくり」は弊害がある。
- ✓ 基本的には賛成であるが、個々のセッションにそれなりに発表者がいるのであれば、別々でもよいのかもしれない。
- ✓ セッションを統合した方が聴講しやすいので、もっともな意見だと思う。セッションはある程度テーマ(哲学)をもってプロポーズされていると思うが、データ・解析結果をテーマより優先すると、セッションを細かく分けるより、セッションをなるべく統合し、関連分野の研究進展の全体を把握できることがうれしい。

一方、JPGUのような機会がないと、現在どのようなテーマ・目的意識で他グループが研究に取り組んでいるかわからないので、JPGU がさまざまなセッションを持つことは重要であると思う。

あたりまえかもしれませんが、セッションが多いことが問題なのではなく、クオリティの低いセッションが多いことが問題だと思う。

- ✓ 立ち見でも入りきれないというデメリットを最優先で改善すべきなので、セッションの統合で改善できるのであれば、やむを得ない。
- ✓ 似たセッションがあったのは事実であり、ある程度の統合は必要かと思うが、投稿受付後の統合は現実的には難しいのではないだろうか？投稿受付後に統合するのであれば、一定数の投稿がなかったセッションは実施しないかポスターのみにすると言ったことをやらざるを得ないだろう。受付前の統合の場合には、コンビナー間の調整ができるかどうかによる。
- ✓ 統合すれば、関連セッションが同日同コマに重複開催されたり、逆に初日と最終日といった風に遠く離れて開催される、などといった不都合がなくなるので、コンビナーとしてはメリットもあると思います。一方で、あまり統合しすぎるとプログラムを見たときに自分の聞きたいセッションがどこにあるのか分かりにくいだろうなとも思います。同じ方が代表コンビナーを務め、似たようなタイトルのセッションを大量に開催しておられるのをみかけますが、統合の対象になっても良いのではないかと感じます（実際にそのセッションに出席していないので内容までは分かりませんが）
- ✓ 個別のテーマごとに独自にセッションを開催する様々な意義は理解しているが、聴衆の立場で考えると、セッションが多いほど、聞きたい発表の時間帯が重なってしまう、部屋を移動しなければならない、煩雑、連合の大会なのにバラバラ、など、弊害も大きいのではないだろうか。
- ✓ セッション統合には一長一短があると思うので、コンビナーからアンケートを取るなど、慎重に進めた方が良い。
- ✓ 数多くのセッションから、投稿を要望されるので、類似した発表を複数行うことになり、忙しいというのが感想です。ただ、様々なセッションを希望通りに開催できるというのは、セッション提案者としては満足度が高いのではないのでしょうか？
- ✓ 案を出してみても、個々のコンビナー同士の話し合いで統合しても良い、ということであれば統合した方が良いかも知れません。せっきくの JpGU なので、内輪だけで固まらず、この機会に知り合いになる、等出会いの場にもなるかと思います。
- ✓ セッションの目的と実際の発表の内容が合致していないものが散見される。結果として、既往のセッションと類似したセッションが次々と現れている。セッション間での、コンビナー同士の意見・情報交換が不足している。

【反対・現状維持・統合は困難】

- ✓ 現状のままで良い（複数部屋で同時に進行する JPGU では、参加者が聞きたい発表があれば移動しなくてはいけない現状には変わりないため。また、多岐にわたるセッションがあるのが JPGU であり、地球惑星科学の特徴であるため、セッションを統合すると本来の研究趣旨に深みがなくなる可能性が出てくる。）
- ✓ 無理。だれが調整できるか？できれば良いけどね。
- ✓ 参加者側からみれば、セッションの統合をすることで一見、多くの話を聞くことができるように錯覚しますが、科学的な理解を深めるためには、ある程度内容を絞った中での講演を続けて聞く方が効率的です。小さな目的を絞ったセッションと、大きな統合セッションと、多様性に富んだ構成の方が JpGU らしいと思います。
- ✓ 現状でも、特にセッションが多すぎるようには思えないし、これだけの規模の学会だと、聞きたいセッションの日程がかぶってしまうのは仕方のないことだと思う。

- ✓ 学会が提案母体になっているセッションでは、統合が難しい面があります。特に、セッション内或いは直後の休憩時間に特定の学会の行事に類するものが非公式に組まれている場合などは、別の学会が提案するセッションを統合できません。
- ✓ セッションごとの特徴が分かりやすいよう、現状のような細切れでよいと思います。
セッション名から何が議論したいのかわかりにくいセッションもあることから、さらに細分化して欲しい気もします。
- ✓ 統合すると、プログラム編成がむしろ難しくなるような気がする。また、大きな部屋の確保が難しくなるような気がする。もうしばらくこのままで様子を見るのが良いと思う。

【その他】

- ✓ コンビーナ側で、共同セッションなどを提案しあう機会（個別のメール対応よりも、システム上で）を持てると良いのではと思いました。
- ✓ オーラルは巨大な会場でのひとつのみとして、残りは全部ポスターにするのが良いのではないかと私は思っています。今の連合大会は巨大になりすぎて、「参加することに意義がある」という雰囲気になりつつあります。
- ✓ セッション統合より、連続開催ができるようにして欲しい。複合領域やユニオンセッションは、構成する元になるより専門的な分野のセッションと連続開催できるとよいのではないかと？例えば、生命・水・鉱物なら、このセッションで午前中に生物、化学、鉱物の全てにまたがる発表やピックアップしたい発表をして、午後は連続開催により少し小さな会場で、生物分野、化学分野、鉱物分野に分かれるとか。
- ✓ 多くの学会が集まる JpGU のメリットを生かした「領域統合を目的としたセッション」と、通常セッションに分け、「領域統合セッション」によってセッション数を減らすべきで、単に規模が小さいからと言って統合する方向に仕向けるのは意図に反する場合もあると思う。
- ✓ 単一の学会だけで実施可能なセッションの寄せ集めではなく、連合大会らしさを出す工夫が必要です。招待講演数が一セッションにつき〇件となっていると、多数の招待講演を作りたいためにセッションを細切れにするインセンティブが働きます。また、学協会共催セッションの大多数は単独でその学会が大会を開くときのセッションリストとほぼ共通ですが、連合大会を単に〇〇学会春季大会として位置付けてることを戒めて、学協会共催セッションの半数程度を、複数の学協会（例、A 学会と B 学会）と連合の共催にするという制限を設けるなどの方法が考えられます。
そうすると、各学協会は〇〇学のような大括りのセッションを提案せざるを得なくなり、細切れのセッションが減ります。
- ✓ 私たちのセッションは客の出入りが大変多かったのです。しょっちゅう出入りした方はセッションの統合を望まれたかもしれません。でも、私たちは、このセッション全体の成長を望んでいます。セッション後に小さな懇親会を設けました。ばらばらの研究者が共通のプラットフォームを得た感じが有り、好評でした。
- ✓ 参加者からの具体的なご意見を聞かないとコメントできません。何らかの形で公開して頂けませんか？
また、この問題に焦点をあてた参加者アンケートをして頂くことも有用だと思います。
いずれにせよ、セッション統合で解決できない問題もたくさんあると思います。（会場が狭い、という問題は一応、解決するが、聞きたい発表が重複する問題は解決しないですね。どこに申し込むのが良いかわからない、という事でしたら、それはセッション統合ではなく、提案段階での問題です。）
- ✓ 誰が、どのような理由で統合を望んでいるのかわからないので、答えられません。似たようなセッションが複数あるときは統合した方が良い、ということなのでしょう？
- ✓ 下記のセッション群は学術的にかなり重なり合っているにも関わらずプログラムで分散していて極めて非効率であり、本学会に期待される統合的な効果と日本国の本分野における国際競争力を著しく損な

っているので、今後はより連結したプログラム編成とすべきである。

4/29:HW07

4/30-5/1: HW28

5/1-2:HW25-27

5/2:HW29

- 【事務局より】 プログラム編成システム(採択, 発表順の設定, 招待講演の設定等)について, 何かご意見がありましたらご入力ください

【良かった・問題なし】

- ✓ 大変な作業を統括してくださり、誠にありがとうございます。編成システムに関してはこちらが不慣れなために多少戸惑うこともありましたが、大きな問題はなかったと考えております。
- ✓ 特に問題無く使用できています。ありがとうございます。
- ✓ ご苦労様でした。
- ✓ ウェブベースで設定できるので、使いやすくて良いと思う。
- ✓ これについては、大きな不便を感じませんでした。
- ✓ 特にありません。例年よりタイトな日程の中、調整をなされたと思います。その労力には頭が下がる思いです。
- ✓ とくにありません。運営側のご苦労に敬意を表します。
- ✓ 細かい部分でやや使いにくいところがありますが、概ね良く設計されていると思います。
- ✓ コンビナー側としては、概ね問題はありませんでした。事務局・プログラム委員会の負担が大きそうに見えました。
- ✓ 概ね良好な印象でした。ありがとうございました。
今回の担当セッションで特に必要なかったため、試しておりませんが、例えば、口頭発表前のセッション趣旨説明や、口頭発表後のディスカッション時間など、コンビナーの意図で用意したい場合、編成システム内での反映ができると良いと思われます。
担当セッション投稿者(主著者または Corresponding author)の全メールアドレスを統合した csv が自動取得(コピー&ペースト用のテキスト)できると、事前連絡や調整の際によいと思います。
- ✓ 招待講演に 5-10 分長めの時間を割り振れたら有難いのですが。
編成システムそのものは使いやすくて良いです。一点、今年から変更になった何かの指定方法がしばらく分からず、エラーで戸惑いましたが、何だったか忘れてしまいました。

【問題あり・改善求む】

- ✓ 多少分かりにくいシステムでした。例えば、招待講演者の発表時間を変更するためには事務局に直接連絡を取らなければなりませんでした。システムの中で直接修正できる方がもちろん良いと思います。ただ、改善の余地はあるとは思いますが、最終的には望むようにプログラム編成ができたので、現行のもので十分なのかもしれません。
- ✓ 招待講演が 15 分しか割り当てがなかったのですが、20 分にしてもらえるとよいと思います。
- ✓ 学生賞審査のエントリーの画面について(審査可能な講演にチェックを入れていく画面)、セッション名や日時で検索できるようにはできないか。非常に多数の講演のリストをすべて確認していく現状だと、時間もかかるし、ミスを招く可能性もある。
- ✓ バグがあるように思われ、うまく入力できないことが良くある。大変であろうし時間もかかるだろうが、バグ取りをお願いしたい。

- ✓ 招待講演の時間設定等、自由に設定できる機能は必須。
- ✓ ポスター3分口頭発表枠は、ポスター講演番号順に「1口頭発表枠＝5ポスター3分枠」で自動的に並べられてしまいます。口頭発表枠Aにポスター3分発表を4つ、口頭発表枠Bにポスター3分発表を3つ、というようにも並べられると、口頭発表コマをまたいでのポスター3分発表を並べやすいので、可能でしたらご検討ください。
- ✓ プログラム編成システムのバグでしょうか？
2コマ以上の口頭発表枠があるときに、口頭発表とポスターの概要説明を内容の関連が強いものに分けて、例えば1コマ目の終わりに3件のポスター概要説明、2コマ目の終わりに5件のポスター概要説明をプログラムしようとすると、うまくいきません。その場合、システムが強制的に1コマ目の終わりのポスター概要説明を5件に修正してしまいます。セッションを統合して大きなセッションにまとめると、ますますこのシステムの不備は問題になるので、何とかしてほしいです。
- ✓ 発表順を検討する際、手元のExcel等で作業できるように、発表者リストのCSVへの出力機能があるとよい。(web上で簡単なマウス操作で並べ替えができれば良いが、そこまでの機能はコストがかかりそうだから)
- ✓ 今回プラズマ宇宙関係のセッションが多数、同一の人によって提案され、連続開催されました。これはコマ数を獲得するためと捉えることもでき、この方式を多くの人が真似をするとプログラム編成に支障が生じると思います。このような同一テーマのセッション提案については、事務局側で一つにまとめるよう指示するほうが良いと思います。

【招待講演】

- ✓ 通常のセッションでも招待講演を認めてほしい。
- ✓ 招待講演者の発表時間の設定について、もっと柔軟に調整できるようにしていただきたい

【オーラル/ポスター】

- ✓ ポスター紹介の3分発表があまりに中途半端なので、この制度自体を無くして欲しい。
- ✓ 上記の通り、すべてを希望通りに受けるのがよいのかは難しい問題。オーラルでの発表でも、内容的にポスターの方がいいと思われる場合もあり、希望だけではうまくいかないと考える、作業システムについては、特に問題なかったと思います。

【その他】

- ✓ プログラムに関しては特にありません。他に意見を反映させるところがないので書きますが、7000人もの参加がある大会にしては、緊急時の対応がほとんど用意されていないのは問題です。何かあったときに、今の態勢では社会の批判を受けるでしょう。次年度の大会では、是非、大会本部に防災担当者を置いてください。
- ✓ 今回、セッションの終わった後に有料の部屋での総合討論を1時間半実施しました。たいへん有意義で合ったと思います。幕張なかなか部屋に余裕がないと思いますが、こうしたことができれば研究進展上望ましいと感じましたので、報告いたします。
- ✓ 次回、参加者が多く会場満席のセッション(火山関係など)、逆にガラガラなのに大会場のセッションは、コンビーナーによる強い意見に縛られずに、これまでの参加者数実績等に基づき連合主導で会場割り振りをすべきと考えます。
- ✓ プログラムの確定が遅すぎてスケジュールが組めず、出席できない人が(特に大学教員等で)多い。さらにはドタキャンも発生している。申し込み開始時期を早めてでも、プログラム確定の時期を早めて欲しい。

理事会後回覧分
委員会名簿(2014年6月)

総務委員会名簿

No.	役職(案)	選出母体	氏名	所属	期数
1	委員長	理事	古村 孝志	東京大学	2期
2	副委員長	理事(副担当)	成瀬 元	京都大学	2期
3			川合 義美	独立行政法人海洋研究開発機構	3期

(2014年6月1日～2016年5月31日)

財務委員会名簿

No.	役職(案)	選出母体	氏名	所属	期数
1	委員長	理事	北 和之	茨城大学	2期
2	副委員長	理事(副担当)	西 弘嗣	東北大学	3期
3			山田 泰広	京都大学	2期
4			向山 栄	国際航業株式会社	2期
5			高野 修	石油資源開発株式会社	2期

(2014年6月1日～2016年5月31日)

大会運営委員会名簿

No.	役職(案)	部局(選出母体)	氏名	所属	備考
1	委員長	(理事)	浜野 洋三	JAMSTEC	重任
2	副委員長	企画	岩上 直幹	東京大学	重任
3	副委員長	企画(固体地球)	興野 純	筑波大学	重任
4		企画(理事)	北 和之	茨城大学	重任
5		企画(理事)	高橋 幸弘	北海道大学	重任
6		企画(宇宙惑星)	中村 昭子	神戸大学	重任
7		企画(宇宙惑星)	和田 浩二	千葉工業大学	新任
8		企画(宇宙惑星)	大月 祥子	専修大学	新任
9		企画(宇宙惑星)	能勢 正仁	京都大学	新任
11		企画(人間圏)	財城 真寿美	成蹊大学	重任
12		企画(人間圏)	赤坂 郁美	専修大学	新任
13		企画(人間圏)	近藤 昭彦	千葉大学	重任
14		企画(固体地球)	金川 久一	千葉大学	重任
15		プログラム局長	鈴木 庸平	東京大学	新任
16		プログラム局	河宮 未知生	JAMSTEC	重任
17		プログラム局	中本 泰史	東京工業大学	重任
18		プログラム局	目代 邦康	自然保護助成基金	重任
19		プログラム局	井出 哲	東京大学	重任

(2014年6月1日～2015年5月31日)

情報システム委員会名簿

No.	役職(案)	選出母体	氏名	所属	備考
1	委員長	理事	村山 泰啓	独立行政法人情報通信研究機構	新任
2	副委員長		小口 高	東京大学	重任
3	副委員長		近藤 康久	総合地球環境学研究所	重任
4		理事	古村 孝志	東京大学	重任
5			金田 平太郎	千葉大学	重任
6			坂口 有人	独立行政法人海洋研究開発機構	重任
7			篠原 育	独立行政法人宇宙航空研究開発機構	重任

(2014年6月1日～2015年5月31日)

グローバル戦略委員会名簿

No.	役職(案)	選出母体	氏名	所属	備考
1	委員長	理事	木村 学	東京大学	重任
2	副委員長	理事(副担当)	ウォリス サイモン	名古屋大学	重任
3		理事(副担当)	高橋 幸弘	北海道大学	新任
4		理事(副担当)	日比谷 紀之	東京大学	新任
5			佐々木 晶	大阪大学	新任
6			中島 映至	東京大学	新任
7			氷見山 幸夫	北海道教育大学	新任
8			大谷 栄治	東北大学	重任
9			小林 憲正	横浜国立大学	重任
10			加藤 照之	東京大学	重任
11			関 華奈子	名古屋大学	新任
12			末広 潔	独立行政法人海洋研究開発機構	新任
13			多田 隆治	東京大学	重任
14			春山 成子	三重大学	重任
15			藤本 正樹	独立行政法人宇宙航空研究開発機構	重任
16			村山 泰啓	独立行政法人情報通信研究機構	重任

(2014年6月1日～2016年5月31日)

教育検討委員会簿(検討中)

No.	役職(案)	選出母体	氏名	所属	備考
1	委員長	日本気象学会	畠山 正恒	聖光学院中学高等学校	
2	教育検討委員会	理事(副担当)	渡邊 誠一郎	名古屋大学	
3	教育検討委員会 副委員長	日本地震学会	根本 泰雄	桜美林大学	
4	教育検討委員会 上席幹事	日本地質学会	阿部 國廣	元・川崎市立西有馬小学校	
5	教育検討委員会 幹事	日本地球化学会	瀧上 豊	関東学園大学	
6	教育検討委員会 幹事		宮嶋 敏	埼玉県立深谷第一高等学校	
7	教育検討委員会 幹事	日本地質学会	中井 睦美	大東文化大学	
8	教育検討委員会 幹事	地球電磁気・地球惑星圏学会	中井 仁	大阪府立茨木工科高等学校	
9	教育検討委員会 幹事		高橋 栄一	東京工業大学	
10	教育検討委員会 顧問	地球電磁気・地球惑星圏学会	大村 善治	京都大学生存圏研究所	
11	教育検討委員会	日本宇宙生物科学会	奥野 誠	東京大学	
12	教育検討委員会	日本応用地質学会	武田 和久	(株)開発設計コンサルタント	
13	教育検討委員会	日本海洋学会	島田 浩二	東京海洋大学	
14	教育検討委員会	日本火山学会	吉本 充宏	北海道大学	
15	教育検討委員会	日本火山学会	萬年 一剛	神奈川県温泉地学研究所	
16	教育検討委員会	形の科学会	松浦 執	東海大学	
17	教育検討委員会	日本活断層学会	廣内 大助	信州大学	
18	教育検討委員会	日本気象学会	坪田 幸政	桜美林大学	
19	教育検討委員会	日本鉱物科学会	赤井 純治	新潟大学	
20	教育検討委員会	日本国際地図学会	西木 敏夫	目白学園	
21	教育検討委員会	日本古生物学会	間嶋 隆一	横浜国立大学	
22	教育検討委員会	資源地質学会	藤本 光一郎	学芸大学	
23	教育検討委員会	資源地質学会	宮下 敦	成蹊中学校・高等学校	
24	教育検討委員会	日本地震学会	伊東 明彦	宇都宮大学	
25	教育検討委員会	日本地震学会	山野 誠	東京大学	
26	教育検討委員会	日本情報地質学会	坂本 正徳	国学院大学	
27	教育検討委員会	日本水文科学会	辻村 真貴	筑波大学	
28	教育検討委員会	水文・水資源学会	近藤 昭彦	千葉大学	
29	教育検討委員会	生態工学会	新井 真由美	日本科学未来館	
30	教育検討委員会	生命の起源および進化学会	三田 肇	福岡工業大学	
31	教育検討委員会	石油技術協会	佐溝 信幸		
32	教育検討委員会	日本雪氷学会	納口 恭明	防災科学技術研究所	
33	教育検討委員会	日本測地学会	里村 幹夫	静岡大学	
34	教育検討委員会	日本測地学会	松本 剛	琉球大学	
35	教育検討委員会	大気化学研究会	林田 佐智子	奈良女子大学	
36	教育検討委員会	日本堆積学会	伊藤 孝	茨城大学	
37	教育検討委員会	日本第四紀学会	加藤 禎夫	埼玉県立小川高等学校	
38	教育検討委員会	日本地学教育学会	南島 正重	東京都立小石川高等学校	
39	教育検討委員会	日本地学教育学会	林 慶一	甲南大学	
40	教育検討委員会	地学団体研究会	久津間 文隆	埼玉県立川越初雁高校	
41	教育検討委員会	地下水学会	宮岡 邦任	三重大学	
42	教育検討委員会	日本地球化学会	津野 宏	横浜国立大学	
43	教育検討委員会	地球電磁気・地球惑星圏学会	町田 忍	京都大学	

44	教育検討委員会	地球電磁気・地球惑星圏学会	橋本 武志	北海道大学	
45	教育検討委員会	日本地形学連合	島津 弘	立正大学	
46	教育検討委員会	日本地質学会	芝川 明義	大阪府立花園高等学校	
47	教育検討委員会	日本地熱学会	大谷 具幸	岐阜大学	
48	教育検討委員会	日本地理学会・東京地学協会	滝沢 由美子	帝京大学	
49	教育検討委員会	日本地理教育学会	竹内 裕一	千葉大学	
50	教育検討委員会	地理教育研究会	海東 達也	都立竹早高校	
51	教育検討委員会	地理情報システム学会	谷 謙二	埼玉大学	
52	教育検討委員会	東北地理学会	西城 潔	宮城教育大学	
53	教育検討委員会	日本粘土学会	山崎 淳司	早稲田大学	
54	教育検討委員会	日本農業気象学会	林 陽生	筑波大学	
55	教育検討委員会	物理探査学会	三ヶ田 均	京都大学	
56	教育検討委員会	物理探査学会	山田 伸之	福岡教育大学	
57	教育検討委員会	日本陸水学会、陸水物理研究会	濱田 浩美	千葉大学	
58	教育検討委員会	日本リモートセンシング学会	宮崎 忠國	東京農業大学	
59	教育検討委員会	日本惑星科学会	縣 秀彦	国立天文台	
60	教育検討委員会	日本惑星科学会	鈴木 文二	埼玉県立春日部女子高等学校	
61	教育検討委員会		小寺 浩二	法政大学	
62	教育検討委員会	日本惑星科学会	山下 敏	埼玉県立熊谷女子高等学校	
63	教育検討委員会	日本火山学会	小川 康雄	東京工業大学	
64	教育課程小委員会		宮嶋 敏	埼玉県立深谷第一高等学校	
65	教育課程小委員会	日本地球化学会	瀧上 豊	関東学園大学	
66	教育課程小委員会	日本惑星科学会	山下 敏	埼玉県立熊谷女子高等学校	
67	教育課程小委員会	日本古生物学会	河潟 俊吾	横浜国立大学	
68	教育課程小委員会	日本地震学会	根本 泰雄	桜美林大学	
69	教育課程小委員会	地球電磁気・地球惑星圏学会	野坂 徹	松本大学松商短期大学部	
70	教育課程小委員会	日本気象学会	畠山 正恒	聖光学院中学高等学校	
71	教育課程小委員会	日本火山学会	林 信太郎	秋田大学	
72	教育課程小委員会	日本海洋学会	間々田 和彦	筑波大学	
73	教育課程小委員会	日本地学教育学会・日本地震学会	南島 正重	東京都立小石川高等学校	
74	教育課程小委員会	日本地質学会	矢島 道子	東京医科歯科大学	
75	教育課程小委員会	日本地質学会	阿部 國廣	元・川崎市立西有馬小学校	
76	教育課程小委員会		渡邊 正人	川崎市立川中島小学校	
77	教育課程小委員会		能見 郁永	さいたま市立大宮南中学校	
78	教員養成等検討小委員会	日本地質学会	中井 睦美	大東文化大学	
79	教員養成等検討小委員会	物理探査学会	松島 潤	東京大学	
80	教員養成等検討小委員会	地理情報システム	秋本 弘章	獨協大学	
81	教員養成等検討小委員会	日本地理教育学会	井田 仁康	筑波大学	
82	教員養成等検討小委員会	地理情報システム学会	谷 謙二	埼玉大学	
83	教員養成等検討小委員会	東北地理学会	西城 潔	宮城教育大学	
84	教員養成等検討小委員会	日本測地学会	里村 幹夫	静岡大学	
85	教員養成等検討小委員会	日本国際地図学会	志村 喬	上越教育大学	
86	教員養成等検討小委員会	日本地球化学会	瀧上 豊	関東学園大学	
87	教員養成等検討小委員会	日本地震学会	根本 泰雄	桜美林大学	
88	教員養成等検討小委員会	日本気象学会	畠山 正恒	聖光学院中学高等学校	
89	教員養成等検討小委員会	日本地学教育学会	林 慶一	甲南大学	
90	教員養成等検討小委員会	日本火山学会	林 信太郎	秋田大学	
91	教員養成等検討小委員会		宮下 芳	茨城大学	
92	教員養成等検討小委員会	日本火山学会	吉本 充宏	北海道大学	
93	大学および大学院教育小委員会	日本火山学会、日本惑星科学会	高橋 栄一	東京工業大学	
94	大学および大学院教育小委員会	理事	渡邊 誠一郎	名古屋大学	
95	大学および大学院教育小委員会		磯部 博志	熊本大学	
96	大学および大学院教育小委員会	監事	北里 洋	海洋研究開発機構	
97	大学および大学院教育小委員会		見延 庄士郎	北海道大学	
98	大学および大学院教育小委員会		松澤 暢	東北大学	
99	大学および大学院教育小委員会		小澤 一仁	東京大学	
100	大学および大学院教育小委員会		藤 浩明	京都大学	
101	大学および大学院教育小委員会		高橋 嘉夫	広島大学	
102	大学および大学院教育小委員会		廣岡 俊彦	九州大学	
103	大学および大学院教育小委員会		小室 裕明	島根大学	
104	大学および大学院教育小委員会		廣井 美邦	千葉大学	
105	大学および大学院教育小委員会		高澤 栄一	新潟大学	
106	大学および大学院教育小委員会		坂本 正徳	国学院大学	
107	大学および大学院教育小委員会		松岡 数充	長崎大学	
108	大学および大学院教育小委員会		鳥居 雅之	岡山理科大学	
109	大学および大学院教育小委員会		林田 明	同志社大学	
110	大学および大学院教育小委員会		内田 悦生	早稲田大学	

111	大学および大学院教育小委員会		和仁 良二	横浜国立大学	
112	大学および大学院教育小委員会	理事	畠山 正恒	聖光学院中学高等学校	
113	大学および大学院教育小委員会		根本 泰雄	桜美林大学	
114	大学および大学院教育小委員会	理事	瀧上 豊	関東学園大学	

JpGU広報普及委員会名簿

No.	役職(案)	選出母体	氏名	所属	備考
1	委員長	理事	成瀬 元	京都大学	新任
2		理事	道林 克禎	道林 克禎	重任
3		理事	奥村 晃史	広島大学	重任
4		前委員長	田近 英一	東京大学	重任
5		前副委員長	原 辰彦	独立行政法人建築研究所	重任
6	幹事(JGL編集担当)		東宮 昭彦	独立行政法人産業技術総合研究所	重任
7	JGL書評担当		谷 篤史	大阪大学	重任
8	JGLデザイン担当		橘 省吾	北海道大学	重任
9	JGL広告担当		宮本 英昭	東京大学	重任
10	Web担当		佐藤 活志	京都大学	新任
11	連合大会トップセミナー担当		山田 耕	早稲田大学	重任
12	高校生セミナー担当		安藤 寿男	茨城大学	重任
13	高校生セミナー担当		久利 美和	東北大学	重任
14	メールニュース担当		吉本 和生	横浜市立大学	重任
15	秋季講演会担当		横山 広美	東京大学	重任
16	教育関連担当		瀧上 豊	関東学園大学	重任
17	大気水圏科学担当		阿部 彩子	東京大学	重任
18	宇宙惑星科学担当		高橋 幸弘	北海道大学	重任
19			紺屋 恵子	独立行政法人海洋研究開発機構	重任
20			大河内 直彦	独立行政法人海洋研究開発機構	重任
21			関根 康人	東京大学	新任
22			笠井 康子	独立行政法人通信総合研究所	新任

(2012年6月1日～2014年5月31日)

環境・災害対応委員会名簿

No.	役職(案)	選出母体	氏名	所属	備考
1	委員長	環境・災害担当理事	田中 賢治	京都大学	新任
2		環境・災害担当理事	奥村 晃史	広島大学	重任
3		環境・災害担当理事	北 和之	茨城大学	新任
4		先期委員長	松本 淳	首都大学東京	重任
5		日本応用地質学会	大野 博之	(株)環境地質技術部	重任
6		日本応用地質学会	大塚 康範	応用地質(株)	重任
7		日本火山学会	吉本 充宏	富士山科学研究所	新任
8		日本火山学会	石峯 康浩	国立保健医療科学院	重任
9		日本気象学会	塩竈 秀夫	国立環境研究所	新任
10		日本気象学会	小司 禎教	気象庁 気象研究所	新任
11		水文・水資源学会	松島 大	千葉工業大学	重任
12		日本雪氷学会	河島 克久	新潟大学	新任
13		大気化学研究会	加藤 俊吾	首都大学東京	重任
14		日本堆積学会	後藤 和久	東北大学	重任
15		地学団体研究会	卜部 厚志	新潟大学	重任
16		地球電磁気・地球惑星圏学会	小田 啓邦	独立行政法人産業技術総合研究所	重任
17		地球電磁気・地球惑星圏学会	吉川 顕正	九州大学	重任
18		日本地質学会	小荒井 衛	国土地理院	重任
19		日本地質学会	川畑 大作	産業技術総合研究所	重任
20		日本地熱学会	柳澤 教雄	独立行政法人産業技術総合研究所	重任
21		日本地図学会	宇根 寛	国土地理院	重任
22		地理科学学会	前杢 英明	法政大学	新任
23		地理情報システム学会	後藤 真太郎	立正大学	重任
24		東北地理学会	村山 良之	山形大学	重任
25		東北地理学会	大月 義徳	東北大	重任
26		日本リモートセンシング学会	作野 裕司	広島大学	新任
27		陸水物理研究会	知北 和久	北海道大学	新任
28		第四紀学会	田力 正好	地震予知総合研究振興会	新任

(2014年6月1日～2016年5月31日)

男女共同参画委員会名簿

No.	役職(案)	選出母体	氏名	所属	備考
1	委員長	理事 (日本海洋学会)	原田 尚美	独立行政法人海洋研究開発機構	重任
2	副委員長	日本惑星科学会	小川 佳子	会津大学	重任
3	副委員長	日本地理学会・日本地形学連合	小口 千明	埼玉大学	重任
4	副委員長	地球電磁気・地球惑星圏学会	坂野井 健	東北大学	重任
5		理事	中村 正人	独立行政法人宇宙航空研究開発機構	重任
6		理事	渡邊 誠一郎	名古屋大学	新任
7		日本堆積学会	天野 敦子	独立行政法人産業技術総合研究所	重任
8		日本火山学会	下司 信夫	産業技術総合研究所	新任
9		日本雪氷学会	紺屋 恵子	独立行政法人海洋研究開発機構	重任
10		地球電磁気・地球惑星圏学会	坂野井 和代	駒澤大学	重任
11		地理情報システム学会	佐々木 緑	広島修道大学	重任
12		日本気象学会	清野 直子	気象研究所	重任
13		日本地理学会	宋 苑瑞	東京大学	重任
14		鉱物科学会	土屋 範芳	東北大学	重任
15		日本地震学会	西澤 あずさ	海上保安庁	重任
16		日本鉱物科学会	富樫 茂子	独立行政法人産業技術総合研究所	重任
17		日本地質学会	堀 利栄	愛媛大学	重任
18		日本地形学連合	若狭 幸	秋田大学	重任

(2014年6月1日～2016年5月31日)

キャリア支援委員会名簿

No.	役職(案)	選出母体	氏名	所属	備考
1	委員長	理事(主)	高橋 幸弘	北海道大学	重任
2	副委員長	理事(副)	渡邊 誠一郎	名古屋大学	重任
3	副委員長	連合男女共同参画委員、SGEPSS	坂野井 和代	駒澤大学	重任
4	副委員長	前副委員長	市原 美恵	東京大学	重任
5	副委員長	連合広報普及委員	末吉 哲雄	国立極地研究所	重任
6		連合男女共同参画副委員長	小口 千明	埼玉大学	重任
7			佐々木 和彦	応用地質株式会社	重任
8		水文・水資源学会	大石 哲	神戸大学	重任
9		連合広報普及委員	田近 英一	東京大学	重任
10			津野 宏	横浜国立大学	重任
11		連合男女共同参画委員	富樫 茂子	独立行政法人産業技術総合研究所	重任
12			藤光 康宏	九州大学	重任
13		日本地理学会	松山 洋	首都大学東京	重任
14		前委員長	佐藤 薫	東京大学	重任
15		前副委員長	栗田 敬	東京大学	重任
16			多田 啓亮	横浜国立大学(博士前期課程1年)	新任
17			新井 真由美	日本科学未来館	新任
18			浜田 盛久	独立行政法人海洋研究開発機構	新任

(2014年6月1日～2016年5月31日)

JpGUジャーナル企画経営委員会名簿

No.	役職(案)	選出母体	氏名	所属	備考
1	委員長	JpGU	川幡 穂高	東京大学	重任
2		JpGU会長	津田 敏隆	京都大学生	重任
3		JpGU副会長	木村 学	東京大学	重任
4		JpGU副会長	中村 正人	宇宙航空研究開発機構	重任
5		JpGU	田近 英一	東京大学	重任
6		総編集委員長	井龍 康文	東北大学	重任
7		編集長	小原 一成	東京大学	重任
8		編集長	多田 隆治	東京大学	重任
9		編集長	佐藤 正樹	東京大学	重任
10	(拡大)	セクションプレジデント	佐々木 晶	大阪大学	新任
11	(拡大)	セクションプレジデント	中島 映至	東京大学	重任
12	(拡大)	セクションプレジデント	氷見山 幸夫	北海道教育大学	重任
13	(拡大)	セクションプレジデント	大谷 栄治	東北大学	重任
14	(拡大)	セクションプレジデント	小林 憲正	横浜国立大学大学院	新任
15	(拡大)		小田 啓邦	産業技術総合研究所	重任

(2014年4月～2015年3月31日)

JpGUジャーナル編集委員会名簿

No.	役職	選出母体	氏名	所属	備考
1	総編集長	日本地質学会	井龍 康文	東北大学	重任
2	編集長	宇宙惑星科学セクション	倉本 圭	北海道大学	重任
3	編集長	大気水圏科学セクション	佐藤 正樹	東京大学	重任
4	編集長	地球人間圏科学セクション	松本 淳	首都大学東京	重任
5	編集長	固体地球科学セクション	小原 一成	東京大学	重任
6	編集長	地球生命科学セクション	川幡 穂高	東京大学	重任
7	編集長		多田 隆治	東京大学	重任
8		日本第四紀学会	池原 研	産業技術総合研究所	重任
9		日本温泉科学会	井上 源喜	大妻女子大学	重任
10		日本古生物学会	遠藤 一佳	東京大学	重任
11		日本惑星科学会	大竹 真紀子	宇宙航空研究開発機構	重任
12		日本鉱物科学会	大谷 栄治	東北大学	重任
13		水文・水資源学会	大手 信人	東京大学	重任
14		日本測地学会	加藤 照之	東京大学	重任
15		大気化学研究会	金谷 有剛	海洋研究開発機構	重任
16		日本地球化学会	川勝 均	東京大学	重任
17			菊地 俊夫	首都大学東京	重任
18		日本雪氷学会	兒玉 裕二	国立極地研究所	重任
19		日本宇宙生物科学会	小林 憲正	横浜国立大学	重任
20			近藤 昭彦	千葉大学	重任
21			サイモン・ウォリス	名古屋大学	重任
22		日本測地学会	渋谷 和雄	国立極地研究所	重任
23		地球電磁気・地球惑星圏学会	清水 久芳	東京大学	重任
24		日本水文科学会	杉田 文	千葉商科大学	重任
25		地球人間圏科学セクション	千木良 雅弘	京都大学	重任
26		日本火山学会	中田 節也	東京大学	重任
27		地球電磁気・地球惑星圏学会	長妻 努	情報通信研究機構	重任
28		大気水圏科学	早坂 忠裕	東北大学	重任
29		日本海洋学会	日比谷 紀之	東京大学	重任
30		日本鉱物科学会	平島 崇男	京都大学	重任
31		東京地学協会 物理探査学会	三ヶ田 均	京都大学	重任
32		日本活断層学会	宮内 崇裕	千葉大学	重任
33		地理情報システム学会	村山 祐司	筑波大学	重任
34		地球電磁気・地球惑星圏学会	山本 衛	京都大学	重任
35		水文・水資源学会	芳村 圭	東京大学	重任
36		資源地質学会	渡辺 寧	秋田大学	重任

(2014年4月～2015年3月31日)